

小泉八雲全集

第一卷

東京
第一書房



一八八九年の小泉八雲



大叔母ブレネーン夫人
と八九歳頃の小泉八雲

異文學遺聞
支那怪談
チータ
ユーマ

譯者

大谷正信

落合貞三郎

小泉八雲全集第一巻目次

異文學遺聞

落葉

印度及び佛教文學よりの物語

カレワラよりの歌

回々教國物語

支那怪談

異文學遺聞

アンヴリ・ソヘーリ、バイタル　パチシ、マハバーラタ、パンチヤタントラ・ギユリスタン、タルムッド、カレワラ、等より作りあらためし

物語

ニユウ・オルリアンズ・タイムス・デモクラットの記者

我が友

ページ　ベーカー

に呈す

解説

傳說と寓言との此の小さき剪嵌細工に從事せる間、余は、金剛石の谷より鷲が摑みのぼる或る肉片に附着せる小さき寶石を集むるに甘んぜざるを得ざりしてふ、シンドバッドの第二回の航海に語らるゝ彼の商人の一人なるが如きを覺えぬ。余は余の所得を全然翻譯者の勞に手頼らざるを得ざりしが、その所得また餘りに小さくして、個々に文學的撰擇を造らん値無きが如く思はれぬ。余は余が手中の小さき寶石をば一つの型に從ひ切りたれば、その或る物の美は減損したるには相違なけれども、しかもなほその色いかにも妖異に、その光いかにも魑魅的なれば、余の如き拙劣なる工人によりてすら、その本質的價値が全く破壞さるゝことはあり得ざらんやう余は思ひぬ。

要するに、此等の寓言傳說譬話等は、余が手にし得たる最も異國情趣に富める文學のうちにて奇怪極まり無く美しきものと思はしめしものを改造したるに過ぎず。殆んど例外無しに、原の物語の趣向はそのまゝ傳へぬ。時に少しは添加し、時に短縮はしたれども、そ

の增加は概ねその傳說と同じ根元より得たる資料を用ひて行ひ、省略は反覆を避くる目的を以て、或は一般の閱覽に不適當なる事件を削除する必要に由りて爲したり。余は余が採りたる浪漫的自由或は詩人的特權に特別の注意を乞はざるを得ざるなり。

ポリネシア物語（『泉の少女』）にては、ギルの南太平洋の神話及び歌謠――珍奇なれども非藝術的なる書にして、頗る感嘆に値する資料が甚だ乾燥無味に取扱はれたる――を基として、余は著しく之を敷衍したり。ギル氏の書の他の部分に余は彼の妖異なる『盜人の歌』の原文と飜譯とを見出し、氣まぐれなる變更を少しく加へてそをこの物語に利用せんとの意を抱きたり。亞剌比亞來の『戀物語』は、ド・スタンダールの『愛（ラムウル）』より藉りたる幾多の斷片的亞剌比亞物語を一つの物語に鎔接したるものなれば、更に尙ほ贋作的なり。

ラビの物語にては余は屢ゝタルムッドの書卷の種々なるものに載れる一人物にかゝはる數々の事件を結合したり。されど此の方法はゲマラの本文に參照して充分に明細ならしめぬ。ヘルションの『雜記（ミセラニー）』に添へある索引并びにヱルサレム・タルムッドのシュワッブ譯に據りて、著名なる一人のラビにまつはれる異常なる傳說を數多く蒐集して、そを一つの物語に結合するは容易なる業なりき。最後に自白せざるを得ざるは、『ナタリカ』の物語は、フエリスタ即ちフィーリスタより直接物したるものにはあらで、器用なる作家なれど

も信用は置き難き東洋學者にして、その著書は重要なる價値殆んどあらざるヤコリナよりして得たるものなることなり。さりながら、眞僞は兎に角、この傳の物語は餘りに可憐なりしかば余は見捨てがたく思ひしなりき。

ただ一つの場合に於てのみ余は佛文よりして正銘の飜譯を試みたり。レウーゾン・ル・ダックの『カレワラ』の逐字譯は余がこれまで飜譯物のうちにて遭遇したる詩的散文の最も美妙なる見本と思はれぬ。余は事件三つを擇びて、そを殆んど全く逐字に譯したり。

イタリックにて認めたる文は、配置異樣なれども、殆んど總て、その文が紹介するその傳說を有する國民の文學より得來りたるものなり。印度の智慧の彼の無盡藏の寶庫たるパンチャタントラより得たる句多し、他は之を種々なる佛典より得たり。『王の義務』と題する一篇に對する紹介文は、ファリッド・ウディン・アッタルの物せし波斯のマンティック・ウタイルより藉り、『佛敎の譬話』（こはスタニスラス・ユリアンの阿波陀那の中にある或る物語に倣ひて作りなほしたり）は法句經より取りたり。思ふに、より短き物語はより長きものに比して、余の手に罹りて損ずるところ概して少かりしやうなり。ソースの書に關する彼の不思議なる埃及物語は、原の草紙文書よりしてマスペロが爲せる佛譯にては遙かに目覺しきものなれども、埃及の文句は往々にして壁畫なる踊り子のそれに優りて

駭心的なる赤裸々たる特徴を備へたり。……

別頁に、余が資料を得たる殆んど總ての根元の小書目あらん。ただ一句若しくは二句を余に與へたるが爲めに載せたる書もあり。例へば、余は措辭或は趣向を『アマルー』より、フォーシュが爲したるリトウ・サンアラの佛譯より、また殊にシェジーが爲したるシャクンタラの妙譯に添へある豐富なる註釋より得たり。

此の一巻の小蒐集は學者の考察を求むるものに非らず。ただ余が奇異にしてしかも美妙なる三四の文學に親しまんと試みつゝある間に經驗したる、珍らしき愉悦の幾分を一般讀者と共にせんとする企圖に過ぎざるのみ。

本書作成中、注目すべき著書二種半ば似寄りたる目的を以て現はれぬ。ヘレン・ジンメルンの『王の叙事詩』と、エドヰン・アーノルドの『イスラムの珠數』之なり。前者にありてはフィルドゥシの巧妙なる通俗譯あり、後者には『メスネヰ』の美しき極みなる眞珠が幾つか美妙に繋がれたるを見る。余は世に知られざる文學を普及ならしめんとての、藝術的に遙か劣れる余のこの貢獻が、他の人々を刺戟して余の企て及ばざるより價値ある物を産出せしめんことを望む。余が寶玉は數多からず、また大ならず。巨大にして華麗なる寶玉はシンドバッドを、或はノルマハルの墓の上に置かれし黃玉の花と紅玉の蕾との彼の

花束の如く絶妙なる寶石の花毬をそれもて細工せん一大玉人を待てり。

一八八四年　　ニユウ・オルリアンズにて

〔原著者がこの解説に「イタリックにて認めたる文」と斷れるものは、本譯書に於ては、ハウトン・ミフリン本の如く、本文の活字より少しく小さき活字にて組みたり。譯者識〕

書目

（※印を附せるものには甚だ精妙なる英譯あり）

アレゴリー・レシ・コント・…………――ガルサン・ド・タシの亞剌比亞語、波斯語、ヒンドスタアニ語及び土耳古語よりの譯。一八七六年、巴里。（「バカワリ」を含む）

アマルー。アントロジー・エロティーク。――梵語原文、アントアン・レオナール・ド・アブディ（シェジー）譯並びに註。一八三一年、巴里。

アヷダナ（レ）。コント・エ・アポローグ・アンディアン。――スタニスラス・ユリアン譯。一八五九年、巴里。

佛陀（の浪漫的物語）。――レヹレンド・サミュエル・ビール譯。一八七五年、倫敦。

コント・エジプシアン。――ガストン・マスペロ。一八八二年、巴里。

法句經。――レヹレンド・サミュエル・ビールの漢譯よりの重譯。一八七八年、ボストン。

※ギタ・ゴギンダ（ル）、エ・ル・リトウー・サンアラ。――イポリット・フオーシュ譯。一八五〇年、巴里。

※グリスタン（ル）、ド・サディ。――セムレ逐字譯。一八三四年、巴里。

ヒンドウー・パンセオン（ゼ）。――エドワァード・ムア少佐。一八六一年、倫敦。

※イトパデサ（リ）。――ランスロー譯。一八八二年、巴里。

ヤコリオー『ゴルコンダ廢趾旅行記』（ヺワヤアジユ・オー・ルイーヌ・ゴルコンド）――一八七八年、巴里。

佛本生譚。――ルイス・デギッツ譯。第一卷。一八八一年、ボストン。

カレワラ。――レウゾン・ル・ダック譯。一八四五年、巴里。

マハバーラタ（オンズ・エピソート・ドゥ）。――フーコー譯。一八六二年、巴里。

※マンティック・ウタイール。――ガルサン・ドゥ・タッシー波斯語よりの譯。一八六三年、巴里。

ミトロギー・デ・ゼスキモー。――ラペ・モリヨ。一八七四年、巴里。

南太平洋の神話及び歌謠。――レエレンド・ギル。一八七七年、倫敦。

※パンチヤタントラ。ウー・レ・サンク・リーヴル。――ランスロー譯。一八七一年、巴里。

スタンダール（ド）。『愛』（ラムウル）

※サクンタラ。――梵語原文、シエジー註並びに譯。一八三〇年、巴里。

タルムツド。ル・タルムツド・ド・エルサレム。――モイーズ・シュワップ譯。一――六卷。一八七八――八三年、
巴里。

タルムディック・ミセラニイ（ア）。――ハルション。一八八二年、ボストン。

エタラパンチヤギンサティ（ヒンディ・ヴアション・ヲブ・ゼ）。バイタル・パチシ、即ち『一鬼二十五話』
――バーカー譯。一八五五年、倫敦。

落葉

ソースの書

こは城門一百を有つシーブズの廢墟の中なるディル・エル・メディネてふ墓地にて見出されたる民用文字草紙文書に記されたるが僅を傳へし埃及の妖術物語なり。……今は世に知る人無き或るトロメィウスの御宇の第三十五年に書かれ、魔法師の中にもその名きこえし或る學士がタイビの月に完了せしもの、……該の草紙文書について好く言はん者共には恭しくその慈悲を乞ひ祈りたりしあらゆる妖術者の大主、あらゆる學士の首長、ソースに疑も無く獻呈したるものなり。……

……

……魔術者の王、最も優れし工人、學士どもの首長にして神たるソース、自ら筆を執つ

て他のあらゆる書物に勝りし、魔術の文句ただ二つ記せし書を嘗て書きしといふ。此の文句の初のものを唱へ得ん者は立所に位ただ神に次ぐものとなるといふ、――ただそを口にするばかりにて、山嶽谿谷、大洋雲霧、天界の高峰、地獄の深淵、悉く其の意に從ひ、空翔くる禽鳥、暗黑に潛む爬蟲、水界の魚族、その爲めに姿を現じて、その胸に祕むる思を顯はならしめざるを得ざればなり。されどその第二の文句を唱へ得ん者は竟に死を知ること無しといふ、――假令大地の內臟の裡に埋めらるゝとも、暗黑を通して天界を視、靜寂を横ぎりて大地の聲を聞き、墓地の中に在つてすらも猶ほ日の出沒、諸神の眷族、月の盈虛、蒼空の永遠の光明を見るべければなり。

かくて神ソースはその書を黃金の匣の裡に收め、その黃金の匣をば白銀の匣の裡に收め、その白銀の匣をば象牙と黑檀の匣の裡に收め、その象牙と黑檀の匣をば棕櫚樹の匣の裡に收め、その棕櫚樹の匣をば唐金の匣の裡に收め、その唐金の匣をば鐵の匣の裡に收めぬ。かくてコプトス州を貫き流るゝかの埃及の大河の床にそを埋めぬ。かくて不死なる川の怪物その匣を取卷きてあらゆる魔術者に奪はせじとそを守護しぬ。

*
* *

さて、あらゆる魔術者の中にても、國王ミニブプター（生命と健康と力とをとこしへにその人に在れ）の子ノーフェルケプターといふが、初め奸智を用ひてこの不可思議なる書の隱されある場處を發見し、大膽にもそを奪ひ取りぬ。その因由は、高齢なる祭司の中にても最も賢き祭司に金あまた取らせて行くべき道を教へしめたる後ち、ノーフェルケプターは糧食缺ぐるところなく備へ屈强の水夫數多く乘せし御座船一艘を父ファラオより得、かの隱されし寶探さんとそれにてコプトス指して出で立ちたればなり。日數重ねてコプトスに到り着き、彼は神祕の言葉を唱へて魔力ある小舟と魔力ある乘組とを造りつ。かくて彼とその幻の乘組とはかの匣見出さんと努め働きつ。やがて堰を築きて終に見出し了へぬ。かくてノーフェルケプターは魔法に由りてかの不死なる蛇に打勝ちつ。かくてかの書を獲、その神祕の文句を讀み、かくて己が身を、位ただ神に次ぐものとなしつ。

　されど諸神は彼を怒り給ひ、彼の妹にしてまた妻なるアフーリをナイル河に、また彼の子をも、落とし給ひぬ。ノーフェルケプターは河をして二人を還へさしめぬ。されどかの書の威力奇しき樣に二人の生命を失はしめざりしかども、その生けるは前とは異れることとて、コプトスなる墓地に埋めざるを得ざりき。かゝる事を目にし又一人にて國王の許に歸ることを恐れたれば、彼はかの書を己が胸の上に括り、己れ亦身を河に沈めぬ。げにや

かの書の威力は奇しき様にその生命を失はしめざりしかども、その生けるは前とは異れることとて、人々は冥府アメンシへ赴きたりし者と思ひシーブズの都へ運び歸り、その祖先の傍にその軀を置き、またかの書をも置きぬ。

さりながら、彼はかの書の威力に因りて、塚の暗きが中に在りて生きながらへ、日の昇るを見、諸神の眷族を見、月の盈虧を見、夜の星を見ぬ。かの書の威力に因りて、彼はまたコプトスに埋められたる妹——そを埃及人の習慣に從ひて妻となしたりし——アフーリの魂を招き寄せつ。かくて其の住居には光ありき。さればノーフェルケプターはその妻アフーリの力卽ち魂と共に、またその子ミクホンスーの力と共に住みて幽幻なる幸福を知りぬ。

* * *

さて、國王ミニプブターの時代より四代を經て、埃及のファラオはウーシルマリなりき。ウーシルマリには埃及人の中にも博學なる子二人ありき、——長子名をサトニと言ひ、次子名をアンハソレロウーと言ひつ。廣き埃及のうちにサトニに優して賢き學士はあらざりき。尊き書册、護符の上なる銘文、塚の中なる語句、石柱の表に刻まれし言辭、『二重の

生の家』と呼ばるゝかの祭司者の書庫なる書巻を讀み得るなりき。更にまた彼は魔法のあらゆる文句と、靈魂もそを奉ずるあらゆる文言とを書き綴ることを得しことゝて、埃及全土に彼に比べん妖術者はあらざりき。サトニは或る年老いし祭司よりノーフェルケプターとソースの書のことを耳にしつ、そを得んと心定めぬ。されどその年老いし祭司警めて言ひぬ、『構へてかの書をノーフェルケプターより奪はざれ。奪はば彼の魔術に魅せられ、塚の中なる彼に返して更に贖罪の苦行を爲さざるを得ざるべければ』

されどもサトニは、シーブズの墓地に降り行き、叶はば其處よりかの書を取去らんことを乞ひて國王の許可を得つ。斯くて弟と共に彼の地に赴きぬ。

＊
＊　＊

兄弟は無限無涯なる死者の町にてノーフェルケプターの塚を探し索むること三日三夜なりき。暗き廻廊幾哩を辿り進み、埋葬の塚穴幾百の中に降り行き、打震ふ燈火の光に無數の碑銘を判讀するに倦みて後ち、終にその休み場處を見出しぬ。されどその塚に入りし時二人の眼は眩きぬ。ノーフェルケプターは妻のアフーリを傍にして横たはり、二人が中に置かれしソースの書は日の輝に似たる光をあたりに放ち居たればなり。サトニ入り來るや、

アフーリの魂その光を背に立上りつ。斯く彼に問ひぬ。『汝は誰ぞ』サトニ答へて曰ひぬ、『余は國王ウーシリマリの子サトニなり。汝とノーフェルケプターとの間なるソースの書を得んとて來れり。若し與へざらんには强ひても奪ひ去らん』

されど彼女の魂彼に答へて曰ひぬ、『否、理に悖りたること述べ給はざれ。此書を乞ひ求め給ふこと勿れ。我等は之を得て、我等が生れながらに與へられたる生涯を此世に住まん愉快を奪はれたれば。また塚の中なる此の妖異なる生活は埃及の生活に似るべくも無し。此書何等の用をもおん身に爲す事無し。されば此書ゆゑに我等が身に降り來りし悲哀を寧ろ聽き給へ。……』

されどアフーリの物語を聞きし後もサトニの心は依然として黄銅の如く、ただ斯く繰返すのみなりき。――

『汝若し汝とノーフェルケプターとの間なるその書を與へざらんには、余は强ひても奪ひ去らん』

之を聞きてノーフェルケプター塚の中に身を起こして笑つて言ひぬ、『サトニよ。汝若し眞の學士ならば汝の手並もて此書を余より贏ち得よ。恐れじとならば、此書の所有を競技にて――五十二の競技にて決せん』この塚の中に象棋盤ありしなりき。

斯くてサトニはノーフェルケプターと象棋の技を演ぜしが、其間アフーリと眼大いなる子との力が、魂が、靈が眺めてありぬ。そが彼を凝視せる眼は、またノーフェルケプターの眼は、不思議に彼の心を亂したれば、サトニの頭腦はくるめき廻り、思案の綱は縺れ絡みて、彼は敗れぬ。ノーフェルケプターは笑ひて、魔語一つ唱へて、象棋盤をサトニの頭上に置きぬ。と見る、サトニは膝まで塚の床(ゆか)に沈みぬ。

再び二人は演ぜしが結果は同じかりき。ノーフェルケプターは更なる魔語一つ唱へて、象棋盤をサトニの頭上に置きぬ。と見る、サトニは腰まで塚の床に沈みぬ。

更にまた二人は演ぜしが結果は同じかりき。ノーフェルケプターは更にまた魔語一つ唱へて、象棋盤をサトニの頭上に置きぬ。と見る、サトニは耳まで塚の床に沈みぬ。

さればサトニは急ぎ護符を持來れと弟に叫びぬ。弟は護符を持來り、そをサトニの頭上に置き、魔力有てる護符にて兄をノーフェルケプターの偉力より救ひぬ。されどそを爲し終へしと思ふ間も無くアンハソレロウーは塚の中に仆れて死にき。

サトニは手を延べてかの書をノーフェルケプターより奪ひ、塚より廻廊へ出で來りぬ。その間、かの書は彼の爲めに道を照らしたれば、偉大なる光明行く手を進み、深き暗黑しりへに従ひぬ。その暗黑の中をばアフーリ彼の後を追ひて、歎きつゝ叫びぬ、『悲し、歎

し。生を與へし光は我等より奪はれたり。恐ろしの無有我等に來らん。まこと、寂滅此の塚に入り來らん』されどノーフェルケプターはアフーリを呼び寄せ、泣くを制して斯く言ひぬ、『かの書を慕ひ歎くこと勿れ。その手に杈と杖とを持ち、その頭に火ある火鉢を戴きて、余にかの書を返へさしむべければ』

* * *

こゝに國王ウーシルマリは事の子細を知るや、予の爲めに驚くこと大方ならず、彼に曰ひぬ、『見よ、汝の愚かさは既に弟アンハソレロウーの死を齎したり。されば心して同じくまた汝自らの身の破滅を起こさざれ。死せるノーフェルケプターは汝に勝りて偉大なる魔術者なり。直ちにかの書を返へせや、彼汝を滅ぼすべければ』

サトニ答へて曰ひぬ、『何とて！余は肉慾を抱きたること嘗てあらじ。また生ける物を害ねたること嘗てあらじ。されば死せる者が余に打勝たんことあるべしや。魔力に打敗けん者はただ愚かなる學士——情慾を制することを知らざる學士——のみなり』

かくて彼はかの書を放さざりき。

＊
＊　＊

さて、二三日後のことなりき。プターを祀れる宮の前庭にサトニ立ち居ける折、偶ま美しき女を見ぬ。その眼その女に落ちし刹那よりして彼は生ける者の如く振舞ふこと叶はずなり、世界は全く身のあたりに夢の如くなりぬ。サトニは、その女が宮にて祈禱を捧ぐる間に、女は名をスートブーイと呼び、豫言者の子なることを耳にしぬ。かくて使者を女の許に送りて言はしめぬ、『我が主は斯く宣べ給ふ。國王ウーシルマリの子、王子サトニ、余はおん身を愛して心地生命絶えなん人の如し。……おん身わが望むが如くに我を愛し給はば、捧ぐるに尊き極みなる贈物を以てせん。さらずば、何人も再びおん身を見ざらんやう、おん身を生きながら死者の裡に葬り埋めん威力余に在りと知り給へ』

スートブーイは此の言葉を聞きて、少しも驚ける樣も、怒れる樣も、恐れし樣もなく、その黑き太き眼にて笑ひて、斯く答へぬ、『國王ウーシルマリの子、おん身の主サトニ王子に、ブバステズなる我が家を訪れ給へと告げ給へ。己は今しそれへ行かんとすなり』……斯く言ひて數多の少女より成れる供人を具して去りぬ。

＊
＊ ＊

さればサトニは直ちにかの河に沿へるブバステズの町に急ぎ、豫言者の娘スートブーイの家を訪れぬ。此町いづこにもかの女の家の如き家はあらざりき。棟高く軒長く、白壁廻らせる花園に圍まれてありぬ。サトニはスートブーイの下婢に隨ひ家に入り、渦と曲れる階段を二階なる一室に到れば、黒檀と象牙との幅廣き寢床あり、珍らしき彫せし貴重なる家具あり、焚香燻ゆる鼎あり、黄金の盃載せし杉の食卓ありき。壁はまた綠玉石を鏤めて瑠璃に塗られ、心地よき異樣の光を放てり。……スートブーイは、ファラォの宮殿の壁に描かれしかの舞姬の衣裳のごと透き通りたる純白の衣を身にまとひて、閾の上に身を現はしぬ。サトニは壁の光を背に立てる彼女の、その手足のしなやかなるを見、その身のたをやかなるを眺めて、心臟の鼓動止まるかと覺え、物言ふこと叶はざりき。されどスートブーイは葡萄の酒を侑め、齎したる贈物をその手より受取り、――否まず口づけせしめぬ。

やがてスートブーイ言ひぬ、『我が愛は贈物もてたやすく購はるべきに非らず。おん身しかく望み給へれば猶ほおん身を試し見ん。さればおん身我に愛されんとには、有ち給ふ總てを――おん身の黄金とおん身の白銀、おん身の土地とおん身の家屋、おん身の家財と

おん身の物たる總てを——證書にしたゝめて我に讓り給へ。かくて我が住む家はおん身の家たらん』

サトニは、その長き黑玉なす眼に見入りて、己が有てる總ての物の價を忘れぬ。學士を招きつ、その學士はサトニの財貨總てをスートブーイに與へんとの證書をしたゝめぬ。

スートブーイまた言ひぬ、『おん身しかく望み給へれば猶ほもおん身を試し見ん。おん身我が愛を得んとには、おん身の子等をもまた奴隷として我に讓り給へ、おん身が物たりしものについて我が子等と爭を起こし給はん惧あれば。かくて我が住む家はおん身の家たらん』

サトニは、物彫る象牙の如く曲り駝鳥の玉子の如く圓やかなるその胸の魅力を諦め見て、己が愛らしき子等を忘れつ。證書は認められぬ。……恰もその時使者來りて言ひぬ、『サトニの君、卿の子等下に在りて卿を待ち給ふ』彼は言ひぬ、『此處へ昇らしめよ』

スートブーイはまた言ひぬ、『おん身しかく望み給へれば、猶ほもおん身を試し見ん。おん身我が愛を得んとには、卿の子等を殺させ給へ、後に至りておん身が與へ給はりし物を要求し給はん惧あれば。かくて我が住む家はおん身の家たらん。』

サトニは、そのなよやかなる姿と、その棕櫚のごとたをやかなると、その象牙のごと美

はしきとの魅力に魅せられ、父の身を打忘れて答へぬ、『しか爲さしめん、我もし天界の主ならんには、口づけ一つ得んに天界も亦汝に與ふべし』

スートブーイは己が目前にサトニの子等を殺させしが、サトニは生命助けんとはせざりき。彼女は下婢に命じて下なる猫と犬とに子等の軀を窻より投げしめしが、サトニは手を擧げてそを止めんとはせざりき。されど彼は彼女に『汝の愛を我に與へよ。余は汝の爲めに地獄に在る者の如くなり』と呻くのみなりき。やがて彼女は立ち上りつ、他の一室に入り、振返りてその奇しくも美はしき兩腕を彼に差伸べ、口言ふべからざるその眼の魅力もて彼を引寄せぬ。……

されどサトニが彼女を抱きて口づけせんとせしに、不思議やその赤き口は開き、延び、擴ごり、深まり——いや廣く、いや黑く、急速にまた廣大に開きて——墓地の如く暗黑に、冥府の如く洪大なるものとなりぬ。サトニは夜の如く深まり黑ずむ深淵を目前に視るのみなりき。と見る、その深淵よりして暴風突として哮り起こり、彼が身を運び去りて、木の葉の如くに遠く旋轉せしめぬ。彼は正氣を失ひぬ。……

……己に還りし時は彼は地下の墳墓の入口に身あらはに横たはりてありぬ。甚大の恐怖と絶望と彼を襲ひ、己が生命を断たんと志しつ。されど國王に仕ふる者共彼を見出し、事無く父の許へ運び歸りぬ。その妖異なる話を父は聞きぬ。

聞き訖りてウーシルマリは曰ひぬ、『サトニよ。死せるノーフェルケプターは生ける汝よりも偉大なる魔術者なり。子よ、先づ知れや、汝が子等は我が保護の下に安泰に生きて在り。また知れや、汝がその美はしさに迷はされ、その爲めに心の裡にて汝が極惡なる罪を犯したりしその女は、まことはノーフェルケプターの魔術が爲せし幻なりしなり。汝に情慾を起こさしめ、斯くして汝の魔術の力を無きものたらしめしなり。されば我がいとしの子よ、急ぎノーフェルケプターにかの書を返せ。汝の眷族總てと共に、全く滅び果てん惧あれば』

＊
＊　＊

かくてサトニはツースの書を取り、その手に杈と杖とを持ち、その頭に火ある火鉢を戴きて、シーブズの墓地に赴き、ノーフェルケプターの塚の中に納めぬ。アフーリは手を拍ち、光明の再び還れるを見て微笑みぬ。ノーフェルケプターは笑つて言ひぬ、『先きに汝

に言ひはせざりしか』アフーリは言ひぬ、『さなりき。嗚呼サトニよ、おん身は迷はされしなりき』されどサトニはノーフェルケプターの前に平伏して、贖罪の術を問ひ尋ねぬ。

ノーフェルケプター答へて曰ひぬ、『サトニよ。我が妻と子とはまことはコプトスに埋められてあり。此處にて汝が眼にするはただ二人の靈のみ――魔力に因りて我と共に止まれる魂のみ、力のみ。さればコプトスなる二人が休み場を探し出し、その軀を我と共に埋めよ、我等は斯くして再び結合すべく、汝は罪業を滅せん』……

かくてサトニはコプトスに赴き、アフーリの墳墓の場所を知れる老齢の一祭司に會ひぬ。祭司曰ひぬ、『我が父の父の父なりし人そを我が父の父なりし人に語り、我が父の父なりし人そを我が父に語りき』と。……斯くてサトニは二人の軀を見出し、ノーフェルケプターへその妻とその子とを還し與へぬ。斯くして己が罪を贖ひぬ。その後ノーフェルケプターの塚はファラォの命に依りてとこしへに封ぜられたれば、ノーフェルケプターの墳墓の在り場を知るもの、今は世に更に無し。

泉の少女

こは死者のほか何人も衣服を着けず、年若き者の美はしさは琥珀の像の美はしきが如くなる、常夏を通じて山も亦雲の帶を纏ふを否むなる、かの太平なる國の物語なり。……

『偉(おほ)いなるオマタイアヌク！
『色黑き長身者アヴアヴ！
『丈高きウートゥートゥ！
『我等の爲めに道に影あらせや！
『我等が前なる椰子を聳えや！
『まどろめる者へ夢と身を屈めや！
『眠れる者の眠をいや深からしめや！
『眠れや、汝等、闇の蟋蟀！眠れや、汝等、憩ふ事無き蟻！眠れや、汝等きらめく夜の

甲蟲！

『風よ、汝等囁くことを止めよ！休まざる草よ、汝の戰ぐことを休めよ！棕櫚の葉、靜かなれ！河の邊の葦、揺ぐな！青き川、汝の脣を岸に觸るゝことを止めよ！

『眠れや、汝等家の梁よ、汝等柱よ太きも細きも、汝等捶棟木よ、草葺の屋根よ、蘆編の器よ、竹格子の窻よ、幽靈のごと軋り泣く戸よ、低くほの燃ゆる白檀の焔よ――など ろめや汝等いづれも！

『あゝオマタイアヌク！

『丈高きウートゥートゥ！

『我等の爲めに道に影あらせや！

『我等が前なる椰子と聳えや！

『まどろめる者へ夢と身を屈めや！

『眠れる者の眠をいや深からしめや！――

『風の眠をいや深く――

『水の眠をいや深く――

『夜の薄暗さをいや薄暗くせや！

『汝等の呼吸(いき)もて月を蔽ひ隱せや！
『星の焔をいや弱からしめや！
『かの妖(あや)しき者共の名によつて我は祈る。——
『ウートゥートゥ　ロラー！
『オブーブロロア！
『眠れや！
『眠れや！』

＊
＊　＊

月ごとに新月の上るに連れて、盜人共の魔力ある歌斯く、——初の夜は椰子の木の間の風の細唸りの如く低く、滿月の白き太き顏が光を森に漲らせて柱なす椰子のあたりに白銀の水溜をつくるに至るまで、夜毎聲高らかにいや聲高らかに、いや淸くいや妙に聞こえぬ。滿月の魔力はかの歌の魔術よりも力づよく、ラロトンガの人等は眠らざりければなり。さればさならぬ夜には、ラロトンガの人等そを捕へんと係蹄(わな)を置きたれども、眼に見得ざる盜人ありて椰子の實里芋(タロ)野甘蕉バナナを數多く奪ひ去るなりき。しかも椰子の實の人の手

の及ばざるべき高き木末なるを取られたるを見て人々恐ろしと思ひぬ。

※
※ ※

されど酋長アキは、或る夜、此の世の底を流るてふ水地より湧出づる泉ヴイピキの傍に在りて、恰もその夜の薄き月影がそを見入りし時、月よりも白く、魚の如く身露はなる、夢の如く美しき若者と少女とが、その泉の水より立昇るを見ぬ。二人は歌を歌ひ始めぬ。アキはたこのきの葉陰に身を潜めてその響に耳を留めしに、そはエ・ティラ・オマタイアヌク、エ・ティラ・ウートゥートゥ ロロアの彼の妖魔の歌なりき。風は靜まりつ、波は眠に沈みつ、棕櫚の葉はうなづくことを止めつ、蟋蟀の歌は鎮まりぬ。

※
※ ※

アキは二人を捕へんと工みて、泉の裡に大なる網を深く沈めてその歸り來るを待ちぬ。夜の靜けさは深まりぬ。火の山の煙は、下より血の色爲して、巨人がいたゞける羽毛の冠のごと、空に懸りて動かざりき。やがて海の風棕櫚の林に幽けき囁を始めぬ。蟋蟀一つ細く鳴きそめて、幾百千の蟲の歌之に應じぬ。新月はその蒼き角一つを海に沒し、東は白み

て沙魚の腹の如く色更めぬ。歌の魔力は失せて、空は明けなんとしてありぬ。

アキはかの白き者共が果物と木の實と香ばしき菜草とを携へて歸り來るを見ぬ。葉陰なる隱れ場より突と現はれ出でて二人を襲ひたるに、二人はその果實を泉の緣に投げ散らして、魚のごと、その中に飛び入りぬ。されど見よ、二人は網に捕へられしなりき。

アキは網を陸へ曳上げんと力めつ。力強き男なりければ容易く動かし得たり。されど網を裏返す時、男は網の口を飛び出でて、下なる水の人知らぬ奈落へ鮭のごと身をきらめかせて沈み入りしかば、アキは唯少女のみ捕へ得つ。女は網の中にてもがきたれどもその甲斐無く、その月と白き身は、漁者の手中なる美はしの魚の身のごと、蛋白石樣の光を帶び來ぬ。女は泣いて赦されんことを願ひしかど甲斐無かりき。アキは女がその手を辷り逃れて再び身を匿さんことを恐れて、珊瑚の大石もて泉の底を塞ぎ止めぬ。されどその異しきまでに美はしきを打眺めて、口づけしまた言ひ慰めつ。女もやがて泣き止みぬ。その眼は星に閃く熱帶の天の如く、大きくまた黑かりき。

* * *

やがてアキはその女を戀ひぬ。己が生命に勝して戀ひぬ。人々またその美はしさに驚き

ぬ。動く時は光その身より出て來り、川に泳げばその過ぐる處――打震ふ光の柱となりて――水の上なる月の道の如くなりければなり。ただ人の心に留りしは、その光ある美しさが月の光の增し衰ふるにさかさまに、增し衰ふることなりき。その白さは新月の折その白きを極め、月の面の圓やかなる折は殆んど光を失ふなりけり。また新月の上る時は必らずしめやかに泣きぬ。アキはその國人の言葉もて――母音に富み、聽く人には夜啼く鳥の歌を模したるやうに甘く心地よき言葉もて――戀の言葉を敎へたりし後もなほ、女を慰むること叶はざりき。

* * *

斯くて幾歲か過ぎて、アキは年老いぬ。されど女は年長くること絕えて無き不思議の種族のものなりしかば常に同じ容姿にてありき。やがて女の眼がいや深くいや麗はしく――妖しきまでに麗はしくなりしが氣づかれぬ。アキはこの齡にて人の子の父となるべきことを覺りつ。さるを女は泣きて乞ひ求めて言ひぬ、『思ひ給へ、妾はおん身の種族にはあらねば、やがてはおん身と分れざるを得ざるなり。おん身若し妾を愛し給はば、妾の此白き身を切り斷ちて二人が中の子を助け殘し給へ。子若し妾が乳を飮まば妾は妾が世ならぬ此

世になほ十年を住まざるを得ざれば。斯くして妾を害ね給ふことはあらじ、死ぬと見ゆるとも妾が身は生き永らふることなれば——妾を傷づけ給ふこと叶はざるは斧または槍もて水を傷づくること叶はざるに勝れり。妾は水と光とより、月の光と風とより生れ出てしものなれば。妾はおん身の子に乳を授くることは得せじ』……

されどアキは女と子と二人ながら失はんことを恐れて女を説諭してうべなはしめぬ。生れし子は白き星のごと美しく、女は樂しき十年を子をはぐくみぬ。

されどその十年過ぎたる時、女はアキに接吻（くちづけ）して言ひぬ、『嗚呼、今やおん身と分れでは叶はじ、さらずば死に果つべければ。さればかの泉の珊瑚の岩を取去りて給へ』かくて更に又接吻（くちづけ）して重ねて歸り來るべしと誓ひければアキは竟にその乞に從ひぬ。女は夫を伴なひ行かまほしく思ひたりけめ、されど生命（いのち）ある人の身とて彼は行くこと叶はざりき。女は閃く光のごと泉の底に躍り入りぬ。

* * *

子は丈高くまた美しく生ひ立ちしが、白しといふもただ海の彼方よりの異人の如くにて、其母の如くには非らざりき。されども其眼には異（あや）しき光ありて、新月の折は限り無く輝き、

その光増すにつれて衰ふるなりき。……一夜大風吹き起こりぬ。椰子の木、蘆の如くたわみ、怪しき聲、風と共に聞こえ、叫びつまた呼びつ。曉にかの若者は在らざりき。人の目覺にまた彼を見たることあらざりき。

されどアキは生きること百歳を越えて、その髪が夏雲よりも白くなるまで、ヴイピキの傍に女の歸るを待ちてありき。人々は終に彼をその家に運びてそのたこのきの葉の床の上に横たへぬ。死なんことを慮りて、女共擧つて彼を看護(みとり)してありぬ。

……新月の夜なりき、――またその新月の昇る頃なりき。俄かに低き妙なる聲が、半百の年經たる後なほ記憶せりし人のありしかの古き歌を歌ふが聞こえぬ。いや妙にいや妙に音は響きて、いや高く月は昇りつ。蟋蟀は歌ふを止め、椰子は風に順ふを否みぬ。看護(みとり)せる者共俄かに頭重くなるを覺え、眼は開き居ながらも、手足を動かし得ず、聲を放ち得ずなりぬ。やがて其處なる總ての人に、湖の魚のごとしなやかなる姿せる、月の光よりも白き或る白き女が看護(みとり)の人達の並み居る中を辿り行くが氣付かれぬ。その女アキの半白の頭を己が輝ける胸の上に寄せ、彼に歌うたひ、彼に接吻(くちつけ)し、彼の年老いし顏を撫でさすりぬ。

……

日は昇り、看護の者は目覺めぬ。身を屈めてアキを伺ひ見たるに、彼は輕く眠れる様な

りき。されど人々彼の名を呼びしが彼は答へざりき。彼に手を觸れ見しが彼は動かざりき。彼は永久へに眠れるなりけり。……

鳥妻

其處にては月は、幾度も死しまた幾度も魔術の爲めに蘇生(よみがへ)らさるゝ者の如くに、あまたたび年老いてはまた若やぐなり。また日は蒼白き霧の輪の中に動きて沈むこと無し。されど竟にその沈む時も猶ほ光あり。月あまたあまた經ちてその再び昇るまで、空に、氷山の上に、死せる者が赤き焰を造ればなり。

黑き海と薄黑き霧のほか、其處にては萬の物みな白し。されど水の終はる處と陸の始まる處を見出さんことは難し、世界のその個處を神は造り終ふることを忘れたればなり。氷の峰々は太りまた瘠せ、その居並を北にまた南に移し、怪しきまでにその姿を更たむ。伸びまた擴ごる氷に顏面あり、今は世に絕えたる動物のそれの如き形態あり。月盈つれば、死魚を食とすなる無數の犬の群、轟く海に向ひて共々に吠え喚き、大いなる熊その聲を聞きて、氷河の中の最(いと)高き岡に群がり集ひ、稜(かど)立てる氷の白き岩をば其處よりその犬に烈し

く投ず。あるが中に、赤き光に抽んでて、世界創始このかた生ける焔の泉なりける山一つありて、その土地の表には到る處怪異なる骨堆く積もれり。されどそは其處にての夏なり。冬となれば氷の呻き、風の叫び、海に浮ける大氷塊の齒軋(はぎしり)のほかには更に何の音も無し。

さてかゝる處に、海獸の油注げるラムプを點して、そが家は雪の小屋なる、人住みて、野犬その人等に從へり。されど彼等は腕無き人間の姿して往古の氷の綠色せる彼(か)の怪物ハヴストラムを恐れ、己が小屋の立てる氷の下にて泣く、女の如き形せるマアヂャイジを怖れ、その牙は氷柱なる化け物熊を怖れ、氷山の精にてカヤクを黑き水の下に曳き入るゝカヤリサットを怖れ、魚の鱗よりも薄き氷の上を聲無く煙の如き一聯の獸(けもの)を走らしむる幻の象牙取を怖れ、その不思議の術にかかりて笑を催す者共絕ての生命(いのち)を絕つ力もてる、夜路にさ迷ふ者共を待てる彼(か)の白き變怪を怖れ、また構へてそを追跡すまじき白眼の鹿を怖る。また魔術者の、妖術者の――トゥピレクの創造者イリセーツトの――住居あり。

さて恐ろしき物の中にても最も恐ろしく、言語に絕せる物の中にても最も言語に絕せるはこのトゥピレクなり。

故いかにとならば、此土地は骨に充ち――海の怪物と陸の怪物との骨、人の生るゝ幾劫の昔に死滅せる動物の頭骨と肋骨に充ち――さる骨の山ありまた島あり。深さそを蔽ふに

足らざる氷よりして又沙よりしてはみ出づる此等の白き齒を、此等の恐ろしの牙をば、生命を賭して獲んとて橇と無數の犬とを伴なへる象牙取が遠き南國の大商人に送られ來ること時折あり。

イリセーツトはかゝる骨のうち最も大いなるを索め、多くの海の動物と陸の動物との心臟と頭腦と共に、之を大いなる鯨の皮にて包み、それに向ひて奇しき言葉を唱ふるなり。その巨大なる一塊斯くて顫へ呻き、神が造れる如何なる形態にも優して物凄くまた巨大なる形態を自づと得て、數多き足もて歩み、數多き眼もて視め、數限り無き齒にて物喰み、その創造者の意のまゝに行動す。これ即ちトゥピレクなり。

* * *

其處にては――氷がその姿を奇しくも更むるが如く、砂地の境界永久へに改まるが如く、骨は土となり土は骨となるやうに思はるゝが如く、――萬の物みな形を變ず。されば獸も亦人間の外貌を装ひ、鳥も人間の形態を伴る。此處にては萬の物に魔術あればなり。或る日の事なりき、さる象牙取、一群の海鳥が形を婦と更ふるを見ぬ。白き雪の上をば――自は白き毛皮にて身を包みて――心用ゐて匐ひ行き、俄かに彼等を襲ひ、最も手近なる一人

を強き手もて捉へぬ。殘れるは再び鳥に返りて、怪しき長き叫と共に南の方に飛び去りぬ。

その女若き月の如くしなやかに、またその如く白かりき。またその眼は野鷗のそれの如く黑くまたなごやかなりき。斯くてその象牙取は――女が悶ゆること無くただ泣くのみなるを見て――憐を催し、己が暖き雪の小家に伴なひ歸りて、軟き毛皮を纒はしめ、大いなる魚の心臟を喰ましめぬ。やがてその憐は戀と更はりて、女はその妻となりぬ。

二年の間二人は共に住みて、男は網と弓とを用ふるに巧なりければ魚肉と獸肉とを女に喰ましめつ。されど出で行く折は、女が再び鳥と姿を更めて飛び去らんことを虞れて、常に小屋の戶口を塞ぎぬ。されども、女が二人の子を擧げたりし後は、その恐は夢の記憶の如く消え去りつ。女は從ひて狩に出て、弓執る業すらいと巧となりぬ。されど女は男に說きて野鷗を撃つこと無からしめぬ。

二人は斯く住み斯く愛したりしが、やがて子等は强くまた疾くなりぬ。

或る日の事なりき、二人が共に狩してありし折、多くの鳥の殺されたることありき。その時女は子等に向ひて言ひぬ、『兒等よ、急ぎて羽毛少し齎せよ』子等は手に餘る羽毛を持來ぬ。女はその羽毛を子等の腕の上に、また己が肩の上に置き、叫んで曰ひぬ、『飛べや、汝等は鳥の種族なり。汝等は風の子なり』

たちどころに三人の衣物は身より辷り落ちぬ。かくて野鴨と變りて、母と子等は氷と冷たき冴えたる風に立昇り、翔け廻り翔け廻り、いや高くいや高く舞ひ上りぬ。泣き崩るゝ父の上を三たび輪に旋り飛び、ほの明るき氷の峰々の上に三たび叫び、僅かに向を定めて遙かの南指して射るが如くに永久へに飛び去りぬ。

॥श्री॥

印度及び佛教文學よりの物語

* * *

ティロッタマの創造

こはそを二萬四千の首盧迦(スロカ)にて作りその他にまた六百萬の首盧迦を作りしクリシュナ・ドヴイパーヤナ仙(せん)が作『摩訶婆羅多(マハバーラタ)』の中に語られてあり。その六百萬の首盧迦のうち三百萬は諸神之を保管し、一百五十萬は因陀羅(インドラ)天の樂師たる乾闥婆(ガンダハルヴ)之を保管し、一百四十萬は惠まれたる死者の亡魂たるピトリ之を保管し、十萬は人間之を保管す。……人間の如何に罪深き者といへども『摩訶婆羅多』を唱ふるを聞けばそのあらゆる罪業を免れ、病も不幸も近づくこと能はず。

註　摩訶婆羅多の初篇の序文に據れば此の今や最も巨大なる叙事詩は初はただ二萬四千首盧迦より成りしものなりき。その後の増補がこの對句詩の數をば十萬七千三百八十九といふ絶大なるものに膨脹せしめしなり。L・H・

偉大なる諸神が一婦人の美しさの爲めに多くの顏と百千の眼とを有つやうなりしは如何なる次第にてか、大なる重さの書に――摩訶婆羅多に――詳しく物語られてあるが儘に余は語らん。

※
※ ※

遠き昔、惡神の種族阿修羅族より出でし雙子の兄弟たるダイテャ二人ありき。その名はスンダとウーパスンダとなりき。王子の身と生れしが、二人は長じて殘忍猛烈に、しかも目的も、思想も、快樂の追求も、罪惡の遂行も常に相同じかりき。

時久しく經ての事なりき、偶ゝこの二人の兄弟は三界を主宰して、尊き限りなる苦行者がそれに因つて身を神の位（くらゐ）に高むる彼（か）の峻嚴なる行と犧牲とを總て行はんと心定めぬ。斯くて二人は頻陀山の幽靜なる地に赴き、默想と祈禱に身を委ねて、その巨大なる手足は籐の莖のごとか細く、その關節は骨の節の如くなりぬ。二人は生の活動總てを廢し、此世の事物との接觸は感覺を生じ、感覺は欲望を生じ、欲望は墮落を生じ、墮落は存在を生ずることを知りて、此世の事物との總ての接觸を耐へ忍びぬ。斯くて冥想と難行の功力に依り

て世界は彼等には非實在のものとなりぬ。一たび意志を動かせば二人は宇宙を震撼することを得て、世界は二人の思想の重さに恰も地震に惱めるが如くに震ひ戰きぬ。二人の身の滋養(やしなひ)はただ風なりき。二人は己が肉をも犧牲と捧げつ。かくて頻陀山も二人の苦行の力に熱せられて火の山の如くに空に煙を立てぬ。

されば諸神は恐を爲し、彼等の思を苦行より轉じ、女と惡魔と神との幻を以て彼等の心を亂さんと欲しぬ。されど此の阿修羅二人は刹那もその苦行を行ふことを止まず、ただその拇指のみにて立ち、日を見つめて在りき。

＊＊＊

さて、幾年か過ぎての事なりき、世界の創造者の父にして上帝たる梵天王偶〻二人の前に光の姿と身を現じて、何にても欲するものあらば乞へと述べぬ。二人は額の前に手を合はせて答を爲しぬ。『世界の父の父若し我等の苦行を嘉し給はばあらゆる魔術とあらゆる戰の術とを知らん事を、美と力との賜物を有たん事を、また不死不滅の約を得ん事を欲すなり』

されど梵天王の姿は彼等に答へぬ、『ダイテャの王子等よ、汝等はただ三界を主宰せん

とて苦行を行ひたることなれば、不死不滅は汝等に與ふまじ。されど余は智慧と力と、また汝等が欲する肉身的賜物とは與へん。また何物も汝等を滅ぼさざるべきことをも汝等に保證せん。汝等互に傷ふにあらずば、此世の生物又は精靈又は神のうちにて、何物も汝等を害ふ力あることなからしめん』

斯くて二人のダイテャは梵天王の恵を享けて神も人も征服すること叶はざる身となりぬ。二人はその住居に歸り來り、正しき道を全く離れて、惡しきその種族の如何なる者もが嘗て爲したりしに勝りて、異常に飲みまた食ひまた罪を犯したれば、二人の生存は汚れし快樂の果てし無き饗宴に比すべきものなりき。されど彼等と共に住める生きとし生ける物は放逸の爲め身を害ねたれども、如何なる快樂も此の阿修羅を飽かしむること無かりき。

まこと此二人のダイテャは休息も睡眠も欲する所にあらず、また要する所にあらで――日も夜も彼等には同じものの如くなりき。されど彼等のあたりの者共は快樂の故に疾く死し、ダイテャはその死ぬるが爲めに彼等を怒りぬ。

＊＊＊

さてやがての事、この二人の阿修羅は梵天王の意によりて與へられたるその魔術の知識

もて三界を征服せん爲め、暫らく快樂を棄つるに心定めぬ。斯くて彼等は因陀羅天と戰ひぬ。空を走ること鬼神より速き力を與へられたればなり。天人(スーラ)は固より諸神も亦、彼等が來ることを知り彼等が授かりし威力の性質を知れることとて、聖き極みなる死者の精靈が住む梵天界(ブラアマロカ)に逃れ去りぬ。されど二人のダイテャはその惡神の軍勢を從へ、財寶の守護者たる夜叉多くを殺し、鬼神たる羅刹を殺し、また空飛ぶもの數多くを殺しぬ。かゝる事爲し終へて後、世界の內臟の裡に住まへる人面の蛇たる那伽(ナガ)總てを殺しつ、また海の生物總てを征服しぬ。

斯くて二人はその惡の威力を全世界に擴げて、神を崇むる者總てを滅ぼさんと心定めぬ。そは王仙人並びに婆羅門が捧ぐる祈禱と犧牲とが諸神の威力を絕えず增したるが爲めにて、その爲め此ダイテャ二人は聖き人總てを甚だしく惡めるなりき。しかも此邪まなる二王子には授かりたる威力あることとて、何人も其意志に反抗すること叶はず、隱者及び婆羅門の偉大なる呪咀も更に效無かりき。神を崇むる者は悉く滅ぼされぬ。永久へなる祭壇の火は散らされ消されぬ。聖き捧げ物は水に投ぜられぬ。聖器は毀たれぬ。尊嚴なる寺院は倒されぬ。大地の表は、死の神に荒らされしが如くに、寂寞たる曠野となりぬ。二人の阿修羅は更に身を魔術によりて虎の姿に、獅子の姿に、恐ろしの象の姿に變じて、山の祕かな

る洞穴に、或は森の人知らぬ奥底に、或は藪地の深き靜寂の中に住める行者隱者を探し出して、之を滅しぬ。されば世界は人骨の散在せる荒野と成り、町無く、人無く、犧牲の煙無く、祈禱の囁無く、人間の聲無く——唯々無量の恐怖と忌まはしの死滅あるのみなりき。

* * *

かゝりければ空なる聖き者總て——悉達とデヴルシとバラマルシと——世界の荒廢に愕き、聖き限の同情を萬有に注ぎて、梵天王の住處に集まり、二人が爲せりし事を歎き訴へ、スンダとウーパスンダとの威力を奪はんことを乞ひぬ。その時梵天王は悉達とブラマルシの環を爲して並べるが中(なか)に、諸神のうちに坐してありき。摩訶提婆もありき、又因陀羅も、火の王阿耆尼(アグニ)も、風の主ヴユーも、七頭の馬を驅る日神アディテヤも、蓮を好める月の神チャンドラも在りき。また天界の長者も總てそのあたりに立ちぬ、——聖なるマリチパと、アヤと、アギムーダと、テジョガーバも在りき。森のヴナプラスサと、空のシッダと、草の根喰みて生けるヴィカーナと、梵天王の毛髮より生れ出でし——大いさ人間の拇指にも及ばざる——光り輝ける六萬のバラキイルヤもまた在りき。

斯くて梵天王は永遠界の菫色なせる深奥よりして宇宙の形成者たり諸々の世界の創造者

たる毘首羯磨を――天界のあらゆる光明の點火者たる――毘首羯磨を招きぬ。毘首羯磨は永遠界より星雲の如くに立昇りて、あらゆるものの父の前に光りて立ちぬ。

梵天王は彼に語りて言ひぬ、『我が金色の子よ、毘首羯磨よ、その美はしさは月があらゆる水をその裾に率ゆるが如くにあらゆる神の心を引かんやうなる――麗はしき極みなる物よりも尚ほ麗はしく、いとも妙なる物よりも尚ほも妙なる女一人を我に創造せよ。……我れ待たん』

＊
＊　＊

斯くて毘首羯磨は身を霧に包みて、神の父の命に從ひ、あらゆる寶玉を用ひ、天界のあらゆる色を用ひ、花のあらゆる香を用ひ、光のあらゆる光線を用ひ、音樂のあらゆる音を用ひ、眼に見手に觸れ耳に聞き口に味はひ鼻に嗅いで美はしく貴き物總てを用ひて、人目に見ゆること無く、盛んに、事に從ひぬ。斯くて蒸氣が霜の木の葉に似たるレース細工に形造らるゝが如く、日の光が百種の色有つ寶石に變形さるゝが如くに、まこと不可思議にも、價値限無き百千の事物混合して生ある新らしき物質となり、その物質形を成して、一人の婦の身となりて現はれぬ。一切の花の美はしさその女の胸に媚び、一切の芳香その女

の呼吸にたゆたひ、一切の寶石の閃光その女の眼の光輝を成し、その女の髮は日光と黃金とにて造られ、天界の花その女の唇に吝み、眞珠と靈妙なる蛋白石とその女の微笑に解け、その女の聲音は禽鳥一千の戀の歌にて造られぬ。名をティロッタマと與へられつ。そは神と人とが語りし印度の彼の古き言葉にて『優美極り無き原子より成れる者』との意なり。……斯くて毘首羯磨は夕榮が消え失するが如くに去り、無量無邊に沈みて、時間も空間も在らざる永遠界に加はりぬ。

＊
＊ ＊

ティロッタマは、衣物を纏へるが如くに光のみを身に纏ひ、輝く共居の前に禮拜の手を合はせ、諸神の父の前に身を屈し、天中の天に在つても尙ほ且つ未曾有なる美はしき限りなる聲にて言ひぬ、『汝一切の父よ、おん意(こころ)は如何に、我が造られたる望き目的は如何に』深き黃金の音色、穩かに、答へぬ、『善きティロッタマよ、人間界に降り行き、汝の美の魔力をスンダとウーパスンダとが見る所にて顯はし、汝の故に、かのダイテャが互に憎惡の念に充たんやう行へ』

ティロッタマは『萬物の主よ、卿の望の如く爲さん』と答へ、その美しき身を三たび梵

天王の前に伏し、過ぐる折いづれにも會釋して、環なせる諸神のあたりを辷りまかりぬ。

さて其處に、かの大自在天たる大神濕婆、その面を東に向けて南に坐して在りぬ。他の諸神は北を見て在りき。またかの七位の聖者——デヴル聖者、プラマル聖者、マハル聖者、パラマル聖者、ラヂャル聖者、カンダル聖者、スクルータル聖者——あらゆる方位に坐りて在りき。諸神は、ティロッタマがその圓座を廻り行く間、歡喜の爲めに造られしにはあらでまこと破滅の爲めに造られたるその魔力ある美はしき女の方に己が情が心ならずも引かれんことを惧れて、いづれも女を見まじと努め力めぬ。斯くて一刻の間、因陀羅と尊きスサノウとは彼の女にその心を冷やかならしめつ。されどその面を東に向け居たる大自在天に彼の女近寄りし時、大自在天に更なる面——その南方に、蓮の花よりも美しき眼有てる面一つ——生じぬ。彼の女その後に廻りし時、その西方に更にまた面一つ生じ、彼の女北に轉ぜし時、その北方に更にまた面一つ生じたれば、彼女を視ざるを得ずなりぬ。大因陀羅すら、彼女が廻り行ける時、前に後に四方に眼開きて、赤き眼瞼なせる深き太き眼こその數千に及びぬ。摩訶提婆が四面神となり、バラスーダナ神が千眼神となりしは斯る因由にてなり。またティロッタマそのまはりを過ぐる時、あらゆる神と天界のあらゆる作者とに、新らしき面生じぬ。視まじと志ざせしかども、いづれも二面となり、三面となり、或

は百千面となりつ、彼女の麗はしさの魔力はしかく偉大なるものなりき。ただあらゆる神の父たる梵天王のみ依然として永遠の如くに情念を有たざりき。彼には美も醜も、光明も暗黒も、夜も晝も、死も生も、有限も無限も、常に同一不二なればなり。……

＊
＊＊

さてスンダとウーパスンダとは山の中にて心猥らなる女共と遊び戯れ居りしが、その時始めてティロッタマが花を摘み居るを認めぬ。そが姿を見ると共に二人の心臓は鼓動を止めぬ。二人はそが行ひたりし事の總てを、その財寶を、その威力を、その快樂を打忘れしのみならで、二人は互の手に依りてのみ死することとありうべしとの神の約束をも打忘れぬ。各〻ティロッタマに近づきつ、各〻その口に接吻せんと求めつ、各〻他を斥けつ、各〻彼女を己が物と要めつ。斯くて、互の初めの憎惡はその眼に炎を燃やしぬ。『我が物たるべし』とウーパスンダ叫びぬ。『爲し得んには我手より奪へ』とスンダは氣狂ほしく反抗して哮りぬ。かくて言葉は罵詈となり、罵詈は烈しき挌鬪となりて二人は兇器もて互に打ち合ひ、終に二人とも生命を失ひぬ。

斯くて恐怖の念、邪惡なる者共總てを襲ひ、女共は泣叫びて逃れ去りぬ。阿修羅どもは、

梵天王の手が此事にあづかれるを視て、戰き震ひ、逃れて火と暗黒との彼等の住處に歸り、遠く、呪はれし者共の住處たるパタラヲにすら赴くがありき。

* * *

されどティロッタマは梵天界に歸り來りて諸神の稱讚と諸の世界と人間との父たる梵天王の懇ろなる褒辭を受けぬ。その時梵天王は如何なる惠與にてもその望むが儘なるを與ふべしと乞はしめしが、惠まれし者共が住むなる、彼の光明界に永久に住まんことをのみ願ひぬ。一切の父は答を爲して言ひぬ、『許さん汝の願を、汝、造られし物のうちにて最も誘惑の力ある者よ。日の近くに汝を住まはしめん、惡しき事起こらん處あれば神共の間には住まはしめじ。生命ある者共の情が汝の爲めに滅びざらんやう、汝の美はしの光輝は眼もて汝を見ること能はざらしめん。さればとこしへに日の天の裡に住め』

斯くて梵天王は、因陀羅に三界統治の力を返し與へて、梵天界の無限の光明の中に退きぬ。

婆羅門とその妻

賢者は女に愛著する事無し。恰も翼の羽毛を捋られし大鴉を弄ぶが如くに、女は己を愛する者の情(こころ)を弄べばなり。……女の舌には蜜あり。その情(こころ)には毒ハラハラのほか他に物無し。……その性は海の渦の如く動き易く、その愛情は續くこと日の沒する所の上なる黄金の光よりも長からず。内は總て毒、外は總て麗はしく、女はゴウンヂャの果實の如くなり。……されば經驗ある者また賢き者は女を避くること、恰も墓地の内に置かれたる水器を避くるが如し。……

『五つの物語(パンチョパキャーナ)』に、また古き印度の言葉にて『カスァサリツァガラ』と呼ばるゝ『物語の川の洋』に、或る婆羅門とその妻との此の說話見出さるべし。

……戀人の眼に存する光如何に和やかなりとも、己が情(こころ)をその進歩の下(した)に置きし女の生命(いのち)の爲めに己が生命を捧げたりし婆羅門の眼に存する光に優(まさ)して、和やかに輝きたりして

と嘗てあらじ。されど生命ある間に、一度は女が起こしたる狂氣の犠牲とならざりし如何なる人か世に住むべき。……

彼のみその妻を愛しぬ。一家の者は――その女の香に、姉妹を兄弟と爭はしめ友を友と激せしむる、微妙なる毒ありたれば――その女の前に在ることを忌みいとひぬ。されどこの婆羅門その妻を愛すること甚だしく、その女の爲めに父母兄弟姉妹を見捨て、他の處にて身を立てんとその妻と共に出て立ちぬ。幸にもその守護神デヴ彼に伴なひぬ――餘りに妻を愛する愚かしさのほかには咎むべき所なき、まこと尊き男なりければなりき。デヴは靈眼を有てることとて出來(しゅったい)せん總てを先見しぬ。

その若き女、象の住むなる森の中を共に行ける時、その夫に言ひぬ、『汝、尊き人の子よ、汝の妻は渇きて死なんとす。近き泉より水少し得來れ、恭しく汝に乞ふなり』かくてその婆羅門ただちに、瓢を手に、流れ小川に急ぎ行きぬ。されど水を得て歸り來り見れば、そのいとしの妻は木の葉の積み重なれるが上に倒れて死んでありぬ。さてこの死にまことはかの善なるデヴの私(ひそ)かの業(わざ)なりしなり。

婆羅門は瓢を投げ棄て、泣きくづほれ、その魂その身を去らんとするが如くに涙に咽び、その妻の美しき死せる顔とか細き死せる足と金色の喉とに接吻(くちづけ)し、時に聲高にその不幸を

叫び、何とて斯くは我身を苦しむるぞと神に問ひ訊ねもしぬ。然るに歎き悲しみけるその時、聲ありて鳴禽の音の如く朗らかなる言葉にて彼に答へぬ、『愚かなる者よ。汝の妻の再び生きんが爲めに、汝の生命の半を與ふるか』

恐怖の念、愛の爲めに悉く殺されたりし彼は、打震ふことも無く、その眼に見えざる者に答へぬ、『然り、那羅延天よ。我が生命の半、喜んで彼女に與へん』眼に見えざる者言ひぬ、『愚かなる者よ。かの神秘なる言葉三つ唱へよ』かくて彼はそを唱へしに、その妻恰も夢より醒めたるが如くにその寶玉なす眼を打開き、その圓き雙腕を夫の頸に捲き、爽やかなる唇もて恰も花の唇が夜の露を飲むが如くに夫の涙の雨を飲みぬ。

* * *

斯くて果實を食ひ心地すがすがしくなりて後ち二人はその歩みを進めぬ。やがてその森を去りて、或る白き市街の外なる一望の廣き花園に——不思議なる香の花もて虹の色を爲し、また石の神像の唇よりまた岩の象の鼻より流れ落つる水に涼しき花園に——到り着きぬ。妻を愛すること厚きこの婆羅門その時妻に言ひぬ、『汝、餘りに麗はしき者よ。急ぎ行きて果實と氣力を恢復せん飲料とを得て歸り來るべければ、暫らく留つて此處に在れ』

……

さて花園の此處なる處に、大いなる車を廻はして水を汲上げ、噴水の口を淸むるに備はれたる若者住み居たりき。若者にてはありつれども、炎の空の下に在りて猶ほ且つ寒さに人を震はしむる病の爲めに瘠せ衰へて久しかりしかば、其若々しさはその聲のほかには殘るところ殆んど無かりき。されど奇術師が僧帽蛇を魅するが如くにその聲もて彼は女共の情(こころ)を迷はしめぬ。今しかの婆羅門の妻を見て、彼は聽かしめんとて歌うたひぬ。

鳥が妻戀ふる折に林の中にて歌ふが如くに、廻りめぐれる木深き川土手に脣觸るゝ水が歌ふが如くに、アプサラ共が去(い)にし封波に歌ひしが如くに歌ひぬ。彼はアマルーの歌を——その魂は美はしき極みなる一百の女の身に移り移りて一百の輪廻を經て終にあらゆる戀の奧義に此世の首長となりたる、あらゆる歌手のうちにて最も妙なる歌手たる、アマルーの歌を——歌ひぬ。かの婆羅門の妻之を聽くや、カマ(譯者註)花の尖(さき)有てるその矢もて彼の女の情(こころ)を貫きたりければ、彼女はその若者に近づきて己が脣をその脣に押當て、『汝我を愛せざれば我れ死なん』とつぶやきぬ。

譯者註　愛欲の神なり。

＊
＊　＊

されぱかの婆羅門果實と飲料とを携へ歸り來たれる時、彼女は言葉巧に夫に勸めてかの若者にも分かち取らしめ、旅の友としてまたは奴僕として其若者を召連れんとも乞求めぬ。婆羅門答へて言ひぬ、『此の若者困苦を堪へんには餘りに弱し。途にて倒れなば我が力彼を運ぶに堪へざらん』されど妻は答へつ、『いなとよ。彼倒れなば、我が籠に入れて、我が頭に我れ自ら運ばん』婆羅門怪しむこと甚だしかりしも女の乞に從ひぬ。斯くて三人は共に旅を續けぬ。

さて或る日の事なりき、三人は或る深き井戸の傍に休みてありし時、かの婆羅門の妻は己が夫の眠れるを見て突きて其井戸の中に陷れ、若者を伴なひて立去りぬ。此事ありて後間無く、二人はその名世に聞こえし尊き王の住まへる大いなる町に到り着きぬ。王は遍く一切の婆羅門を愛し、土地をばそのまはりに黃金の象の足を幾列びにも置きて買求め、豐饒なる土地を四方に繞らしめて一寺を彼等が爲めに建立せし人なりき。奸智に長けしかの婆羅門の妻は、路稅を收むる者に捕へられて王の前に連れられし時——なほもかの若者を籠に納めて頭上に擔ひ居りしが——心太くも王に向ひて言ひぬ、『尊き極みなる王よ。こ

は我がいとしき限りなる夫なり。心正しき婆羅門なるが、その命ぜられたる善行を行ひ居るが間に憂き目に會ひたるものにて、世嗣の者共その生命を得んと窺ふにより、此邊に隱して此地へ連れ來りたるなり』聞きて王は、同情に心充たされ、この婆羅門の妻とその伴なる夫とに村二つの收入を與へその恣まなる使用を許して言ひぬ、『汝、最も眉目好くまた最も眞實なる女よ、汝この後我が妹の如くあれ』

＊
＊＊

然るにかの哀れなる婆羅門は死にてはあらざりき。彼を守護せる善なるデヴは井戸の穴の中にてその生命を保たしめ、その横を過ぎ行けるさる旅人彼を引上げて彼に食物を與へたればなり。斯くて偶〻彼も亦やがてその心邪まなる妻が住める該の村に來りしに、女は異常なる恐怖に心怯えて急ぎ王の前に來りて言ひぬ、『我が夫を殺さんと求むる敵我等が後を追ひ來りぬ』

王は言ひぬ『その男を象の足にて踩ましめ』

されど彼の婆羅門は王の臣下に捕へられて身を問へ、悲しき泣聲に叫びぬ、『王よ。罪を歸せられたる者の言ふ所を聽かんとせざる卿はまこと正しき者と呼ばるべくや。美しけ

れども心は邪まなる此女はまことは我が妻なり。我を罪するに先だち、我が此女に與へし物を先づ我に返さしめ給へ』

王は臣下に命じてその手を止めしめぬ。暴風の聲して王は命じぬ、『彼が物たる物をば彼に返せ』

されどその婆羅門の妻は抗ひ言ひぬ、『我が君よ。我は彼が物なる物何物をも有たじ』されば王の額は摩訶王の顰もて曇りぬ。

婆羅門は叫びぬ、『我に返せ、我が汝に與へし生命を、かの神秘なる言葉三つ唱へて汝に與へたる我れ自らの生命を――我れ自らの歳月の半を』

女は、王を恐るゝこと太だしかりしかば、低き聲して言ひぬ、『さなり、我れ汝に返さん、かの神秘なる言葉三つ唱へて我に與へし生命を』と見る、女は王の足下に呼吸絶えて倒れぬ。

斯くて眞實は明らかとなりぬ。この故に彼の諺は現はれぬ。

己れその爲めに家族を捨て一家を捨て我が生命の半すら捨てたる女我を見棄てたり。この情無き者や。如何なる人か女に信を置かん。

バカワリ

回々教徒が物せしものなれども、印度の古き神々のことを、アプサラのことを、ラクシヤサのことを物語れる、ヒンドスターニ語にてのこの不思議なる譚あり。『バカワリの薔薇』と呼ばる。それにて沐浴する者の性を變ふる、魔力ある水充ちたる、泉の奇しき物語も亦その書中に見出さるべし。また、妖術にて造られたる——永久へに萎れざる——その香は盲者に視力を與ふる——花の物語もあり。またあるが中にも、之に匹儔するもの他に無かるべき、人の世のまた人の世ならぬ戀の此物語もあり。……

……ザイヌルムルク大王がヒンドスタンの東の國々を治めし頃、アプサラたるバカワリがこの大王の子に他ならざりける生命ある若者と戀に陷りし事起こりぬ。その若者少女の如く美はしく、神カマの如くにも美はしく、恰も戀の爲めに造られたるが如くなりければなりき。さてその土地にては生ける物は皆な愛らしきものに感ずること敏かり。眉目好き

少女の足にても觸らば忽ちに芳ばしき花を開く無憂樹の如くに——草木もなほ且つさなりき。されどバカワリは不死不滅なる者の息女とて、この世の如何なる生物よりも美はしかりしかば、彼女を見たる者共は彼女を生命ある女より生れ出でしものと思ひて、彼女に就いて問はるれば斯くぞ答ふるなりき、『我等に問はざれ。その美はしさを歌はんことを夜啼鶯に乞へ』と。

若者タヂャル・ムルクは、圖らずも此女に遭ひて乾闥婆の爲すが如くに私かに睦み合ひたることとて、己が愛人が生命ある種族のものならじとは嘗て思ひ量りだもせざりき。されど女の眼が不思議にも大きくまた黑く、その髮の香が韃靼麝香の如くなるを知りぬ。また女の身動きする時、その姿を打見ながらもその間物言はん力を失ひ、壁に描ける物の如くに動き得ずなる不思議の光と香とをその身より放つやう思はれぬ。バカワリはまた、戀の燈その情に燃えたることとて、その智慧は金色の蛾のごとその燈の炎に燃え失せ、己が家族を全く忘れ、己が身の不死不滅なることを忘れ、住み慣れし空なる宮居をも忘れ果てぬ。

*
* *

印度の尊き書卷のうちに、其處なる住民は不死不滅なる永遠の都テマラナガルに就いて書かれたる事多し。其處には空色の鬚有てる因陀羅、天つ星座が金色の舞踊を爲して太陽スルヤを旋り回るが如くに、その眠ることあらざる天界の舞姫に取卷かれて、眠無き快樂を爲して住めり。人間に戀してバカワリが見棄てたりしその家はこれなりき。

或る夜のことなりき、かぐはしきまた心地よき夜なりしが、久しく打忘れたりし物を俄かに思ひ起こしたる人の如くに、因陀羅その寢椅子より立上り、あたりの者共に問ひぬ、『フイロヅの息女バカワリが我が前に身を現はさざるはいかにしてか』一人の者答を爲して言ひぬ、『大因陀羅よ。かの愛らしの魚は人間との戀の網に捕はれてあり。なほ多く戀せんと思へども己が身には叶はじとて、夜啼鶯の如くに嘆き訴へて歇むこと無し。生命ある其戀人のやがては衰へぬべき若々しさと美しさに醉ひ、ただ其男に生き其男の爲めに生きて、己が家族すらも今や打忘れたるかまたは、彼女には厭はしき物となりてあるなり。空つ神よ、天つ神よ。彼の薔薇なせる者が再びおん前に身を現ぜざるは其男の爲めなり』

之を聞いて因陀羅は怒り、その戀の呆の辯解きかんと思へば強ひてもバカワリを己が前に連れ來よと命じぬ。されば天等は彼女を覺ましてその雲の車に乘せ、その脣は猶ほ生命ある者の接吻に濕ひ、その喉には人間の脣が殘せし紅き花形あるが儘に、因陀羅の面前に

伴なひぬ。女は祈禱の折の如くに指を結び合はせてその前に跪きたるに、蒼天の此主は、三つ鼻のその象に跨りて戰に出て立つ折浮かぶるが如き顰面して、怒りに物も得言はで女を見つめぬ。やがてあたりの天共に言ひぬ、『不死不滅なる感官に忌まはしき死滅の香この女に在るが識らるれば、火もて燒き淨めよ。またこのものその呆に歸らば、その度毎に我が眼前にて燒き盡くすべし』……

されば天は擧つてアプサラの中にても最も麗はしきその女を縛り、日の炎のごとく烈しき爐の中に投じたれば、瞬く間もあらじ女の身は一塊の白き灰と變りぬ。されどその灰の上に魔力ある水を撒きしに、生れし許りなる者の如くに身露はに、されど昔に優れるばかりに薔薇なす美しさ更に完く、その爐よりしてバカワリ立ち昇りぬ。かくて因陀羅は、この女が曩に爲せりしが如くに、その前にて舞へと命じぬ。

されば女は空の宮居に知られし舞の總てを踊りぬ。薰風に花の撓むがごと、光の下に水の紆るがごと身を撓めつゝ、妙なるみやびの變化を盡くし、移りて止まざる身振の魅力もて、落葉吹き拂ふ風のごと迅く、蜂のごと輕く、人々の前に舞ひ旋りければ、眺め居たる者共の情は閃めく女の足に蹂みにじられて齊しく聲高に叫びぬ、『あな花の身や。あな薔薇の身や。あなみやびの御園の不思議や。あてやかの花や。あな花の身や』

＊
＊　＊

斯くて女は夜毎アマラナガルなる因陀羅の前に現はれざるを得ざりしが、その戀の呆を捨てんとは思はざりければ夜毎また烈しき極みなる淨化の炎を忍ばざるを得ざりき。夜毎また女は、宮居の裡なる薔薇水の大噴泉にて先づ浴し、生命あるその戀人の許に歸り來り、覺まさざるやうそと身をその傍に置きぬ。

されどタヂャル・ムルク或る時夜中に眼覺めて、手を延ばし見たるに女の其處に在らざるを知りし事ありぬ。枕にかをる女の頭の香と、長椅子一つ一つに妙なる樣に形無く崩ほれて掛かれるかぐはしの衣と在るのみなりき。……

女が美しさ前にも優りたらん樣にて歸り來りし時若者は責め咎むること無かりしが、次の夜さ銳き小刀もて己が指の尖を裂き、眠らざらんやう鹽もてその傷口を充たしぬ。さて、かの空つ車が月の白銀色なる長き雲の如くに音無く降り來りし時、彼は起き出でて、その目を偸んでバカワリに隨ひぬ。車の下に縋り附きて、風吹く空越え、アマラナガルに到り着き、玉鏤めし宮居に入り因陀羅の面前に運ばれぬ　されど因陀羅は知らざりき、美しの眺とソマ酒の氣にその心眩みてありたれば。

タデャル・ムルクは、と或る柱の陰に立ちて、嘗て見たる事無き――バカワリは措いて――美しさを視、生命ある樂師が嘗て學びたる事無き妙なる音樂を聽きぬ。壯麗その眼を迷はしぬ。組格子して玉鏤めたる迫持が頭上に交錯せるは數限りなき虹霓の馳せちがひ入り亂るゝが如くなりき。されど、計らずもバカワリの恐ろしの淨化が眼に映じたりし時、その情氷の如く覺えて泣き叫びぬ。呪文唱へられ魔水の撒かるゝ事一時遲く、足動かすべうなりし事一時早かりしならんには、盛る白熱のその火の中に身を投ずるを禁めかねてやありつらん。やがて彼は雪と白きその灰燼よりして――女神吉祥天がその千相の最も美はしき相なせる折の像に似て光り輝き――しなやかなる形の昔に勝してあてやかに、光ある髮の昔に勝して長く、日の抱擁より歸り來たれる彗星に似て前よりも尙ほまばゆく――バカワリが立現はるゝを見ぬ。……

バカワリは舞うて宮居を辭し、タデャル・ムルクまた來りし時の如くに歸り來つ。……

＊
＊　＊

翌けの日東雲の頃、從ひ旅してその祕密を捉へしと告げし時、バカワリは泣きつ恐れに打震へつ。涙に咽びて言ひぬ、『あな悲しや。何をか爲し給ひたる。卿は卿の此上無き敵

となり給へり。卿の爲めに我が受けたる苦痛總てを卿は知り得給ふことあらじ――我が家族の呪咀、我が種族なる者總ての侮蔑を。されど卿の戀に顔をそむけんよりはと、夜毎燃燒の苦悶を忍びぬ。卿を失はんよりはと百度千度の死を死にき。己が眼もて卿がそを見給へりとは！……されど人の子が許可なくて神の住居を訪ね、罰なくて歸り來んことはあらじ。嗚呼！惡しき事を爲し給ひぬ。卿の禍を避けん術我には工み得じ、またも私かにアマラナガルに卿を伴なひ、何事をも許さんやうに因陀羅の心を魅せんほかには』……

※ ※ ※

斯くてアプサラたるバカワリはまたも火熱の苦悶を忍びて神々の前に舞ひぬ。霄に嘗て舞ひしが如くなるのみならで、眺め見し者總ての眼が、その手足の變り行く紆り曲りに、その白き足の眼まぐるほしき速力に、その髮の振り立つ光に、朧とかすむまで舞ひぬ。その美しさの魅力は其處に在りし者總ての舌を迷はしたれば、『あな、花の身や！』との叫びも力弱りてそれともわかぬ私語となり、樂師共の指は疲れに痺れ、樂の音は震へつ顫へつ弱り行きて、やがて心地妙なる樣に消え失せぬ。

やがてその無言より因陀羅の喜び聲の和らかなる雷音忽然として響きつ、『あなバカワ

りよ。欲しと思はんもの何にても乞へ、そを汝に與へん。三體一位(トリムルチ)の大神かけて誓はん』……されど女は、踊に猶ほも胸を波打たせて、王の前に跪き、謐(やす)ぐが如く言ひぬ、『尊き君よ。此地を去りて、我が戀ふる此の生命(いのち)ある者とそが授かれる生命(いのち)の年月(としつき)の間住まんこと、乞ひまつるはこれのみ』斯く言ひて女は若者タヂャル・ムルクを諦視(みつめ)ぬ。

されど因陀羅は此言葉を聞き、またタヂャル・ムルクを見て、額(ひたひ)太く皺(しわ)めたりければ、空なる宮居は總て暗黒(やみ)に充たされぬ。王は言ひぬ、『汝、人の子よ。汝も亦必らずや同じ願にてあらん。されど思はござれ、悲なくしてバカワリごときアプサラを此處より連れ去り妻(め)と爲し得んとは。また汝はと言へば、恥を知らざるバカワリよ、汝は彼と共に去りて可なり、余は誓ひたることなれば。されど余はまた汝に誓はん、汝をば腰より足まで十二ヶ年の歳月、大理石の女としあらせん。……汝の戀人に汝を樂しましめや』……

* * *

……さてバカワリは錫蘭の森の中に深く埋れたる廢れし或る塔の部屋に置かれぬ。石の臺(うてな)の上に坐り、其身も足より腰まで石にて、幾年を其處にて過ごしぬ。されどタヂャル・ムルクは女の在場を見出しつ、女神の像に事ふるが如くに事へて、その長の歳月を彼女を

待ちてありぬ。

穢れし鋪石は、草に圍を外づされ、過ぎ行く野象の踏むによろめきつ。綠玉の如き燃ゆる眼して圓柱列び立つ入口を虎の窺ひ寄ることも屢ゝなりしが、タデャル・ムルクは絶えて倦むことと無くまた恐るゝことと無く、憂き恐ろしきその歳月を彼女の横に待ちてありぬ。珠の眼したる蜥蜴は纒はり訴りつ。蛇は怪しき黄玉の眼もて眺め視つ。巨大なる蜘蛛はこの人間なる像の頭上にその白銀のレイスを編みつ。肉色なせる太き嘴有つ、夕紅羽毛なる鳥はバカワリの眼の下に安らかにその雛を孵しつ。……やがて十一年目の末のことなりき――タデャル・ムルクは食を求めんと外に在りしが――この層塔崩れ倒れて、人一人の腕の力にては除けがたき巨大なる重き崩壊の下に、逃れん術無きアプサラを埋めぬ。……その時タデャル・ムルクは泣きぬ。されども、不死不滅なる者の死ぬることあり得ざるを知りたれば、猶ほも待ちてありぬ。

やがてその形無き破壊の團塊よりして、纖女の如くに開き、あてやかなる、たをやかなる不思議なる木一本生ひ出でぬ。タデャル・ムルクは夏の激しき暑さにそが丈高く伸び進むを見守りてありしが、東の國なる娘の眼に例へられたる花有つかの水仙花よりも柔らしき花を咲かせ、少女の肉のごと滑かなる皮せる薔薇色の果實を結びぬ。

斯くて第十二年は過ぎぬ。その最後の月の過ぐると共に、大いなる果實一つおのづと分かれ、其處より一人の女の身體(み)現はれ出でぬ。その柔(やは)き手足は蝶がその繭の中に摺まれたるが如くに摺まれたりし、しなやかに又たをやかなる――まこと不死不滅なる者なれば、アプサラなれば――此世の女よりも深き眼(まなこ)せる、印度の東雲のごと麗はしき女なりき。己が戀人の爲めに再び肉身を得し、神々の呪詛を免れしバカワリなりしなり。

ナタリカ

ありしゴルコンダの國なるティルーギカレーの祭壇の中なる或る黒石の像の物語なり。……內身は恰も枯木の幹の如くに朽ちたらん時、恰も土塊の如くに塵土に碎けたらん時、その死者の愛人は其顏をそむけて去らん。されど德はまめやかに居殘りてその魂を暗黑の彼方に導かん。……

黄なる藪草その町の街路にあり、僧帽蛇神々の大理石の足に絡めり。蝙蝠その子を花崗岩の象の耳の裡にはぐくみ、毛深き蜘蛛紅玉の瞳せる蜂鳥捕らんと國王の部屋々々の中にその網を織れり。蟒蛇は印度の詩人の戀歌の如くに曾ては華麗なりし宮殿の中に子を產み、神々の金剛石の眼は拔去られ、蜥蜴は濕婆(シブ)の脣に巢くひ、百足蟲は長押(なげし)の彫物のうちに身を枉げ、鳥の糞汁聖壇を白うせり。……されど寺院の神聖なる門口は、その銘文の尊さに守護されたらんやう、今猶ほ存す。銘に曰く、

自存する物は此の宇宙の物に非らず。……人はその所持するもの如何なるものとても墓の彼方に持行かんこと叶はじ。恰も白蟻が己が住所の高さを増すが如くに、人はその善行の大いさを増すべきなり。父も母も、姉妹も兄弟も、子も妻も、伴なひて他の世に赴くこと叶はざればなり。されど徳のみはその伴侶たらん。……

石に刻まれたるこの言葉は一千年の破壞に生き殘りてあるなり。

※
※　※

さて、近き年のことなり、物識りたる旅人そこなる神々の隱れし手足の中を、また藪草の中を、また石の象の首絞めんと力むるかに見ゆる、巨大なる蔓草の中を、さまよひて、偶々驚くばかり巧に彫られし黑花崗岩にての少女の像に逢着しぬ。その姿はクリシュナの女共のそれの如くに露はにまたたをやかなりき。その頭上には王女の寶冠あり、合はせしその手よりして花の瀑流れ落ちてその妙なる足を支ふる臺板の上に垂れてありき。その臺板の表にナタリカとの名ありて、その名の上に尊き羅摩耶那よりして抽きし句ありき。その句は我等が言葉にてはかゝる意味のものなりき、——

彼の女花をその手中に壓し潰して更にうるはしき香をその花に放たしめしその奇蹟の證人と我はなりてあれば。

さて記さんとするは、囘々教國の史家フェリスタの記錄に載れるが儘を傳へたるこのナタリカの物語にてあるなり。

千年以上の古昔、哈利發クワレッドと身毒王國のディール王との間に戰ありき。亞剌比亞の騎馬兵は大風の如くにその國を掃蕩し、その鷲の顏なせる大群は川を血に赤らめ、城市の燃ゆるに夜を紅ならしめぬ。ブラーマナバッドをば火もて燒き、アランとディナルとをも燒いて、女は之を虜とし、男は悉く之をその彎刀の刃に委ねぬ。印度王は、その國民の爲めその諸神の爲めに、勇ましく戰ひはしたれども『天國は刃を交ふる影に見出されん』との豫言者の言葉を記憶して何物をも恐るゝ所なき亞剌比亞人終に勝を制しぬ。かくて彼の哈利發の熱烈なる代將カシムはブラーマナバッドにて國王の息女を虜にし、國王とその國民と總て屠りぬ。

＊
＊　＊

女の名はナタリカなりき。カシムその女の蓮の花より生れし彼の愛の女神よりも麗はしく、其眼の露よりも和やかに、その容姿華の如くしなやかに、その青黒き毛髪のその踝に卷きし金環に波打てるを見し時——彼は豫言者の鬚賭けて、女の生みし物にて斯くも緻縹好きもの嘗てあらじ、哈利發クワレッドのほか何人もこの女を有つことあるべからずと誓ひぬ。されば彼は選りすぐりし一隊の騎馬兵に命じて多くの高價なる獲物——羽よりも輕く且つ絶妙なる寶玉、不可思議の細工せる（刻まれし球の中に更に球ある）牙彫もの、綠玉と土耳古玉、金剛石と紅寶石、迦濕彌羅の織物、象並びに乘用の駱駝——と共にその女を八吉打に連れしめぬ。また途にてナタリカを害ねん者は何人にても、コーランが神の豫言者の言葉なるが如くに確かに、その首もて之を贖はしむべしと令しぬ。

＊
＊　＊

ナタリカ八吉打の哈利發の面前に出でし時、この篤信なる者の統帥は、かゝる美はしき少女を見たることとて、初めは己が眼を信ずること能はず、カシムよりの象、寶玉、奴隷、

その他の贈物は眺めだもせて玉座より立上り、その娘を膝より立たしめ、人々總ての前にて接吻（くちつけ）し、その女が我が前に跪かんよりは我れその女の前に跪かん要ありと誓ひぬ。されど女はただ泣くのみにて答へざりき。……

かくて幾日か經ざるうち、哈利發は女を己が寵愛の妻たらしめん心あることを知らしめぬ。その眼始めて此女を見てよりこのかた、女を思ふ餘りに、食（くら）ひも眠りも得せざりければなりき。されば、ただ天國の豫言者を除きて、如何なる人もが爲し得んに勝（ま）して女を幸（さち）多からしむべければ、泣くを止めよど女に乞ひねがひぬ。

ナタリカは前にも勝（ま）して激しく泣き、己（み）は國王の息女なれども哈利發の新婦たらん價値（あたひ）無し、そは八吉打に送るに先だちてカシムが痛ましき非事（ひがごと）を己（み）に行ひたれば、と誓ひ述べぬ。……

＊
＊　＊

クワレッドはその物語を聞き、その髭は忿怒に曲りぬ。直ちに身毒（シンド）の地を去り急ぎバスラに赴き其處にて更なる指揮を待て、とのカシムへの命令を納めし密封の書持たせて最も迅速なる使者を印度に送りぬ。ナタリカは獨り己が部屋に籠り居て泣きつ。哈利發は己れ

彼の女を慰め得ざるを怪しみぬ。されどカシムは身毒(シンド)を去りつゝ、己が贈物の美はしきに、己が捕虜の愛らしきに、己が送りし象の見事なるに、何とてかの篤信なる者の統帥が己れを呼び返したりけんと更に多く怪しみぬ。なほも怪しみ驚きつゝ馬を驅つてバスラに赴き、其處なる都督の家を尋ねつ。恰も己が不滿を想へつゝある間に、物得言はざる數多の男弓弦もて出で來り、都督の足下(あしもと)にてカシムを絞め殺しぬ。

* * *

日幾たびか來りまた往きぬ。やがて八吉打に猛々(たけ)しき騎馬兵一隊走せ來たつて、哈利發の宮殿に着きぬ。その隊長はクワレッドの面前に進み出て、彼に敬禮し、血に汚れたる鬚もてる物凄き首を――かの大軍帥カシムの首を――その足下に置きぬ。

* * *

クワレッド、ナタリカに呼んで言ひぬ、『見よ。我れ汝が受けたりし非行に報いたり。されば余が汝を愛することを、まこと余は汝を余が家に、余が妻とし、余が女王とし、余がいとしき極みの者として、置かんと欲することを、信ずるならん』

然るにナタリカは荒々しき怖ろしき笑もて笑ひ初めぬ。叫んで言ひぬ、『欺かれたる者よ。知れよ、カシムは我が訴へたる事には全く無辜なることを、また我は我が國民(くにたみ)の死に、我が兄弟姉妹の殺害に、尊きブラーマナガル町の護神なる破滅に報いんとのみ求めしことを。刹帝利(クシャトリア)の王の息女(むすめ)たる我は、汝の血と信仰とを有てる者に身を委ぬることあらざるべし。我はただ復讐せんとてこれまで生き延びたれ。我等が敵の死と、我への汝の望無き戀の夢とにて二重に復讐したることなれば、我は喜んで死なん』言ひ訖りて己が胸を懐劍もて貫き、哈利發の足下に仆れぬ。

* * *

されどナタリカと婚約ありし戀人ウダヤ王は、割禮受けたる征服者共をその國より放逐し、己が手に落ちし總ての敵を殺して、更に尚ほナタリカの爲めに復讐しぬ。彼等が行ひし殘虐は百倍に之を彼等に報い返しぬ。

さりながら、ナタリカ死せるが爲めに生き永らふるに倦み、愛の抱擁もて女をそれへ就かしめんと望みたりし王座に在つて世を治めんとは思はずなりぬ。世を遁れてティルーギカレーの寺院の尊き托鉢僧となりぬ。……

やがて己が末期の近づけるを悟り、彼はその寺院の壁の下に自ら小さき墓を掘りつ。その愛人の大理石像を造り、その像を己が墓の上に建つべきやう、最も巧なる彫刻者に命じぬ。されば彫刻者は女神の像を刻むが如くにナタリカの像を刻みたりしが、常に彼の命に従ひ、女がその指もて薔薇を壓し潰し居るやう見えしめぬ。かくてウダヤ王此世を去りし時、女の足がその胸の上にあらんやう、彼の上にナタリカの像を立てぬ。

彼の女花をその手中に壓し潰して更にうるはしき香をその花に放たしめしその奇蹟の證人と我はなりてあり！

この花は己れを犧牲と爲せるが爲めに更にうるはしさを加へしその女の美しき青春の花と咲けるものに非らずや。

此の寺院とその一萬の僧とは逝いて在らず。されど一千年を經たる後と雖も、一脈の芳香猶ほこの石の薔薇よりして薫ずるなる。

屍鬼

印度の古き言葉にて物されし『或る鬼神の二十五の物語』といふ意味なる『ヹタラ・パンチャギンサティ』と呼ばるゝ書あり。……その物語は人間が傳したるあらゆる物語に勝さりて怪しきものなり。鬼神の述ぶる言葉はまことに怪異にして、しかも不易なるものなればなり。……さて語らんこの說話の鬼神といふは、人間の屍體の中に住み、その屍體の舌もて物言ひ、その屍體の眼もて物見るなりき。またその屍體は、墓石を蔭もて晒うせる、或る木より足にて吊るされてありき。……

さてバドン月の月無き半部の十四日、刹帝利王毘柯羅摩泥底耶は、その屍體を切り落としてそを持ち來るやう、胸に計略有てるさる瑜祇に命ぜられぬ。その瑜祇は斯くしてその夜その王を亡きものたらしめんと計らひたればなりき。……

王はその屍體を切り落としたるに、その屍體の中なる鬼神笑つて言ひぬ、『汝若し途にて一言にても物言はんには、我は汝と共に行きはせで、我が木へ歸るべし』斯く言ひて後ち、其鬼神は聽かざるを得ざるが如き奇異なる物語を王に物がたり始めぬ。かくて物語一つ一つが終はる度毎

に難問を發して、答へざらんには噬み喰はんと毘柯羅摩泥底耶を嚇すなりき。王は正しき答を爲したれば身の滅亡は免れはしたれども、物言ひたることとて已む無く其鬼神を元の木に歸らしめざるを得ざりき。……さてその鬼神が語りたる數多き物語の一つを聴き給へ、――

王よ。古昔ダルムプルといへる町ありき。その王ダルムシリ、一千の相を具へ一千の名を有てる女神デギに壯麗なる神殿を建立しぬ。その女神の像は大理石にて刻まれ、その四つの手の二つは祈りに合掌せられ、他の二つはそのいづれにも香ある水の飛沫を噴き出す像の立てるその左右の噴水盤上に差し上げられ、盃形なる巨大の蓮華の上に組膝して坐りてあるやう見られぬ。此の神殿には歸依者極めて多く、白檀、盛り米、供物、花、香油に燃ゆる燈明を奉納して人倦むことなかりき。

さて或る町よりして或る日デギの神殿に參詣せんとて洗濯を業とする男と、その友とが來りぬ。その男恰もその神殿の石階を昇りつゝありし時、その國人の風習に從ひ、腰の上には衣物をまとはざる或る少女彼の方に降り來るを看ぬ。その顔は月の如くに麗はしかりき。その髮は美くしき黒雲の如かりき。その眼は野鹿の眼の如く澄みて太かりき。その眉は引絞りし弓の如く圓やかなりき。その品好き鼻は隼の嘴の如く曲りてありき。その首は

鳩の首の如く愛らしかりき。その歯は石榴の實の如かりき。その唇は紅甑の如く赤く、その手と足とは蓮の葉の如く軟かなりき。その皮膚は瞻波伽の花瓣に似て金色を帶びし黃なりき。この參詣者はまたその女の腰が豹の如くしなやかなるを見ぬ。その女の圓き脚踝のあたりなる金環の響き遠のきて聞こえずなる間に、その男の眼は戀に霞みつ。その少女が誰なるかを見出さんやうその友に乞ひねがひぬ。……その女は洗濯を業とする或る男の娘なりき。

この參詣者は、その心全くかの娘の幻に充たされて、女神の前に入り來り、身をひれ伏して、不思議なる誓を立てて斯く言ひぬ、『デギよ。神々の母たり、變怪退治者たる——あらゆる神がその前に頭を垂るゝ——摩訶デギよ。卿は此世よりその重荷を除きたり。卿は卿を崇めし者共にその百千の不幸を除きたり。母デギよ、我は卿がまた我が救濟者となり、我が衷心の願望を成就せしめんことを祈る。卿の恵によりて我れ若し女の中にても愛らしき極みなる彼の女を娶ることを得んには、まこと必らず我が首を卿に捧げん』彼が誓ひし誓はかゝるものなりき。

されど己が町へ歸り己が家に歸りたる後、戀しきその女と遠く離れある苦しみは彼を痛め、戀は一切の事物を人に忘れしむるものなれば、眠も飢も渴も覺えず、重き病に罹りぬ。

やがて死ぬべく思はれぬ。さればその友はいたく打驚き、その若者の父の許に赴き、子細を語りたれば、父も亦その子の爲めに心を勞すること甚だしかりき。かくてその父はその子の友に伴なはれて彼の町に赴き、彼の娘の父を尋ねて言ひぬ、『余は汝と種族職業を同じうするものなるが、願ふ所ありて來りたり。我が子たまたま汝の息女を戀ひ慕ひて、娶らざらんには必らずや死すべし。されば我がいとしの子の爲めに、汝の息女の手を我に與へよ』この言葉をききて少しも心よからず思ふこと無く、さる婆羅門を迎へて、行はん結婚の吉日を定めぬ。言ひつ、『友よ、汝の子を伴なうて來たれ。我れ我が娘が婚約したることを總ての人に知らさん爲め、娘の手を姜黄にて塗らん』

婚約は斯くて取結ばれつ。時到りて若者の父は子と共に此町に來りぬ。儀式果てたる後、子と嫁と共に己が家に歸りぬ。さて、若きこの二人が互に抱ける愛は日毎に增して、この若者の幸福を謳うする蔭は更に無かりしが、己が立てたる誓は忘れてありき。されどその妻彼を愛して彼に仕ふる事甚だ篤かりしかば、やがてかの誓の記憶は全く消え去りぬ。

日多く過ぎて後、この夫妻たまたまダルムプルにての或る饗宴に招かれぬ。二人は、神殿參詣の時若者に伴なひたりし彼の男と共に其の町に赴きぬ。恰も其の町に近づきたりし時、三人はデギの神殿の高く聳ゆる金色の棟を遙か遠くよりして眺め見ぬ。その時己が誓

の記憶はげしき苦痛となりてその若き夫に歸り來りぬ。心ひそかに思ひぬ、『まこと我は、神の母たるデギにすら己が誓に不實なることとなれば、あらゆる僞誓者のうちにても極めて無恥に極めて邪惡なるものなり』

彼はその友に言ひぬ、『余は行いてデギを拜すべければ、その間我が妻と留って此處に在れ』

斯くて彼は神殿に到り、聖池に浴し、合掌して像の前に頭を垂れぬ。さて型の如き儀式を終へたる後、刀もて己が首を强く打ちぬ。さればその首その軀より離れて、デギが坐せる大理石の蓮華の柱爲せる臺の處まで轉げ行きぬ。

妻とこの死者なる友と空しく長く待ちし後、その友は言ひぬ、『行きてより時經ること誠に久し。行いて連れ歸らん間汝此處に留りて在れ』斯くて神殿に赴きしが、中に入り見れば友人の軀は血にまみれて横たはり、離れし首はデギの足の下に在りき。彼は己が心に言ひぬ、『まこと此世は住むに難し。……我れ若し今歸り行かば、その妻が極めて美しきが爲めに彼の男を殺したるなりと世の人言はん』かくて彼亦聖池に浴し、定められたる式禮を終へ、己が首を切りたれば、その首またその軀より離れて、同じ樣にデギの足下に轉げ行きぬ。

さてかの若き妻は獨り久しきが間徒らに待ちたりし後、夫を思ふ懸念に心くるしめられて、また神殿に赴きぬ。行いて二つの屍と血しほ腥き二つの刀を見し時、口言ふべからざる苦痛(くるしみ)もて打泣き、己が心に言ひぬ、『斯く思ふとも、まこと此世は住むに難し。我が夫あらずば、生くるも今は、我に何の甲斐かある。なほまた、人々は言はん、心惡るき女なれば、戀に邪(よこしま)なる生活(くらし)せん爲め、此等二人を殺したるなりと。されば我も亦、犧牲とならん』……

斯く言ひて女は聖池に赴き其處にて浴し、尊き式禮を終へて後、自害せんと一刀を己が滑かなる喉に上げぬ。されど恰もその刀を取上げし時、大理石の巨大なる手その腕を留めつ、厚き鋪石はデギの足の踏み來るに震へぬ。神の母が身を起こし、その蓮座より降りて、女の横に立ちたればなりき。神々しき聲その恐ろしき石の脣より發して言ひぬ、『娘よ。汝は我に汝をいとほしきものとなしぬ。賜物をデギに乞へ』されど女は全身打ち震はせつ答へぬ、『尊き限りなる母よ、此二人が蘇生せんやうそれのみ乞ひ奉る』聞きて女神は言ひぬ、『その首をその軀(み)の上に載せよ』

この美しき妻は神命の如くに爲さんと欲せしが、戀と望とデギ恐ろしの念(おもひ)とがその頭腦を曇らせしかば、己が夫の頭をその友の頸の上に置き、その友の頭を己が夫の頸の上に置

きぬ。斯くて女神その二つの軀に不死不滅の甘露酒を灑ぎたるに、二人は生きて健やかに立上りはしたれども、怪しくも頭は取換へられてありぬ。

斯く語り了へて鬼神は言ひぬ、「毘柯羅摩泥底耶王よ。此女はこの二人のいづれに妻なりしか。正しき答を爲さずば、まこと我汝を噛み喰はん」毘柯羅摩泥底耶は答へぬ、『聽けよ。經に云へり、恒河が川の中にこの長なるが如く、須彌山が山の中にての長なるが如く、極樂樹が木の中にての長なるが如く、頭は身體の諸部分の中の長なりと。されば その女は己が夫の頭をその身體へ接がれたるその男の妻なりしなり』……正しく答へたることとて王は何等の傷害も蒙らざりしかども、物を言ひたりしが爲めに、その屍鬼は元の木に還りて其處より墓の上に吊り懸りて在ることを許されぬ。

……斯くして幾度か、同じ樣に、その鬼神はその木に還ることを得しが、毘柯羅摩泥底耶また幾度かその鬼神を取下ろし縛りて運び去りぬ。かくて鬼神はその度毎に、あまりに奇異にあまりに不思議なれば聞かじとすれど聽かざるを得ざる物語を王に語るなりき。……さて次なるは鬼神が語りし物語のうちの一つなり。

王よ。ダルマスサルといへる町にケサヴと呼ぶ婆羅門住みてありぬ。その息女アプサラ

の如く美しく、マドウマラチ卽ちかんばしの茉莉花といへる、まことその身にふさはしき名を有ちぬ。嫁がんに程よき年齢となりし時、その父その母またその兄弟は、ふさはしき夫を見出すべう、いづれもいたく心を勞しぬ。

さて或る日、その娘の父と兄と母と各〻異れる求婚者に女の手を約しぬ。そは、この心善きケサヴは、神詣でに出でて外にありし折、婆羅門のさる若者に遭ひしがその者甚だ己が心に適ひしかばマドウマラチをその男に約し、恰も同じ日に、經書の研究者なりし兄はその心靈の師の宅にて他の研究者に會ひ、その男甚だ己が心に適ひしかば、マドウマラチをそれに約し、其間他の若き婆羅門ケサヴの家に訪ね來りたるに、母は己が心に快き男なりしかばマドウマラチをそれに約したればなり。しかもその娘に婚約せりし三人の若者は、美しさ、力、技藝、また年齢、いづれも等しかりしかば、そのいづれか一人を擇みて他を措かんことは爲さんに難きこととなりき。かくて、その父その家に歸り來りし時、その三人の若者己が前に在るを見、また事の子細を聞き知りて、いたく思ひ惱みぬ。彼は叫びぬ、『まこと娘は一人にて婿は三人なり。その三人の總てに我等は言葉をつがへたり。余は誰にかマドウマラチを與ふべき』彼は爲さん術を知らざりき。

然るに恰も彼が思ひ廻らしつゝ、其三人の若者をつぎつぎに眺め居る間に、一尾の僧帽

蛇その娘を咬みて、娘は爲めに死にき。

父は息女の生命を返さしめんと直ちに魔術者と尊き人とを迎へつ、尊き人等は魔術者等と共に來りぬ。されどその魔法師共は、月の時期の理由ありて己等に施さん術無しと言ひ、尊き人等は梵天王と雖も蛇に噬まれし者の生命を取返さんこと叶はじと誓ひぬ。さればその婆羅門は痛く歎き悲しみて葬禮を行ひ、葬壇に薪を積んで、マドウマラチの身をそれにて燒きぬ。

さてその三人の若者はその娘の在りし世の美しさを眼に見、いづれも氣狂ほしきまでに戀ひ慕ひてありしかば、そを愛して而もそを失ひたることとて、いづれもその後は浮世を捨て此世の快樂總てを絶たんと心定めぬ。三人いづれも葬壇を訪ひつ、その一人は娘の骨總てを、そが未だ炎に暖き間に、拾ひ集め、嚢の中に括り入れ、托鉢僧たらんと出て立ちぬ。今一人は女の身の灰を掻き集め、そを携へて或る森の幽靜なる地に入り、其處に庵を結びて、女のその紀念と共に獨り住み始めぬ。最後なるはマドウマラチの遺物は何一つ取ることはせざりしが、祈を捧げたる後、瑜祇がまとふ衣を着け、途々食を乞ひて國中を遍歴せんと出て立ちぬ。

此事ありて後ち久しきを經て、マドウスダム或る日或る婆羅門の家に到りて施物を乞ひ

しに、その婆羅門一家の食事を分かち攝らせんと家に招き入れぬ。さればマドウスダムは、己が手と己が足とを洗ひ了はりて、その婆羅門の横に食事せんとて坐りつ。その婆羅門の妻二人に侍りぬ。たまたま、食事なほ未だ央ばならざるに、その婆羅門の小さき男の子食を乞ひぬ。待ちてあれと云ひたれども、客もてなさん母の義務を妨げて、母の衣物の裾に縋り附きぬ。されば母は怒りてその子を掴み、太き火燃え居る爐の中に投げ入れつ、その子は瞬く間に燃えて灰となりぬ。されどその婆羅門は事も無げに物食みその妻は優しき微笑を顔に浮かべて食事に侍してありぬ。

　マドウスダムは之を見て恐れ愕き、食事央ばに座を立ちて門邊に足を向けぬ。その時その婆羅門は懇ろに彼に問ひて言ひぬ、『友よ。汝の物食まざるは如何にしてか。我と我が妻とは汝の意に適はんやう共に能ふ限りを力めたるなるに』

　マドウスダムは驚き且つ怒りて答へぬ、『汝は如何にして問ふことを敢てするぞ、余が何が故に物食まざるを。かゝる鬼神の行爲を爲せる者の家にて、羅刹のほか、如何なる者か物食み得べき』

　然るにその婆羅門は微笑み、立上り、その家なる他の處に行き、魔法書を――復活の學問の書を――手にして急ぎ歸りぬ。彼はその中なる呪文唯一つ唱へたるに、こは如何に！

燒かれしかの男の子、火に焦げもせで生きかへり、母の許に走り行きて、前の如く泣きまた衣物にまつはりぬ。

その時マドウスダム心私かに思ひぬ、『我れ、若し彼の不思議なる書を有たば、我が愛人を生き返らせんこと如何にた易かるべき』彼は再び坐し、食事終へたる後、客としてその家に留りぬ。されど夜半彼は密かに起き出て、かの魔法書を盗みて己が町へと逃れ去りぬ。

日幾たびか經て後、彼はマドウマラチの骸が燒かれたりし地に（女の死の年忌なりしかば）進んで參拜にと出て立ちたるに、到り見ればかの女に婚約したりける他の二人の者も亦彼より前に其處に到りて在りき。二人は聲を高めて叫びぬ、『マドウスダムよ。汝去つて年久しきを經ぬ。汝多くの地を見舞ひたらん。術は汝は何を學びたる』

されど彼は答へぬ、『余は死者を復活せしむる術を學びたり』聞きて二人は彼に乞ひて言ひぬ、『マドウマラチを復活せよ』彼二人に語りぬ、『さらば汝等かの女の骨と灰とを一つに集めよ、我れ彼の女に生を與へん』

二人がしか爲したりし時、マドウスダムはかの書を取出し、その中なる呪文一つ唱へぬ。灰と骨とは呪文の命のまゝに自づと形を爲し、色を變へ、生きて、茉莉花の如く美くしき

麗はしの女と――恰も彼(か)の蛇が噬まざりし前の姿の如きマドウマラチと――なりぬ。されどその三人の若者は、女の微笑むを見て、戀に目しひたれば、彼女を得んとて互に烈しくいさかひ始めぬ。……

斯く語り了へて鬼神は言ひぬ、『毘利羅摩泥底耶王よ。女はそのいづれに妻たりしや。正しく答へよ、然らざれば汝を噬み喰はん』

王は答へぬ、『まことその女は、その灰を掻き集め、そを携へてかの森の幽靜なる地に入り、其處に庵を結びて、女のその紀念と共に獨り住みたりし者の妻なりしなり』

鬼神は言ひぬ、『いなとよ。今一人なるがまたその骨を保存せざりしならんには、いかで彼の女復活し得たるべき。またこの二人の篤實ありとても、今一人なる者無かりせばいかで彼女蘇生し得たるべき』

されども王は答へぬ、『子の義務(つとめ)はその兩親の骨を保存するにあることなれば、マドウマラチの骨を保存せし男は彼の女に對して子たる地位にあり。父は生を與ふるものなれば、再びマドウマラチを生かしたる男は彼の女に對してただ父たる地位にあり。されどその灰を掻き集め、そを携へてかの森の幽靜なる地に入り、其處に庵を結びて、女のその紀念と共に獨り住みし男はまことにその女の愛人にして正しき夫なりしなり』

……かの鬼神は、魔法によりて女と變りたる男に就きて、惡魔の爲めに生き動きたる屍骸に就きて、他の難問を多く尋ねたれども、王はその總てに答へたるが、如何なる答も爲し得ざる問一つありぬ。——

＊
＊　＊

毘柯羅摩泥底耶よ。マハバルがダルムプルの王たりし時、他の王彼と鬪ひ、さる大戰に彼が軍勢を滅ぼし、彼を殺しぬ。死せるその王の妻と娘とは危うきを避けて森に遁れ、そこにただ二人にてさまよひぬ。その時チャンドラセン王その森にて狩してあり、その子も父と共にありしが、二人は地の上に女の足の跡を認めぬ。その時チャンドラセン言ひぬ、『まこと此處を過ぎりし者共の足は、女のそれの如く、弱く又うつくし。されど斯かる淋しき處に女のあらんこと奇しき限りなり。その女共の後を追はん。その女共若し美しからばこの足跡の最も小さきをつくりし足もてる女を我は妻とせん、汝は他なる女を娶れ』

斯くて二人はその女に追ひ付き、その美しさにいたく心を奪はれぬ。かくてチャンドラセンは死せるマハバルの娘を妻とし、チャンドラセンの子はマハバルの寡婦を娶りぬ。さ

れば父が母の娘を娶り、子が娘の母を娶りたりしなり。……

かの鬼神は問ひぬ、『毘柯羅摩泥底耶よ。この婚姻に依りてチャンドラセンとその子との子等は如何なる關係にあるべき』されど王は答へざりき。かの鬼神は王が依然として物言はざりしを以て喜び、不思議なるまた意外なる様(さま)に王を扶けしが、そは『ヹタラ・パンチャギンサティ』に書かれてあり。

獅子

智慧は博識に優る。智慧は學術に優る。智慧を有たざる人は己等の爲めに獅子を造りし者共の如くに死すべし。……こは尊き婆羅門ヰシユヌーサルマンが「五つの物語（パンチヤタントラ）」のうちに語れるがままの獅子の物語なり。

古昔（むかし）婆羅門種族の若者四人ありぬ――兄弟なりしが。互に深く相愛し、身を立て名を成さんが爲めに打連れて隣なる或る帝國に旅せんと心定めぬ。

その四人の兄弟のうちにて三人はあらゆる學術を深め修めて、魔術天文錬金術幷びに學ぶに最も難き玄奥なる方術を知り居りしが、その末なる弟は學術の知識は更に無くして、ただ智慧のみ有ちぬ。

さて、四人が共に旅してありし時、その博識なる兄弟の一人云つて言ひぬ、「知識無き兄弟は我等の智慮にて何の利を得ることあらんや。我等と共に旅せんに唯我等の重荷たら

んのみ。國王の尊敬を受くること決してあらざるべく、されば常に我等の汚辱たるに定まれり。寧ろ歸らしむるを可とせん』

されどその最も年長なるが答へぬ、『いなとよ。我等の幸福を須かちとらせよ。彼は我等がいとしき弟なり。我等に不面目を來たさずして占め得ん地位を我等彼が爲めに見出し得るやも計られざれば』

斯くて四人は旅を續けしが、暫らくして或る森を過ぎれる折、獅子の骨の途に散在せるを見ぬ。その骨は乳の如く白く、燧石の如く堅く、甚だしく乾燥しまた漂白してありき。

其時初め己が弟の無學なるを咎めたりし兄の言ひぬ、『學術が如何なることを爲し得んものかを今ぞ我等が弟に示さん。此の獅子の骨に生命を與へそれよりして獅子一つ造り出してその無學を恥ぢらはせん。余は魔法の言葉二つ三つ唱ふれば此の乾きたる骨を集まらしめ、各〻のものをその處に嵌まらしめ得ん』斯く言ひてその言葉を唱へたれば、その乾ける骨戞々と音して集まり來り――各〻その窩に嵌り――骨骼自づと繋がり合ひぬ。

『余は』と次なる兄言ひぬ、『二言三言唱へてその骨の上に――各〻その元の處に――腱を張り延べ、筋肉もて太からしめ、血もてそを赤からしめ、體液、血管、腺、髓、內臟機關及び外皮を造り得べし』斯く言ひてその言葉を唱へたるに、その獅子の體軀、巨大に、

毛深く、完全に、地上に脚にて立ちて現はれぬ。

『また余は』と第三の兄言ひぬ、『一言唱へてこの動物が生きまた呼吸しまた贓を噬み食はんやう、その血を暖め、その心臓を動かしめ得ん。かくて汝等にその唸るを聞かしめん』

されど其言葉を言ふに先だちて、學術は毫も知らざる末なる弟は、その手を兄の口の上に置きぬ。叫んで言ひぬ。『いなとよ。その言葉を口にせざれ。そは獅子なり。若し生命を與へなば我等を噬み食はん』

されど三人は彼を嘲り笑つて言ひぬ、『家に歸れ、汝愚なる者よ。學術のこと汝何を知るぞ』

其時彼答へぬ、『せめて汝の弟が此木に登らん間、獅子を造ることを待て』しか彼等は爲しぬ。

されどその木に登り終ほせも果てずその言葉を唱へしに、その獅子動きてその黄色なる巨眼を開きぬ。やがて身を伸ばし、立上り、唸りぬ。やがてその賢き三人に身を轉じ、そを殺し、そを噬み食ひぬ。

されどその獅子立去りし後、學術は毫も知らざる若者は些の傷害を蒙ること無く木より

降りて、その家に歸りぬ。

怪物禍の物語

百を有てる者は千を望む。千を有てる者は十萬を有たんと欲す。十萬を有てる者は王國を望む。王國を有てる者は天界を所持せんと願ふ。富貴と智慧との所有者すらも、貪慾に迷はされて、人の決して爲さざる可き事共を行ひ、人の決して求むまじき事を求む。……さればこそ己が惡しき欲情を養ふ者共の爲め、『法苑珠林』第四十六卷より採りし此の物語は書かれたるなり。

日の光今よりも輝かしく照り、花の香今よりもかんばしく、世界の色彩視て今よりも美はしく、神々地上を歩み居たりし頃に、不幸といふもの更に無き或る幸福なる王國ありき。寶玉は又黄金は、有り餘るばかりに多く、收穫は大洋の如くに無盡藏に、市邑は蟻塚よりも住める者多かりき。戰といふもの無くして經る年餘りに永く續きたれば、その國の大なる都會の境壁に草木生ひて、その根の蛇の如き力もてその壘壁の石を離し外づしぬ。またその國到る處に黄河の流の如く絶えざる音樂の幽音きこえ、快樂(けらく)の追求を妨ぐるはただ眠

のみにて、眠れる者の夢すらも想像の災害に暗くせらるゝこと嘗てあらざりき。病といふもの無く、何等の缺乏といふもの無く、人おのおの一百の齡を保ち、死する折は快樂の後に休息を求むる者の如くに――歡喜の陶醉の後の熟睡の穩やかさを味ひて――苦痛(くるしみ)無く身を横たふるなりしなり。

* * *

一日その國の王その顧問と大臣と主もなる官人(マンダリン)悉くを招きて彼等に問うて言ひぬ、『聞けよ、我が大寺院に保存さるゝ或る古き年代記にて讀みたるうちに「古昔禍此の國を訪れぬ」といふ言葉ありき。汝等のうちに禍とは如何やうなる動物にや語り得る者ありや。禍とは如何なる物になぞらへ得べきや』

されど顧問と大臣と官人とは總て答へぬ、『王よ、我等は未だ嘗てそを見たることあらじ、また如何やうなる動物なるべきか言ふこと叶はじ』

此處に於て王はその大臣の一人に命じ、己が國よりも小さき國々を訪ひ、禍とは如何やうなる動物なるべきかを質ね、若し購ひ得るものならんには――その價一州の値ならんとも――如何なる價にても求めしめぬ。

茲に或る天神あり、此事を見且つ聞きて、直ちに化して人間と作り、鐵の鎖にて繫がれし禍を伴ないて、隣れる一王國の最も大なる市場に赴きぬ。禍の形狀は巨大なる猪の形狀なりき。斯くてかの大臣その外國なる市場を訪ね、其處なる柱に繫がれたるその動物を認めて、そは何と名づくる動物にやとその天神に尋ねぬ。

『禍の母と呼ぶもの』と天神は言ひぬ。

『賣らんとにや』と大臣は問ひぬ。

『さなり』と天神は答へぬ。

『價は』

『黃金百萬片』

『日々の食は何ぞ』

『縫針二斗』

* * *

山吹色なる純良の黃金百萬片を拂ひてその動物を得たる後、大臣は强ひてもそが爲めに食物を得ざるべからずなりぬ。されば縫針を手に入れんと、あらゆる市場に、また仕立物

師と織物師との店に、また國內なるあらゆる地方のあらゆる官人に使者を送りぬ。この爲め多大の災難、縫針の乏しきが爲めのみならず、國人が蒙る苦痛の爲めに、この國土に出來しぬ。縫針を有たざる者は竹もて打たれ、官人は王の大臣の命に從はんと欲して苛酷なる事多く行ひたればなり。縫針にて生ける仕立物師どもはやがて憫れなる身となりぬ。また縫針造る者共は、努めんとはすれど、過勞の爲めに死する者は多かりしが、かの動物の飢を充たさん量を造ること叶はざりき。縫針一本の價數多の綠玉金剛石の價の如くなり、富める者は、その口地獄の口の如くに滿たさるゝことあり得ざる此の獸の食物得んとて、その財產總てを與へぬ。斯くて諸州の人々、飢餓の爲め官人の苛酷なるが爲め、自ら棄てて起ちて叛亂し、人命幾千萬を損ずる戰爭を起こしぬ。川は血に流れぬ。されどかの大臣は、それに喰ましめん縫針の足らざるが爲めにその獸を宮殿に伴ひ歸ること叶はざりき。

かゝりければ彼は國王に一書を送りて言ひぬ、『禍は我れその母なるものを見出して買求むることは爲し得しも、父なるものは之を得ること能はざりき、また陛下の許容を得て之を探すことは爲さざるべし。思ひ見給へ、その母なるものは早此の國の物質を食ひ盡くしたり。かゝる怪物を宮殿に伴なはんことと我れ之を試むることをえせじ。されば余は陛下に希ふ、この恐ろしの獸を殺さん許可を我に與へ給はんことを。余は陛下が印度の賢者の

言を記憶し給はんことを信ず、「忠言に耳藉さんと欲せざる王なりとも信實なる顧問の言をば聽くべきなり」との』

國王は旣に飢饉と革命とに恐れを抱けることとて、便ちその獸を殺すべしと命じぬ。

* * *

斯くて禍の母はその村の外なる人氣無き處に引出され、鐵の鎖にてしかと繋がれぬ。かの大臣は屠殺者にそを殺せと命じぬ。されどもその皮堅くして刃を迎へず、斧も刀もそを傷つくること叶はざりき。されば兵士に命じてそを殺さしめぬ。されど射手の矢はその眼は射當つるもその鋼の尖は平たく鈍りつ、眼は金剛石の如く輝きまた硬かりき。またそを殺さんとの愚かの努力に折れ碎けたる劍と槍とは數限りなかりき。

かくて大臣は大なる火をつくらしめ、その火の裡にその怪物を縛り、瀝青と油と脂多き木材とを山とその火の上に積み上げしかば、火は熱く燃え上りて、人はそを距ること十里の内に近寄ること叶はずなりぬ。然るにその獸は燒くること無く、月の如く輝きて初め赤熱となり後ち白熱となりぬ。その鎖は蠟の如くに鎔けたれば、その獸は終に脫れ出てて火龍の如くに國人のなかに走り出てぬ。斯くて燒け死にたる人多かりしが、かの獸は村に入

りて村を破滅し、市に入りて市を破滅し、進むにつれていよいよその熱を増してなほも迅く走りて首府に入り來り、その中を貫き走りまたその上を屋根の上を走り過ぎ、その宮殿なる國王すらも燃やしつくしぬ。

斯くてこの國王の愚かなるが爲め、その王國は全く荒廢破滅し、ただ蜥蜴と蛇と惡鬼とが棲む一沙漠となりぬ。……

註　此の寓話と次なる寓話とは、支那の或る百科全書よりしてスタニスラス・ジュリアン氏が飜譯し、千八百六十年巴里にて――此兩話が原と古き梵語の原文よりして支那人自らが飜譯したるか又は改作したるかしたるものなれば是記して然るべき、漢語「比喩」に相當する――「レザ・アヴダアナス」てふ表題にて出版したる珍らしき蒐集のうちに在り。されど余は、前記のこの奇怪なる譬話のやゝ支那式なる色彩を高調することを敢てしたり。L・H・

佛教の譬話

……人の生涯は陶器師の轆轤にて造らるゝ土の器に似たり。いかに心用ひて形つくるとも、總て皆な破滅の運命あり。存在するものは如何なる物と雖も永續すること無し。生は流れて歸ること無き川の水の如くなり。されば幸福は、龜がその六端をその甲の中に引入るゝが如くに六欲を隱し、恰も市邑がその濠と壁とに護らるゝが如くに思想を護りて願望と悲哀とを起こさざるによりて初めて得られん。……

釋迦牟尼は偈にて斯く述べぬ。古昔彼が語りたるにまぎれ無きものにて、今は無き印度の筆寫物よりして支那の言葉に飜譯されたる此の譬話は、『法苑珠林』第五十一卷に見出さるべし。

※
※ ※

……蛇多き頃、父とその子と野に働きありしに、僧帽蛇その若者を噬みたれば彼は纏て死にき。僧帽蛇の毒は俄かに眼を昏からしめ心臓の活動を停むるものにてその毒を消さん藥は人の知らざる所なればなり。されどその父は己が子の死して蟻の集まり來るを見て、その業に歸り、心穩かに働くことを休まざりけり。

その時或る婆羅門其處を過ぎ、ありし事を看、その父がなほも働けるを怪しみ、その眼の涙無きを見て尙ほ更に怪しみぬ。されば彼に問ひて言ひぬ、『死せる彼の若者は誰が子にや』

『我が子なりき』と、その農夫は働ける手も休めて答へぬ。

『されど、汝の子ならば、余は如何にして汝の涙無く冷かなるを見ることぞ』

『愚かや』とその農夫答へぬ、『それ人は此世に生るゝ刹那よりして死に向つてその第一步を踏むなり。その體力の圓熟はその衰退の初なり。善行には報あり、惡行にも亦罰あり。されば啼いて哭くとも何の益あらん。……善き婆羅門よ。恐らくは汝町に赴く途にてあらん。若しさならば、乞ふ、我が家の前を過ぎ、我が子死にたりと我が妻に告げよ。さらば我が妻は我に日中の食を齎さめ』

『嗚呼、こは何んたる人の樣ぞ』とその婆羅門心私かに言ひぬ、『己が子死せるも泣か

ず。その屍體日の下に横たはれども働くを止めず。蟻集まり來るも冷かに己が日中の食を求む。彼が内臓には慈悲無く、人間の情なきに極れり』斯く其婆羅門は心私かに言ひしが、好奇の念に動かされたれば過たずその農夫の家に赴き、死者の母を見て言ひぬ、『婦よ、汝の兒は僧帽蛇に噬まれて死にたり。汝の涙無き夫は、汝が彼に日中の食を運ばんことを汝に告げよと余に乞ひたり。……嗚呼汝も亦己が子の死を聞きて更に感ずる所無きよ、汝泣かざるを見れば』

されどその死者の母は譬喩もて彼に答へて言ひぬ、『君よ、彼の子はその兩親よりして唯だ一時の生を受けたりしなり。されば余は彼を我が兒とは呼ばざりき。今や彼我より去りたれば、我が弱き力にては彼を留めん術あらじ。彼はただ旅人の宿に停れるが如くなりしなり。旅人は停まつて後ち去る。主人彼を留めんや。母と子との關係まことに斯の如し。その子の去るも來るも、止るも進むも、余には何等の力も無し。我が子は定められたる運命を果したれば、その運命よりして彼を止めんこと何人も爲し得ざるべし。されば何とて避くべからざることを哭き悲しまん』

婆羅門は尙ほも打驚きつゝ死せる若者の長姉に、少女姿の蓮の花の如くなる處女に、向ひて問ひて言ひぬ、『汝の弟死せるに汝は泣かざるや』

されどその處女も亦譬喩もて彼に答へて言ひぬ、『力逞しき樵夫時に森林に入りて大いなる斧もて木を伐り、そを縛り合はせて大筏を作り、其筏を大河に浮かぶ。然るに烈風起こりて波浪を起こし、その筏を彼方此方に打ち當て、筏は爲めに碎けて水流はその最も前なる二木を後ちなる丸木と離し、總て皆な流れ去つて再び結ぶこと無し。我が若き弟の宿命も亦正に斯の如くなりしなり。我等は宿命に因りて同じ一家に結合せられしが、我等は永久に分かたれたるなり。死生に定まれる時はあらじ。我等の存在長からんも短からんも、ただ一時の間結合せられたるにて、永久へに分かるべきものなり。我が弟はその定められたる途を果たしたるなり。我等いづれもまた鏈はらざらん宿命を辿りてあるなり。我には彼を護りて救はん力あらざりき。されば何とて妨げ得べからざりし事の爲めに泣かん』

婆羅門は尙ほも打驚きつゝ死せる若者の美しき妻に對ひて言ひぬ、『汝よ、汝の胸に彼は眠りしなるに、その夏と盛りの年齡に當たりて彼が、汝の眉目よき夫が、斷たれたるに汝は泣かざるや』

されど彼女も亦譬喩もて答へて言ひぬ、『恰も二羽の鳥の、一つは東より飛び一つは南より飛び來り、遭うて互にその眼を見入り、互に旋り飛び、木若しくは寺の同じ頂を求め、共に眠りて曉に及ぶが如く、我等の宿命また然りしなり。金色の光東天を破れば、その二

羽の鳥はその寺若しくは木の宿を去り、各〻食を求めて異れる道に飛び去る。宿命之を欲すれば彼等再び會はん、宿命之を欲せざれば彼等終に互に相會ふこと無し。我が夫と我との宿命は斯の如くなりしなり。死彼を求めし時、彼の宿命は果てたりしことなれば、彼を救はんこと、余の力にあらざりしなり。されば何とて我は泣くべきぞ』

婆羅門は更に前にも増して打驚きつゝ死者の奴僕に尋ねて問ひぬ、『汝の主は死にたるに汝何故に泣かざる―』

されどその奴僕もまた譬喩もて彼に答へて言ひぬ、『我が主と我とは宿命の意によりて結ばれたりき。余はただ大牛に隨ふ犢子の如くなりしなり。大牛殺さる、その犢子は屠殺者の斧よりして彼を救ふこと能はざらん。その號泣も何の益する所かあらん。まこと我が死なん時刻の如何に早く來るべきかを知らざれば、何とて余は泣くべきぞ』

その婆羅門は、驚き怪しみて聲を發せず、野なる涙無き夫へ運ばん日中の食を調へつゝ、外より射し入る金色の光をよぎりて、彼方此方へ速く立ち動けるその二人の女のしなやかなる姿を見つめてありき。

芬陀利

成道を得しこととて、光もて此世を滿たし、その足の裏は光り輝く日二つの顏に似たりし佛陀の物語なり。

……その頃佛陀には、王舍城（ラジヤグリハ）が――白き街路、組子細工の拱廊、さては迦濕彌羅の絹の如く輕く、霜の如く細緻（こまやか）に、見ゆる許りに極めて巧に彫りたる乳色の宮殿ありて、その頃は目も醒むる眺望（ながめ）なりし今は無き古き王舍城が――見渡さるゝ靈鷲山（グリドラクタ）の頂に住みてありき。象の叫聲（さけび）きこえ。風は戀の樂（がく）の音に打震ひ。百千の花園の花は香（かをり）を大空に放ち、その花よりも美はしき女竪琴と笛の調（しらべ）に合はせて飾環嵌めし踝（くるぶし）を動かしぬ。……されど、あるが中にも、その山の巓は、――佛陀の在るを示せる巨大なる薔薇色の光もて、――晝よりもあかるき大光明に照り輝きぬ。

さてその町に、溫雅（しとやか）なる樣（さま）それに竝ぶもの他になかりける、女といふ女の中に愛らしき

極みなりし、舞姫一人ありしが、舞踏、寶玉、花に飽き――眞紅と金色との絹のその胸甲に、空氣の如く輕く霧の如く透けるその衣に、飽き――寶玉と薫香と十年の旅せでは到り難き遠き國にて奇しくも造られし器物と、贈物を、その女に齎して象に跨りてその住居に訪ね來る王子等にも、また飽きたりき。佛陀を探し求め、知識と安靜とを得て、恰も比丘尼の如くなれよと、その情その舞姫に囁きぬ。

されば、その美しき町に暇を告げ、その巨大なる薔薇色の光そが上に輝けるを當てに險しき山路を登り始めぬ。日の暑さは烈しく、眼眩く路は荒く、沙漠の渴と疲勞と彼女を襲ひぬ。されば、その山をただ半ば登りたる時、岩の胸に自と奇しき水盤を造り爲せる、金剛石の如くに光りて淸き泉にて水掬びまた休らはんと立停りぬ。

されどその舞姫水掬ばんと泉の上に身を屈めけるに、その白銀と澄み光れる鏡にて、己が髮の黑くつやつやしきを、絹の陰うけし己が眼の蓮と穩かなるを、蜜と甘き己が口の薔薇の苔なせるを、己が顏色の日の光の如く金色なるを、己が腰のしとやかにたをやかなるを、己がしなやかなる手足の象の鼻よりも圓きを、また黃金捲ける己が踝の美はしきを、眺め視ぬ。涙の靄見る眼を塞ぎぬ。呟きて言ひぬ、『さても此の美はしきを捨つべきにや。王を迷はし、大王を迷はしたる、此の愛らしさを世捨人の衣に覆ふべきにや。我が若々し

さとたをやかさが、過去の夢の如くに孤獨のうちに消え去るを視るべきにや。身は何が爲めに斯く美はしく生れ出でたりけん。いなとよ、年若からず姿美しからぬ人こそ一切を捨てて五道を尋ぬべけれ』女はその顏を上げて白く輝ける靈鷲山を見やりたるに、花の香立ち騰り、流るゝ如き妙なる笛の音ひびき、踊り子共の猥らなる戯れ笑きこえぬ。……

されど彼方の山の上高く遠く、かの薔薇色の光の中にありて、全智の佛陀は女の情の中を見入り、その心弱きを憐みて、言葉唱へてこの舞姫芬陀利よりもなほもあてやかに、なほもしなやかなる娘と身を變じぬ。されば芬陀利が山を降らんとする時、圖らずも麗はしき極みなる侶の己が傍にあるに氣づきていたく驚き、問ひて言ひぬ、『美しき極みなる者よ。何處より來たれる。斯くも愛くるほしき者の眷族は誰れにてありうべき』

その麗はしの他人、黄金の笛の音よりも和やかなる聲して答へぬ、『愛らしき者よ。我れ亦王舍城の白き町に歸らんとするなり。連れ立ちて行かずや、道すがら互に慰めん術もあらめば』

芬陀利は答へぬ、『美はしき極みなる處女よ、さなり。汝の美くしさは花が蜂を誘ひ寄するが如くに我を誘ひ寄するなり。されば汝の情は汝の比へん方なき顏の如くに貴きに定まれり』

斯くて二人は連れて歩みぬ。されどこの美はしき他人（あだしびと）やがて疲れたれば、芬陀利は坐して己が圓き膝をそのあてやかなる頭の枕とし、睡らんやうその侶（とも）に接吻（くちづけ）し、その髮の絹のごと華やかなるを撫て、その金色なる寢顔の熱したる美しさをいとほしみて、この他人（あだしびと）への深き愛その胸に溢れ起こりぬ。

然るに己が滑らけき膝の上なるその顔を見守りてある間（ま）に、恰も金色の果實が萎びて縮むが如くに變じて、そのふくよかなる頬は悴れ萎びつ、怪しき凹み眼のあたりに黑ずみ深まり、絹の睫毛はその影と共に消え、光澤（つや）うるはしき髮毛は墓壙の火の灰の如く白み、唇は縮みしなび、嘗ては薔薇の如かりし口は齒無く大きく開き、顔の骨は突き出でて朧氣に髑髏の輪廓を形どりぬ。青春の香失せて、堪へ難き死の臭起こり、それと共に死がそを太らしむる物凄き這ふもの出で來り、暗き死の手が殘す蒼白き色と汚斑と現はれぬ。芬陀利は打叫びて遁れて佛陀の面前に到り、己が見たりし事共を語りぬ。

世尊は女を言ひ慰めて言ひぬ、——

『さても芬陀利よ。人の生命（いのち）はただ果實の如く、美はしさはただ花の如きのみ。肉身は如何に麗はしくとも恒河の流の傍に朽ちてあらば何の用かあらん。老と死とは我等誰人も免れ得じ。されど尙ほ惡しきことあり——木精（こだま）が洞穴にての聲に從ふが如く、大いなる足

跡が象の歩行に從ふが如く、此世の生に從つて受くる新生これなり』

『悲哀欲望より來り、諸惡欲望に依つて生る。肉體はただ心意の――快樂を求めんとする情の愚かしき飢渴の――所産なり。恰も夢の影が、睡れる者の覺むると共に消え散るが如く、欲望に勝ち情の飢渴を止むる者の情よりして悲哀は消え諸惡は去らん。また能く五道を踏まん者共には肉體そのものも消え失せん。

『さても芬陀利よ。欲望ばかり激しく燃ゆるものはあらじ。いかなる歡喜も肉體の滅却に比ぶべきは無し。愚かなる情欲の烈しき火にその若き時を過ごす者共は、恰も涸れて水無き蓮池の横に獨り佇める白鶴の如くならん。大なる變化來たらん時、彼等は必らずや愚かしさと淚との中に再び生を享けん。

『あだし人々が厭ひ恐るゝ荒野に悅樂を見出したる者共、あらゆる渴望を消滅したる者共、生死の冥想に由りて欲情無きものとなりし者共のみ、――かゝる者共のみぞ幸福を獲、再び生るゝこと無くして涅槃の至福に入るなる』……

斯くてその舞姬は、その髮を切り、寶玉身飾などあらゆる贈物を身より投げ、一切を捨てて五道に入らんと力めぬ。デヴは打喜び、かの白き町の上なる山々に光を放たしめ、奇しき花の雨もて空を充たしぬ。尙ほ佛陀に就きて知らんと欲する者は、彼の不可思議なる

書『法句經』を——ダムマパーダを——讀め。

夜摩王

マツガヴゴ物語なり。『法句經』てふ不可思議なる書中にある『道』なり。……その生るゝ時諸の星その歩みを停めし佛陀の物語なり。……

その婆羅門の子死にたりき——その胸に蟲の生れたる薔薇の如く、其池の水の斷たれたる道の蕾の如く、その美しの青春が花と咲かんとするに死にたりき。尊き限りなる種族の子等のうちにすら、彼の如く紋縹好きものは、一人とてあらざりき。また、宗教の書卷に、經典を正しく說き論ずるに、靈感受けたる歌手の首盧迦を吟誦するに、彼に優りしもの一人とてあらざりき。されば年老いしその婆羅門は己が子の遺骸に縋り附きて三たび喪神しつ、幾度か伴なひてその家に歸らしめんとしたるも、度毎に泣き悲しみてまたも喪神したりしかば、やがてそが恰も死せる樣にて倒れある間に、人々その子の遺骸をその腕より離さしめ、淨化の水もて洗ひ淨めたる後、香かぐはしき亞麻布にて包み、印度の花もて飾れ

る棺臺の上に載せ、埋葬の場處に搬び去りぬ。かくて彼の不幸なる父が己に還りし時は、事悉く終はりてありき。またそが種族の嚴しき長者ども、そがまはりに集まり來りて、其愁傷を嚴しく責めしかば、悲歎の無益と人の涙の愚かしさとを思ひ知らざるを得ずなりぬ。

＊
＊　＊

されどその子の痛ましき死を思ひ煩ひ歎むこと無く、やがて無謀なる望その胸に浮かび出てぬ。彼は思ひぬ、『或る偉大なる婆羅門、五徳五能十力を得て、死の王たる夜摩王と相對して語る事を得たりと言ふを聞けることあり。實にや我には、我が意の弱きが爲めか、無上智を得ん力あらねども、我が愛と信とは衷心よりなれば、死の王夜摩王を探し求めて我が子を返せと乞はん』斯くてその婆羅門は僧服を身に纏ひ、律法の定めし聖禮を行ひつ、花と香との捧物を獻げて後、失せし國々の大王にて、死の王たる夜摩を探し求めんと出で立ちぬ。彼は道に遭へる人悉くに、何處に夜摩を見うべきと問ひ質しぬ。

＊
＊　＊

彼をば氣狂へりと思ひて、驚の眼を開きて、全く答へざる者もありき。彼を嘲り笑ふ者

もありき。餘りに早く夜摩に會はめば家に歸れと諭す者もありき。寶石の欛せる刀佩きし刹帝利の王子共は、閃く鋼と輝く黄金の物の具に馬を驅り過ぎて彼に答へぬ。『夜摩は暴風なす戰の中に、矢の雲の湧き出づる下に、稻妻閃めく刀の中に、戰ふ象の鎧へる列の前に、見ることを得ん』色黑き船人は海風の如き荒き笑もて答へぬ、『汝夜摩をば哮る海に、また狂ふ颱風に、求め得べけん。嵐の精靈の答ふるを聽け！』……また、天人ウルヷシの燃ゆるが如き頌歌うたへる踊り子共は、聲を止めてその蠱惑もて答へぬ、『夜摩をば我等の腕の中に、我等の脣の上に、我等の胸の上に求めよ。汝の魂を接吻一つにて吐き消せ』……言ひ了はりて、寺の廂なる鐘の、風がその銀の舌に脣觸るゝ時笑ふが如く、甲高に打笑ひぬ。

* * *

斯くて彼はさまよひ進みつ、多くの川の土手近く、多くの市邑の城壁の影の下に、變はらず求め探してあゆみ行きしが、やがて無上智を得たりし最も尊き人等のすまへる、東山の麓なる廣野に到り着きぬ。托鉢僧の如く僧帽戴ける蛇はその割れたる舌を突き出しぬ。豹は綠の炎の眼もて彼を視んと藪地の草を薙ぎぬ。うははみは水の上なる小舟の船跡の如

く深き草の上に波をうねらせて彼の前を行きぬ。されど彼は夜摩を求めてありしかば恐るることなかりき。

かくてやがて彼は、無上智を獲てただ花の香のみを食とせる、婆羅門のうちにても最も尊き者の住まへる處に到り着きぬ。岩の影、太古よりの樹の影、日の昇るに從ひて伸び縮みて廻りぬ。されど彼等がその下に坐れる木の影は廻らず、また過き日の光の變はると共に變はることなかりき。その隱者等の眼は瞬くこと無く日の面を見詰めてありぬ。天なる鳥はその蓬々たる鬚の動かざるが中に巢造りぬ。震へに顫ひつ彼は何處に夜摩を見出すべきかを彼等に問ひぬ。

*
* *

彼は、永久へなるその首廬遮を吟ぜる木と、ちらつくそのあらゆる葉の舌もて囁ける木と、數限り無き金色の蠅の呟と、數地行く大いなる獸の重げなる身動きとを聞くのみにて、無言に彼等の答を待ちぬ。やがてその婆羅門どもその脣を動かして答へぬ、『何が爲めに汝は夜摩を求むるぞ』彼等聲を發するや、水と林との聲は靜まり、金色の蠅その翼の樂の音を止めぬ。

其時かの巡遊者は身を震はして答へぬ、『知れや、我も亦婆羅門なり、汝等尊き者共よ。されど我は絶對を知るにふさはしからざるを見てか、無上智を獲る力は我れ授からざりき。されど余は尊き身たらんと六十年の久しき勤めて怠らざりき。我等が律法(おきて)は教ふ、人若し六十歳にして智慧に達せずんば、家に歸りて妻を迎へ、尊き子等を生まんがその義務(つとめ)なりと。斯く余は爲して、一子我に生れしが、素馨(ワシカ)の花のごと美しく、幼にして既に學の道に長たりき。余は無上智を愛する念を注がんとてあらん限りの力を悉くし、我れ自ら教へたりしが、やがて我が知れるよりも多く知るやうなりしかば、エレフアンタの國より數々の教師を彼に求めぬ。さるをそが青春の美しき央ばに、彼れ我より奪はれぬ、――その脣に早も影なせる成人の絹ありしも、取り去られぬ。されば、尊き人等よ、如何なる處にか夜摩王は住める、乞ふ我に告げよ、我れ我が子を返さんことを彼に願はんと思へば』

* * *

その時、一つの韻律爲して流るゝ川々の音(ね)の如く、その尊き聲々一つの聲して一齊に答へぬ、『冬と更(ふ)けたる汝の年齡(よはひ)に、迷の爲めになほも悲しむを思へば、まこと汝は無上智を求むるに適はざるなり。諸の星も年經れば死し、諸の天界も木の葉の如く凋み、諸の世

界も香の煙の如く消ゆべければなり。生は褪せんと開くなる花瓣の如く、人の爲す事は水の上にものせる語句の如くなり。無上智に達したる者はただ存在を嘆くのみなり。……されど汝が蒙を啓かん爲め、我等汝に諭さん。夜摩の國は汝之を訪ふこと叶はざらん、如何なる人も生命（いのち）ある足もてその道を踏み行かんこと叶はざればなり。されど日の沒する方（かた）幾百里の彼方に、その中央に光り輝く町ある谷一つあり。其處には人更に住まず、地上に住まんとて化身する時、ただ神住むことあるのみ。されど月々の八日に夜摩王彼等（たち）を訪ぬ。その時汝彼を見ることを得ん。されど不思議なる禍汝に起こらん惧あれば、心して、儀禮を行ひ呪文（マントラ）を唱ふるに一刻をも空しうすること勿れ。……されば我等より去れ、我等再び禪定に入らんとすれば』

* * *

斯くて幾月か旅したる後、心善なるその婆羅門は終にその谷を見下ろす山の上に立ち、象牙と白きその町を――忉利天の如き光明世界を――眼下に見ぬ。ラアマの使者ハヌーマットと雖も、夜、楞伽島の宮居を訪ねて、睡眠（ねむり）の抱擁に織り交ぜられたる女の中にても最も麗はしき女を、『織り合はされたる女の肉身の花環』を、婆羅那王の宮殿にて看たりし

時、かゝる華やかなる眺望は見ざりしなり。魔法の鑿もて卍字と彫られし臺地は、階に階を重ねて段一段と高く天に向ひて高まり、その頂上は羊毛なせる夏雲かと怪しまれ、拱門の上に拱門聳え、石竹色なる大理石の諸門まどろめる舞姫の目の如くに廣く開き、金鏤めし縫取もて縁取られし銃眼有てる壁は森の如く厚く庭園を取卷き、乳房の如く圓やかなる白き丸屋根は青空を背に眞珠と圓き半圓を畫き、銀の乳嘴の噴泉は異香薫ずる飛沫を降らし、またデヴがその翼を收めて守護せる諸神の宮殿の大門の上には、無上智を得たる者共のみが理解すなる言葉がその面に刻まれたる巨大の紅寶石炎と火を放てりき。かの婆羅門はその門の前に立ち、淨香を焚きて尊き呪文を唱へぬ。……さればデヴは彼を憐み、黄金の扉を轟と打開きて、彼を入らしめぬ。

* * *

その宮殿の廣間は天つ空の如くに高く、その空色なせる青き圓天井は、支ふるもの無く支へられて、諸神の集團の上に懸かりてあり、眞黒き大理石の鋪石は底無き湖の如くほの光りてありき。されどその婆羅門、その眼を得上ぐること叶はず、身を屈め伏したる時、その鋪石が恰も地のをののくが如くに生命ある人の足に踏まれて、打震ふを覚えぬ。彼は

その床に映れる影にて諸神が集まりて坐してあるを見しが、此世の聖賢にて見るが如き怖ろしき姿にはあらで、不死不滅の身なるが故に薔薇色爲せる、星を冠ける、光明ある者なりき。……ただ夜摩王のみその額に星の炎を有たず、その眼には濕にこたふる淵の深さありき。彼を崇むる此者の耳にはその聲反響無き奈落の縁を流れ落つる水の聲の如くひゞきぬ。……かの婆羅門はこの聲に從ひてその希ふ所を述べぬ。

死の王は怪しき聲音して答へて言ひぬ、「婆藍摩の子よ、汝の願は敬虔にして正當なり。汝の子は今や東の花園に在り。その手を執りて汝の行かん道を行け」……

* * *

その婆羅門は喜び勇みて永久へに流るゝ噴泉あり、落つること無くとことはに熟せる果實あり、褪すること無く不死不滅なる花あるその花園に入りぬ。戲れ遊べる無數の兒童に打交じりて、己がいとしの子が噴泉の傍に遊べるを認めぬ。されば大いなる叫もて打叫びて、走り行きて、その子を捉へて、そを擁して泣きて喚きぬ、「うるはしの子よ。我がいとしの初兒よ。汝は我を、しかく長く歎き悲しみし汝の父を――汝を求めんと死の王夜摩王の前にすら入り來りたる汝の父を――知らざるか」……

されどその子は霧の如くその抱擁より逃れて、眼に驚を湛へて、答へぬ、『我れいかいか汝を知らずよい』……

その婆羅門こゝに於てその子の前に涙ながら跪きて叫びぬ、『うるはしき限りなる子よ。汝は己が生命に優して汝を愛せし父を——汝の幼き唇に尊き祈を唱ふることを敎へし汝の父を——汝が心の願は一つとして否まず、王の子の如くに養ひ育て、婆羅門の智慧悉くを敎へし汝の父を——まことと忘れたるにや。我が斯くも久しく汝を求めんとて旅したることを思ひて、ただ獨り今汝の爲めに泣く汝の母をも忘れたるにや。いなとよ、汝の眼もて我を見よ。再び我を見よ。我を知り得めば。さるにてもまた、我が愁傷我が姿を變じ、汝の眼には我れ舊の如くならざるが爲めか』……

されどその子は常に答へぬ、『我れ汝を知らずよ』

こゝに於てかその婆羅門は身を地に投じて無限の絶望に打たれたる者の如くに悲しみて、あまりに咽び泣きしかば、その子は彼に手を觸れて再び物言ひぬ、『我れ汝を知らずよ。汝は我に他人なり。余は汝が——俗世の草の如くに過ぎ去る境遇を意味する、父さては母なる語を述ぶるを思へば——愚かなる者とは知れり。また汝が悲しめることをも、されば迷の生贄たることをも、知るなり。悲哀は無智と願望より生ずること、恰も菌が腐敗よ

り生ずるが如ければなり。此處にては我等願望を知らず、我等悲哀を知らず、また我等迷を抱かず。汝の我に於る、風の月に於るに、消されし炎の嘗ては照らされし物に於るに、劣らず。汝の悲哀と汝の愚かとを此地に齎さんは、汝に利するところ更にあることなければ、汝此地より去れ』……

斯くてその婆羅門は、悲歎の餘りに言葉も無く、出で立ちぬ。

此時初めて彼は忠言と慰安を得んとて沙門喬答摩たる佛陀を求めぬ。佛陀は彼を憐みてその手を彼の心に置き、彼に靜安を與へて言ひぬ、——

『婆羅門よ、汝はただ己が迷と愚かとに罰せられたるなり。

『死者の靈は出て去りたる後新たに肉身を受くることなればその原の關係は全く終はること恰も路傍の宿舍を訪ふ者がその家を去りての後は客に非らざるが如きものなるを知れ。

『汝の心は弱し。汝のその愛は迷妄なり。憐れむべきかな、汝は。ただ無上智によりての他、汝は慰安を見出すこと能はざらん。

『妻と子との爲めに心を煩はすは徒勞なり。終焉が人皆なを襲ふこと恰も轟々たる瀧つ瀬の如く、それに絡まる此世の愛着すべてを流し去るべければなり。

『生命終はれば父も母も之を救ふこと能はず。生命終はれば愛も力も之を助くること能

はず。親も眷族も燃ゆる火を守る盲人の如きものとなるなり。
『されば眞に賢き者は、世を救ひ、人の蒙を啓き、願望を滅して以て悲哀を滅し、己が身を濟度せんと求めて、斯る事を思惟すること無し。
『恰も風が雲を吹拂ふが如く、賢き者は力めて思索を排し、此世なる意識を排し、斯くて永久へに未來の生死を脱れ、八重なる智慧に達し、終に永遠の平和と永遠の休息を見出すべきなり。
『高き物は低きに置かれん。合あれば必らず離あり。生ある處にはまた必らず死あるべし。
『されば婆羅門よ、一切の欲情、一切の愛情、一切の哀惜を捨つること、恰も素馨がその萎びし花を落とすが如くなるべし。されば無智なる者より逃れ去り、如何なる侶も要とせで、その群より脱れし象の如く歡びて、孤獨に在りて眞の智慧を求めよ』……

＊
＊　＊

斯くてその婆羅門は――生の徒なることを、歡喜の果敢なきことを、悲哀の愚かなることを悟りて――悲しむことを止めて教主の歩む後追はん許容を乞ひ願ひぬ。……

とも題し、また『火爐』とも題す。こは佛『本生譚』に在り。……その生るゝや海の水あらたまり、七地獄の深奥照らされぬ。盲者は世界のこの至福を視んやう視る力を獲、聾者は歡喜のこの報知を聴かんやう聴く力を獲、七重の蓮華に岩は裂き割られ、無量の光明三千大千世界に遍かりき。……

婆羅摩達多が彼の尊き町を――大猿と孔雀との町を――七寶を有ち、十種の叫喚、象の唸、馬の嘶、樂器の音、鳴禽の囀鳴り響ける町を――婆羅痆斯の町を治めし頃、未來の佛陀、無量劫の生を經たりし後、王室出納司の一家に子となりて生れぬ。

さて一劫の長さは十百萬年なり。

その頃菩薩なりしこの未來の佛陀はこの尊き町の王子の如く榮華榮耀のうちに育てられ、幼にして夙に人智の一切の部門に長じ、成人の後父の跡を襲ひて出納の司となりぬ。され

どその任務を果たしつゝも、尊き者共に貴重の贈物をとらしめ、施物贈與には己に優るものあらざらしめぬ。

その頃また尊き或る佛陀住まひ居たりしが、十行悉くを果たさんと力めて米一粒だも食ふこと無くして七日七夜を過ごしたりき。やがてその尊き無我より覺め、身を洗ひ衣をまとひ、己が身を淨くし、その行の功德によりて空を翔り過ぎりて、布施乞ふ鉢を手に載せてこの出納司の家の門に降り立ちぬ。

其時菩薩はその神聖なる乞食が無言の儘待てるを看、無上智を求むる者が肯んじて食はんやうなる食餌をそれに充たさんとて、侍者に命じてその佛陀の鉢を己が前に持ち來たらしめぬ。さればその侍者はその鉢を携へ歸らんとて出て行きぬ。

然るに恰も彼が進み出でて未だその手を延ばさざるに先だち、大地動搖して海の如く足下に上下し、地自ら開きてその內臟を現はし、その神聖なる乞食と菩薩の侍者との間に底無き淵を造りぬ。またその深淵沸き立つ炎の地獄となり、阿鼻地獄の如く、花崗岩の巨巖なほ且つ蠟の如く融け雲の如く散ずる火山の心の如きものとなりぬ。また不可思議なる巨大の暗黑太陽の前に生じ遍くその面を黑くしぬ。

さればかの侍者とその從者とは喚き叫びて逃れ去り、殘れるはただその深淵の一方の際

に立てる菩薩と、他方の際にありて靜かに待てるその佛陀とのみなりき。十全なるその乞食の足が立てる處は深淵廣ごらざりしが、菩薩の足の前は、深淵急速に廣ごり地を食み、恰も彼を呑まんと欲するが如くなりき。羅刹(らせつ)並びに惡鬼の王たる摩羅、その佛陀の死なんことを望みて、斯くして菩薩が施物を與ふるを妨げんと欲したればなりき。太陽の前なる暗黒は摩羅の物凄き顔の暗黒なりしなり。

その時山雷の私語(つぶやき)の如く、聲出て來りて言ひぬ、『その佛陀は汝の施物授與によりて生くべきに非らず。彼の死期は來りたるなり。……我は汝と彼とを距つ炎なれ』

その時菩薩は炎の深淵の彼方なるその佛陀を眺め見しに、佛陀の顔色少しも變ぜず、爲さざれとの言葉一つ唱ふることも無く、勵ます手眞似一つ示すことも爲さざりき。

されどその深淵廣がりて彼を呑まんといや大きくなりし時もなほ、菩薩は聲高に叫びぬ、『摩羅よ、汝が言には從はじ。汝には義務(つとめ)に反(そむ)かしめん力あらじ。……さて我が主たる佛陀よ、余は恐るゝ所なく汝に到る。汝に仕ふる者の手よりして此の食を取れ』

斯く言ひて菩薩はその手に米の皿を持ち、轟々たる炎の地に踏み入り、玉なす言葉を斯く述べぬ、『義務(つとめ)を怠り或は知つて惡を行はんよりは求めて地獄に入らんが可なり』……

恰もその時佛陀は他方の岸に在りて微笑みぬ。

また菩薩が陥るに先だちて、その炎の穴の深奥よりして、巨大端麗なる蓮華、恰もその黄金の胎内より梵天王が生れし蓮華に似たるが、忽然として現はれ出て、菩薩の足を受け、穴を彼方へ渡らしめ、星の時雨の如き金砂の飛沫を彼に灑ぎぬ。斯くて彼は佛陀の鉢の中にその尊き施物を注ぎ入れぬ。

暗黑は消えぬ。深淵は在らざりき。かの佛陀は虛空に立上り、薔薇色なせる雲の橋を渡りて比馬拉耶の山地に去りぬ。されど猶ほも黄金の蓮華の上に立てる菩薩は尊き事共に就きて長く衆生の爲めに說きぬ。

カレワラよりの歌

魔法の言葉

世界の初のことを、大空の根柢を初めて造りし鍛冶の神々のことを、また遠き極みなる北國の魔法使妖術者のことを述べたる歌の本にて、カレワラと云へる、古き芬蘭土語にて書かれし不思議なる書物あり。魔法使のうちにてもルーヒは最も力優れし者の一人なりき。その息女は諸神諸勇士慕ひ戀ひ——最も偉大なるワイナモイネンすら慕ひ戀ひぬ。……その處女いとあてやかなりければその麗はしさ月のごと光を放ち、その骨白かりければその白さその透明なる肉を透してほの光り、その骨の象牙色清かりければその中なる髓も見られつ。……此處女の壻を得んとて乘り行かん船をばワイナモイネンが如何にして造りしかの物語カレワラの歌に次の如くに語られてあり。——

……齢たけし雄々しのワイナモイネン船を、迅き戰船を、造らんと心定めぬ。木を伐りぬ、松と樅との太幹を伐りぬ、そのあひだ唄うたひつつ、惡魔を拂ふ歌吟じつつ。彼れ歌へば伐り倒さるゝ木々は彼に答へつ、樫と樅と山松の纖維は、他の人等にはただ木精と思はるれど、ワイナモイネンの耳には句たり語たる——魔法が木より絞取る語たる——……にてその祕密を語るなりき。

龍骨のみ造られてありき。なほその戰船の堅固なる龍骨を作らざるを得ざるなりき。曲げまた彫りて龍骨を造るが如くに、其胴體を彫りて曲げんとワイナモイネンは、どある大いなる樫を伐り倒しぬ。さるに死なんずるその樫、その木の言葉を、その不思議なる警の聲を、發して言ひぬ、『汝の船の龍骨には、汝の戰船の底には、余は用立つことなからん。見よ、蟲その曲がれる住居を我が根の中に造りてあり。きのふのことなり、大鴉我が頭に止りぬ。その背は血にまみれ、その鳥冠は血にまみれ、またその頸の黑きに血固まり着き居たり』

かゝりければ年老いしワイナモイネンはその樫を後にし、數ある山樅と山松とのうちに疵無き龍骨材を探しぬ。かくてその戰船にふさはしき材を見出し、魔法の歌うたひてそを

形造りぬ。

そは様々の形を造らん魔法の言葉を彼は知りたればなりき。彼は魔力ある言葉によりて船體を造り了へつ、魔力ある言葉用ひて櫂を作り了へつ。また肋骨と龍骨とは妖魔の歌にて結びつながれぬ。されど船首を完うせんに言葉三つ、魔術の言葉三つ歌はざるを得ざりき。さるをその三言葉をワイナモイネンは知らざりき。そを知らざるが爲め彼の心はわづらひぬ。

こゝに山間に住まへる牧羊者――月百を十度見たりし老齢の牧羊者――ありき。彼に赴きてワイナモイネンは三つのその魔術の言葉に就いて尋ねぬ。

されどその老齢なる牧羊者は夢むが如くに彼に答へて曰ひぬ、『魔の歌の百語千句、汝必らずや之を燕の頭に、雁の肩に、鵠の頸に見出さん』

斯くて齢たけし雄々しのワイナモイネンはその魔語を捜らんと出て立ちぬ。飛べる燕を幾千となく殺しつ。幾千の雁を殺しつ。雪と白き幾千の鵠は彼の矢に打たれぬ。されどその頭に、その肩に、その頸に、何等の言葉の書かれたるを見ず、言葉一つの端緒すら見出さざりき。彼は思ひぬ、『歌の百語千句、余は必らずやそを夏の馴鹿の舌の下に、白き栗鼠の赤き口の裡に見出し得ん』

斯くてその魔語を求めんと進み行きぬ。屠りし馴鹿の軀(むくろ)を廣野に撒き、白き栗鼠幾千と無く幾萬と無く殺しぬ。されど馴鹿の舌の下に何等の語無く、白き栗鼠の口のうちに何等の魔語無く、その一語の端緒(はじめ)すら無かりき。

* * *

されどワイナモイネンまた思ひぬ、『百の魔語、千の歌の句、余は必らずやそを死の女王の住める處に、トゥオネラの土地に、マナラの地下の平野に見出し得ん』

彼はトゥオネラの住める處に、月無き死者の土地に、マナラの地下の平野に進み行きぬ。風より輕き歩行(あゆみ)もて其處へと旅すること三日、影の上を歩む影のごと旅すること三日なりき。

やがて彼は、死者の魂そを越え渡るべきかの神聖なる川の土手に、かの黒き川の眞黒き岸に、着きつ。死の子等に向つて叫びぬ、『トゥオニの息女等よ、汝の小舟を此方へ齎せ。マナラの子等よ、汝の小舟を此方へ齎せ、我れ此の黑河を越えんと思へば』

されど死の息女等、地獄の子等は叫びて曰ひぬ、『汝が如何にしてマナラに來たれるや、如何にして――死の住所、亡魂の領土たる――トゥオネラに達したるや、そを我等に語り

たらんには小舟をそなたへ齎さん」

ワイナモイネンは川越しに呼ばはつて曰ひぬ、『まことトゥオニが此方へ我を誘ひたるなり。まこと死の女王がトゥオネラに我を驅りたるなり』

されどトゥオネラの息女等は腹立ちぬ。カルマの處女等は怒りぬ。答へて言ひつ、『我等は人間の巧計(たくらみ)を知れり。我等は汝の口の中なる虚言を識れり。まこと汝は生きてあるに非らずや！汝を殺したる傷あらじ。汝を亡せしめたる災あらじ、汝を溺したる不幸あらじ、汝の爲めに掘られたる墓あらじ。されば生きて汝をマナラへ齎したるは誰ぞ』

ワイナモイネン之に答へて川越しに呼ばはりぬ、『まこと鐵が我を死の土地に齎したるなり、まこと鋼が我をマナラに伴なひたるなり』

トゥオネラの息女等は腹立ちぬ。カルマの處女等は怒りぬ。答へて言ひつ、『我等は人間の巧計(たくらみ)を知れり。我等は汝の口の中なる虚言を識れり。鐵が汝をトゥオネラに齎せしならんには、鋼が汝をマナラに伴なひしならんには、汝の衣服は血の滴りてあるべきに。……汝をマナラへ齎したるは誰ぞ』

ワイナモイネン重ねて川越しに呼ばはりぬ、『火が我をマナラに齎したるなり。炎が我をトゥオネラに伴なひたるなり』

トゥオネラの息女等は腹立ちぬ。カルマの處女等は怒りぬ。叫んで言ひつ、『我等は人間の巧計總てを知れり。我等は汝の口の中なる虛言を識れり。火が汝をマナラに齎せしならんには、炎が汝をトゥオネラに伴なひしならんには、汝の衣服は火に燒き盡くされてあるべきに、炎の灼熱汝の身の上にあるべきに。汝をマナラへ齎したるは誰ぞ』

ワイナモイネンなほも重ねて黑き河越しに呼ばはつて曰ひぬ、『水が我をマナラに齎したるなり。水が我をトゥオネラに伴なひたるなり』

トゥオネラの息女等は腹立ちぬ。カルマの處女等は怒りぬ。答へて言ひつ、『我等は人間の巧計總てを知れり。我等は汝の口の中なる虛言を識れり。汝の衣服より水の滴ることなければ。されば我等に僞り言ふことを止めよ、我等は汝が生きてあることを知り居れば。汝を殺したる傷あらず、汝を亡せしめたる災あらじ、汝の骨を碎きたる不幸あらざるを我等は識れり。汝をマナラへ齎したるは誰ぞ。汝をトゥオネラへ導きたるは誰ぞ』

かくてワイナモイネン川越しに呼ばはりぬ、『まこと我れ今や眞實(まこと)を語らん。余は余が技術(わざ)にて船を造りつ、魔法の歌にて戰船を自ら造りつ。歌もて余は船體を造りつ、歌もて余は龍骨を造りつ、歌もて余は櫂を造りつ。されど三つの言葉――それにて船首を其處に完うし得ん魔法の言葉三つ――我れ之を缺げり。余はその三つの言葉を見出さんとてトゥ

オネラに來たれるなり。その妖術の言葉三つを求めんとてマナラに來たれるなり。トゥオネラの子等よ、汝の小舟を此方へ齎せ。カルマの處女等よ、汝の小舟を此方へ齎せ——

斯くて死の息女等はその黒き小舟にてその黒き河を渡り來り、ワイナモイネンを彼方の岸へ、さまよふ亡魂の荒野へ、漕ぎ渡して、死者が飲む物を飲ましめ、死者が喫ふ物を食はしめぬ。ワイナモイネンは遠かりし旅に疲れたれば、身を横たへて眠りぬ。

彼は眠りて夢みぬ。されどその衣服は眠らざりき——魔力有てるその衣服は彼の爲めに見張してありき。

*
* *

さてトゥオニの息女は、鐵の指有てる死の息女は、暗きが中に水の中なる大石の上に身を置き、鐵の指もて鐵糸の網長さ一千エルなるを編みぬ。

トゥオニの子息等は、死の女王の子息等は、また該の暗きが中に該の水の中なる該の大石の上に身を置き、その鉤なす指もて、その鐵の指爪もて、また鐵糸の網長さ一千エルなるを編みぬ。

かくてワイナモイネンを罠に掛けんとて、この魔術者を絡めんとて、黄金の月が天を廻

らん間は、白銀の日が人間の世界を照らさん間は、マナラの奈落を去ること絶えて無からしめんとて、トゥオネラの領土を去ること絶えて無からしめんとて、その網を、岸より岸へ、その川に投じぬ。

されどワイナモイネンの衣服は見張りてありき、この魔術者の魔力有てる衣服は眠らざりき。かくてワイナモイネンは魔語一つ唱へ、身を小石に變じつ。その小石その黒き河に轉げ落ちぬ。

その小石鐵の蝮蛇となり、うねうねと網の目を通り抜け、河の流を横ぎりて、黒き河の彼方の土手なる黒き葦の中に入りぬ。

斯くてワイナモイネンはトゥオニの王國を去り、死の子等を後にしたりしが、かの魔語は——その一語の一部をも——見出し得ざりき。

※
※ ※

斯くてワイナモイネン心私かに思ひつ、「歌の百語千句、余は必らずやそを地の巨人の口の中に、年たけしカレワラの内臟の中に見出さん。されど途は遠し彼が在る處へ、或る時は女の針の尖の上を、また或る時は武士の劍の鋭き刃の上を、更にまた或る時は勇士の

戰斧の鋭き刃の上たあゆまざるを得ざらん』

ワイナモイネンは、鑷子の齒の痕一つ殘さず槌の打撃の跡一つ殘さで天つ大空を鍛へたりし永久の鍛工イルマリンネンの――暗黒時代の間、人間の爲めに白銀の日と黄金の月とを鍛へたりしイルマリンネンの――己が弟のイルマリンネンの鍛冶場に赴きぬ。叫んで曰ひぬ、『イルマリンネンよ、偉大なる弟よ、我に鐵の靴、鐵の手袋、鐵の上衣を鍛へよ。魔語をカレワラの胃より、彼れ地の巨人の死せる內臟より、奪ひ取らんと思へば、鋼の心ある鐵の杖を余に鍛へよ』

イルマリンネンはそれ等を鍛へつ。されど言ひぬ、『兄ワイナモイネンよ、年たけしカレワラは死んであり。彼れ地の巨人の墓は深し。言葉一つをも――言葉一つの端緒すらも――彼より得んこと叶はざらん』

されどワイナモイネンは出で立ちぬ。ワイナモイネンは針の尖と鋭き限りの鋼の劒と斧頭の刃とが撒かれたる道の上を急ぎ行きぬ。鐵の靴もてそが上を足疾く走り、鐵の手袋もてそれ等を路より捩ぢ取り、終にカレワラの休める處、彼れ地の巨　の巨大なる墓、に達しぬ。

月千を越えてなほもカレワラは地下に眠りてありしなりき。ハアパ――ポプラ――その

肩に根附きてあり、コイヴ――白樺――その顳顬より生じ、レパ――接骨木――その頬より生ひ伸び、その鬚にはパアユの皮――枝垂柳の皮――生ひ繁りてありき。オラギクウシ――陰多き樅――その額に根附き、ハヴコンカ――山松――その歯より枝を延ばし、ペタヤ――黒蝦夷松――その足より生え居たりき。

されどワイナモイネンはその肩よりハアパを、その顳顬よりコイヴを、その頬よりレパを、その鬚よりパアユの皮を、その額よりオラギクウシを、その歯よりハヴコンカを、その足よりペタヤを捥ぎ取りぬ。

ワイナモイネンはかくして彼(か)の山を裂く者の口の中へ、かの埋められたる巨人の口の中へ、その鍛へられたる鐵の杖を勢づよく突き刺しぬ。

カレワラはその幾代の眠より覺め――苦しみの呻吟もて覺め――その顎を杖の上に閉ぢしが、その齒は鋼の心を挫くこと能はず、鐵の杖を碎くこと能はざりき。かくてカレワラ己れを苦しむる者を呑まんと口を廣く開きたるに、視よ、ワイナモイネンはその開きたる喉に飛び入り、その巨大なる內臟の中に降り行きつ。かくてワイナモイネンはこの巨人の腹の中にて火を燃やし――その內臟の中にて鍛冶場を造りぬ。

カレワラは、劇しき痛みの餘り、世界の軸に凭るゝかの神を、水界のかの青き女神を、

氷の曠野の諸神を、森の精靈を、その生るゝ時眞鍮の山々その爲めに震ひ湖水はその爲めに小山となりしかのユマラ大神をも、呼ばはりて助を求めぬ。されど其等の神々は來りて救はんとはせざりき。

カレワラは己れを苦しむる者を魔法の千の呪詛もて――風と嵐と火との呪詛もて――人間の顏を石に變ずる呪咀もて――咀はれたる者をば、馬の蹄の音きこゆること無く、牝馬の子等牧草を見出し得ざる、ラポニアの大沙漠に移す呪咀もて――咀ひぬ。されどその呪咀はワイナモイネンを害ねざりき。呪咀はただワイナモイネンの唇より嘲の笑を呼出すのみなりき。

ワイナモイネン、カレワラに叫んで云ひぬ、『汝ルーンの偉大なる歌ひ手よ、余が望むかの魔術の言葉三つを――世界到る處に求めて徒らなりしかの魔法の言葉三つを――汝より知り得んまで、余は此處を去らざるべし。カレワラよ、汝の歌を、汝の怪しき極みなる歌を、汝の不可思議なる魔術の歌を、我に歌へ』

斯くて崇高限りなき智慧の所有者、不可思議なるルーンの歌ひ手、巨大のカレワラはその口を開きて、ワイナモイネンの爲めにその歌を――その怪しき極みなる歌を、その妖術の歌を――歌ひぬ。

語は語に續き、句は句に續き、魔力あるルーンは魔力あるルーンに續きつ。カレワラは己が知れる總てを歌ひ終はらざるに、己が學びたりし總てを唱へ終はらざるに、山々は失せなんとし、川々の水は乾かんとし、大いなる湖はその魚族を絶やさんとし、海は浪をつくるその力を忘れんとするにてありき。

絶ゆる間無く彼は幾日か歌ひ、絶ゆる間無く彼は寢ねざる幾夜か歌ひぬ。彼は妖術の歌を、魔力の歌を、物を造り物を滅ぼす歌を、歌ひぬ。

彼は智慧の歌を、世界の始まらざる前に神々が歌ひしルーンを、之を唱ふるに因りて無有變じて物質と成り暗黑變じて光明となりし詩句を歌ひぬ。

彼れ歌ふ時、美はしの太陽は彼を聞かんとて其行路に立留り、金色の月は聽かんとて其行路に立留り、恐ろしの海の大濤は靜止し、松を呑み樅を吸ふ氷の川は荒るゝを歇み、偉大なる瀧はその奈落の上に動かず懸かり、ユォルタナの浪は聽かんとて其頭を高く擡げぬ。

かくてツイナモイネンは終にその求めし三つの言葉を、魔法の言葉三つを聞きたれば、カレワラを苦しむることを止めて彼より出で去りぬ。さればカレワラは再びその永久の眠に沈み、彼を愛する地は再び彼を蔽ひ、森は彼の眠の場所の上に節多き根株のその網を再び編みぬ。……

最初の樂師

芬蘭土の古きルーンに、『カレワラ』のルーンに、世界が玉子の卵黄より、天空がその玉子の殻より創造されしこと、また鐵の起原、銅の出生、音樂の本源のこと語られてあり。……さて最初の樂師はワイナモイネンにほかならざりき。絃三つ有てりし最初のカンテレは、ルーン第二十二篇に物語られてあるが如くに、響好き樅の村より、また巨大なる鮫の歯より、彼が造りしなりき。その樅よりしてそのカンテレの胴造られ、その鮫の歯よりしてその螺旋造られ、その絃は魔術者ヒイシの駿馬の黒き鬣より――狼と熊との牧者ヒイシの牝馬の嘶く鬣より――つくられしなりき。……

……斯くて樂器は成り、カンテレは造り了へられ、年老いし雄々しのワイナモイネンは年老いし人等に之を彈ぜしめ、また古昔のルーンを歌はしめぬ。人々は歌ひしが、力弱げなること山の荒野を吹く風の如くなりき。またその聲は冷たく

打震ひ、樂器は彼等の弱き指の觸るゝに逆らひぬ。

年老いし雄々しのワイナモイネンは年若き人達に命じて歌はしめぬ。されど彼等の指は絃の上にいぢけ、出て來る音は悲しげに、樂器はその觸るゝに逆らひぬ。喜、喜に應へず、歌、歌に答へざりき。

されば年老いし雄々しのワイナモイネンは氷の曠野に住む妖術遣の人等に、ポーヨラの人等に、ポーヨラの魔法遣の女に、そのカンテレを送りぬ。

その魔法遣の女は歌ひぬ、魔法遣の處女（をとめ）等も歌ひぬ　また妖術遣の人等も、その妖術遣の人等の子等も歌ひぬ。されど喜、喜に應へず、歌、歌に答へざりき。カンテレは彼等の指觸るれば打叫び、夜の暗きに太く恐れ怖れて、眼に見ぬ人手を己が身に感ずる者の如くに打叫びぬ。

冬を見ること二百に餘りし老齡なる或る男――そのカンテレの叫の爲めに、爐の壁龕にての眠より覺まされし年老いし或る男――口を開いて言ひぬ、『止めよ止めよ。汝等が發する聲は我が頭腦を惱まし、汝等が成す音は我が骨の中なる髓を冷かならしむ。その樂器を水に投ぜよ、さらずば直ちにそを造りたる人に返せ』

その時カンテレの絃よりして美はしき音ひびき出て、その音自づと言葉となりて、カン

テレは己が聲もて答へて言ひぬ、『我を深淵に投ずること勿れ。我を造りし人に還せ。我を造りし人の手にあらば余は喜の音を與へん、余は調妙なる美はしき音を發せん』

斯くて人々はそを造りたりしワイナモイネンの許にそのカンテレを持ち行きぬ。

年老いし雄々しのワイナモイネンはその拇指を洗ひつ、その小指を淨めつ、黃金が丘の巓なる白銀の小丘なる歡の石の上に海近く身を置きつ、双手にその樂器を取りて聲を高めて言ひぬ、『ルーンの激しき歡を、樂器の美はしの音を、音樂の音を耳にしたること無き者、此方へ來りて聽けや』

斯くて年老いしワイナモイネンは歌ひ始めぬ。其の聲、流るゝ水の聲のごと澄み、深く且つ滑らに、強く且つ美しかりき。

その指は輕やかにカンテレの絃の上を亙りぬ。カンテレは應へて歌ひぬ——妙に歌ひぬ、奇しく歌ひぬ、一千の鳥の喉の如く戰き震へて歌ひぬ、その歡は歌ふ者の歡に答へ、その歌はワイナモイネンの歌に應へぬ。

森の中なる生きとし生ける物、空の中なる生きとし生ける物、彼の聲の優しさを聞かんと、彼の歌の美はしさを味はゝんと、ルーンのこの歌者に近づき、この偉大なる吟者のあたりに集まりぬ。

灰色の狼は廣大なる沼地なるその潛み家より出で來り。熊は樅の根元なるその住み家を去り、巨大なる松のうつろの中より現はれ、その途中なる生垣に攀ぢ上ぼり、そが前なる障碍を倒しぬ。ワイナモイネン此の世に歡を呼び招ける間、ワイナモイネンその奇しき歌を歌へる間、狼は高地に上ぼり、熊は樹木に上ぼりぬ。

森の主も亦、鬚黑きかの老人も――喜に充てる林の王ニッパナも來りぬ。野獸の神タピオの從者總ても、聞かんとて出で來りて姿を現じぬ。森の王の妻、猛獸の女神、タピオラの女主すらも、その紅の衣をまとひ、その空色の靴下を穿ち、この神の歌に耳藉さんとてうつろなる樅に上ぼりぬ。

林なる獸すべて、空なる鳥すべて、此の樂師の不思議の術を聞かんと急ぎ、彼が歌の美はしさを味はゝんと歩みを早めぬ。

鷲は雲より下り。鷹は風を切り。白き鷗は遠き海沼より立ち、鵠は流るゝ川水の清き淵より現はれ、飛ぶ迅き告天子、飛ぶ速き鶸、愛らしき紅雀、この神の肩に止まらんとて來りぬ。

空なる晴れ輝ける處女たる日は――その光彩に富める日は、美しく輝く月は、共にその歩みを停めぬ。前なるは輝く天つ圓天井に、後なるは長き雲の端に、在りたるなりき。二

人は其處にて黃金の梭もて織り、白銀の櫛もて梳きて、妙なる光の織物を織りてありき。俄かに彼等は、聞きしこと無き歌の聲音を――このルーンの歌者の強くまた美はしき聲を――耳にしつ。黃金の梭はその手を逸し、白銀の梳櫛はその手より辷りて、その織物の絲は切れたりき。

水に棲む獸すべて　深きに棲む百千の鰭もてる魚すべて、ワイナモイネンの聲きかんとて來り、その歌の美はしさを味はゝんとて來りぬ。

鮭と鱒と速かに來りぬ、鰤も小鮫も亦。大いなる魚すべて小さなる魚すべて岸近く泳ぎ來り、能はんかぎり近く居留まりて、聽かんとてその頭を擡げぬ。

また水界の王者アートは――大洋のごと年老い、水草を鬚とせるアートは――その巨大なる睡蓮に乘りて浪の上に現はれぬ。

海神の產むこと多きかの妻は黃金の櫛もてその髮を梳りてありしが、この歌者の聲を耳にしぬ。櫛はその手より落ち、喜の戰慄その心を捉へ、希望の苦しみ聽けやと襲ひしかば、緣の奈落より立出てて岸に近づきぬ。其處にて、其胸を岩に凭せて、ワイナモイネンの聲に交じるカンテレの響に耳を傾けぬ、――その響何んぞ優しき、その歌何んぞ美はしき！

總ての勇士泣きぬ。心かたくなる限りのもの和らげられぬ。絕えて泣きたること無き

者總ての中にて此の時泣かざりしものはあらざりき。

年若き者泣きぬ。年老いし者泣きぬ。强き者泣きぬ。處女泣きぬ。小さき幼兒泣きぬ。

ワイナモイネンすらまた己が涙の泉が湧き出てて溢るゝ心地しぬ。

やがてその涙、小山なる野苺の實に、燕の頭に、鳥の卵に、數勝さりて落ちそめぬ。

涙はその頰の上を流れぬ。頰よりして膝に落ち、膝よりして足に滴り、足よりして地に轉びぬ。

その涙の滴、その毛織の外套六つに、その黃金の帶六つに、その靑き上衣七つに、厚く織られたるその下着八つに、滲み通ほりぬ。

かくてワイナモイネンの涙は川のごと流れ、川となり、海の岸に流れ出て、岸よりして逆さまに奈落の底に落ち入りて黑砂の地に到りつきぬ。

涙は其處にて花と艶づき育ちて、眞珠と——王者の冠に、優れし勇士の永久なる歡に身の末定まれる眞珠と——其處にて形を改めぬ。

※

※ ※

その時年老いしワイナモイネン叫んで曰ひぬ、『若き者共よ、世に名聞こえたる種族の

息女共よ、汝等のうちにて、行いて大洋の底より、黒砂の地より、我が涙を拾はんと欲するものは一人も無きか』

されど年若き者も年老いし者も答へて曰ひぬ、『我等のうちにて、行いて大洋の底より、黒砂の地より、汝の涙を拾はんと欲するもの一人とて無し』

その時一羽の鷗あり、青き翼もてる鷗ありて、その嘴を冷たき浪に浸しぬ。その鳥、大洋の底より、黒砂の地より、ワイナモイネンの眞珠を拾ひぬ、ワイナモイネンの涙を拾ひぬ。

ワイナモイネンの治癒

……血管の女神は――仁慈なる血管の女神、スオネタル女神は――麗はしき極みかな。その奇しき紡錘（つむ）もて、その眞鍮の絲取り棒もて、その鐵の絲取り車もて、人間の血管を不可思議に紡ぎますよ。……

惡なるヒイシの奸智の爲め、狼と熊との牧者たるレムポの惡意の爲め、己が斧にて傷づきたるワイナモイネンの膝よりして血は、山の流れの跳ぶが如くに、瀧つ瀬の走るが如くに、流れ出でぬ。

年老いし雄々しのワイナモイネンはあらゆる智慧を、永久（とことは）なるあらゆる言語を、あらゆる魔術の言葉を知り居たりしが、傷を醫さん魔力ある言葉は知らざりき。彼は魔術に助を求めぬ、嚴かなる呪詛を唱へぬ、心して原始の言葉を讀みぬ、方術のルーンを誦しぬ。

されど彼はその最も偉大なる言葉を――動悸打つ早瀬が停められ、血の流が抑へられ、

鐵が破りし場處を横ぎり、鋼の青齒が咬みし傷を横ぎりて、潰ゆる事なき堤が投ぜらるゝ魅力もてる言葉、血の言葉を忘れたりしなりけり。

血は此の勇士の傷より、ワイナモイネンの膝より、滾々として迸ることを止まざりき。

＊
＊　＊

年老いし雄々しのワイナモイネンはその鳶色なる橇にその馬を繫ぎ着け、座席に上ぼり、その駿馬を打ち、眞珠もて飾れるその大なる鞭をパチと鳴らしぬ。

馬はその鳶色なる橇を曳いて長き道をば矢の如くに飛び走りぬ。ワイナモイネン馬を驅ること風の如く速かなりければ、やがて魔法遣の住所の第一のものたる、妖術者の家に近づきぬ。彼は敷居際に停まり叫びぬ、『此の住居に鐵の知識に長けたる者——血の此河に堤を横たへ得んもの、血の此の瀧つ瀨を抑へ留め得ん者誰かある』

子供一人、小さき子供一人、床の眞中に坐してありぬ。その子供答へて曰ひぬ、『鐵の知識に長けたる者此處に一人とて無し、——その呼吸もて木のうちみすら和らげ宥め得んもの、また勇士の痛みを緩め安らげ得んもの、一人とて無し。……他の住所に赴け』

年老いし雄々しのワイナモイネンは眞珠もて飾れるその大なる鞭をば足迅きその駿馬の

脇腹に嘯かしめぬ。その進むこと稻妻の如く速かなりければ、やがて中なる家に到り着きぬ。ワイナモイネン敷居際に停まり聲高に叫びぬ、『此の住居に鐵の知識に長けたる者――血の此河に堤を横たへ得んもの、血の此の瀧つ瀬を抑へ留め得ん者誰かある』

爐の横なる凹み床の遙かに遠き端のうちに、何事か口說き口走りつゝ、毛布の下に身を横にして年老いし女――齒はただ三つ有てる年老いし女――この國にての最も賢き女――在りぬ。その女立ち上り、戶に近づき、答を爲して曰ひぬ、『勇士の不幸を解し、その苦痛を安らげ、血管の川と流るゝを、血の雨と落つるを、血の瀧つ瀬と走るを、止めんほどの智慧あるもの此處に一人とて無し。行いて他の住所にかゝる人を求めよ』

年老いし雄々しのワイナモイネンは眞珠もて飾れるその大なる鞭をば足速きその駿馬の脇腹に嘯かしめぬ。最も高き住家に通ずる長き道を電の如くに辿りぬ。敷居際に馬を下り、柱に凭れて聲高く叫びぬ、『此の住居に鐵の知識に長けたる者――血の此河に堤を横たへ、血の此の瀧つ瀬を抑へ留むる者誰かある』

年老いし男その大なる爐の內に住みぬ。その聲その赫く空所の凹み床よりして轟きつ、『創造者の三つの言葉にて、神聖なる言葉たる原始の言葉を唱へて、我等はなほも大いなるものを抑へ留めたることあり、なほも迅きものを搦め縛りたることあり、なほも大いな

る危險を打ち負かしたることあり、なほも難き障碍を打ち倒したる事あり。その三つの言葉にて、川の出口に、湖の進路に、瀧の狂暴に打勝ちたることあり。海角を斷ちて海峽を通じたることあり、地峽と地峽とを合はせたることあり』

年老いしワイナモイネンはその橇より下り、その老人の家に入りぬ。白銀の盃一つ彼に齎され、また黃金の盃一つ齎されぬ。されどそはワイナモイネンの血の、此の尊き神の血の、極めて僅かなる量をも容るゝこと能はざりき。

老人は爐の凹み床よりして哮りぬ、――その長き鬚は叫びぬ、『汝は如何やうなる人ぞ。如何なる勇士ぞ、汝の膝より流るゝ血もて早、盃七つ、大いなる器(うつは)八つ、充たされぬ。嗚呼、他の魔法の言葉を――威力ある血の言葉を――我れ唱へ得んには!されど惘れや、余は鐵の根源を忘れたるよ』

その時年老いしワイナモイネンは曰ひぬ、『余は鐵の根源を知れり、余は鋼の生誕を知れり。その根源同じき子三人ありき。水、これその長兄なり。鐵、これその末弟なり。火、これその中(なか)なるものなり。さるを火はやがてその怒を現はし、炎傲りがに自づと上ぼりて、驕慢にいよいよその大を增しぬ。その不毛の大凶年に、消えざる火もて自然の生物すべてを蕩盡したるその致命の夏に、田畠は燃え盡き、沼澤は燒け焦げぬ。かくて鐵は避難所を、

隠るべき場所を、求めぬ』……

老人は爐の凹み床よりして哮りぬ、『いづこに鐵は身を潜めしぞ。その荒蕪の大凶年に、自然の生物すべてを蕩盡したるその致命の夏に、鐵はいづこに隠れ場を見出したるぞ』

年老いしワイナモイネンは、雄々しのワイナモイネンは、答へぬ、『鐵は身を潜めぬ。鐵は或る長き横雲の端に、枝を剝がれし或る樫の木の木末に、或る年若き娘の蒼める胸に、その隠れ場を見出しぬ。……處女三人、夫の定り居たる少女三人あり、その胸の乳を地上に垂らしぬ。初なる少女の乳は黒かりき。次なるが乳は白かりき。末なるが乳は赤かりき。乳の黒かりし處女よりして鍛鐵生れ出て、乳の白かりし者よりして鑄鐵生れ出て、赤き乳なりし者よりして鋼鐵生れ出てぬ。……其後二年の間鐵は或る廣大なる沼の眞中に、白き鵠がその卵を産み、鴨がその小さきものを孵す或る岩の巓に、身を潜めてありぬ。狼はその沼を走り過ぎ、熊はその不毛の曠野に走り入り、其にその鐵を隠せる地を掻き上げぬ。然るに或る神ありて、その荒蕪の地を横ぎり、狼が掻き上げ、熊が脚下に踏みたるその黒き砂を見たりき。……斯くてその日その鐵はその沼より取出され、地の土を滌はれ、乾かして水の濕潤を淨められぬ』

老人は爐の凹み床よりして哮りぬ、『そが鐵の根源なりしか。そが鋼の生誕なりしか』

されど雄々しのワイナモイネン答へぬ、『いな。鐵の根源は我れ未だ語らじ。火を食はずしては鐵は生れざらめば、水無くしては硬くならざらめば。鐵はかの大鍛工の工場へ、イルマリンネンの鍛冶場へ、撥ばれぬ。この偉大なる工匠は、この永久の鍛工は、鐵に向つて言ひぬ、「我れ若し汝を我が火の裡に置かば、我れ若し汝を我が鍛冶火の炎の中に置かば、汝は傲慢とならん、汝は強力とならん、汝は汝の母の子を殺さん」……鍛冶火の裡なる鐵は、槌の打擊の下に、斯く誓ひぬ、「我には裂かん樹あり、嚙まん石の胸あり。我が兄弟を害ふこと必らず無からん、我が母の子を殺すこと必らず無からん」……斯くてイルマリンネンはその鐵をば爐の胸の裡にて軟らげ、鐵床（かなしき）の上にて形を與へぬ。されどそを水に浸さんに先だちて、鋼創造の體液を、鐵に硬度を與ふる水液を、その舌もて試み、その口もて味はひぬ。叫んて言ひぬ、「此水は鋼を創造せん力無し、鐵を硬くせん力無し。ヒイシの鳥メヒライネンよ。鳴呼、我が鳥の友ヘルリハイネンよ。汝の素速き翼に乘りて此處へ飛び來よ。沼の上を、陸の上を、漫々たる海の上を飛び來よ。蜜を汝が羽の上に我に齎せ。草七莖の、花六蕋の、蜜を汝が舌の上に我に運べ、鋼を造らんと思へば、鐵を硬くせんと望めば」……然るに惡なるヒイシの惡鳥ヘルリハイネンは血の毒を、その蜥蜴眼が見たりし或る蛆蟲の黑き液汁を、蝦蟇の祕かの毒を、齎し、そを造らるべき鋼の爲めに、

鍛へらるべき鐵の爲めに、イルマリンネンに與へぬ。されば忽ちにして鐵は忿恚に打震ひ、怒り唸り、動き歩み、己が誓を忘れぬ。犬の如くに己が爲しゝ誓を呑みて、その兄弟を害ひ、その母の子を殺しぬ。今も猶ほ鐵は肉に突き入り、人間の膝を咬み、血が流れに流れて巨大なる早瀨と流れ溢るゝ許りに荒れ狂ふなり』

老人は爐の凹み床よりして哮りぬ、『今にして我れ鐵の根源を、鋼の不吉なる宿命を、知れり』斯くて彼の記憶に原始の言葉、偉大なる血の言葉、還り來りぬ。彼は魔力ある呪詛もて鐵を詛ひ、愛撫の言葉もてその走り流るゝ血の恐慌を鎭めぬ。斯くて鐵の痛みは歇み、赤き早瀨は流れずなりぬ。

やがて老人は血管の端々を指に持ち、そを數へて、魔法の祈禱(いのり)を唱へぬ、——

血管の女神は——仁慈なる血管の女神スオネタルは——麗はしき極みかな。その美しき紡錘(つむ)もて、その眞鍮の絲取り棒もて、その鐵の絲取り車もて、人間の血管を不可思議に紡ぎますよ。……

……來給へ、血管の女神！我に來給へや！我れ汝の助を禱り、汝の名を呼ぶ。……赤き肉の一卷(ひとまき)、血管の青き一桛(ひとつせ)、汝の胸に此方へ持ち來り給へ、此の傷が充たされんやう、此の血管の端々を結ばんやう！……

斯くて忽ちにしてワイナモイネンの傷は癒えぬ。肉は前に優して固くなりぬ、斷たれし血管は再び結ばれ、斷たれし筋は再び繋がれ、損はれし骨は再び合はされぬ。

＊
＊　＊

爐の凹み床なる老人が言ひまた行ひし他の多くの不思議なる事、かの古きカレワラのルーン第四篇に歌はれてあり。



回々教國物語

鳩ブーチマル

……人の知る海の彼方に、生命ある者の知らざるかの冥晦洋の海唸る。其處にては岸打つ長き大浪、他し海洋の聲音とは異れる調にて、永久の讃美歌を吟ず。またその大洋には島一つあり、その島には青春の泉神祕なる洞穴より湧き出で滾々として息む時無し。かの二角のアレキサンダー王が求めて得ざりしは此の泉なり。氏の將、豫言者カデルのみ之を發見し、それによりて不死の身となりき。國語の鍛工ホッサイン・ベン・アリ、又の名エル・ヴェズ・ウル・カシフイがヘヂラ後九百年に物せし波斯譚に據れば、他の生命ある者のうちにて、ただソロモンのみその泉の水を視たりと云ふ。そは『天蓋の光明』を意味する『アンヴリ・ソヘイリ』の中にあり。……

慈悲極り無き大神の御名を讃へて！……あらゆる鬼神妖魔人間地上の獸類空中の禽鳥洋海の生物いづれも爲めにその心の腰に服從の帶を卷き、その權力は『朝のその道程、この世なる駿馬の最も足迅きものにての一箇月の行程にて、夕のその道程また一箇月の行程に當たる』ゼファルの馬の蹄にてのみ計るべかりし、王の中にても他に匹儔無かりし王、ソロモンの此の傳說を余は聞きぬ。

……さてソロモン、今猶ほその名を保てる、山の中にても最も大いなる山――同時にイランの平原と印度の諸王國とが見渡さるゝ山――の巓にて嘗て王座に卽きたるに、宇宙の生物悉く彼に敬意を表せんとて集まり來りぬ。天なる鳥彼の頭上に生ける天蓋を造り、空なる精靈來たつて彼に仕へぬ。やがて地より立騰る霧の如くに、一團の香雲自づと彼の前に生じぬ。その雲よりして、寶玉なす光きらめく稀代の水を盛りし金剛石の盃を捧げて、月光よりも美はしき手一つ延び出で、樂の音よりも妙なる聲その雲よりきこえぬ、『ソロモンよ、萬物の創造者は――彼の本性永久へに讃へられ、彼の威力永久へに敬はれんことを！――終無き青春と生命との水を容れたる此盃を余に持たしめて汝に送りたり。青春の泉より汲み來し此一盃の水、之を飲まんと欲するか欲せざるか、自由に汝の撰ぶを望み給ふ。ソロモンよ、されば能く思へよ。之を飲みて、とことはに幾代重ねて神のごと不滅に

生きんと欲するか、依然として人性の桎梏の裡に止まらんと欲するか。……余は待たん」

深き沈默其處の上を蔽ひぬ。ソロモンその言の葉を夢心地に思ひ考へ、かの香雲縣かりて搖れず、かの白き手はその寶石の盃を捧げて動かざりければなり。斯くて夢心地に思ひ惱みて獨り心に言ひぬ、『實にや生命(いのち)の黄金は復活の大市場に於て物多く購はんに好(よ)し。生命の野原は永久の慶福の香木を植ゑんに豐饒なる土壤なり。暗黑なる死の安靜は樂しからじ。……されど飲まんと心定むるに先だち、鬼神と、妖魔と、人間の最も賢しき者と、地走る獸類と、空飛ぶ禽鳥とに諮らざるを得ず」

猶ほも月と白きかの手は燦めく盃を捧げてあり、かの香雲は變はること無かりき。斯くて鬼神、妖魔、人間の最も賢しき者、地上の獸類、空中の禽鳥、すべて同意の一(ひと)聲もて語りて、世界の福祉は彼の生ける智慧に賴り、あらゆる生物の幸福は黄金の指環の枠輪の中に嵌められし寶石の如くに、彼の生命の環に支へらるゝことなれば、その水を飲まんことを、と彼に乞ひ祈りぬ。

さればソロモンはその手を延ばし、光に輝くかの手よりその盃を取りたれば、その手は再び香雲の中に退きぬ。水の中なる光は不思議なるものなりき。盃のあたりには、日は決して東方より昇ること無く夜もあらず晝もあらざる、陰晦の洋の彼方なるかの島々に見る

永遠の黎明の如き、薔薇色のほの光り絶え間無く立ちこめてありぬ。されど飲むが前に更に再びためらひつゝ、彼は宇宙の生物に尋ねて言ひぬ、『汝等奉仕する鬼神妖魔どもよ、汝等賢き人間のうちにても最も賢き者共よ、また汝等空中並びに地上の生物どもよ、この會集のうちに余が支配するなる總ての物の代表者の一人にても缺けたるあらば言へよ』

彼等答へぬ、『君よ、生ける者總てのうちにて最も愛らしき、野鳩のブウチマル——ブウチマルのみ此處に在らじ』

斯くてソロモンはフドフド——妖術者のうちにても殊に優れし妖術者、セバの女王、バルキスの魔術にて造られたる、黄金の鳥、フドフド——を遣はしてその野鳩を探させしが、その金色の鳥は、生ける者總てのうちにて最も愛らしき、野鳩のブウチマルを伴なひ歸りぬ。ソロモンがその嘗て認めたりし歌の言葉を繰返したるは此の時なりき、『巖の絶壁に、人知らぬ石階の隱れ場に棲む我が鳩よ。我に汝が顔を見せしめ、我に汝が聲を聞かしめよ。……汝が主ソロモンが青春の水を飲みて、此世にて不死不滅なるべき至福を知らんはふさはしきか』

その野鳩は、生きとし生ける者のうちただソロモンのみが知れる鳥の言葉にて語りて、この豫言者王に問ひて言ひぬ、『空なる一鳥いかてか智慧の本源に答へん。斯くもか弱き

心いかでか至上なる思慮に忠言し得ん。さりながら、若し言はざるを得じとならば、ソロモンよ、此の香ぐはしの精靈が此處に齎したる生命の水は汝のみにか、或は汝の心がそを領かち取らしめんと思はん總ての者にか、我をしてそを問はしめ給へ』

然るにソロモンは答へぬ、『そは我れのみに送られたるなり、またこの盃の中には他の如何なる者にも與へんほどのものあらじ』

ブウチマルは鳥の言葉にて答へぬ、『神の豫言者よ。汝の朋友と汝の忠告者と汝の子供と汝の婢僕と汝を愛する總ての者とがいづれも死者の數に入らんに、いかでか汝一人生きて在らんことを望み得べき。汝は生命の水を飮まんとも、此等の者は總て必らずや死の苦き水を飮まざるを得ざればなり。世界の顏すら時代と共に皺み、星の眼もアズラエルの黑き指もて閉ざされんに、何とて永久への青春を欲する？汝が歌ひたる戀が乳香の煙のごと消え失せたらん時、汝の心臟に逆ひ打ちたる心臟塵土に歸して天なる四風に吹き散らされて久しきを經たらん時、汝の來るを喜び待ちし眼が憶出となりたらん時、汝の耳に快かりし聲音が永久へに靜まりたらん時、汝の生命が遍き死の荒野の一オアシスとなり、汝の永久の生存はただ永久の死滅を識るのたづきとならん時――野鳩はその配偶者が來たらざる時は死ぬなるを――汝は生きてあらんことを欲するにや』

ソロモン、答ふること無く、黙してその腕を延べかの盃を還したるに、かの白き手出て來りてそを取り、香雲の中に退き、香雲は解けてとこしへに消え散じぬ。されどこの豫言者王の、金粉撒き布かれたる、ゆたかなる鬚の上に、淸き露の如き更なる光見られぬ——その金剛石なす露なりき、涙なりき。

盜人の子

こは、ヘヂラ後六百五十六年に、言葉の魔術者、シラズのシエイク・モスリン・エディン・サディが設け、天國の八大門に應じて八區に排置したる、グリスタンの薔薇園より摘みし一萼なり。……下界なる最も高き神の影、ソロモンの副攝政、莊厳限り無き、王の王、アブーベクエル・ベン・サッドの御世なり……慈悲極り無き大神の御名を讃へて。

……その頃その國の山地に住み鷲の巣の上に砦を構へし盜人あり、如何なる軍勢もそを擊ち了ほすこと能はざりき。いづれも山に生れたるものにて財物滅盡の火を崇むる者共なりしかば、その名は恐怖に國人の心膽を寒からしめ、隊商の道を塞ぎ、谿谷を荒らし、その力とその猛々しさに國王の軍隊をも打負かしぬ。されば山地諸州の太守ども相諮りて、近寄り難きその山住居より盜人共を誘き出し、斯くてそを全滅せん、巧妙なる策略を案出しぬ。

されば或る日のこと、盗人共或る隊商の後を追ひ行ける間に、國王の最も勇敢なる軍隊山の陜路に隱れ潛み、その一團が澤なる掠奪品と贖身の金得べき捕虜とを携て歸り來るをば、聲も立てて靜かに待ち居たりき。斯くて盗人共、用心深き者には最大の敵たるそれをば睡と呼べるに壓迫されつゝ夜歸り來たれる時、波斯の軍兵彼等を襲ひ、彼等を打ち、彼等の双腕を背後に括り、彼等を野羊の群のごと城市へ驅りぬ。かくて彼等は國王の面前へ齎されぬ。

國王はその諸州の太守等の智略を稱へて言ひぬ、「汝等詭計を用ゐて彼等に打克たざりしならんには、盗人共の力、盗んで罰無き日の重なるに從ひ、漸くに增して、終には彼等を滅ぼさんこと我等の力の及ばざる處となりしなるべし。泉は小さき盞もてその口を閉ぎ得ん。されど長く流れ進みて河と膨めば、象の背に乘るともその流を横ぎること叶はざらん。……盗人は我等が法律にては死刑に處せらるゝことなれば、この囚人は餘すところ無く直ちに死刑に處すべし」

然るにこの盗人共のうちに、若き棕櫚のごと姿うるはしく嫋かなる若者ありき。その妙齢の果實はなほ未た熟せず、その双頰の薔薇園の翠絲はやうやく莟みそめたるばかりなりき。かくてその男の子の美はしきが故に、心やさしきさる大臣その白髯を王座の玉階の前

に屈め、王の脚臺に口づけし、執成の言葉もて乞ひ願ひぬ、『高き極みなる神の地上の影よ、時の輪の軸よ、此の世の主よ、奴僕の祈願に耳を藉し給へ。……此の子未だ生の果實を味はひたること無く、青春の花の美しきを賞でたること無し。……諸王の上主よ、汝の普遍の大度と無限の仁慈とに賴り、此の子の生命を助けて、汝の奴僕に感恩の更なる義務を負はしめ給はんことを汝の奴僕は乞ひ願ふなり』……

王の胸は情深くはありしかど、その心はまた金剛石の稜角の如く鋭く且つ淸かりき。述ぶるところ彼には賢からず思はれ、さればまた彼には心よからざりしかば、彼は眉を顰めぬ、『大臣よ、その根源惡しき者共の心には、善の力何等の感銘をも與へ得ざる事を、汝知らずや。空の雨、如何に肥沃の力に富むとも、柳は實を結ばずと云ふ事あるを汝聞かざるか。火を消して、炭の餘燼を燃えし儘に殘すべきか。育ち終へたる蝮蛇のみ殺して、その子なるを生かし置くべきか。此等の者共、根も枝も、族類も名も、全く絕滅せんが可なり』……

されどその年老いし大臣は、恭しく頭を垂れ、王の言葉の賢きを正しく稱へつゝも、賢者の金言と豫言者の傳說とより異例と譬話とを求めて、重ねて王に乞ひ願ひぬ、『ソロモンの後繼の言葉は汝の奴僕には至高の智慧なり。此の子固より邪なる者に育てられなば、

必らずや邪なるものとならん。されど汝の奴僕は信ず、若しそを教育せんもの、人間の最善なる者のみならば、極めて有徳なる者となり得ん。此の子の情を飾り、その心の花園に花咲かしめんに要するもの、汝の奴僕は毫も惜しむことあらざらん。豫言者の傳説に曰く、「その父母後ち猶太人となし基督教徒となし或は拜火教徒となさんとも、女より生れ出てし子にて本來回々教と生れ來たらざるもの一人もあらじ」……メッカの尊き七睡眠者に従ひて身を護りしかの犬キトミルすら、齒もてその淨き衣の縁を摑みしが爲めに、天國に入るを得たりき』……

かくて他の多くの大臣、諸州の太守、その男の子の美はしさに愚かにも惑はされて、かの大臣と結んで言葉強く執成しぬ。王の顔は動かず、陰影なほその上に在りしが、王は答へて曰ひぬ、『余は汝等の情の弱きが故を以て此男の子を赦さん。されど何等の利あるを認めず。大臣よ、天よりの慈雨は欝金香の華麗に光を與へ、また蛇草の毒液に力を與ふることを忘るゝ勿れ。下劣極り無き敵と雖も輕んずべきにあらず、淺くして今は魚の棲むに堪へざる流れも、太りて荷と共に駱駝を流さんことあるを能く記憶せよ』……

されどその大臣は、悦に打泣き、その男の子を連れ歸り、衣着せ物食ましめ、己が子の如くまた王侯の子の如くに育てぬ。言葉の知識にまた儀禮の知識にまた武藝の知識に長け

しめんとて——弓を射、劍を用ひ、馬を御する技術(わざ)に、歌を歌ひ調(しらべ)能く物言はん術に、とりわきて恭敬と眞實に、また此世なる王の王に仕ふるに契ましき尊き德性に、長けしめんとて、多くの教師を彼に傅ひぬ。その子强くまた美しく生ひたちたれば、あらゆる人の眼がその子の動く方に從ふこと、恰も浪が月を仰がんとて總てその頭を轉ずるがごとくなりき。唯王のみ然らざりしが、彼を見て微笑まざるものはなかりき。されど王のみは彼がその前に立つ時面を顰め、この若者に就いて人々が述ぶる讃辭に一顧をも拂はざりき。或る日大臣はその身の幸に心傲(ほこ)らひて王に曰ひぬ、『見給へ、汝の奴僕の業(わざ)に依りてかの男の子はその親々の辿りし道を改めたり。その心の泉は賢き教師共の爲めに開かれ、その情(こころ)の花園は有德なる欲望の花を咲かせぬ』

　されど王はその鬚にて打笑ふのみにて、斯く言ひぬ、『大臣よ、狼の子は、假令人の子等と共に育てんとも、なほ狼たらん』

*
* *

……二た冬の時日、王の言葉の記憶を微かならしめし頃なりき、かの年若き男、獨り馬に跨りて出て行き、山賊の一隊に遭ひ、其情(こころ)彼等の方(かた)に動きたるを覺えぬ。彼等また、男

の子の眼の太く猛々しきと、その鼻孔の鷲の嘴と曲れると、その血管に稻妻爲せる猛々しき血しほの痕跡とに己が種族なるを知りて、彼の親々の山言葉にて彼に語りぬ。峰に叫ぶ風の聲、躍り跳ぶ水の狂暴、鷲がその子を孵す雲の上なる眠り場、人知らぬ洞穴の秘密、風に搖らめく炎の祭壇、の慕はしさに、その親々の狂暴なる本性彼に還り來りぬ。……されば彼は彼等と約を結びつ、逆心を胸に歸り來りて、かの年長けし大臣をその子等と共に殺し、王宮の物を盜み奪ひ、山に逃れ、かくてその父が住みたりし古昔の砦に遯れて、匪徒の首領となりぬ。人々此の物語を王に語りぬ。

その時王は更に驚ける樣なく、いたく笑ひて言ひぬ、『汝等賢き愚者よ、いかで善き刀が惡るき鐵より鍛へらるべき。いかで敎育が邪なる者の情を改め得べき。薔薇を養ひ育つるその雨がまた、鹽氣ある沼に生ふる用無き雜木を養ひ育てずや。いかで鹽氣ある荒野が甘松を生ずべき。げにや、惡人に善を行ふは善人に惡を行ふに劣らず咎むべきなれ』

『アヅラ』デミル言ひき、『我れ生きてあらん間、我が情は汝を戀ふべし。我れ在らずならん時、なほも我が影は墓を横ぎりて汝の影に從はん』

汝はそを見もやしたりけん——その城の塔の上に青空高く搖らめく棕櫚の木ありて、臺地幾段に山腹を上り行ける堅固なる白き町を。またその亞剌比亞風の諸門と長押に輝く豫言者の金言とを震へに顫へ映して風に紋絹織り成す湖の水を。またロクの卵のごとまろやかなる會堂の圓屋根を。また日沒の消え行く赤らみと共に祈禱の時告ぐる人の聲『汝等眠らんとする者共、汝の魂を眠ること絕えて無き彼に委ねや』と信者に言ふが響き出づる尖塔を。

……此町にまた基督敎徒多く住み居たりき、——彼等の骨は碎かれ、彼等の名は永久へに抹殺されん事を！さなり、唯一人の名を除きてなり、その名を余は忘れたれども。（さ

れど我等が主豫言者はその名を書き記し給ひぬ。女の名なりとも——物たえて忘れ給ふことと無き彼は忘れはし給はじ）さて、此町の壁近く善良なる回々教徒を埋むる墓地一處あり。その墓地に、墓二つありて、その一つの脚部他なる墓の脚部と相向へるが見らるべし。この墓の一つには頭帕子(タルバン)を冠れる碑石あれども、他の一つの上なる塚石の形せるには、浮彫の花と削られし人の名の文字幾つかあるのみ。さればそは女の墓たることを知り得べし。其處には夏の夜の如くあたりを暗うして、回々教よりもなほ古き糸杉の樹多く立てり。

*
* *

……彼の女たをやかなること莖の上なる欝金香の如くにて、歩む折はその足大地に堅く接吻(くちづけ)するかに思はれぬ。されど面帕(かほおほひ)除けたるその顔を、また微笑める時その薔色の脣の間なるその歯の白さを、視たらんには！……男も亦夏と盛る年若き者なりき。その戀はサヒド・ベン・アグバが物語りけるベニ・アヅラの戀の如くなりき。されどその處女は基督教徒にて男は善良なる回々教徒なりければ、二人は人目偸までは相語らふこと叶はざりき。またいづれも己が戀人の親々に事を知らしむることを敢てし得ざりき。神はその子孫をはぶき給はねば、男は身を邪教徒の一人となし得ず——また女は己が家族を恐れて豫言者の

信仰を公言するを得ざりしなり。……女はただ己が窓の格子越しに折々男と語らふのみなりき。かくて互の戀は募りて、二人は共に重き病の床に就きぬ。若者はといへば、まこと其の病彼を惱ますこと太だしく、その理性は去りて、久しきが間氣狂へる者の如くなりき。されどやがて病癒えたれば、他の地に、ダマスクスの町に、と出で立ちぬ、――忘れんとは思ひ得ざる者を斯くして忘れんとにはあらで、體力を元に還さんとてなりき。

＊
＊ ＊

さて處女の雙親は富みたるものなりしが、若者は貧しかりき。されば此の二人の戀人互に文通はす術(すべ)を工らみし時、女は男に百チナルを送り、我を愛し給はば、繪師を其町に探し、我が爲めに口づけし得ん肖像を描かしめ給へと彼に乞ひぬ。男は書き送りぬ、『愛人よ、されどそは我等の信仰に悖ると知らずや。終りの日、汝が造らしめたるその形像に生命を與へよと神求め給はん時、汝は神に何と言はんとすや』されど女は答へぬ、『終りの日に、我が愛人よ、我は答へて言はん、最も聖き者よ、汝が造りし物は生ける物造ること叶はざるを汝は知れり。されど汝の意(こころ)この形像を活かさんとならば、汝が造りたる生ける形像の最も美はしきものをば我が魂に侵(さ)して愛したりしとて我を罪し給はんとも、我はと

こしへに汝の名を讃へん、』と……

＊
＊　＊

然るにやがて彼の若者歸り來り、我が遊ぶるかの町にて再び病みぬ。死に臨みて其女の耳に囁きぬ、『我が魂が戀ふる彼の女をば此世にて再び見んことあらざらん。我れ若し回回教徒として死なば、我れ恐る彼の世にて彼女に會ひ得ざらんを。されば余は我が信仰を誓ひ絕ち、基督教徒たらんと望むなり』斯くして男は死にき。されど彼がかゝる言葉を口にする時は心甚だ亂れてありしに違はじと、正しき信者の墓地に彼を葬りぬ。

若者の此友はあらん限りの速度もて處女が住まへる所に急ぎ行きぬ、死に瀕して女も亦その情を苦しむること太だしかりければ。その時女は彼に言ひぬ、『我が魂が戀ふる彼の人をば此世にて再び見んことあらざらん。我れ若し基督教徒として死なば、我れ恐る彼の世にて彼の人に會ひ得ざらんを。されば我は證言す、神のほかに神あらじと、またマホメットは神の豫言者なり』と

その時その友若者が言ひたりし事を女に囁きたるに、女は太く驚きぬ。されどただ答へて言ひぬ、『彼が休める處に我を搬び、我が足を彼の足に對はしめて埋めよ、審判の日に

彼と向ひ合ひて立ち得んやう」

王の裁判

その存在の祕密は知る人あらざる萬物の創造者に、――彼自らには我等が眼に見ゆる印あらざれども彼が造りませる物總てに或る印を附し給ひたる萬物の創造者に、――心の心にてましかます萬物の創造者に、――潜める物のうちに潜みませる萬物の創造者に――賛美あれ。……蒼穹は暗黑の中にその幾百千萬の眼を開けども、彼をば視ざらん。されど崇めて、日は夜毎その炎の顏を西に伏し沈め、月ごとに月は彼の大いなるに驚きてうすれ消ゆ。……とことはに大洋は彼の光榮を宣べんとその幾千の浪を高め、火は彼へ昇り行かんと求め、風は彼の神祕を囁く。……彼の審判の秤には一と歎息すら重みあり。……

國王の行爲を書き記せるグリスタンの第一巻第一話に、波斯の或る王口づから或る俘虜を罪し、そを死刑に處すべしと命じたる事記されあり。

その俘虜未だ青春の氣に充ち體力溢れたるものなりしかば、さらずば住み生きたらん日

を、愛でたらん美はしき者を、知りたらん幸福を、花と彼に咲き出でたらん蕾の希望を、心の裡に思ひ廻らしつ。彼は口惜しく思ひ、己の前には盲目無月の死の夜あるのみなるを見、美しき日の再び彼に昇り來たらざるべきを思ひ、己が國にての呪詛の言葉もて、聲高らかにまた狂ほしきまで激しく王を呪ひぬ。諺に、『生命と手を絶つ者はまことにその心の裡なる一切を語る』とあれば。

さて王はその男の烈しき言葉はきけどもそが口にする野蠻なる國語を少しも解せざりしかば、その第一の大臣に問うて曰ひぬ、『かの犬何をか言ふ』

されどその大臣は情優しき人なりければ斯く答へぬ、『君よ、彼は聖書の言葉を――その怒を抑へて惡行を赦す者、アラーの愛し給ふ者、にかかはる神の豫言者の言葉を――反復すなり』

王はその言葉を聞いて之を信じ、その情の動かされたるを覺え、その怒の炎は滅して憐の念入り來りたれば、己が命を撤回し、その男の罪を赦し、釋放せんことを命じぬ。

然るに王には、心邪に眼狡き男にて、あらゆる國語を知り、常に他人の不幸を起して榮達を謀れる、他の大臣ありき。此の大臣、されば、祈禱すなる苦行僧のそれに似たる嚴めしき顏をよそほひ、叫びぬ、『我等如き、貴き地位にある者が、王者が頼みとせる大臣

が、主君の前にて一言葉にても不實なることを述べんは宜しきに適はず。されば君よ、第一の大臣はかの俘虜の言葉を不實に解き明かしたりと知り給へ。かの下劣なるものは、神を敬へる言葉は一つだも述べて、その怒に心萎えて己が王を呪ひて、君にかかはる不敬の惡言を放ちたり』

されどその言葉を聞きし時王の額は曇りぬ。恐ろしき眼をその第二の大臣に向けて王は言ひぬ、『我が耳には、第一の大臣が述べし虚言、汝の唇が語りし眞實よりも快かりき。汝は邪なる惡意ある目的の爲めに眞實を語りしが、彼はまこと情ある善き目的にて虚言を述べたれば。義しき目的の爲めに語れる虚言は惡を起こす眞實に優れり。我が赦免はまた撤回せざるべし。されど汝はと言へば、再び汝の顏を余に示すこと勿れ！』

ש״ס

タルムッドのを書更めし傳説

※ ※ ※

ラバの物語

こはバビロンのベラコスのゲマラの中にあり。……夢の解明に就いてはラビ・ベナア言へることあり。『エルサレムには夢の解明者二十四人ありき。余は或る夢を夢みてその說明をその二十四人の各〻に乞ひぬ。各〻異れる解明を余に與へたるも、「夢は總てその解明に從ひその如くに遂行せらる」との諺に正しく一致して、いづれもの言葉實行されぬ』……嗚呼あらゆる物の王よ、我等は汝のものなり。我等の夢また汝の物なり。……

ラバの有てる知識は甚大なるものなりき。エツイラア書の奥義にも深く通じたりければ、

或る時その弟のラビなるジラを試し見んと思ひて、土よりして生ける男一人を創造し、用件を物に認めしを持たせてその男をジラへ遣はしぬ。されどその男は女より生れ出でたる者にも非らず、また彼には神の生の聖靈吹き入れてあらざりしかば、物言ふこと叶はざりき。さればラビのジラ彼に物言ひてその應へせざるを見し時、ラビ彼の耳に囁きつ。『汝は魔術にて生れ出てしなり。汝の土の姿に還れ』と。その男たちどころにラビの眼の前に碎け崩れて形無き物となり、風その形無き物を運び去りて、煙が嵐の一と呼吸に散ずるが如くなりき。されどラビなるジラはラバの力を太く驚きぬ。

　されどもラバは夢の解明にはバア・ヘディアほどには賢くはあらざりき。バア・ヘディアはそのあたりなる夥多の人々に夢の解明を乞ひ求めらるゝなりき。されど彼は人彼に拂へば善きやうに解き明かし、人彼に拂はざれば惡きやうに解き明かすなりけり。多くのラビが言ふ所に據れば、井戸を夢むは平和の兆、駱駝を夢むは咎の赦免、山羊を夢むは豐年、生ける物を夢むは、唯猿と梟とを除いて、善し、猿と梟も裝具あるか繋がれ居らば善し、と。さればバア・ヘディアは斯かる善兆を、夢見し者金を拂ふこと多からずば、逆さまに解明すなりしが、其豫言せる禍があやまらず成就さるゝはまこと不思議と思はれたりき。

或る日の事なり、ラビなるアバヰとラビなるラバとが、共に同じ夢を見たることを知りて、解明者バア・ヘディアを訪ひてその說明を求めぬ。アバヰは一ヅウヅを拂ひしがラバは一毫も拂はざりき。

* * *

二人は共に斯く言ひて彼に尋ねつ。『我等が夢見し此夢を我等に解明し給へ。眠れるうちに、一卷の卷物一大光明の下に舒べらるゝが見え、我等は共にそのうちにモーゼの第五卷の中にある

汝の牛汝の目の前に宰らるゝも汝は之を食ふことを得ず……汝の男子と汝の女子は他邦の民の有とならん……汝は多分の種を田野に携へ出すも、その刈りとるところは少かるべし……

との言葉を讀みしやう思ひたり』

解明者バア・ヘディアは彼に一ヅウヅを拂ひたりしアバヰに言ひぬ。『汝には此夢は吉兆なり。牛に關する句は、汝驚く許りに榮えて、歡の餘りに食はんこと叶はじとの意なり。汝の男子と女子とは他國に緣づかん。されば彼等と分かるべけれど、彼等が賢くまた安んぜるを見て、悲しむことあらざらん。』

『されど余に一毫をも拂はざりし汝ラバに就いては、此夢は凶兆なり。汝は爲に憤慨されて悲の餘りに食ふを得ず。汝の女子と男子とは虜へらるべし。アバキは「多分の種を田野に携へ出」さん。されど句の次なる部分「汝は刈りとる所少かるべし」は汝の事なり』

二人は再び問うて曰ひぬ。『されど我等の夢に二人はまた斯く記されし句を讀みたり。

汝の國には遍く橄欖の樹あらん然れど汝はその油を身に塗ることを得じ……地の民みな汝がエホバの名をもて稱へらるゝを視て汝を畏れん』

バア・ヘディア言ふやう『ラビ・アバキよ、汝にはその言葉は汝が榮えて太く敬はれんとの意なり。されど余に一毫をも拂はざりし汝ラバにはその言葉は全く惡兆なり。汝の勞苦には何等の益もあらざらん。汝は僞り訴へられ、その訴の爲めに罪を犯せし者として忌み避けられん』

なほもラバは、今はただ獨り言に言ひ續けぬ。『されど余はまた我が住家の外なる戸が倒るゝを見、また我が齒が口より落つるを夢見たり。また余は二羽の鳩が飛び去るを見、二本の大根の脚下に生ずるを夢見たり』

更にバア・ヘディアは答へて曰ひぬ。『余に一毫をも拂はざりしラバよ、汝にはそは災を示すなり。汝の外なる戸の落ちしは汝が妻の死の前兆にて、汝の齒を失ひしは汝の男子

と女子とが同じく年若くして死なん兆なり。鳩の飛びしは汝が他の二人の妻と離別せんことを意味し、汝の夢なる二本の大根は汝の仕返し得ざらん打撃を二たび受けんことを豫言すなり』

かくてバア・ヘディアが豫言せりし事は悉く起こり來りぬ。ラバの妻は死にき。彼は王の寶庫のものを盜みしとの疑にて捕へられ、諸人は罪ある者として彼を避けぬ。また盲目なる男二人が鬪へるを分けんと力むる間に彼等は二たび彼を打ちぬ。知らずして爲せることとて仕返すること叶はざりき。また數々の不幸、恰もヨブに來りしが如くにラバに來りぬ。彼はその總てを諦め得たりしが、ただラビなるヒスダの娘なりけるその年若き妻の死は諦め得ざりき。

*

* *

終にラバはバア・ヘディアに巨額の金を拂ひて、夢みたりし樣々なる恐ろしき夢を語りぬ。こたびはバア・ヘディアは彼に幸福を、財寶を、禮物を豫言せしが、そのいづれも解明者の言葉のまゝに起こり來り、ラバは驚くこと太だしかりき。

一日偶ゝラバとバア・ヘディアと旅行を共にせし折、バア・ヘディアその魔術の書を打

ち落としぬ。彼はその助に依りて、夢のその解明を爲し居たりしなり。ラバ急ぎそを拾ひ上げしが、その書の初に『夢は總て解明者の解明の如くに遂行せらる』とあるを認めぬ。斯くてラバは此男の邪なる魔法を發見し、彼を呪ひて曰ひつ。『痴者！他の總てに對して汝を許し得んも、ラビ・ヒスダの娘なりける我がいとしの妻の死に對しては許さじ。嗚呼汝邪なる魔術者よ。我が呪詛を受けよ』……

こゝに於てかバア・ヘディアは懼れを抱き、進んで羅馬人のうちに移り住み、斯くして己が罪を贖ひ、また己が身を滅せんラバが呪詛の力を免れんと望みしが徒勞なりき。

* * *

斯くて羅馬に赴き、王の寶庫の門前にて日毎夢を解明して、前に常に爲せしが如くに多くの不善を行ひつ。或る日王の庫官彼に來たつて曰ひぬ、『余は針が我が指に入りたりしと思ひし夢を見たり。この夢を我に解明せよ』

されどバア・ヘディアはただ言ひぬ、『我に一ヅウヅを與へよ』かくて彼はそを與へんとせざりければ、バア・ヘディアは何事をも彼に語らざりき。

他日庫官來たつて曰ひぬ、『蟲我が指を二つ食みしと思ひし夢を見たり。この夢を我に

解明せよ』

されどバア・ヘディアはただ言ひぬ、『我に一ヅウヅを與へよ』かくて彼はそを與へんとせざりければ、バア・ヘディアは何事をも彼に語らざりき。

さるを三たび庫官來たつて曰ひぬ、『蟲我が右の手總てを食みしと思ひし夢を見たり。この夢を我に解明せよ』

バア・ヘディア彼を嘲つて言ひぬ、『行いて、汝が保管を委ねられし王の絹の貯藏を見よ。蟲今は悉くそを滅ぼしたり』……正しくバア・ヘディアが言ひし如くなりけり。

茲に於てか王は怒りて、庫官を斬首すべく命じぬ。されど彼はあらがひ述べぬ、『蟲の在るあるを先づ知り居りしかの猶太人がそれに就いて何事をも述べざりしに、何とて我れ一人を殺すにや』

かくて人々バア・ヘディアを連れ來りて彼に質しぬ。されど彼は庫官を嘲りて言ひぬ、『王の絹が滅ぼされしは汝が餘りに慾深くして余に一ヅウヅを拂はざりしが爲めなりき』

これを聞いてその羅馬人等は忿怒の念に充ち、若き杉の木二本を曲げて互に近寄せ、綱もて括りぬ。かくてバア・ヘディアの右足をその一本の木末に縛り、その左足を他の木の木末に縛り、後ちその綱をば刀もてつと絶ちぬ。その二本の杉はその元なる位置につと跳

ね返りて、バア・ヘディアの躯を等しき二つに裂きければ、その内臓は振り落とされ、その頭蓋骨すら二つに割けて、その脳髄を容しうしぬ。

偉大なるラバの呪詛彼に在りたればなりき。

嘲弄者

……『タルムッド・エルシャルミ』のシエヰイス書のうちに存れるラビ・シモン・ベン・ヨカイの物語なり。……エホバ——有難の大神や——の御前に出でざる者四類ありとサンヘドリンは傳へずや。その四類のうちに嘲弄者數へられてあり。……

ラビ・シモン・ベン・ヨカイに就いて、バビロンのかのタルムッドにもエルサレムのかのタルムッドにも不思議なること數々語られてあり。その中に就きて、彼が常に嘲弄者の厚かましさを懲らしたる手段についての傳說ばかり驚くべきは無し。

羅馬人が爲せし大工事を輕んじて、ただその邪なる軍隊をいや速かに動かさんが爲めに道路を造りたるなりと言ひ、ただ貢賦を徴せんが爲めに橋を架したるなりと言ひ、ただ己が快樂の爲めに水道を引き浴場を設けたるなり、ただ惡を支へんを目的に市を設けたるなりと言ひしが爲めに羅馬人に迫害られしは卽ちこのラビ・シモン・ベン・ヨカイなりき。

かゝる言葉を述べしが爲めにラビ・シモンは死を宣告されぬ。そが爲めに彼はその尊き子と共に逃れて巖穴に身を潜めぬ。其處に住む事十二年の久しきに及びぬ。二人はただ祈禱の折にまとひて常はまとはでありしが、さらずば二人が衣服は崩ほれて土に歸しやしたりけめ。二人は睡眠と思念との時間は身を首まで沙中に沒してあるなりき。されどその巖穴の中にヱホバは二人が爲めに天のいなごまめ一樹を造り給ひ、その木日々に二人を養ふ果實を結びぬ。またヱホバは——有難の大神や——二人が寒さに惱まざらんやう、巖穴の中に果無き夏を造り給ひぬ。かくて豫言者エリヤが天界より降りて、羅馬人のかの皇帝は偶像を拜む者がすなる死を爲したることを語り、二人には此の世に恐るゝもの無きことを語りしまで二人は其處に在りき。されどその多年の思念の間に、ラビとその子との尊とさは、翼もて顏を蔽ひて神の玉座のあたりに立つ者の尊とさの如くなり、此の世は二人の滯留にはふさはしからずなりしなりけり。さればかの巖穴より出て來るや、野原を耕しまた刈る人々を見て烈しき忿怒二人の心に充ちつ、人々に向ひ叫びぬ、『此の人等は此の世の事のみを思ひて永久なるものを顧みず』

斯くて土地とその上に働ける人等は二人の眼の火に燒き盡くされて、ソドムとゴモラとが地の表より燒き拂はれたるが如くなりき。されどバス・コル——大神の御聲——天より

責めて告給ひぬ、『汝等はただ余が造りたる此の世を滅ぼさん爲めに出で來りしにや。巖穴に歸れ』二人は更に一年巖穴に歸り、前後十三年の滯留を其處にて爲せしが、やがてバス・コルまた聲を發して、二人を赦して此の世に歸らしめ給ひぬ。こは總てバビロンのタルムッドのシーダー・ミードのシャバス書に記されあり。

※ ※ ※

さてエルサレムのタルムッドには、ラビ・シモン・ベン・ヨカイ巖穴を去りたる後、遍くテベリヤの土地を潔めんと心定めしこと記されあり。そは巖穴の中に住みし折、その身いたく腫物に惱まされたりしが、テベリヤの水そを癒したりければ、己が身テベリヤに潔められしが如くにテベリヤ己に潔めらるべしと彼は宣べぬ。彼れそを嘲弄者が聞き得る處にて言ひぬ。嘲弄者は彼の眼を恐れしが、互に彼をあざ笑ひぬ。

されどラビ・シモンはテベリヤの邑の前に坐り、はうちはまめを取り、そのはうちはまめを細々に切り、生ける人にて彼の外その解明を知る者無き言葉をそれに唱へぬ。（天使も惡魔もなほ且つ知るところ少きを思へば、かゝる言葉の意味を知るもの人には稀なり）斯く爲したる後、ラビは立ち上り、地上を歩みて、種蒔く者が種を散らすが如くそのはう

ちはまめを散らしぬ。そのはうちはまめの落つる處、死せる者の骨、下より現はれて土の表に出でければ、人々そを取り去りて正しき處に埋むることを得たり。斯くして其土地は、偶像を拜む者と希望の土地にそのかみ住みたりしネビリムとの骨のみならず、同じくまたイスラエル出でしこのかた死にたりしあらゆる動物と生けるものとの骨をも潔められぬ。

ここにサマリヤ人なる或る邪なる懷疑者ありて、ラビ・シモン・ベン・ヨカイを惶てふためかしめんと思ひ、既に潔められし處に私かに汚れたる屍を一つ埋めぬ。そのサマリヤ人巧みにラビ・シモンに來りて言ひぬ、「汝は我が野のこれこれの處を潔めしと思ひしに、共處に汚れたる軀——人の軀——あり。汝は智慧を喪ひしや、或は汝の魔術に足らざる所ありや。余と共に來たれ」斯くてラビ・シモンを伴ひ行き、地を掘り、その汚れたる屍を彼に示して、彼を蔑み笑ひぬ。

されどラビ・シモンは彼が爲したりし事を神の靈示にて知り、その男の邪なる顔に眼を注ぎて言ひぬ、『まことや、汝の如き者は生ける者のうちに住むに値せじ。死せる者と處を換ふべし』その言葉言ひ終はると見る間に、その死せる者の軀立ち上り、その肉淨まり、その生命その眼とその心とに還り、かの邪なるサマリヤ人は穢れたる屍となりて、蟲その鼻の穴とその耳とより出でぬ。

されどラビ・シモンその道を進み行きし時、邑の外なる人住める塔の横をよぎりぬ。その塔の上なる室より人の聲彼を嘲りて聲高く叫びぬ、『テベリヤを潔め得と思へる彼(か)のバア・ヨカイ此方へ來るよ』その嘲弄者は自(み)ら能く文字知れる者なりき。

『余は汝に誓ふ』とラビ・シモン答へぬ、『余は汝に誓ふ、テベリヤは、汝如きものありとも、またその嘲弄ありとも、淨めらるべし』

尊きラビ斯く言ひければ、塔の室の中に立ち居りしその嘲弄者全く崩ほれて一塊の骨となりぬ。その骨よりして悶ゆる煙一すぢ立ち昇りぬ。書に『ヱホバの忿怒(いかり)は燃えん』とある、ヱホバの忿恨(いきどほり)の煙なりしなり。……

エステルの選み

尊きミドラシムの尊きミドラシュ、シル・ハシリムに語られあるラビ・シモン・ベン・ヨカイの物語なり。……嗚呼イスラエルよ、聞けよ、我等の神エホバは一人なり。……

その頃その大いなる邑シドンに、多くの資財（たから）を有ち、そを知れる人總てに愛され、もろもろの國にても愛されし或る尊きイスラエル人ありけり。その人の妻に勝さりて美はしき妻有てる人はシドンにあらざりき。その眉目好さは、その麗はしさ遍く埃及全土を照らせしサラのそれの如くなりければなり。

されど此の富める者に幸はあらざりき。嬰兒（みどりご）の泣聲その家に聞かるゝこと無く、幼な兒の聲音その心の裡に日の光を造ることなかりければ。彼は時に非難の聲を耳にしぬ、『ラビ等は敎へずや、人若し妻と共に住みて十年にして子あらずば、律法（おきて）の定むる婚姻の分（ぶん）を女子に與へて去るべしと。そが種族を永續せしめんにその女にてはふさはしからじと思は

れたらんも圖り難ければ』……されどまた、その美くしさが彼女を高ぶらしめたるなり、その受くる恥辱はただ高ぶりの罰なりと思ひて、その妻を訪る者もありき。

やがて或る朝ラビ・シモン・ベン・ヨカイは其住家の控の室に訪れ人の二人あるを知りぬ。シドンにて最も富める人とその妻となりき。二人はラビに『サレム　アレイクウム』と挨拶しつ。ラビは女の顏を見ざりき。女の踵を見んことすら尊き人等には禁じられてありたればなり。されどその女を前にしての心地よさは、祈禱の天使の手に織り成されし花の香のごと遍く一家を貫くを覺えぬ。ラビはその女の泣き居るを知りぬ。

やがて夫は立ち上りて言ひぬ。

『余はその時齡二十なりしが、齡二十を過ぎて妻娶らであらんは日に日にエホバの命に背くなりといふ敎に從はんと欲して、エステルを娶りたりしは今は十年を過ぐる昔なり。ラビの君よ、君は知るらん、エステルはシドンにての最も美はしき少女なりき。何の谷あるを見得ず、我には愛らしき美はしき極みなる妻なり。またその心にいつはり無し。

『余は其後富めるイスラエル人となりぬ。ツロの人々余を知り、カルタゴの商人共余が名にて誓ふ。余はオフルの象牙と黄金とまた東の國より値澤なる寶石を積み歸る船あまた有てり。余は奇しく妙に造りなされし青玉の花瓶と綠の玉なる盃とを有ち、また車と馬と

を有てり——如何なる王子も我よりは多く有ち給ふことあらざるべし。こはヱホバ——有難の神や——の御恵と、賢くまた武き女にて忠言に巧みなる我が妻エステルとに因るなり。『されどラビよ。余若し子一人を得んには、イスラエルにて父なるものと知られんには、余が財寶總てを喜んで與へたらんに！大神は——有難の神や——余にこの物を與へ給はず。斯かる美はしきまた善き女に依つて子を有たん値余に無しと見られたるなり。されば余は汝に乞ふ、別離の劵書に適法の制定を與へんことを。かの聡慧イスラエルの目前に余等より去らんやう、余はエステルに離緣狀を與へ、また婚姻の分をも多分に與へんと心定めたれば』

＊
＊＊

ラビ・シモン・ベン・ヨカイは燻し銀なすその髯を思深く撫でぬ。シエキナの沈默に似たる沈默三人の上に落ちぬ。微かに、遙か彼方よりして、シドンの商業の海の如きざわめき三人の耳に浮かび來りつ。……やがてラビ口を開きぬ。エステルは彼を眺め見て、此尊き人が脣もて微笑むを見たるものはあらざりしが、その眼微笑みたりと思ひぬ。されどそは二人が心を見入りてその眼微笑みしにやあらん。『我が子よ。適應しき辨明無くまた急

ぎて、汝が志すが如くなさんは、イスラエルにては曲事なり。エステルは心善からぬ妻なりしと、或は汝は餘りに嚴しき夫なりしと、人々想はめば。世の蔑を起こさんは宜しからず。されば家に歸り、大いなる饗宴を設け、汝の友と汝の妻の友總てと、汝の結婚の式に列なりし人達をそれに招き、心善き人が心善き人に對ふが如くに語り、汝がこの事を爲す理由(いはれ)とエステルには何の過(あやまち)も無き事とを人々に知らしめよ。かくしてその翌日余に歸り來たらば、余は汝にその劵書(かきつけ)を與ふべし』

＊
＊　＊

斯くて大饗宴は催され、賓客あまた集まりぬ。そが中に、アズラエルが手を執りて連れ去りし者を除きて、エステルの婚姻の式に列なりし者總てありき。葡萄の美酒(うまざけ)多くありぬ。肉は黄金の盤(さら)の上に湯氣立ち、靑玉の杯は客各々の肘近く置かれぬ。夫は諸人の前にていとしほなげに妻に向ひて言ひつ、『エステルよ、二人は幾年か睦まじく共に住みぬ。今若し別かれざるを得じとならば、余が汝を愛せざるが爲めにはあらで、ただ我等に子等を惠み給ふことと大神の意に適(かな)はざるが爲めのみ。余が汝を愛しまた汝の幸を希ふことを表はさん爲め、黄金にても宜し、價に代へ難き珠玉にても宜し、如何なる物にても汝の望む物を

我が家より取り去らんことを汝に望むと知れ』

斯くて酒は廻はり、夜は喜歡と歌謠とに更けて、賓客の頭あやしくも重り、數限りなき蜂の羽音の如き唸りその耳に響き、その髯笑に動くこと歇みて、深き睡眠彼等を襲ひぬ。

その時エステルは侍女を呼びて言ひぬ、『視よ我が夫は深く睡り給へり。余は我が父の家に行かん。睡りませる儘に夫をも亦彼方へ搬べ』

*
* *

翌くる朝眼覺めて夫は己が身の異しき室にまた異しき家にあるを知りぬ。されど女ありて己が前に在る心地よさ、己が髯を撫する象牙なせるその指、己が頭を枕と支ふその膝の軟かさ、己が眼覺むる眼を見入れるその黑き眼の光——そは異しきものには非らざりき。己が頭はエステルの膝の上に休めるを知りたればなり。彼は悲しきその夜の夢々に心惑ひて叫びぬ、『女よ、何を爲したるにや』

無花果の樹々の中なる鳩の聲よりも美はしき聲してエステル言ひぬ、『夫よ、如何なる

物にても我が最も望める物を選みておん身の家より持ち去れよと命じはし給はざりしか。余はおん身を選み、……此世なる他の總てに優しておん身をいとほしみて、おん身を此處へ、我が父の家へと齎したり。今我を此處より追ひ給ふにや』彼は愛の涙に女の顏を見得ざりき。されど女の語りつぐ言葉を――愛する者總てにいとも古く然もいとも若きかのルツの黃金なす言の葉を――耳にしつ、『我は汝の往く處に往き汝の宿る處に宿らん。死の天使のみぞ我等を離さん、汝は我には一切なれば』と。……

黃金なす日の光を浴びて門口にラビ・シモン・ベン・ヨカイの薄黑き嚴かなる姿圖らずも立ち現はれ、双手を擧げて祝福して言ひぬ、『シェマア・イスラエル！一人なる我等が神ヱホバは、永久の祝福を汝等に惠み給ふ。金工の巧妙に、黃金と黃金の一つに接ぎ合はん如く、汝等の心は愛に接ぎ合はされん。宗族に二人を繋ぎまた獨身者を置き給ふヱホバは汝等を護り給はん。ヱホバはこの武き妻をば、イスラエルの家を建てたりしラケルの如くまたリアの如くならしめ給ふ。汝等は汝等の子等をまた汝等の子等の子等をヱホバの宮居に見ん」

ヱホバはしかく彼等に惠み給ひぬ。エステルは實多く附くる葡萄の如くなりて、彼等は

その子等の子等をイスラエルにて見ぬ。そは書に記されたれば、『主は乏しき者の祈禱を顧み給はん』と。

ハレカの論諍

……こはバヴ・メツイアの書の中に、卽ち聖經の『中門』の中に傳へられし物語なり。……エホバはハレカの記さるゝ門を愛し給ふこと會堂及び講堂に優さる。

さてその頃、タルムツドのバヴ・メツイアの書に記さるゝところに據れば、さる麵麭燒竈が律法に見て淨きか否かに就いてミシユナの敎師等とラビ・エリエゼルとの間に論諍ありき。他の總てはその竈はハレカに據れば不淨なりと言へるをば、ラビ・エリエゼルは淨しと宣べ、彼等の辯論總てを打倒し、言ひ伏されじとすれど彼等の異議總てを論破したればなりけり。かくてラビ・エリエゼルは律法の己が解釋に證明を爲さしめんといなごまめの樹を招きけるに、そのいなごまめの木、地より拔け出て、根より土を垂らしつゝ空に昇り、四百ヤールの距離に空を飛び行きて、震へつゝ圃に植わり立ちぬ。

されどミシユナの敎師等は、不思議なる事に慣れたれば、心動かさざりき。彼等は曰ひ

つ、『いなごまめの木の證詞(あかし)は認めがたし。いなごまめの木が我等にハレカに就いて語るべきにや。いなごまめの木が律法を我等に教ふるにや』

斯くてラビ・エリエゼルは、その絶え間なき祈禱をつぶやく外なる小川に向ひて言ひぬ、『汝流るゝ水よ、我に證明(あかし)となれ』その小川は流の道を變へつ。その水は後すさりし、その源に流れ還り、床(とこ)なる小石を裸(あらは)ならしめて日に乾きぬ。

されどその賢者の弟子等はなほその初めの意見を守りて言ひぬ、『小河が我等に律法のことを語るべきにや。我等は聖きもの――讃むべきかな――の聲に、またその僕(しもべ)モーゼの聲に、聽かずして、流るゝ水の聲を聽くべきにや』

その時ラビ・エリエゼルは、尊き言葉がそれに記されたる、上なる壁に眼を擧げて叫びぬ、『汝、神に捧げ建てられたる壁よ、此事には余が決定(さだめ)正しと我に證明(あかし)となれ』壁は打震ひ、内側に反り、風變はらんとする刹那の、太く孕める帆の如くに曲り、ラビ等の手の上に迫りて落ちんとしたれば、ラビ・ヨシュア壁を叱咤して曰ひぬ、『ラビどもハレカの口論すとも、そは汝等には何かある。汝等は我等を碎かんとするにや。靜かにあれ』かくて壁はラビ・ヨシュアの言葉に遵ひて落ちんとはせざりき。されどラビ・エリエゼルの言葉にも遵ひたることとて、その元の場所に歸らんともせざりき。されば壁は今日に至るも

なほ倒れんとしたる儘にて在り。

その時ラビ・エリエゼルは、彼等の心が彼に逆らひて壁の石よりも硬くなれるを見て叫びぬ、『バテ・コルに我等の論諍を決定かしめよ』此言葉を聞いて校舍は根柢までも震ひ、空よりの聲答へて曰ひぬ、『汝等はラビ・エリエゼルを何とせんとするや。ハレカは如何なる事も彼の決定の如くなり』

されどラビ・ヨシュアは恐るゝ處なくその中に立ちて言ひぬ、『空よりの聲なりとも我等そを顧みんはよろしからず。神よ、汝がシナイにて與へし律法に書き記してそのむかし汝は言はざりしか、「汝衆の人に從ふべし」』と。かくて彼等はラビ・エリエゼルの言ふことを聽かんとせずして、彼を破門し、律法について爲せる彼の決定總てを火もて焚きつ。

〔さて、神すらこの事には惑はされ、己が決定の誤れるを認めて『我が子等が我に打ち勝てるなり。我が子等が我を壓したるなり』と言ひたるよし、豫言者エリヤが告げたりと、ラビ・ナタンが證明したりと言ふ人等あり。されどもラビ・エリエゼルを破門したる罰として、全世界なる大麥と橄欖と小麥との三分の一が蟲害に罹りたることを我等また知り居れば、ラビ・エリエゼルの解明は謬ならざりしと信ずるも可ならん〕

＊
＊＊

さて、未だ破門の命を蒙り居りしが間に、ラビ・エリエゼル重き病に罹りぬ。ラビの者共はそを少しも知らでありき。されど彼の學(がく)は深かりければ、ラビ・アキヴとその弟子總て彼を訪ねて教を求めぬ。……ラビ・エリエゼル肘を突いて立上り、彼等に問ひぬ、『何とて汝等此處へ來たれる』

『ハレカを學ばんとて我等來りつ』とアキヴ答へぬ。

『されど何とてなほ早くは來たらざりしや』

彼等答へぬ、『我等時なかりければ』

ラビ・エリエゼルその答を聞いて怒り、重ねて彼等に言ひぬ、『まことや、汝等自(おの)づからなる死を死なば余は大いに驚かん。また、アキヴよ、汝について言はば、汝の死は惡しき極みのものたらん。汝は律法(おきて)を學ぶ時のあらざるものもあらんと、敢て口にせるを思ひて、余が呪詛を汝に與へざるが汝には可なり』

かくてラビ・エリエゼルは兩の腕を己が胸の上に組み、死の至るを待ちつゝ言葉續けぬ、『禍なる哉。中に記されたること今は見えざる、今は卷き上げたる律法の二卷(まき)の如くなる、

此の我が爾の腕、禍なる哉。汝等若し前に余に侍したらんには、奇異なる事多く學び得たらんを。さるを我が知識今己れと共に死せざるを得ず。余は多くを學びたり、余は多くを教へたり、されど我がラビの知識を減ずること嘗て無かりしは、恰も大洋の水が犬これを舐むるとも減ずること無きが如くなりき』……

彼はなほ彼等に語り續けぬ、『さて、さる事總てに勝して、余は埃及胡瓜の生長に關して三千のハラコトを解きたりき。されどラビ・アキヷ・ベン・ヨセフ一人を除きては、それに關して問一つすら余に質ねたるもの嘗て一人もあらざりき。……田野の中なる路を二人が歩み居りし時、彼は埃及胡瓜に關して教へんことを余に乞ひぬ。かくて余は唯一言を述べしが、田野は立ちどころに埃及胡瓜に充たされき。彼はそを穫り收むることに就きて余に尋ねぬ。余は唯一言を述べしが、總ての胡瓜我が前なる一處に自づと集まりき』……

斯くラビ・エリエゼル語り居る間にその心彼より去りぬ。ラビ・アキヷはその弟子總てと共に彼の爲めに、また律法を學ばんとて來ることの遲かりしを思ひて己等の爲めに、太くその死を悲しみぬ。

*
* *

されどラビ・エリエゼルの豫言は果たされき。……ラビ・アキブ極めて尊き人となり、博學驚くべくなりたりし時、羅馬人彼に命じて律法をイスラエルにて教ふることを禁じぬ。さるを『我等律法を學び修め居る間に、聖き者の意によりて斯くも苦しむとせば、そを顧みざる間は如何に多く苦しむべきことか』とラビは言ひて、其處なる人々に公にそを教ふるを止めざりき。

斯くて人々は彼を處刑せんとて連れ出だし、言語に絶せる拷問もて彼を苦しめぬ。時恰も『聞け、イスラエルよ、我等が神エホバは一人なり』との祈禱を言ふべき刻限なりき。恰も者共鐵の櫛もて彼の肉を裂き居る時、ラビ・アキブはその尊き言語(ことば)を口にして死にき。時に偉大なる聲空よりして叫びぬ、『ラビ・アキブよ、汝讃むべきかな、汝の心と一人なりの言葉と共々に汝の軀(むくろ)を去りたれば』

ラビ・ヨカナン・ベン・ザカイ

その額に文字ある生物天界に住めり。日中はその輝き太陽に優（まさ）れるその文字眞理てふ語を爲し、天使それに由つてその晝なるを知る。されど日暮るればその文字自づと變じて信仰てふ語と成り、天使それに由つて夜の來たるを知る。……

さて、タルムッドのセダリムを集めし人にて且つは異教徒が崇むるかの耶蘇の師範たりしヒレル王には聖者となりたる門弟他に八十人ありき。そがうち三十人は極めて尊き人々なりしかばセキナ宿り給へること正（まさ）しくモーゼに宿り給ひしが如く、その顏は光明を放ち、日の光の如き光線その顳顬（こめかみ）より流れ出でたり。

また他の三十人は、命を聽けば太陽も靜止せん威德ありて、其尊さナンの息ヨシュアの尊さの如くなりしといふ。殘る二十人は、そのうち最も優れしがラビ・ヨナサン・ベン・ウジエルにて、最も劣れるがラビ・ヨカテン・ベン・ザカイなりしが、威德その中間に位

するに過ぎざりき。されどラビ・ヨカナンが現時の生ける人よりも尊かりしことを思へば、その最も劣れる者にも比すべきもの今一人だも無し。

そは、ラビ・ヨカナン・ベン・ザカイは、位卑くかりしも、聖典に――ミシュナとゲマラとミドラシムとに――ゲマトリアとノトリコンとテムラとの法規カバラアに――かの五つの神祕の字母アトバシュ、アトバク、アルバム、アイアクベカア、タシュラクに――古傳にまた小律令にまた細目に――月の學說に、天使の言語に、また棕櫚の囁と鬼神の言葉とに深く通じたればなりき。また海洋悉くが墨にて、河の邊に震ふ蘆悉くが筆にて、地上の人悉くが記錄司なりとも、ラビ・ヨカナン・ベン・ザカイが識りたりし總ては言ふを要せじ、一百二十年の星霜を耐へしその一生に教へしほどのものすら書き留めんこと叶はざりしなり。しかも彼はヒレルの門弟のうち威德最も少かりしものなりしなり。

その一生の歲月のうちにて初めの四十年をば彼は、賦與されし年月の殘餘を善行に身を委ね得られんほどの金贏けん爲め、世事に、殊に商業に、献げぬ。次の四十年をば彼は研究に委ねて、――口言ふを憚るべき御名の文字を結び合はせて生ける禽獸果實を創造せりしラビが蒙りし如く、――またエッチラアの書（創造の書）を究めて己が爲めに犢を創造してそを食みたりしラヴ・オシヤヤアとラヴ・カネアナアとが蒙りし如く、――魔術者な

りとの咎を蒙りしばかりに物識れるものとなりぬ。
かくてその尊き極みなる一生の最後の四十年をばラビ・ヨカナンは國民を教ふるに費しぬ。
さて、タルムッドのシダア・ネジキンなるバヴ・バスラ書に載れるに據れば、ラビ・ヨカナン・ベン・ザカイは或る折愚かなる或る門弟に對ひて豫言者イサイアの言葉を說き明かしぬ。說き明かしつゝ言ひぬ。『聖き極みの君――永久へに御名に祝福あれ――寶石と眞珠、各〻縱三十キユビット横三十キユビットなるを取り、各〻縱二十キユビット横十キユビットたらんまで截り磨き、之をヱルサレムの諸門に飾り給はん』
厚顏の子息たるその愚鈍なる門弟之を聽いて聲高らかに笑ひ、その聲に侮蔑の色もて言ひぬ。『綠玉石もしくは金剛石、紅石もしくは眞珠の、小鳥の卵の大いさなるものすら見たるものありや。世に縱三十キユビット横三十キユビットの寶石ありとまことおん身は語らんとし給ふにや』されどラビ・ヨカナンは何の應答も返さざりき。その門弟は嘲りつ去り行きぬ。
さて、此事ありて後數日、かの邪なる門弟は航海にと出で立ちぬ。貿易を營み、盛んなる賣買を試み、交易のその手腕と價値ある品を見出すその技倆とに多くの國に名を知られ

しものなりければなりき。さて、その船にて、未明に錨揚げんと待ちて、水夫等眠れる折、その邪(よこしま)なる門弟たまたま水中に一大光明を認めぬ。見下ろせば、海底に偉大なる天使數多在りて異形なる金剛石と綠玉石を伐り出し、巨大なる眞珠得んとて、絕大なる貝殼を開きつゝあるが見えぬ。天使等の眼は水の下にてその怪しき光の中に働きつゝ彼に注がれてありぬ。されば酷しき恐怖の念彼を襲ひ、その兩膝互に相搏ち、その齒拔け落ちぬ。彼は己が意志に悖りて己が舌を動かす或る力に從ひて聲高く叫びぬ。『その金剛石とその巨大なる綠玉石は何とてぞ。その異常なる眞珠は何とてぞ』或る聲海底より答へぬ。『エルサレムの諸門へ』と。

斯くてその航海より歸りて後、かの門弟はあらん限りの速さにラビ・ヨカナン・ベン・ザカイが敎を說き居る場所に急ぎ赴き、己が見たりしことを物語り、ラビ・ヨカナンの言葉は復び之を疑ふことなかるべしと誓ひぬ。

されどラビは、その胸を洞察し、胸の裡なる邪惡(よこしま)の黑さを眺め見て、雷なす聲もて答へぬ。『痴者(しれもの)！汝若しそを見ざりしならんには、今とてもなほ聖者の言の葉を嘲らんを！』かくてその邪(よこしま)なる門弟をば眼の一瞥もて枯葉が炎に燃き盡くさるゝが如くに燒き盡くし、その屍をば恰も大神の電光に打たれたらん如くに煙る一塊の灰燼となし了はんぬ。

人々の驚愕は異常なりき。されどラビ・ヨカナン・ベン・ザカイは足下に煙るその白色の灰燼に一顧をも拂はで、續いてその門弟等に棕櫚樹の言葉と鬼神の言葉とを講ずるなりき。

ティタスの傳説

……こはタルムッドのギッティンの卷にあり。……ティタス世に出でざりし前は、世界は人の眼球の如くなりき。大洋は白晴の如く、世界は黑睛の如く、エルサレムはその瞳子の如く、またエホバの殿堂はその瞳子の裡なる映像の如くなりき。……

眞實なるかな、聖經の中なるチャリンに、『六十の鐵山一羽の蚊の螯に吊るさる』と記さるゝは。

故いかにとならば、そのむかしティタス――ゲヘナの蝶番をその上に轉ずべく、彼が耳を軸承となさばや――その偶像崇拜者と共に羅馬より來り、聖都を圍み、之を破壞し、處女を捕拿して奪ひ去りぬ。その日の前なるエルサレムを看ざりし者はイスラエルの榮光は終に得見ざりしなり。

三百九十四の會堂あり、三百九十四の法庭あり、青年教化の同じ數なる學院ありき。…

…寺院の諸門開かるゝ時は、その黄金の蝶番の轟は安息日の遊歩八たび重ぬる遠さまでも聞こえたり。……聖の聖なるヱホバの帷幕は八千二百萬の處女が織り成せるもの、之を引くに三百の僧を要し、汚れし折之を洗ふに三百の僧を要するものなりき。さるをティタスは――彼の名に永久へに呪あれ――聖き器物をそれにて包み、船に積み載せ、羅馬の都さして帆を揚げぬ。

陸の影見えずなりしと思ふ間もあらせず暴風吹き起こりつ、――奈落はその暗黒を現はし、波濤（なみ）はその齒を示しぬ。されば異常の恐怖船人共を襲ひて、『神エローヒムぞ』と彼等は叫びつ。

されどティタスは嘲りつゝ、そが聲を御空に、雷鳴に、電光に、海のつぶやきに逆らひ高めて呼ばはりつ。『見よ。此の猶太の神は水上のほか威力無し。ファラオをば彼は溺らしめぬ。シセラをばまた彼は溺らしめぬ。今も彼は我が大軍勢と共に我を溺らさんと力む。彼にして偉力あらんには、また陸上にて余と爭ふを恐れざらんには、堅固なる大地にて余を待ち、余に打勝たん力ありや否や試み見よ』（序でなれば言ふ、シセラはまことは溺死はせざりしなるが、ティタスは無學にして偶像崇拜者なりしかば、その言ふところ謬れるなり）

と見る一道の白熱の光明、暗黒なる雲を衝いて迸り出て、雷音よりも深き聲彼に答へて曰ひぬ。『邪ものイソウの孫、邪なる者の子、汝邪なる者よ、陸地に上れ。汝を待てる動物あらん。そは余が世界にては甚だ小さくまた言ふに足らざるものなり。汝行いてそれと戰へ』

聲終はつて暴風は歇みぬ。

かくてティタスとその大軍勢は幾多の日を重ねて伊太利と呼ぶ土地の海岸に——その聲大地の四隅にきこえ、その騒一百二十哩の距離に在つてすらラビ・エホシユアの耳を聾すてふ羅馬の大都の音にとこしへに震動する海岸に——上陸しつ。羅馬には三百六十五の街路あり、一々の街路には三百六十五の宮殿あり、一々の宮殿の圓柱廊に昇らんに三百六十五段の大理石の階段ありしと云へれば。

然るに皇帝ティタスその足を岸に置く間もあらせず、彼を襲ひたるものありき。一羽の蚊!なりき。その蚊彼の鼻孔を飛びのぼり、その邪なる頭腦に入り、そを嚙み、言語に絶したる苦もて彼を苦しめぬ。その苦惱は絶え間あることなかりき。羅馬なる醫師にてそを醫やさん術知れるもの一人とてあらざりき。斯くてその蚊は彼の頭腦に住むこと七年、ティタスの顏は終はること無き苦痛の爲めに、地獄なる人の顏の如くなりぬ。

＊
＊ ＊

さてもティタスは羅馬人が崇むる汚らはしき神々總てに生贄供へて祈りしも甲斐無かりしが、或る日偶〻鐵匠の店の裡にて、鐵床に落つる鐵槌の音を耳にせしに、その音ダギテの琴の調がソールの耳に快かりしがごとその耳に快く、苦惱やがて彼より去りぬ。かくて心私かに打案じつゝ彼は叫びぬ『見よや余は苦惱を免るゝの途を見出したり』と。かくて鍛工の神に生贄を供へたる後ち、命じて鐵床と鐵槌とを携へ鍛工を己が宮殿に來たらしめつ。かくて彼が爲めに槌打つに――イスラエルにて金數ふ言葉もて言はば――日に四ツウジムを鍛工に拂ひつ。

されど鍛工は絶え間無く槌打つことは叶はざりき。さるを槌打ち止めば苦痛必らず還り來りて、蚊彼を惱ますこと太だしかりき。されば他の鍛工を多く呼び迎へつ、終にはその身奴隷なりし猶太人なる鍛工を迎へぬ。ティタスは異教徒共には金を拂ひたりしが、これには一毫をも拂はんとはせざりき。その故は、彼は言ひぬ『汝の敵が苦しむを見るは汝には充分の報酬なり』

しかも更に三十日。槌の音も蚊が嚙む苦痛を輕んずること叶はず、ティタスは死せざる

を待ざるを知りぬ。

かくて彼は家族に向ひて、死したる時その軀を燒き、その灰を集め、イスラエルの神が審判の日にその軀を發き出さざるやう、船七艘に分かち載せて七海に派遣しその灰を撒き散らすべく命じぬ。

＊ ＊ ＊

「されど尊きミドラシム書なるミドラシユ・コヘレットにはハドリアン――彼が名の抹殺されんことを！――嘗てラビ・ヨシュア・ベン・チャナニアに、最後の日に軀は何物よりして再造せらるゝにやと訊ねしこと記されあり。ラビは『脊骨なるルッより』と答へぬ。ハドリアン證明を求めしかば、ラビは脊柱なるその小骨ルッを取り上げて水に浸せしに軟らぐことなかりき。彼は火に置きしが燒くることなかりき。彼は臼に入れしが碎かるゝことなかりき。彼は鐵床の上に槌打ちしが、槌は毀れて鐵床は二つに割れたり。

かるが故にティタスの願は甲斐なからん。大神は必らずや脊骨なるルッよりして彼を罰せんとその軀を再造し給ふなるべし」

＊ ＊ ＊

されどティタスの屍を燒くに先だちて、かの蚊を見出さんものと、人々その頭蓋を開いて頭腦を檢べ見ぬ。
蚊は燕の如くに大きく、イスラエルにて物量る言葉もて言へば二セラの重さありき。またその爪は眞鍮にて、その口の兩顎は鐵なりき。

支那怪談

この書を

私の友なる

音樂家――

黄金色の皮膚を有する漂泊の淸人に旋律の言葉を語り、

彼等を感動させて、蛇皮の腹を有し、奇異の音を發する三絃を奏せしめ、

彼等に勸めて、私のために叫音を發する月琴を奏せしめ、

彼等を誘つて、その故國の素馨花の歌を歌はしめたる――

ヘンリー・エドワード・クレービールに捧ぐ。

序

本書が微々たる一小卷たるに過ぎないことの最も有力なる辯解は、全く內容を成す材料の性質そのものが示してゐると、私は考へる。是等の傳說を蒐集するに當つて、私は特に怪異なる美を求めた。して私はサー・ウォーター・スコットの「古代歌謠の模倣に關する論」に於ける、左の卓見を忘れることは出來なかつた。「超自然怪異といふものは、人類間に頗る廣く且つ深く蒔きつけられたる、或る强い感情に訴へるものではあるが、しかし强ひてあまりに壓力を加へると、殊の外その彈力を失ひ易き一種の彈機のやうなものである」

支那文學を般に亙つて通曉せんと欲する人々は、デュリアン、パヴィー、レミュザ、ド・ロスニー、シュレーゲル、レッグ、エルヴェ・サン・ドニー、キリヤムズ、ビオー、ヂヤイルズ、ワイリー、ビールの如き語學者、並びにその他幾多支那學者の業績によつて、道

を開かれてゐる。發見と征服の權利上、實際、中華國の物語の領域は、かゝる大探檢家のものである。しかし彼等の跡を慕つて支那人の廣大神祕なる空想の樂園に遊ぶ些やかな旅人は、そこに生えてゐる、幾つかの不思議な花――發光性の花、黑百合、一つ二つの燐のやうな薔薇――を、彼の奇異なる旅行の土産として、摘み取つてもよろしいだらう。

一八八六年三月十五日ニユー・オーリアンズにて

ラフカヂオ・ヘルン

大鐘の靈

漏刻計が大鐘[註一]塔で時を示すと、木槌は金屬製怪物の緣を打たうとして扛げられる――巨鐘の緣には尊い佛教の經文から取つた文句が彫つてある。巨鐘の響く音を聞け！舌はなくても、その聲の太いこと！―― KO-NGAI と響く。その深い音波の下に、綠色の屋根の、高く彎曲せる檐に刻まれた、あらゆる小さな龍は、その黄金色の尾の尖端に至るまで振動する。あらゆる陶器製の樋嘴は、その彫り込んである場所で慄へる。堂塔のあらゆる小さな鈴も語り出さうと欲して戰く。KO-NGAI！と寺院のあらゆる青黄色の瓦は振動する。瓦の上の木製の金魚は空高く踠く。佛陀の天上を示せる指は、香煙の青霧裡に、參詣者の頭上に搖れる。KO-NGAI！と、いかにも雷の如き音だ。宮殿の蛇腹に刻まれた漆塗りの怪物は、悉くその火の色の舌をうごめかす。して、大きな激動の後に起こる無數の反響と、

註一　Ta-chung sz'――文字通りには、「鐘の寺」。この建物は北京にあつて、恐らくは世界一の懸鐘を藏ふてゐる。鐘は西暦一四〇六年、明の永樂皇帝の時代に鑄られ、十二萬斤以上の重さを有する。

大きな美しい黄金のやうな唸り聲の不思議さ！それから、遂に巨大の音が、次第にとぎれとぎれの銀聲の囁きとなつて――恰も女が　Hiai　！と囁くやうに　　消え行くとき、不意に耳の中で喚音の嗚咽となつてしまふ。かやうな有様に、此大鐘は殆んど五百年間、毎日KO-NGAI と響いてゐた。劈頭素晴らしい鏗聲を發し、それから無量の美しい黄金のやうな唸りとなつて、次には　Hiai　！と、銀聲の低囁になつた。して、古い支那の都の色彩に富める、あらゆる町々の子供達の中で、大鐘の物語を知らぬもの――何故に大鐘は　KO-NGAI と響き、Hiai ！と鳴るかを語り得ないもの――は一人も無い。

さて、これが廣州府の學者、Yu-Pao-Tchen の書いた、『百孝集』に載つてゐる、大鐘塔の巨鐘の物語である。

約五百年前のこと、明の時代の天子、永樂皇帝はその高官 Kouan-Yu に命じて、百里の遠方へまで音の達するやうな大鐘を作れといつた。また彼は鐘に眞鍮を加へて、その音を強くし、黄金を加へてそれを深くし、銀を以て美しくせよと命じた。それから、鐘の表面と大きな縁には、聖經の文句を彫ることと、その鐘は北京の都の色彩に富める、あらゆる

町に響き渡るため、帝都の中心に吊るすべきことをも命じた。

そこで高官 Kouan-Yu は國中の鑄造師の頭領、有名な鍛冶、及び鑄造業に於ける、世に聞えた妙工を悉く集めた。それから、彼等は合金に對する材料を量り、それを巧みに處理し、模型、火、機械、及び金屬を鎔かすための大坩堝を準備した。彼等は巨人の如く猛烈に働いた――彼等が怠つた事は休憩と睡眠と娯樂ばかりであつた――夜も晝も Kouan-Yu の命に從つて働き、一切の事、天子の諭旨を成就しようと努力した。

が、金屬が鑄られて、土型を灼々たる鑄物から離して見ると、彼等の非常な勞作と間斷なき注意にも關らず、その結果は無効であつた。何故なら、金屬類が相互に離叛したからである――金は眞鍮を侮つて、一致することを肯じなかつた。銀は鎔けた鐵と混じようとはしなかつた。そこで、模型は今一度調製され、火は再び燃やされ、金屬も更に鎔かされて、一切の仕事が、面倒にも、また辛苦を重ねて繰返された。天子はこのことを耳にして、怒つてゐたが、何も云はなかつた。

第二回目の鑄造が出來た。しかし結果は一層惡かつた。金屬類は依然として頑固に互に混合することを拒んだので、鐘には少しも均一性がなかつた。して、その側面は龜裂を生じ罅隙が現はれ、その縁は固著して熔滓を作つて、割けてゐた。だから、すべての勞作は、

三度繰返されねばならなかつた。して、Kouan-Yu は非常に驚愕狼狽した。すると、天子はこれを聞いて、以前にも増して激怒した。それから、橙黄色の絹に認めて、龍の印を以て封緘せる書狀を使に持たせて、Kouan-Yu に送つた。その文句は次の如くであつた――

『明朝の尊嚴なる永樂皇帝から府尹[註二] Kouan-Yu に告げる。朕が汝に託した任務を二回まで汝は誤つた。若し三たび朕の命を成就することが出來ないならば、汝の頭を頸から斷つてしまふぞ。恐惶して、命を奉ぜよ』

註二　府尹――西洋に於ける市長に比すべき、支那の都會の吏。

さて、Kouan-Yu には、燦然と輝くやうに美しい娘があつた。Ko-Ngai といふその名は、常に詩人の口にのぼり、またその心は顏よりも更に美しかつた。Ko-Ngai は熱愛を以て父を愛したので、百人の立派な求婚者を拒んでも、彼女のゐなくなるため、父の家を淋しくすることを欲しなかつた。だから、龍印に封ぜられた、恐ろしい黄色の書狀を見ると、父のために心配して氣絶した。それから、正氣に返り、力も附いた後、父の危難を思つては、

休むことも寝ることも出來なかつたので、遂に密かに彼女の幾らかの寶石を賣却し、かくして得た資産を携へて、占星者の許へ馳せた。して、巨額の料金を拂つて如何にせば父の身の上にふりかかつてゐる危險を救ひ得るかを占はせた。そこで、占星者は天象を觀測し、銀河（私共の所謂、乳狀の道）の狀況に留意し、黃道帶の徴候を察し、五行の表と煉丹家の祕書を調べた。して、長い間沈默の後、彼女に答へていつた。「少女の肉が坩堝の中で熔かされ、處女の血が金屬の熔ける際に混ぜられるまでは、金と眞鍮は決して婚姻を求めない。また銀と鐵も決して抱擁しないだらう」彼女は心中悲哀に滿ちて家に歸つた。が、その聞いたことを、すべて心に祕めて誰にも告げなかつた。

遂にいよいよ、三度目に大鐘を鑄る、最後の努力の怖ろしい日が來た。して、Ko-Ngai は侍女と共に、父に隨つて鑄造所へ行つて、彼等は鑄型師の勞作と、流動體となつた金屬を瞰視する壇上の席に就いた。すべての職工は、孜々汲々、無言にて働き、火の呟く外には、何の音も聞えなかつた。して、火の呟く音は、大嵐の肉迫するやうな深い轟音と變はり、金屬の赤血色の池は、徐々と朝日の朱に輝き、朱は黃金の燦爛たる光に變じ、黃金は滿月の銀の顏のやうに、眩しいほど白くなつた。それから、職工達は狂燒する炎に薪を給

することを止めて、皆 Kouan-Yu の眼の上に彼等の眼を注いでゐた。すると、Kouan-Yu は型に流し込む合圖をしようと準備した。

しかし彼がまだ指を上げない内に、一聲の叫びが、彼の頭を振り向かしめた。して、すべての人々は烈火の轟々たる音を越えて、鳥の歌の如く、鋭く美はしく響いて、『お父さま、あなたのために！』といふ Ko-Ngai の聲を聞いた。彼女は叫ぶと共に、金屬の白い洪水の中へ跳び込んだ。熔鐵爐の熔けた金屬は、彼女を迎へて咆吼し、屋根までも素晴らしい炎の火花を跳ね飛ばし、土坑の際端から外へ勢よく溢れ出し、幾多の色彩ある渦卷く噴水を投げ上げて、それから電光、雷鳴、低囁を發しつゝ、慄へ乍ら鎭まつた。

そこで彼女の父は、狂氣の如く悲しんで、娘の後を追つて跳び込まうとしたが、腕力逞しいものどもが、彼を引き止め、確かりと押へたので、たうとう絶え入るばかりに弱くなつて、恰も死人の如くに運ばれて家に歸つた。それから、Ko-Ngai の侍女は、苦悶眩迷、言葉も出ないで、小さな靴を手に持つたまゝ、爐の前に立つてゐた。それは亡くなつた美しい女主人の眞珠と花の刺繡を施せる華奢な小さな靴であつた。といふのは、彼女は Ko-Ngai が跳び上つた時に、その足を捉まうとしたが、ただ靴を摑む事が出來たのみて、美麗なる靴はすつぽり脱げて彼女の手に殘つたからである。それて、彼女は全く狂人のやう

に、それを凝と視てゐるのみてあつた。

が、かゝる惨事はあつたものゝ、天子の命令は奉ぜざるを得なかつた。して、いかに結果が駄目であらうとも、鑄型師の仕事は完成せねばならなかつた。しかし金屬の光澤は、以前に比すれば更に純白に見えた。またその中に葬られた美しい屍體の片影をも留めなかつた。こゝに大規模の鑄造は濟んだ。驚いたことには、金屬が冷却してから、鐘は見るからに美くしく、恰好は完全、色はいかなる鐘にも優つてゐた。また少女の身體の痕跡をも留めなかつた。それは全然貴重なる合金に吸收され、よく混和せる眞鍮と黄金に交じり、銀と鐵の融合に加つたのだ。それから、人々が鐘を鳴らして見ると、その音調は他のいづれの鐘よりも深く、淸らかで、强かつた——百里の距離よりも一層遠くに達し、夏の雷の如く響いた。しかも、また大きな聲て、人の名、女の名—— Ko-Ngai の名を呼ぶやうに響いた。

それから、またこの鐘を强く撞き鳴らす合間々々に、長く低い嗚咽の聲が聞える。して、

その嗚咽の聲は、恰も泣く女が Hiai ！と呟くかのやうに、涙にむせび、哀訴する音を以て終はる。して、いつでも人々が巨鐘の黄金のやうな唸りを聞くときは、粛然沈默してゐるが、鋭く美はしい戰慄の音が空に傳つて、それから、Hiai ！の咽び泣きが聞えてくると、北京の色彩に富める町々の、あらゆる支那の母達は、彼等の子供に囁いていふ。『お聽きなさい、あれは Ko-Ngai が靴を求めて泣くのです！あれは Ko-Ngai が靴を呼んでゐるのです！』

投鑪成金

Ming-Y 秀才の話

詩人 Tching-Kou は歌つた。『Sie-Thao の墓上には、必らず桃の花が咲く』

讀者は彼女——美しき Sie-Thao ——は、誰のことだかと私に尋ねるだらう。彼女の石の寢床の上では、既に千年以上も樹木が低語いてゐる。して、彼女の名の綴音は、木の葉のさらさらといふ音に伴はれて、多くの指を有する樹枝の戰くにつれ、明暗の翱翔につれ、數限りなき野花の、女の呼吸の如く芳ばしき息と共に、聽者の耳に達する。が、彼女の名を囁くばかりで、その外に樹木の語ることは解らない。また樹木のみが Sie-Thao の年齡を知つてゐる。しかし彼女については、かの講古人——僅々數錢の報酬を得て、謹聽する群衆に向つて、毎夜古い物語を話す有名な支那の講談師——の誰からでも、幾分を聽くことが出來る。『今古奇觀』と題する書からも幾許を知ることが出來る。して、恐らくは該書に載つてゐる話の中で、最も驚くべきは、この Sie-Thao の物語である——

五百年前、明の孝宗皇帝の治世に、廣州府に Tien-Pelou といふ博學と恭敬を以て著は

れた人がゐた。この人には美しい獨り息子があつたが、これ亦學問技藝並びに風采の優雅に於て、儕輩に比ぶものがなかつた。彼の名は Ming-Y といつた。
この青年が十八の歳を迎へたときに、父の Pelou は Tching-tou の市の督學官に命ぜられたので、Ming-Y は父に伴はれて、そこへ赴くこととなつた。市の附近に、Tchang といつて、政府の特別高等なる委員を務め、富貴の身分の人があつた。この人は子弟のために良師を求めてゐた。新任督學官の到着を聞いて、この件について相談しようと思つて、Tchang は親しく彼を訪ねた。すると、たまたま彼の才藝に長ぜる息子に逢つて、談話を交はしたので、早速子供達のために Ming-Y を家庭教師として招聘した。
さて、この Tchang 卿の邸は、市から數里を隔つてゐるので、Ming-Y はその聘せられたる家に、寄寓するのが、得策であつた。そこで、青年は始めての淹留のため、一切必要の品を調へた。して、兩親は彼に別を告げるに當つて、賢い訓誡を與へ、老子並びに古聖の言を引用して彼に說いた。
「美しい顏によつて、世界は愛に滿たされる。しかし天はそれによつて決して欺かれるものではない。汝もし婦人が東から來るのを見たならば、西の方を見るがよい。もし少女が西から近寄つてくるのを認めたならば、汝の兩眼を東方に轉ずるがよい」

後日に及んで、青年がこの訓誡を注意しなかつたにしても、それはただ彼の若さと、生來愉快なる心の無思慮のためであつた。

かくて、彼は出立して行つて、Tchang 卿の邸に起臥することとなつた。その中に秋が過ぎ、それから、また冬も去つた。

春の二月になつて、支那人が『花朝』と呼んでゐて、百花の誕生日なる、芽出度い日が近づいた時に、Ming-Y の胸には兩親に逢つて見ようといふ倦戀の情が起こつた。そこで彼は Tchang 氏に其心を打明けた。主人は啻に許可を與へたばかりでなく、また銀二兩を强ひて彼の手に握らせた。それは『花朝』の祝節には、親戚朋友に進物を贈るのが、支那の慣習であるから、青年をして兩親に何かの土產を持つて歸らせようと思つたのであつた。

その日、空氣は花の香で睡氣を催すやうで、また蜂の唸り聲で振動してゐた。Ming-Y に取つては、彼が今通つて行く道は、多年の間、誰人も踏んだことがないやうに思はれた。草は路上に高く茂つて、兩側の巨樹は、彼の頭上に苔の生えた、大きな腕を交はし、道に暗い陰を作つてゐた。しかし葉陰は鳥の歌でそよそよと搖れ、森の深い奥は黃金色の蒸氣

て輝き、寺院が抹香に薫ずる如くに、花の呼吸で芳ばしかつた。この日の夢みる如き樂しさは、青年の心に浸み込んだ。して、彼は青紫色の空高く搖れてゐる樹枝の下で、若い草花の中へ身を憩はせ、芳香と光を吸ひ、心地よき靜閑さを味はうとした。かやうに休息してゐる際、或る物音が彼をして野桃の花咲く陰の方に眼を向けしめた。すると、彼は淡紅色の花の如くあてやかな妙齡の一婦人が、花叢の裡に隱れようとしてゐるのを看た。僅かに一瞬間の瞥見であつたけれども、青年は彼女の顏の美しさ、彼女の肌の黄金のやうな清らかさ、蠶蛾が翼を伸ばした如く、優美な曲線を描ける眉毛の下に輝く彼女の長い明眸を認めざるを得なかつた。青年は直ちに視線を轉じて、急に立上つて、行進を續けた。が、彼は木の葉の間から覗いた雙眸の魅惑的な印象に痛く惱まされたので、覺えず彼の袖に入れてゐた銀貨を落としたほどであつた。數分間の後、彼は背後から走つて來る、輕い跫音と、彼の名を呼ぶ女の聲を聞いた。非常に驚いて彼の顏を振向けると、彼は風采賤しからぬ侍婢を見た。その女は『私の女主人は、貴郎が途上に落としなされた、此銀貨を御拾ひ申して、御返しするやう私に申しました』と彼にいつた。青年は丁寧に女に禮を述べ、女主人に宜しく傳言して吳れるやう賴んだ。それから、彼は芳香馥郁たる閑けさの間を通り、世に忘れられた路傍に夢みてゐる陰を越えて、進んで行つた。彼自身もまた夢心地になつ

て、彼が見た美しい女のことを考へて、彼は奇異に、心臓の鼓動が早くなるのを感じた。

青年が歸途、同じ道を通つて、かの優しい姿が瞬間彼の前に現はれたことのある地點て、再び足を停めたのは、また以前のやうな好天氣の日てあつた。しかし今回、彼は窮りなき樹林の遠い奥に、先きには氣のつかなかつた一軒の家——田舍の住宅の、大きくはないが、非常に優雅な——を認めて驚いた。その彎曲せる、鋸歯狀の二重屋根の輝いた碧瓦は、樹葉の上に聳えて、蒼空の色と交り合ふやうに見えた。その彫刻を施せる玄關の綠黄色の意匠は、日光を浴びたる葉や花の精巧なる藝術的扮撰であつた。して、青年は大きな陶器の龜を兩側に据ゑたる、階段の絶頂に、女主人が立つてゐるのを見た。彼の熱烈なる空想の女は、彼女に彼の感謝の使命を齎し歸つたのと同一の侍女を伴つてゐた。青年が眺めてゐると、彼等の眼が彼に注がれてゐるのが認められた。彼等は恰も彼のことを語つてゐるかのやうに、微笑したり、話し合つたりしてゐた。して、内氣な彼も、遠くから美人に向つて會釋する勇氣を得た。彼の驚いたことには、若い侍女は彼に近寄つてくるやう手招きをした。そこて彼は赤い花の咲ける匍匐植物て半ば蔽はれた、田園風の門を開いて、階段の

方へ通ずる青々たる小徑に沿つて、驚異と臆病な喜悦の混ぜる感を抱き乍ら歩を進めた。彼が接近すると、美しい淑女は退いたが、侍女は廣い階段に立つて彼を迎へた。彼が上つたとき、侍女は云つた――

『私の女主人は、過日主人が私に命じて致させました些かばかりのことに對して、貴郎が御禮を述べようと思つてゐらつしやるだらうと存じまして、どうか貴郎がこの家へ御入り下さるやうお願ひ申上げます。主人は最早御評判で、貴郎を知つてゐますので、御目にかかりますれば仕合せと存じてゐます』

青年は羞かみ乍ら入つた。彼の足は森の苔の如く彈力を帶びた、柔かな莚の上に、少しの音をも立てなかつた。應接間は廣やかで、涼しく、新たに集めた花の香に薫つてゐた。心地爽かな閑靜が、家の中に遍く行き渡つてゐた。竹の簀戶から洩れる數條の光の上には、空飛ぶ鳥の影が映つた。燃えるやうな色の翅を有てる大きな蝶が入つてきて、彩畫を施せる花瓶の邊に霎時徘徊して、また神祕な森へ去つて行つた。すると、蝶の如く音も立てずに、この邸宅の若い女主人は、別の戶口から入つて、親切に青年に挨拶した。青年は胸へ兩手を上げ、低頭恭敬の禮をした。女は彼が思つてゐたよりも一層丈が高く、美しい百合の如く纖靭であつた。彼女の黒い髮には、橘の乳白色の花が組み合せてあつた。青白い絹

の衣裳は、彼女の動くにつれて、色合が移り變つて、恰も水蒸氣が光の變化に伴つて色を變ずるやうであつた。

兩人が慣例の挨拶を了つて、席に就いてから、彼女は云つた。『失禮ながら、貴客は私の親戚、Tchang 氏の子供達を教へ下さる、Ming-Y と申す、御方では御座いませんか。Tchang 卿の家族は、また私の家族ですから、あの子供達の先生は、私の親類の御一人としか思はれません』

Ming-Y は少からず驚いて答へた。『恐縮ですが、貴家の御名と、また貴女と私の主人の御親類關係を伺はしていただきたいものです』

『私の家は、Ping と申します』とこの貴婦人は答へた。『Tching-tou 市の古い家柄なのです。私は Moun-hao の Sie と申すものの娘でありまして、矢張り Sie と申します。私はこゝの Ping 家の Khang と申す青年に嫁いだのです。その婚姻のため貴郎の庇護者と親類になつたのですが、私の夫は結婚後、間もなく亡くなりましたので、私はこの孤獨の地を選んで私の寡居の間、住居することに致しました』

彼女の聲には、小川の旋律の如く、泉の囁きの如く、睡眠を催すやうな音樂があつた。またその話し振りには、青年が嘗て聞いたことのないやうな奇異に優美な趣があつた。し

かし彼女が未亡人であると聞いたので、青年は正式の招待がない以上は、長く彼女の前に留まつて居ることを欲しなかつた。そこで、彼に薦められた一椀の銘茶を啜つた後で、彼は立つて去らうとした。が、Sie は、さほど急に去ることを許さなかつた。

『いや、貴郎』と女はいつた。『どうか、今暫く私の家に御留まり下さい。貴郎の庇護者は、折角貴郎がこゝに御出になつたのに、私が立派な御客扱ひを致さないで、あの人同様に御もてなし申上げなかつたといふことを萬一耳にしますれば、さぞ非常に立腹しませうから。少くとも晩餐まで御留まり下さい』

そこで青年は留まつた。心中では竊かに欣んでゐた。それは彼女が未だ嘗て見たことのないほど、美しい女と思はれたからであつた。して、彼は兩親以上に彼女を愛する氣持を感じた。かくて彼等が話をしてゐる内に、薄暮の長い影は徐かに一様の黒紫色に混じた。夕陽の太い檸檬色の光は、消え失せた。して、人間の生と死と運命を支配する三公[三]と呼ばれる星宿は、北の空にその冷かに輝く眼を開いた。邸内には紅燈が點ぜられた。晩餐の食

註三　三公――大熊星座の六個の星が、二つづつ一組となつてゐるのを、支那の占星術者及び神話學者が、かく名づけたのである。この三組は更に大公、中公、小公と區別され、是等は北辰星と共に、天空の法廷を組織し、人の壽命及び運勢を支配する。（スタニスラス・ヂュリアン氏譯『太上感應篇』註による）

卓は設けられた。青年は食卓の彼の席に就いたが、食べようとする氣はあまりに起こらないて、ただ彼と相對する美貌のことをのみ考へてゐた。彼が皿に盛られたる珍味を殆ど味はないのを見て、女は酒を傾けるやう、若い客に強ひた。して、兩人は數杯を共に飲んだ。それは紫色の酒てあつた。酒を注がれた杯が一面に露を帶びる程に冷かてあつたが、しかも不思議な火を以て、脈管を溫めるやうに思はれた。飲んで行くまゝに、青年の眼には、一切のものが魔法による如く、一層輝いてきた。部屋の壁は後退りして、屋根は高くなるやうに見えた。燈火は吊るせる鎖の上て、星の如く輝き、女の聲は遠く朧げな夜の空に聞える、佳調の如く青年の耳へ浮かんてきた。彼の心は擴大してきた。彼の舌は弛んだ。して、彼が敢然口に發し得ないものと思つてゐたやうな言葉が、彼の唇から輕く飛んて出た。しかし女は彼を抑制しようとはしなかつた。彼女の唇は一つの微笑をも洩らさなかつたが、その長い明かるい双眸は、彼の讃辭に對して愉快さうな笑ひを見せ、またその熱烈なる欽仰嘆慕の凝視に對しては、愛情を籠めたる注意を以て應ずるやうに見えた。

　女はいつた。『私は貴郎の非凡の御才能と澤山高尚な技藝に御熟達のことを噂に承つてゐます。私は格別に音樂を修業致したといふのでは御座いませんが、少しばかり歌ふことを習ひました。折角貴郎のやうな專門のお方が御出下さいましたから、私は御遠慮申上げ

ないで、どうか貴郎に私と共に御歌ひ下さるやう大膽にも御賴み申上げます。また私の樂譜を御調べ戴きますれば、非常に滿足に存じます』

『私こそ光榮と滿足を感じます』と青年は答へた。『かやうな稀有の御厚意に對しては、感謝の申上げやうがありません』

侍女が小さな銀の呼鐘の響に應じて、樂譜を持つて出てて、また退がつた。青年は女の手書の譜を取上げて、熱心に檢べた。書いてある紙は、淡黄色を帶び、薄紗の地質のやうに輕くあつたが、文字は古風な美しさて、恰も黒松使者[註四]——かの蠅ほどの大いさの墨の精——によつて揮毫されたかのやうてあつた。また、その譜に附いてゐる落款は、元稹や、Kao-Pien や、Thou-mou ——唐時代の偉大な詩人や音樂家——のものてあつた。彼はかほどの貴重無比の寶を見て、欣然絶叫を禁じ得なかつた。また暫しも手から離す氣になれぬ程てあつた。

註四　黒松使者——漢の Hiuan-Tsong 皇帝が或る日、書齋にゐたとき、蠅ほどの小さな道士が、卓上の硯から現はれて云つた。『私は墨の精で、黒松使者といふ名のものです。眞に賢明な人が筆を執ると、その度毎に、墨の十二神が墨の面に浮かぶものです。私はこのことを告げるために來ました』モウリス・ヤムテル氏著『支那の墨』（一八八二年、巴里出版）參照。

彼は叫んだ。『これは實に帝王の寶に勝るほど貴重なものです。これこそ私共の生れない五百年の前に、歌つた諸大家の書です。よくも立派に保存されたものです！これはあの有名な「幾世紀後も石の如く堅く殘り、文字は漆の如くならむ」と云はれた墨てはありませんか？また、何といふこの譜の絶妙てせう！詩人中の王で、五百年前四川省の刺史であつた Kao-Pien の歌てす』

『Kao-Pien！好きな Kao-Pien！』と女は眼に奇異な光を湛へ乍ら呟いた。『Kao-Pien はまた私の愛好作家てす。貴郎と諸共に、彼の詩を古曲に合はせて歌ひませうよ――もつと今日よりは、人々が氣高くて賢かつた頃の音樂てすね』

それから、彼等の聲は相合して、流暢なる美はしい音となつて、芳ばしい夜の中に鳳凰(註五)

註五　鳳凰――この寓意的の鳥は、幾分亞剌比亞の不死鳥(フヰーニツクス)と對應するのであるが、高五キユーピツト（一キユーピツトは十八吋乃至二十二吋）、五色の羽毛を有し、五音の變調に歌ふと稱せられる。雌鳥は不完全なる調子で歌ひ、雄鳥は完全に歌ふ。鳳凰は支那の音樂に關する神話や傳說によく現はれてゐる。――（不死鳥は唯一無二の鳥で、亞剌比亞沙漠に於て六百年間生活する毎に、埃及國ヘリオポリス市に行つて、自ら身を燒き祭壇の灰と化し、それから再び其灰燼中から、若返つて美しい姿を以て蘇生し、更にまた六百年を經る。かくして輪廻轉生、極まることなしと稱せられる。――譯者）

の聲の如く立騰つた。しかも、間もなく、青年は彼の伴侶の聲の魅力に壓せられて、唯無言恍惚のまゝ、聞き入つてゐるばかりであつた。同時に室の燈光は朦朧となつて波動する如く見え、愉快の涙は双頬を傳つて流れた。

かやうにして夜の時刻は移つた。それでも猶ほ彼等は話をつゞけ、冷たい紫の酒を飲み、唐代の歌を歌ひ乍ら夜を更かした。彼が立たうとしたのは、一たびではなかつたが、その度毎に女は、銀のやうに甘美な彼女の聲で、昔の大詩人達や、また彼等が愛した女の話を始めたので、彼は魅せられたやうになつた。また彼女は非常に珍異怪奇な歌を歌つたので、聽覺の外、彼のあらゆる感覺は死んで了つたやうであつた。たうとう彼女が歌を止めて、彼の健康のために祝杯を擧げた時、青年は彼の腕を彼女の頸に捲きつけ、彼女の纖弱な頭を彼の方に引きよせて、酒よりも赤くて、甘き彼女の雙脣に接吻することを堪へ得なかつた。すると、彼等の脣は最早離れなかつた——夜は更けて行つたが、彼等はそれを知らなかつた。

鳥は目醒め、花は朝暾に眼を開いた。して、青年はいよいよ彼の可愛らしい妖術者に別

れを告げねばならなかつた。女は玄關の墻まで伴いて行つて、懐かしげに接吻して云つた『どうか、なるべく度々御出下さい。貴郎は祕密を洩らすやうな、信實のない人達と異つてゐることを、私は存じてゐますが、でも、まだお若いから、時としては御注意の足らぬこともありませう。どうか、私共の愛は、ただ空の星が知つてゐるだけだといふことを御忘れ下さいますな。誰人にも御話しをしてはいけません。それから、私共の幸福の夜の紀念として、この小さなものを御持ち下さい』

かく云つて、女は精巧珍異の小さな品――孔夫子を崇めて、虹が作つたやうな、黄色の硬玉[註六]て、蹲踞せる獅子の形に作れる文鎮――を彼に呈した。青年はやさしく、その贈物とそれを與へた美しい手に接吻して、『もし貴女が私を叱責下さるやうなことを、私が知りつゝ犯しますれば、神罰覿面です』と誓つた。して、彼等は互に誓を交はして別れた。

註六　硬玉――碧玉の一種である。藝術的材料として、常に珍重せられ、支那人は yuh と稱してゐる。『感應篇』に、孔子が孝經を完成してから、天を拜した時、深紅の虹が空から降つて、彼の足下で一片の黄色硬玉と變つたといふ珍らしい傳說がある。スタニスラス・デュリアン氏譯書四九五頁參照。

その朝、Tchang の邸へ歸つてから、彼は生まれてから始めての虛言を吐いた。今や氣

候も頗る惡くなつたから、母は彼にこれから夜間自宅に泊つて呉れるやう求めたと告白し、道程は幾分遠いが、彼は强壯活潑であるし、新鮮なる空氣と健康なる運動が必要であると云つた。Tchang は、すべて彼の言を信じ、何等の異議を挿まなかつた。そこで、靑年は夜間を美しい Sie の家で過ごすことが出來るやうになつた。每夜彼等はその初會を愉絕快絕たらしめたと同じ娛樂に耽つた。彼等は交る交る歌つたり、物語をした。彼等は碁を圍んだ――Wu-Wang によつて發明された深遠なる遊戲で、戰爭の模擬である。彼等は花、樹木、雲、鳥、蜂について八十韵の詩を作つた。が、すべての技藝に於て女は遙かに彼女の若き愛人を凌駕した。圍碁の際には、いつも彼の王將が包圍を受けて敗れた。詩作に當つては、女の詩は詞彩の調和、形の優美、想の古典的高尙に於て、彼のよりも常に勝さつてゐた。して、彼等の選んだ題は、いつも最も難かしいものであつた――唐時代の詩人のものであつた。彼等が歌つた歌もまた五百年前のもの――元稹や、Thou-mou や、就中名詩人で、四川省の刺史であつた Kao-Pien の歌であつた。

かやうにして、彼等の戀の上に夏は榮えて、また衰へ、それから、幻ろしの黃金のやうな霧と、不思議な紫色の影を伴へる、輝ける秋が來た。

すると、偶然彼の父が、その子の主人に逢つたとき、質問を受けた。『最早冬も近くなつたから、貴下の息子さんは毎夕市の方へ歸つて行くに及ばないではありませんか。道中は遠くもあるし、それに朝歸つてきた際には、疲れ果てたやうに見えます。雪の降る季節の間、なぜ私の家へ泊らせないのですか』彼の父は非常に喫驚して、答へた。『閣下、愚息は市へも出でて參りませぬ。また此夏中、私共の宅へ參つたこともありません。多分惡習に陷りまして、よからぬ友達と夜を過ごすので御座いませう――恐らくは賭博とか、或は華舫の女と酒を飲むのではありますまいか』しかし長官は答へた。『いや、そんなことは思ひもよらぬことです。私は未だ嘗て、あの青年に何等の惡弊を發見しないのです。またく、私の附近に酒舗や華舫や道樂の場所とてはありません。屹度同年配の愉快な友達を得たので、それと夜を過ごすために、さもなくば遊びに行くことを私が許さないと思つて、虚僞を云つたのでせう。どうか私が此祕密を發見し得るまでは、彼に何も云はずに置いて下さい。して、今夜私は家僕を遣はして、彼の後を蹤けさせ、行先を注意させますから』

父は直ちにこの提議に同意し、翌朝「Tchang」を訪ねることを約して、家へ歸つた。夜になつて、青年が邸を出てて行くと、一人の僕が見えないやうに、遠くから彼について行つ

た。しかし道の最も暗い處に達してから、青年は宛然土地に呑み込まれたかの如く、忽然姿が見えなくなつた。長い間、彼を捜索しても無効であつたので、僕は非常に當惑して歸つてきて、そのことを報告した。Tchang は直ちに Pelou の許へ使を遣はした。

一方、青年は愛人の室へ入ると、彼女が涙を流してゐるのを見て、驚き、且つ困つた。女は彼の頸に兩腕を捲きつけて、咽びながら云つた。『私共は永遠に分かれねばならぬことになりました。その譯は貴郎に云へません。抑もの始めから、私は斯うなるものとは知つてゐました。しかしそれでも、暫くの間は、私にはあまりにも殘酷な損失、あまりにも案外な災難と思はれまして、泣かずには居られないのでした。今晩限りで私共はお互に復た逢ふことはないでせう。して、貴郎は一生私をお忘れ下さることは出來ないだらうと存じますが、また貴郎は大學者になつて、富貴を授けられ、それから、或る美しくて、貴郎を愛する女が、私を失ひになつたのに對して、貴郎を慰めるだらうと存じます。て、最早悲しいことはお互に語らないで、この最後の晩を愉快に過ごしませう。さうして、私の思ひ出が貴郎に取つて、心苦しくならぬやう、また貴郎が私の涙よりも私の笑ひを記憶して下さるやう致しませう』

彼女は涙の玉滴を拭ひ去り、酒と樂譜と絹糸の七絃琴(きん)を持出てて、彼をして瞬間も、や

かて來たらんとする別離のことを話させなかつた。して、彼女は夏の潤水が唯碧空のみを映ぜる靜けさと、憂慮悲哀の雲影が心の小さな世界を暗くしない前に於ける、胸裡の沈着平穩を詠ぜる古歌を彼のために歌つた。間もなく、彼等は歌と酒の喜悦に悲しみを忘れた。して、その最終の數時間は、彼に取つては彼等の最初の幸福の折よりも、更に無上のものに思はれた。

註七　琴 Kin ——支那の樂器中、最も完全なもの。「學者の琵琶」とも稱せられる。Kin といふ語は、また「禁」を意味する。支那人の信仰によれば、音樂に「邪念を去つて人間の情を正しくする」から、このやうな名をこの樂器に與へたのだと云はれてゐる。ウヰリヤムス氏著「中國」參照。

が、麗らかな黃色の朝が來ると共に、彼等の悲しみは歸つてきて、兩人は泣いた。再び彼女は愛人を送つて階段まで行つて、別れの接吻をした。その際、彼の掌中へ別れの贈物を押し込んだ——それは瑪瑙の小さな筆筒であつた。驚くべき彫刻が施され、堂々たる詩宗の卓を飾るに適はしいものであつた。かくて、彼等は幾多の涙を灑いて、永久に別れた。

しかし青年は、それを永遠の別れと信ずることが出來なかつた。彼は「否、明日は彼女

を訪問しよう。私は彼女なくては生きて居られないし、また、彼女は屹度、私を迎へることを拒絶し得ないだらう』と考へた。こんなやうな考へに滿たされ乍ら、彼が Tchang の家に達すると、彼の父と彼の庇護者が、玄關に立つて待ち設けてゐるのを發見した。彼がまだ一語を發し得ない内に、父は詰問した。『其方は此頃毎夜、何處で泊つてゐたのだ』

彼の虛僞が露見したのを知つて、彼は何等の答をも敢てしなかつた。彼は父の面前で、頭を垂れ、赤面無言のまゝでゐた。すると、父は杖を以て激しく彼を鞭撻して、祕密を打明けるやう命じた。たうとう一つには父に對する恐怖と、また一つには『父に違背する子は、百回の鞭撻を以て罰すべし』と規定せる法律を恐れて、彼は彼の戀愛の歷史を口籠りながら述べた。

Tchang は青年の物語を聞いて、顏色を變へた。彼は叫んで云つた。『私の親戚に Ping いふ名はない。君が說明したやうな女のことを私は聞き及んだこともない。しかし、君は家大人に虛言を吐く氣にはなれまい。どうも、この事件には奇異な疑はしい點がある』

そこで青年は、女が彼に與へた贈物――黃色硬玉の獅子、瑪瑙に彫刻せる筆筒、また美姬の創作にかかる詩――を示した。Tchang が驚くと共に Pelou もまた驚いた。二人とも瑪瑙の筆筒と硬玉の獅子は數百年も地中に埋れた趣を有することと、現代の工匠の模し得

ない技巧なることを認めた。加ふるに、詩は唐代の詩風で、眞に傑作であつた。

Tchang は叫んだ。『Pelou 君、私共は早速令息を伴つて、是等の不思議なものを得た場處へ行つて見て、私共で實際を調べて見ませう。乾度、令息は眞實を話してゐるのでせうが、私の腑に落ちないのです』して、三人相携へて Sie の住家の方へ赴いた。

が、彼等が道中の最も木蔭の多い場所、花香が最も芳ばしく、蘚苔が最も緑色を呈し、且つ野桃の果實が最も紅く輝いてゐる場所へ達したとき、青年は森を通して凝視して、驚愕の叫を發した。碧瓦の屋根が高く聳えてゐた處には、今は唯青い空虚があるのみで、緑黄色の家の正面が見えてゐた處には、輝いた秋の光りの下に、唯木葉のちらちらするのみであつた。して、廣い壇が延長してゐた處には、唯古色蒼然、蘚苔に深く蝕せられた一個の廢墳が、認められるのみであつた。その上に刻まれた名は、最早讀むことが出來なかつた。Sie の家は失せてゐたのであつた。

突然 Tchang は手を以て額を叩き、Pelou の方に振り向いて昔の詩人、Tching-Kou の有名な詩を誦した――

『Sie-Thao の墓上には必らず桃の花が咲く』

彼は續いて云つた。『Pelou 君、令息を魅惑した麗人は、私共の眼前にその墓が立つてゐる彼女に相違ない。彼女は Ping-Khang に嫁いだと云つたではないか。そんな名の家族はないが、それは實際近く市中にある廣い横町の名です。彼女の云つたすべてのことには、暗黑な謎があつた。彼女は自身を Moun-Hiao の Sie と稱した。そんな人名はない。そんな町名もない。しかし Moun といふ字と hiao といふ字を合はせると、Kiao といふ字になる。お聽きなさい！ Kiao 町にある Ping-Khang といふ狹斜は、唐時代の名妓輩の住んでゐた處でした。彼女は Kao-Pien の詩を歌つたのではありませんか。それから、彼女が贈つた筆筒と文鎭には、「Pho-hai 府の Kao 所有の清翫品」といふ文字が讀まれるではありませんか。その府は最早存してゐないが、詩人 Kao-Pien の思ひ出は殘つてゐます。彼は四川省の刺史であつて、また一大詩人でしたから。且つ彼が Chou の地にゐた時は、彼の寵幸したのは美しい遊妓 Sie ―― 當時のあらゆる女の中で優婉無雙であつた Sie-Thao ――ではありませんでしたか。あの詩稿を彼女に贈つたのは、彼なのです。あの珍重すべき美術品を彼女に與へたのも彼なのです。彼女は死んでも他の普通の女達とは違ふのです。彼女の四肢は、灰燼に歸したのでせうが、まだこの深林の中に、何か彼女のものが生きてゐます――彼女の幽靈が依然この森蔭の地に彷徨してゐるのです』

Tchang は言葉を止めた。漠然いひやうのない恐怖が三人を襲つた。薄い朝霧が、緑色の遠景を朦朧たらしめて、森の怪淒なる美を深めた。一陣の力なげな微風が吹いて、花香の尾を曳いて去つた——枯死せんとする花の最後の薫り——忘れられた衣裳の絹に縋り附く衣薫の微かな名殘りてあつた。して、それが過ぎ去る時、樹木は沈靜を破つて、『Sie-Thao』と囁くやうに思はれた。

息子のため、痛く心配して、Pelou は直ちに彼を廣州府にかへした。その土地て、後年 Ming-Y は彼の材能と學問のために榮位高譽を得た。して、彼は名門の女を娶つて、德藝共に有名なる兒女達の父となつた。彼は決して Sie-Thao を忘れ得なかつた。しかし決して彼女のことを口にしなかつたとのことてある。たとひ兒女達が彼の書机にいつも載つてゐた二個の美麗な品——黄色硬玉の獅子と瑪瑙の彫刻の筆筒——の物語をするやう求めることがあつても。

黒松使者

織姫の傳說

老子の貴い書物の本文に附せられた『感應篇』といふ奇異なる註釋の中に、頗る古い一小話がある。その話が非常に美はしいため、始めて語つた人の名は、一千年間も忘れられてゐても、話だけは四億民の記憶の中に、恰も一たび習ふと、永遠に覺えられる祈のやうに、今猶ほ生きてゐる。支那の作者はこの話について、都會の名も、また州の名も擧げてゐない。たとへ最も古い傳說を述べる場合にも、かゝる省略は滅多にないことである。私共はただこの話の主人公の名は、Tong-yong であつたことと、彼が約二千年前の漢時代に住んでゐたことだけを告げられてゐる。

Tong-yong の母は、彼がまだ幼稺の時に死んでゐた。して、彼が十九歲の青年になつたとき、彼の父もまた失せたので、彼は全然孤獨の身となつて、しかも何等の資產もなかつ

た。それは、彼の父は極めて貧しくて、彼の子を教育するために、非常な窮境に陷つて、儲けたものから一錢をも貯へ置くことは出來なかつたからである。彼は慣例の葬式を行ひ、吉方の地に墓石を立てて、慈父の記憶に敬意を表する事が出來ないほど窮乏してゐるのを大いに歎いた。貧しいもののみが貧しいものの知り合である。彼の知人中、誰一人として、葬式の費用を辨ずるため、助力を與へ得るものはなかつた。この青年が金を得る方法は、唯一つあつた――富農に身を賣つて奴隷たることであつた。して彼は遂にさうしようと決心した。知人達は彼に思ひ止まらせようと、全力を盡くしたが駄目だつた。また將來の援助を約して、彼を賺かして、その擧行を延ばさせようと試みても、無効に了つた。彼はただ答へて、出來ることなら、百回彼の自由を賣つても、暫くなりとも、父の記憶を崇めないまゝ放擲して置くには忍びないといつた。更にまた彼の青春と腕力に信頼して、彼はその服役に對して高價を附することに定めた。立派な墓を建て得るやうな金高て、彼としては殆ど拂戻し得られさうもないほどであつた。

そこて、彼は奴隷や負債者の身が賣りに曝らしてある、廣い公開の場所へ行つて、彼の

服役代價と勞働者として彼の資格の目錄を書いた札を肩にぶらさげて、石の腰掛に坐つてゐた。札の文字を讀んだ多くの人々は、要求價格に對して侮蔑の微笑を洩らしただけで、一言も發せずに過ぎ去つた。他の人々は單に好奇心のあまり立停つて彼に尋ねた。虚僞の賞賛を以て褒める人々もあれば、また明からさまに彼の献身無私を馬鹿にして、彼の子供らしい孝行を笑ふものもあつた。かやうにして空しく長い退屈な時間が經つて、彼は殆ど主人を見出す事を絶望してゐると、一人の州の高官——威風堂々たる美男子で、一千人の奴隷を有し、廣大なる邸宅の持主——が、馬に乘つて近づいた。高官は其韃靼馬の手綱を控へて、札を讀んで、奴隷の代價を思案した。彼は微笑もせず、助言もせず、質問も發しなかつたが、要求の價格を見、また青年の立派で屈強な四肢を見て、無造作に彼を買つて、單に從者をして金高を拂はしめ、且つ必要の證書類を調製するやう命じただけであつた。

かくて、Tong は心願を遂げて、小さな形ではあるが、巧妙なる技術家の意匠により、熟練なる彫刻師の腕によつて仕上げられて、見るものの眼を娛しましめさうな墓碑を立つる事を得た。して、まだ其設計中に、恭敬を盡くせる式は擧げられ、死者の口中へ銀貨を

入れ、白い提燈を戸の上に吊るし、神聖な祈が誦せられ、また死者が仙鄕で要しさうな、紙で作つた一切のものが、淨められた火で燒かれた。それから、方位鑑者と巫術師が、いかなる不運の星も照らさないやうな埋葬地、いかなる惡鬼や龍も擾亂を加へないやうな安息の場所を選定した後に、美しい塚は建設された。して、幻の錢が途上に撒かれた。葬列は死者の家を離れて、祈禱と涕泣を以て、彼の慈父の遺骸は墓に運ばれた。

その後、彼は奴隷として彼の買主の勞役に服し始めた。主人は彼を住ませるため、小さな小屋を與へた。そこへ彼は祖先の名を認めた木牌を持つて行つた。すべて孝子は、このやうな木牌の前で、日毎に祈の香を炷き、家庭の禮拜の優さしい勤行を營むのであつた。

三たび春が花を以て土地の胸を薫らせ、三たび掃墓日[註八]といふ死者の祭が守られ、三たび彼は父の墓を掃除して、裝飾を施し、果實と肉を五重に積んで供へた。喪期は終つても、彼が父を哀慕する心は止まなかつた。歲は月の運行につれて進み、一時の喜びも、一日の

註八　掃墓日――一般に先祖を拜する日。天主敎に於ける萬靈日（オール・ソールズ・デー）（十一月二日）と同じもので、四月上旬、淸明の季節に當る。

愉快なる休憩をも彼に齎さなかつたが、彼は決してその服役を悲しまなかつた。また祖先の祭祀を缺くことはなかつた——その內に、たうとう稻田の熱病が激しく彼を襲つて、彼は病褥から起きられぬやうになつた。そこて、同じ仲間の勞役者達は、彼は畢竟死ぬるに相違ないと考へた。奴隷や家僕達は、全然家事や田畠の勞働に忙しかつたので、彼を看護するものもゐなかつた——彼等はすべて日出と共に働きに出掛け、漸く日沒の後疲れて歸つてくるのであつた。

さて、病める青年が衰弱疲憊の極、眠るかと思へば覺め、覺めてはまた眠に入つてゐるとき、見知らぬ美人が彼の側に立ち、彼の上に屈んで、彼の額に彼女の恰好よき手の、綺麗な長い指を觸れたことを夢に見た。して、彼女の冷んやりした接觸と共に、不思議に甘美なる衝動が、彼を貫通して、彼のあらゆる血管は、新生命がしみ渡つた如く沸き立つた。驚いて目を開いて見ると、正しく夢に見た、魅惑させるやうな女が、彼の上に屈んでゐて、彼女のたをやかな手は、實際彼の鼓動打てる額を愛撫してゐた。しかし熱病の炎は最早消えてゐて、心地よき涼しさが今は身體のあらゆる纎維に滲透し、夢に見た衝動は、まだ激烈なる歡喜の如くに血中に踊つてゐた。同じ瞬間に、靜淑な訪問者の双眸は彼の兩眼と出逢つた。して、彼はそれが異常に美しく、燕の翼の如き曲線をなせる眉の下に、輝く黑い

寶石の如く光つてゐることを知つた。しかしその靜けき凝視は、水晶の中を透る光の如くに、彼を貫くやうに思はれた。して、何となく一種の畏怖が彼を襲つたので、唇頭まで上つた問ひの言葉も發音することを得なかつた。すると、まだ彼を撫で乍ら、彼女は微笑していつた。『私はあなたの御元氣を恢復させ、あなたの妻となるために參つたものです。お起き下さいませ。して、御一緒に禮拜を致しませう』

女の朗かな聲は、鳥の歌の如き諧調を有つてゐたが、その視線には儼然たる力があつて、彼には抵抗し難いもののやう思はれた。臥床から立上つてみると、彼の體力の全く回復してゐるのを發見して驚いた。しかし彼の手を捉へた、冷んやりした纖手は、非常に速かに彼を導いて行つて、彼に驚愕の遑なからしめた。彼はいかにもして彼の困窮を語り、妻を養ふ力なきことを述べる勇氣を鼓するやうに努めたが、女の長い黑い眼には、何となく凛乎たるものがあつて、彼をして言葉を發することを得ざらしめた。して、恰も彼の心底を、その不思議な凝視によつて看破したかのやうに、彼女は同じ朗かな聲で彼にいつた。『私が支給致します』それから、彼はそのみじめな姿と、ぼろぼろの衣服のことを考へて、恥辱の念に顏を赧らめた。しかし彼は女もまた庶民階級のやうな、貧乏らしい服裝であることを見た——何等の裝飾をも帶びないで、また足には靴さへ穿いてゐなかつた。彼がまだ

言葉を發しない内に、二人は祖先の位牌の前へ來た。そこて、女は彼と共に跪いて祈つた。それから、酒杯——何處から齎したのか、彼は知らなかつた——を擧げて、彼に誓を立て、共に天と地を拜した。かやうにして、彼女は彼の妻となつた。

それは不思議な結婚と思はれた。といふのは、その日にも、またその後にも、彼は妻にその家名や、里方の地名を尋ねることを敢てし得なかつた。また彼女について彼の仲間達が發した好奇的質問に對して、返答が出來ないばかりでなく、彼女もまたその名が Tchi であるといふだけて、自身のことについて、一言も云はなかつたからである。彼女の眼が彼に注がれてゐる間、彼は恰も自己の意志を持たぬものの如く、彼女に畏怖を感じてゐたけれども、しかし彼は言ひやう無いほどに彼女を愛してゐた。して、彼の結婚以來は、彼の奴隸といふ考へが、彼を壓迫することを止めた。魔法の力による如く、小さな住家は變化された。その窮狀は可愛らしい紙細工によつて隱蔽された——綺麗な手品を使つて、費用をかけないで、巧妙な裝飾を施すことは、婦人のみがその祕訣を知つてゐる。

毎朝味爽に、また毎夜歸宅の際、若い夫はよく調理された潤澤なる食膳が、彼を待ち受

けてゐるのを見出した。が、妻は終日機上に坐して、その地方では見られないやうな方法によつて絹を織つた。彼女が織るまゝに、絹は光澤ある黄金が緩やかに流れる如く、機から流れ出てて、その波動の上へ青紫や深紅や碧綠の珍らしい形を現はし、幽靈のやうな騎士や、龍に牽かれた幻の戰車や、雲の尾を棚引いた軍旗を織り出した。龍といふ龍の髯には、不思議な眞珠がぴかぴかしてゐた。騎士達の冑には、順位の寶石が燦光を放つてゐた。して、每日 Tchi は、かゝる綾模樣ある絹の大きな一反を織り上げた。それで、彼女の機織の評判は、廣く傳播した。遠近から人々が驚くべき仕事を見物に集つてきた。して、それを聞き傳へた大都會の絹商どもは、使を Tchi に送つて、織物を依賴し、また彼女の祕傳の敎へを求めた。そこで、彼女は報酬として持參された銀塊に對して、希望通りに織つてやつた。しかし彼等が傳授を懇願に及んだ時、彼女は笑つていつた。『あなた方の中には、私のやうな指を持つてゐらつしやる方がありませんから、到底御敎へ申上げることは出來ませぬ』また實際、誰も彼女が機を織るとき、その指を識別することは出來なかつた。さながら速く翔つてゐる蜂の翼の振動を見る如くであつた。

季節は移つて行つたが、Tong は決して缺乏を知らなかつた。彼の美しい妻は、實によく『私が支給致します』といふ契約を履行したのであつた。して、絹商輩の齎した、輝ける銀塊は、Tchi が家財を入れるために買つた、彫つて製作せる大櫃の中に、段々高く積み上げられた。

遂に或る朝、Tong が朝餐を了へて、畠へ出掛けようとするとき、妻は思ひがけなくも、彼を內に留まらせた。して、大櫃を開けて、それから隷書[九]といふ公文書體で書いた文書を取出して彼に與へた。彼はそれを視ると、欣躍絶叫した。それは彼の釋放の證書であつた。女は密かにその不思議な絹の代金を以て、夫の自由を買ひ取つたのであつた。

註九　隷書――支那の六書體の中、第二に位する。ヰリヤムス氏『中國』參照。……道敎の傳說によれば、天の命令は、最も古い印章用の書體（篆書）で書いてある。だから、電光に打たれて死んだ人の死體に印せられた表象は、その書體で書かれた裁判の宣告と見做された。――（普通は五書體であるが、六書體としたのは、鹽谷博士の說によれば、大篆、小篆、隷、楷、行、草、と數へたのであらうとのことである。――譯者）

『最早如何な主人に對しても、あなたは御苦役をつとめなさるに及びません』と彼女は

いつた。「ただあなたのためにのみ御働きなさるのです。それから、また私はこの家を、中にあるもの一切と共に、買ひました。その上、南方の茶畠も、隣りの桑園も、すべて悉くあなたのものです。」

彼は嬉しさの餘り、覺えず彼女の前に平伏して拜まんばかりになつたが、彼女はそれを制止した。

かやうにして、彼は自由の身となつた。それから、彼の自由と共に繁昌が作つて來た。彼が貰い土地に與へたものは、百倍になつて歸つてきた。して、彼の僕婢輩は彼を愛した。また非常に無言ではあるが、しかも非常に周圍の人々に親切なる、美しい主婦を祝福した。しかし絹機はやがて手を付けられぬやうになつた。それは彼女が男の兒を生んだからである。それは頗る綺麗な子供で、彼がそれを眺めたとき、嬉し泣きをしたほどであつた。その後、妻は全く子供の世話に沒頭した。

さて、やがてその子供も母に劣らず驚異すべきものだといふことが明白になつてきた。赤ん坊は生まれて三ケ月目にものを言ひ、七ケ月目には聖賢の格言を諳誦し、尊い祈を朗

吟することが出來た。十一ヶ月にならぬ内に、巧みに筆を使ひ、老子の訓言を立派に寫すことが出來た。して、寺僧達は來て見て、この寧馨兒と談話を交へ、その愛らしさと、その賢い言葉を感歎して、Tong を祝福していつた。『たしかに、この子供さんは天の賜です。天があなたを愛し玉ふ瑞徵です。あなたが百歳の福壽をお重ねなさるやう祈ります』

十一月のことであつた。花は枯れ、夏の薫りは消え、風は次第に冷かになつてゐた。して、Tong の家では夜の火が點ぜられてゐた。夫妻は心地よき火の光りを浴びつゝ、長時間共に坐して、夫は盛んに希望と欣びを談じ、將來傑れた人となる子供のことや、親として幾多の計畫などを語つた。一方、妻はあまりに語らないで、夫の言葉に耳を傾けては、しばしば應答の笑を浮かべ乍ら、驚異の眼を彼に向けた。こんなに美しく彼女が見えたことは、未だ嘗てなかつた。して、彼は彼女の顏を注視し乍ら、夜の更けるのも、火の低く沈んで行くのも、また風が窓外の落葉した樹間に鳴るのも打忘れてゐた。

突然彼女は無言のまゝ立上つて、彼女の手の中へ彼の手を執り、かの奇異な結婚の朝に於ける如く、靜かに彼を導き、夢の中に微かに笑を洩らしつゝ眠れる子供の搖籃へつれて

行つた。その瞬間、彼の念頭に、彼女の眼が始めて彼の眼とぴつたり出逢つた際に感じたと同一の奇異なる恐怖が襲つてきた——その漠然たる恐怖を、愛情と信頼の心が鎮めたのであつたが、鬼神に對する恐怖の如く、決して全然逐ひのけることは出來なかつた。すると、彼は全く我れ知らずに、見えざる偉力ある手の壓迫に隨つたやうに、神に向つて跪坐する如く、彼女の前に低頭した。それから、再び眼を舉げて女の顏を見るや否や、畏怖に襲はれて眼を閉ぢた。といふのは、彼女は此世のいかなる女よりも高く彼の前に聳え、彼女の周圍には日光の如き光耀があつて、彼女の四肢の光りは、衣裳を透して輝いたからであつた。しかし彼女の美はしい音聲は、あらゆる昔の優しみを帶びて、彼に語つた。『いよいよあなたから去つて行かねばならぬ時が參りました。實は私は人間から生まれたのではありませぬ。それ故、ただしばらくの間、化身となつて現はれてゐました。しかし私は私共の愛情の誓をあなたに遺しておきます——此綺麗な子供は、行末あなたに對して、あなたと同樣な孝子となりませうから。實際私はあなたの孝心の報酬として、天からあなたに遣されたのです。して、今は私の天の家鄉へ歸つて行かねばならぬことを、どうか御悟り下さい。私は女神の織姫で御座います』

かく語つてゐる際にも、光輝は消えて了つた。して、彼は再び眼を開けると、彼女が永

遠に去つたことを知つた――空の凨が通る如く不可思議に、吹き消された炎の光りが、取り返しのつかぬやうに。しかし一切の戸は鎖ざされ、窓も悉く塞いであつた。子供は眠りの中に微笑し乍ら、依然として眠つてゐた。戸外では夜は明けかかつてゐた。空は急速に輝き出した。東天は太陽を迎へて、莊嚴華麗な黄金の高い門を開いた。すると、其光りに照らされた朝霧は、いろいろに色彩の移つて行く、驚くべき形狀に變つた――織姫の機で織られた絹の夢の如き、不思議な美しい綾織り模樣に。

太上感應篇

Yen-Tchin-King の歸還

神靈の應報を論ぜる、尊い『感應篇』の第三十八章に、Yen-Tchin-King の傳說が述べてある。この立派な人物が世を去つてから、千年を經てゐる。彼の生存してゐたのは唐の盛時であつたから。

註十　唐時代――西暦六百二十年から九百二年に亘つて榮えた時代で、文學藝術を奬勵し、支那に最も華麗なる文化の時期を與へた。第二章の話に擧げた三詩人は西暦七百七十九年より八百五十二年の間に盛名を揚げた人々である。

さて、Yen-Tchin-King が六大法衙の一つの最高判事であつた頃に、兇惡の一將軍、Li-hi-lie といふものが、叛旗を擧げて、北方諸州の數百萬人を味方に寄せ、破壞の勢、猖獗を極めた。すると、天子はこの形勢を知り、且つ Hi-lie は獰猛無比で、世の中で大膽の外、何ものをも尊敬することを知らない人物であることを知つたので、Tchin-King に命じて、

Hi-lie を訪ね、大義を說いてその心を翻へさせ、また彼に與みして叛軍に加つた人民には、天子の譴責と警告の詔を讀みきかせるやうにした。それは、Tchin-King はその智と實直と勇氣にかけては、國中に有名であつたからである。して、天子は若し逆賊も忠義德操共に確乎不拔の士に耳を假すとすれば、彼は Tchin-King の言葉をこそ傾聽するだらうと信じた。そこで Tchin-King は彼の職服冠冕を着け、また家を片附けて、妻子を抱擁してから、馬に乘り、天子の詔書を懷にして、單身叛徒の轟々たる軍に向つた。『私は歸つてくる。心配するな』これは彼が馬に鞭をあて、出立したとき、階段から彼を見戍つてゐた老僕に、告げた言葉であつた。

Tchin-King は、遂に馬から下り、叛軍の營に入つて、それから、大勢の中を通りぬけて、Hi-lie の面前に立つた。叛軍の大將は部下の諸將軍の間に高く坐つて、劍光刀影の稻妻と、數限りなき銅鑼の雷鳴に取りまかれ、黑龍の旗の絹の折目は彼の頭上に波を打ち、大きな火は彼の前にぱちぱち音を立てて燃え上つてゐた。また Tchin-King は、その火の舌が人間の骨を甜めてゐて、人間の頭蓋骨が灰の中に黑く焦げて橫たはつてゐるのを見た。

しかし彼はその火を眺めることも、また Hi-lie の眼を覗き込むことをも恐れないで、天子の勅語の書いてある、芳香の薰ぜる、黄色の絹卷物を懷中から取り出だし、それに接吻をしてから、朗讀をしようとした。同時に群集は鎭まり返つた。そこで確乎たる朗かな聲で、彼は讀み始めた——

『神聖なる皇帝は、叛徒 Li-Hi-lie 及び彼の部下の徒輩に告ぐ』

すると、海の轟くやうな激忿怒號の聲と、『ひうー、ひうー、うー、うー』暴風に森が唸る如き猛惡な鬨の聲が起こつた。それから、劍光散亂、銅鑼の響は脚下の地を動かした。しかし Hi-lie が黄金を塗つた棒を振つたので、また靜かになつた。『いや、犬に吠えさせろ!』と、彼はいつた。そこで Tchin-King は、また續けた——

『汝、最も躁急輕率なる者よ、汝はただ人民を驅つて、破壞の龍口へ陷るゝを知らざるか。汝はまた朕の國民は天帝の長子たるを知らざるか。この故に、書に曰く、徒らに人民を死傷に至らしむるものは、天これを生かさずと。汝は賢哲の定めたる法則——これを遵守して始めて、幸福繁榮を得べき法則を破らんと欲す。その罪最も重大にして恕すべからず。

『朕の人民よ、朕は汝の皇帝にして、汝の父たり。汝等の滅亡を求むるものと思ふ勿れ。

朕はただ汝等の幸福、繁榮、盛大を希ふのみ。汝等妄りに愚擧を以て天子の怒を招くこと勿れ。狂熱盲動に走ることなく、朕の使者の賢訓を聽け……

『ひうー、ひうー、うー、うー』と、一同は怒號して、ますます激昂した。遂にその叫びが山に反響して颶風の轟くやうであつた。して、今一度銅鑼の響は、聲を抑へ耳を聾した。Tchin-King が Hi-lie を眺めると、彼が笑つてゐたので、詔書は再び傾聽されないだらうと知つた。そこで、彼は力の及ばん限り、使命を果たさうと決心して、傍目もふらずに終まで讀んで行つた。して、全部を讀み了つてから、その書を Hi-lie に渡さうと欲したが、彼は受取らうと手を差し出しもしなかつた。則ち Tchin-King はそれを懷中にまた收め、腕を拱いて、悠然賊魁の顏を見守つて、待つてゐた。再び Hi-lie が黃金を塗つた棒を振ると、轟々の聲は止み、銅鑼の洞音も鎭まり、ただ龍旗の羽搏く音のみ聞こえるに至つた。すると、Hi-lie は、惡意の笑を帶びていつた――

『Tchin-King の犬め！今忠誠の誓を立て、私の前に屈伏して、帝王に對する三拜の禮を以てせねば、その火の中へ投げ入れるぞ』

が、Tchin-King は簒奪者に背を向け乍ら、霎時身を屈めて天地を拜し、それから、不意に立つて、誰も彼を押へる遑もない內に、燃え騰る火炎の中へ跳び込み、兩腕を拱いて、

恰も神の如くそこに佇立した。

Hi-lie は愕然飛び上つて、部下に叫んだ。彼等は Tchin-King を火中より攫み出だし、裸の手のまゝ彼の衣裳の炎を壓へて揉み消し、面と對つて彼を激賞した。して、Hi-lie さへも彼の座から下りて、甘言を吐いた。『君はなかなか勇敢至誠の人物だ。非常に尊敬に値する。どうぞ我輩と座を共にして、何なりとも食べて呉れ玉へ』

しかし Tchin-King は儼然として彼を注視し乍ら、大きな鐘の音の如く朗々たる聲で答へた――

『Hi-lie め、苟も汝が憤怒と愚痴を續ける限り、私は決して汝の手から何も受けないのだ。Tchin-King は叛賊や、人殺しや、盜賊の間に伍したとは決して世間に言はせない』

そこで Hi-lie は俄かに激怒を發し、劍を以て彼を擊つた。して、彼は地に倒れて死んだ。死ぬる際にも猶ほ、南方へ向つて――天子の宮殿の方に向つて、低頭敬禮しようと努めた。

恰もそれと同時刻に、宮殿の奧の間にゐた皇帝は、足下に一人の姿が平伏するのに氣がついた。彼が言葉をかけると、その姿は立上つて、彼の前に現はれたのは Tchin King で

あつた。皇帝は質問を發しようとした。しかしまだ皇帝が尋ねないうちに、耳慣れた聲は奏言した――

『陛下が臣に御依託になりました使命は仕遂げました。臣の微力の盡くし得る限り、勅命を成就致しました。しかし今や臣は他の主君に仕へるため、御暇乞ひを申上げねばなりませぬ』

して、皇帝は壁間に描ける黄金の虎が、Tchin-King の姿を通して透視されたことを認めた。すると、冬の嵐の如く、颯と奇異なる寒さが室を通過して、姿は消え失せた。そこて、皇帝は彼の忠實なる臣が申上げた他の主君に仕へるといふことは、天上の幽界に歸つて行くのだと悟つた。

また同時刻のこと、Tchin-King の邸の白髮の老僕は、いつも萬事整頓のさまを見るとき洩らす笑顔を示し乍ら、部屋々々を巡つて行く主人の姿を認めた。『お宜しう御座いますか、御主人』と老人は質ねた。して、『よろしい』といふ應答の聲は聞えた。しかし主人の姿は早くも去つて見えなかつた。

かくて天子の軍勢は叛徒と奮闘力戰したが、土地は血に染められ、火に焦がされ、累々たる死骸は川に流れて海の魚群を肥しても、依然戰爭は多年に亙つて續いた。それから、西北の荒漠に住む遊牧群が皇軍を援けにきた——彼等は悉く生來の馬術家であつて、各自强弩二百斤を引くほど、獰猛なる射手である。旋風の如く叛軍を襲ひ、雨の如く黑羽の矢を注いで、死の嵐を起こし、遂に Hi-lie とその徒黨を敗つた。殘餘のものは、或は降服し、或は歸順を誓つて、秩序と政令は恢復されることになつた。しかしそれは Tchin-King が死んでから幾春秋の後であつた。

皇帝は凱旋軍の諸將に、彼の忠臣の遺骨を携へ歸ることを命じた。それは勅命によつて建てられた靈廟へ、名譽の式を以て葬るためであつた。そこで諸將は無名の墓を探索し、それを發見したので、土を掘りのけ、棺を取り上げようと準備した。

しかし棺は彼等の見てゐる前で微塵に崩壞した。何故なら、蟲がそれを蝕耗させ、飢ゑたる土は其實質を啖ひ盡くして、ただ空影のやうな外殼を殘しただけであつたからである。その空殼も日光に觸れると、直ちに消えてしまつた。それと同時に、一同の驚いたことには、そこには忠臣 Tchin-King の完全なる形姿が横たはつてゐた。腐敗は彼の身に達してゐなかつた。また蟲類も其安息を妨げてゐなかつた。それから、顏の生色も消えてゐなか

つた。彼はたゞ夢をみてゐるさまに見えた――彼の婚禮の朝に於ける如く美はしく、また大きな堂塔の薄明かりの中に、眼瞼を閉ぢたるまゝ微笑せる佛像の如き笑顏を呈してゐた。僧は墓邊に立つていつた。『これは實に天からの瑞徴です。かやうなさまに、天の力は、不滅の神の數に入るべき人々を保存します。死もかゝる人に勝つことは出來ず、また腐敗も彼等の近くに來ることは出來ないのです。たしかにかの偉人は天の神々の間にその座を得てゐます』

それから、諸將は彼の死體を鄉國に運んだ。して、皇帝の命じた最高の式を擧げて、それを靈廟へ葬つた。そこに彼は永遠不朽となつて、禮服を着飾つたまゝ眠つてゐる。彼の墓碑には、彼の偉大、叡智、德操の象徴と、官職の徽章、及び四つの貴い品が彫つてある。また神聖なる怪獸の石像が、神殿の如くに、奇異なる[註十一]佛の犬の像が、その前に番をしてゐる。

註十一　佛の犬――彫刻の表象として、支那藝術が最も怪奇なる作品を示せる非現實的の奇獸である。實際は獅子を誇張せるもので、また獅子の佛陀に對する象徴的關係は周知のことである。かやうな神話的動物の像――時としては頗る堂々たるもの――が、寺院、宮殿、墳墓などの前へ一對をなして置かれ、尊嚴

と神祕の象徵となつてゐる。

神僊可冀

茶樹の縁起

「目の慾を節制するは善、
耳の慾を節制するは善、
鼻孔の慾を節制するは善、
舌の慾を節制するは善、
體の慾を節制するは善、
言語の慾を節制するは善、
すべての…………は善」

またしても誘惑の兀鷹は、彼の冥想の最高空まで翔け上がつてきて、彼の靈魂を下へ、下へと曳きおろし、よろめきつゝ、胸騒ぎしつゝ、迷妄幻覺の浮世へ歸つて行かせた。またしても思ひ出は、有毒な花の香りのやうに、彼の心をふらふらさせた。しかし彼は支那

へ行く道中、カシ市[註十二]を通る際、ただ瞬間かの巫女を見たのてあつた。廣大なる支那の人々は、佛法を渇望する事、恰も日に焦げた野原が慈雨を慕ふ如くてあつた。彼女が彼を呼び止めて、彼の托鉢の中へ少許の布施を落としてくれた時、實際彼は扇子を彼の面前に掲げて眼を蔽つたのてあつたが、しかも充分敏速てはなかつた。して、其罪過の罰は千里の距離にも、彼につき纏ひつゝ、世界大教主の言葉を傳へんとしてきた異國にまでも、彼の跡を追つかけたのてあつた。呪はれたる美！たしかに正しき者を滅ぼすため、誘惑者中の最大誘惑者なる、惡魔(マラ)自身が作つたものに相違ない。賢くも薄伽婆(バガヷァント)はその弟子を戒めてゐる。『爾曹禁慾者[註十三]、女は觀るべきものに非らず。爾曹若し女に逢ふことあらば、爾曹の眼を注ぐ事なく、貴き決心を把持して、語を交ふること勿れ。また須らく心中に微唱して云ふべし。「我は禁慾者なり。濁世の汚染を免るゝこと、蓮花の溝溜に開くと雖も猶ほその葉を

註十二　カシ市――聖都ビナーリズの古名。神々の創設に係かるものと信ぜられてゐる。また「世界の蓮華」とも呼ばれてゐる。パース氏は「古代並びに近代印度に於ける一切宗派のゼルーサレム」と稱した。今尚ほ二千の寺刹、五十萬の偶像を有する。セリングス氏著「印度の聖都」參照。

註十三　禁慾者 Çramana ――一切諸感覺を克服した人。この名目の興味ある歷史については、佛國學者ブールヌーフ氏著「印度佛教史序說」參照。

汚さざるが如くせざるべからず」』それから、また新たに恐ろしい意味を以て、彼の記憶に浮かんだのは、訓誡第二十三條であつた——

『「一切煩惱の中、最も强きは形姿の煩惱なり。幸にしてこの慾情は無比なり。若し他にかゝるものあらんか、正道に入ること能はざらん」』

實際、このやうに形姿の迷ひに惱まされてゐながら、どうして彼は一夜と一日を天晴れ不斷の冥想に過ごすといふ誓願を完うし得るだらうか。旣に夜は始まらんとす！屹度、靈魂の病、精神の昂奮には祈りの外に療法はない。夕陽は迅速に消えつゝあつた。彼は祈らうと努力した——

『南無蓮華寶玉！

『龜がその甲の中へ四肢を引込める如く、祝福されたる佛よ、願はくは一切私の感覺を全然冥想の中へ撤退させ玉はんことを。

『南無蓮華寶玉！

『長く人住まざる家の壞れ屋根に、降雨の侵入する如く、冥想の住まざる靈魂へは、情慾侵入し來たらん。

『南無蓮華寶玉！

『一切の粘泥は沈澱して靜止せる水の如くに、敎主よ、わが靈を純潔ならしめ玉へ。野鳥が太陽の通路を追はんがため沼澤から立ち上がる如くに、敎主よ、われに濁世の上に立ちあがる强き力を與へ玉へ。

『南無蓮華寶玉！

『晝は日輝き、夜は月輝く。武士は武具を着けて輝き、禁慾者はまた冥想の中に輝く。さはれ、佛陀は晝も夜も絕え間なく世界を照らして、常住不變に燦然と輝く。

『南無蓮華寶玉！

『願はくはわれをして、大覺者よ、この世の森の猿となつて、愚痴の果實の追求捕捉のため永久に輾轉上下することを止めしめ玉へ。一切を纏繞する煩惱の植物は、その生長すること蛇の絡む如く速かに、林中に攀援莖の伸び行く如く廣大なり。

『南無蓮華寶玉！』

悲しいかな、彼の祈願懇禱は無効であつた。貴い經文の神祕な意味――蓮華の意味、寶玉の意味――は文句から旣に發散してしまつてゐた。して、その文句の單調空疎なる吐露は、今や彼を誘惑し懊惱せしめた思ひ出を、更にますます危險にも明白ならしむるに過ぎなかつた。あはれ、かの女の耳を飾つてゐた寶玉！いかなる蓮華の蕾も、肉を折り重ねた

花に、滴るばかりの金剛石の火をつけたる優美にまさることは出來ない！再び彼にはそれが見えた。またその先きには、褐色の美果の如くに甘味津々たる頰の曲線が見えた。訓誡第二百八十四節は眞理を穿つてゐる――

『女の方へ心を曳かるゝ慾情の蔓は、その最微最小根と雖も、これを心裡より拔き捨てざる限り、その心は則ち束縛の中にあるべし』

それから、束縛に關して、同書第三百四十五節がまた彼の念頭を衝いた――

『繩の束縛には何等の力あることなし。また木の桎梏にも、乃至鐵の桎梏にも力あることなし。これよりも更に一層强力なるは、寶玉を飾れる、女の耳環を懸想することなり』

『全知の喬答摩！』と彼は叫んだ。『全見の教主！汝の教訓の慰藉のいかに多方面に互つてゐること！流石に人情に對する理解の驚くべきこと！これは矢張り汝の受け玉ひし誘惑の一つであつたのか――かの大地は戰車の如く搖れ、太陽より太陽へ、世界より世界へ、宇宙より宇宙へ、永遠より永遠へと、神聖なる振動が傳つた夜、惡魔によつて汝の面前に配置された無數の迷妄の一つであつたのか』

あはれ、かの女の耳の寶玉！其幻影は去らなかつた。否、それが彼の心眼の前に徘徊する度每に、それは一層溫かい生氣を帶び、一層懷かしさうな眼眸を示し、一層美しい姿を

呈して、彼の力が弱くなつてくるにつれて、ますます强くなるやうに見えた。彼は鹿のそれのやうな、大きな、淸く澄んだ、柔かくて黑い眼を見た。黑い頭髮の中の眞珠と、石竹色の口に含んだ眞珠、花の如き接吻に渦卷く脣を見た。それから甘美で異樣な、催眠的の薰り――若い香、女の香――が、彼の感覺に浮かんでくるやうに思はれた。立ち上がつて、斷乎たる決心を以て、再び彼は貴い呪文を唱へ、また『無常の章』の聖語を誦した――

『天を眺め地を眺めては、爾曹須らく言ふべし。「天地は永久なる能はず」と。山を眺め川を眺めては、爾曹須らく言ふべし。「山川は永久なる能はず」と。外物の形容とその生長を見ては、爾曹須らく言ふべし。「これ永久なる能はず」と』

しかし、またいかに甘美なる幻影迷妄だらう！壯大なる太陽の幻迷、影を投ずる山々の幻迷、無定形にして、しかも多樣を極むる水の幻迷、それから、またかの幻迷――否、否、何といふ不敬虔なる空想！忌まはしい女！しかし、それでも何故に彼はかの女を詛ふべきだらうか。かの女は嘗て一回たりとも禁慾者の呪詛に値することをしただらうか。それは決してなかつた。ただかの女の姿、かの女の思ひ出、かの女の美しい幻影、それが忌まはしい幻影なのだ。かの女は何でもない。迷妄が愚弄、夢と影、虛榮、懊惱など、さまざまの迷妄を生むのだ。過失と罪は彼自身に、彼の敎に對する反抗的精神に、彼の制御されざ

る思ひ出に存する。心は水の如く動き易く、蒸氣の如く觸れ難いけれども、しかも意志によつては馴致され、叡智の戰車に繫ぐことが出來る。また幸福を得るためには、是非ともさうせねばならぬ。そこで彼は經文の難有い諸句を誦した――

『一切の諸相はただ假相のみ』この大眞理を充分に悟れば、誰ても一切の苦惱から解脫することが出來る。これは清淨の道である。

『一切の諸相には實在性あること莫し』この大眞理を充分に悟れば、誰ても一切の苦惱から解脫することが出來る。この道こそは……

かの女の姿もまた實在でなく、眞實でなく、ただ迷妄だらうか。ただし迷妄の中では最も美しいものだ。かの女は彼に施濟を與へた！施與者の功德もまた迷妄であつたか――その功德は施與者のたをやかな指の美の如くに迷妄であつたか。たしかに阿毘達磨[註十四]には透徹

註十四　阿毘達磨（アビダルマ）――佛教の哲學。佛教の哲學は三大門に分かれ、その最高のものが阿毘達磨である。スペンス・ハーデー氏『佛教提要』によれば、これは佛陀にして始めて悟得される。――（阿毘達磨は論の四つの一に屬し、對法又は無比法と譯せらる。――譯者）

了解し得られぬ神祕がある！……かの女が施してくれたのは、象の形を印せる金貨であつた――實際、佛陀に捧げた諸王の贈物が迷妄でなかつたと同樣だ。胸にも金を帶びてゐたが、かの女の皮膚の金色こそ更に一層美しかつた。絹の帶と、狹い胸甲の間に露はれた彼の女の若い腰は、つやつやしく、また弓の如くしなやかであつた。彼の女の聲に含める銀音が、彼の女の踝に帶びた月の如きパガル[註十五]の銀飾よりも豐艶な音を發した。しかし、何よりもかの女の微笑！――小さな齒は、かの女の口の芳ばしき花の中に並らべる蕊であつた。

註十五　パガル――印度婦人が平常踝に着けてゐる環である。中空で、數個の金屬片が入つてゐるから、足を動かすとき響く。

何といふ意志の薄弱！何といふ恥辱！『決心』の強い御者が、よくもかほどに奔放不羈なる空想の群に對して支配力を失つたこと！かくまで意志が弛緩したのは、襲ひ來たらんとする危險、睡眠に陷らんとする危險の徴候だらうか。是等の空想は不思議にも鮮かで、燦然と輝くばかり明白なので、今にもありありと具體的形態を帶び、不自然な活動を始め、

夢の舞臺の上に邪惡な劇を演じさうに見えた。『願はくば汝全覺者』と彼は聲高く叫んだ。『汝の微賤なる弟子を助けて、正悟の覺醒を得しめ玉へ。彼をしてその誓願を成就する力を發見せしめ玉へ。惡魔をして彼に勝つことを得ざらしめ玉へ』かくて彼は醒覺の章の永遠的章句を誦した――

『佛陀の弟子は全然且つ永遠に醒覺してゐる。日夜絶え間なく、心を法に注いてゐる。
『佛陀の弟子は全然且つ永遠に醒覺してゐる。日夜絶え間なく、心を僧に注いてゐる。
『佛陀の弟子は全然且つ永遠に醒覺してゐる。日夜絶え間なく、心を佛に注いてゐる。
『佛陀の弟子は全然且つ永遠に醒覺してゐる。日夜絶え間なく、その心は全き平和の味を知つてゐる。
『佛陀の弟子は全然且つ永遠に醒覺してゐる。日夜絶え間なく、その心は冥想の深き平安を味つてゐる』

彼の耳に呟きの聲が聞こえた。水の騷ぐ如き、多數の聲の呟きが彼の發聲を不明ならしめた。星は彼の眺めてゐる前で、消え失せて、限りなき空は暗くなつた。一切のものが、見えなく、黒くなつた。太い呟きは深くなつて、寄せくる潮の如き騷音となつた。また地

は彼の足もとから沈んで行くやうに思はれた。彼の足は最早、地には觸れないで、一種の超自然的浮力が、彼の身體のあらゆる纖維に行き渡つた。彼は暗黒裡を浮いてゐるやうに感じた。それから、柔かに、ゆるやかに沈んで行つて、羽の如くに寺の尖塔から墜ちた。これは死といふものだらうか？否、何故なら、全く不意に、恰も第六不思議力によつて運ばれた如くに、彼は再び光明の中に立つたからである――或る印度の都會の驚くべき街頭に浴びせられた、水蒸氣のやうで、美しい、香ばしい、眠げな光の中であつた。今は眩きの性質が彼に明白にわかつてきた。彼は大きな巡禮の群と一緒になつて動いてゐたのだ。しかしこの群集は彼と同じ信仰のものではなかつた。彼等はその額に猥褻なる神々の汚れた象徴を帶びてゐた！が、彼はその中から脫し得られなかつた。一哩も幅のある人間の激流は、一枚の葉が恆河の水に流される如く、彼を運んで行つた。そこには行列を隨へた諸王、象に跨つた皇子達、法衣をつけた波羅門僧、それからカビット[註十六]とダマーリ[註十七]を歌はうとして動いてゐる、逸樂的な舞妓の群がゐた。しかし彼等の行先は何處？彼等は町を出て、

註十六　カビット――印度の宗教讃歌の作者が好んで用ひる詩形。常に四句にて成立する。

註十七　ダマーリ――やゝ淫蕩的性質を帶びたる一種特別の讃歌。普通印度の祭禮に當つて歌はれる。印度の俗謠と讃歌の簡單にして且つ面白き說明については、ガルサン・ド・タッシー氏著「印度俗謠」參照。

榕樹の並木通りを經て、棕櫚の聳立せる間を下つて、日光の照らせる野へと通つて行つた。しかし何處へ行く？

遠い青靄の如く、彼等の前方に、山のやうな、堂々たる切石の建築が見えた――それは尖塔林立、高く沖天へ裝飾の金波を、散らせる寺院であつた。近づくに從つて形は大きくなり、青の色合は灰色に變はり、輪郭は日光の中にくつきりと浮かんできた。それから細部が一つ一つ――岩の龜に載つた柱脚の象、柱頭の大きな獰猛なる顏、彫刻帶の中に絡まつてゐる龍蛇の怪物、格子細工を施せる壁龕相列つて廻廊をなせる處に、層又層をなす多頭の玄武岩神像、汚らはしき、忌まはしき肉慾の神々の畫などが明かになつた。それから彫刻された神々と牧羊婦[註十八]が、狂氣じみた群をなし、四肢や胴體が抱き合つたり重なり合つたりして角錐狀の塊團となつて突出せる下に、彫刻の懸崖面に口を開ける寺門――恰も大自在天（シバ）の口の如く暗い洞穴のやうな――は、生ける行列の群集を呑み込んだ。

註十八　牧羊婦――牧夫の娘や妻。訖哩史那（クリシュナ）は、毘瑟拏（ヴィシユヌ）（徧照天）の第八番目の權化として現はれた後は、牧羊婦達の間で育てられた。訖哩史那が是等の牧羊婦（ゴナピア）との情事が、諸種の有名なる神祕的著作の主題となつてゐる。イーストキック氏其他の人々によつて譯せられた『愛の海（プレム・サガール）』、イッポリト・フォーシュ氏が佛國の散文に譯したベンガル抒情詩人チヤヤデベ作の肉感的な『ギータ・ゴビンダ』（エドウキン・アー

ノルド氏は、その「印度歌集」に、これを純潔なる英詩に譯してゐる」などがそれだ。プールヌーフ氏の未完譯「バガヴァタ・プルナ」、並びにテオドール・パヴイー氏の「訖哩史那とその教理」參照。この題材は、印度藝術中、數個の最も珍異なる作品に影響を與へてゐる。例へばムーア氏著「印度萬神廟」（一八六一年版）第六十五圖及び第六十六圖參照。訖哩史那と牧羊婦の崇拜に關聯する戀愛的神秘については、ベート氏著「印度の宗教」に擧げられたる諸書、ド・タッシー氏著「印度民謠」、及びラメーラス氏著「南方印度俗謠」參照。

群集の渦卷は彼を內部の廣い處へぐるぐる伴つて行つた。誰も彼の黃色の服を眼に留めるものはなかつた。また彼の存在を注意するものさへゐないやうであつた。高い大きな通廊が交錯して、奇異な彫刻を施せる無數の巨柱は、炬火の黃色な光の背後へ、見分け難い遠方までつづいた。凄いほど肉感的な畸形怪像が、香煙靄裡にぬつと現はれた。遠くからは象や、鳥頭鳥翼人體人肢の鳥の形に見えた巨像が、近寄つてみると、趣が變はつて、其意匠の奧妙は、婦人の身體を組み合はせた處にあることが現はれてゐた。或る同一の神がすべての奇怪な譬喩を支配し、絕えず同一の神體又は魔像が彫刻家の手によつて繰返され、恰も獨りで增殖して行くやうに見えた。大きな柱はそのものが象徵、人物、淫蕩の狀を示し、それから、この崇拜の亂痴氣騷ぎの精神は、燭燈の捩れた眞鍮に、酒杯の歪んだ黃金

に、水槽の彫刻せる大理石に、あらゆる器物に活躍横溢してゐた。

どれほどの距離を進んできたのか、彼にはわからなかつた。その數限りなき柱の間を經て、その化石せる神々の群を越え、閃めく燈光の列に沿つて下つて行つた旅路こそ、隊商の旅行や、支那への巡禮よりも更に長いやうに思はれた。しかし不意に何とも譯がわからなく、墓地のやうな靜寂が襲つてきた。生氣躍如たる大海の潮は、彼の周圍から引き退いて、地下の建物の深淵裡に呑噬されてしまつたやうに思はれた。彼は獨り或る見知らぬ土窖の中で、貝殼狀の淺い盤の前にゐるのを發見した。盤の中央には人間の高さよりも低い圓柱があつて、その滑かな球形の絕頂には、花環がまきつけてあつた。上には悉く同形で且つ棕櫚の油を注いだ澤山の燈臺が懸かつてゐた。其他には彫像もなく、祀つた神體も見えなかつた。數知れぬ種類の花が鋪床の上に堆積されて、厚い柔かな絨氈の如く滿面を蔽つて、彼が踏む足の下から、その馥郁たる芳精香粹を吐いた。その感覺的で、醉はせるやうな、不淨な匂ひは、彼の腦髓へ透徹滲染した。抵抗し難き倦怠が彼の意志を征服し、彼の身體はがつくり花の上に崩折れた。

囁きの如く輕やかな跫音が、鈍い踝環の鳴る音と共に、重げな靜けさの中を通じて近づいてきた。突然彼は頸のまはりに、女の腕の微溫な滑かさが辷るのを感じた。あの女、あ

の女だ！彼の迷妄、彼の誘惑なのだ。しかし何といふ變形變貌だらう！超自然的の美、不可思議の魅惑！彼の頬に接觸した女の頬は、素馨の花瓣の如く纖弱て、彼を見戍つた双眸は、夜の如く深く、夏の如く美はしかつた。女の花唇はさゝやいた——

『あなたは心の盗人です。どんなにあなたを探がしたことでせう！どんなに骨折つて發見したことか！うまい味のものを私は持つてきました——唇と胸、果物と花。渇きをお感じなさる？私の眼の泉からお飲みなさい。犠牲をお捧げになりたい？私はあなたの祭壇です。御祈りをしたい？私はあなたの神です！』

彼等の唇は觸れた。彼女の接吻は、彼の血液の細胞を炎に變化させたやうに思はれた。暫らくは迷妄が凱歌を奏した。悪魔が勝利を占めた！……激しき決心の衝動と共に、夢みる人は夜中に目醒めた——支那の空の星の下に。

ただ束の間の睡眠の眞似のやうなものであつたが、しかも誓ひを破り、神聖な目的に違背したのであつた！屈辱と悔恨を感じながらも、斷乎たる決心を以て、禁慾者は彼の帶から鋭利なる小刀を拔き、潔くも兩方の眼瞼を斬り捨てた。彼は祈つた。『全覺の主よ！汝

の弟子はただ肉體が無力薄弱であつたために打負かされました。今や彼はその誓ひを新たにいたしました。食はず飲まずに、こゝに誓願成就の時まで留まつてゐます』して、僧侶の姿勢——兩足を組んで坐つて、兩手の掌を上に向け、右掌は左掌の上に、左掌は仰向けた足の裏の上にのせて——を取つてから、彼は再び冥想を始めた。

東雲紅色を呈し、日が明かるくなつた。太陽は地上のあらゆる影を短くして、またそれを長くし、それから遂に深紅に燃ゆる雲の彼の火葬壇に沒した。夜がきて、きらきらして、また去つた。しかし惡魔は彼に誘惑を演じても無効に了つた。今度は誓願成就、神聖なる目的は遂げられた。

して、再び太陽は昇つて、光りの笑ひを以て世界を充たした。一切の花はその心を太陽に開いた。鳥は朝拜の火の讃歌を歌つた。深い森は愉悅に震へた。して、平野の上遠く、幾層階の寺院の軒頭と、市の塔の尖頂は、燦々たる輝きに浴し始めた。聖願滿足の念に勇んで、印度の巡禮者は朝暉の中に起き上がつた。彼は兩手を眼にもたげた時に愕然喫驚した。何事ぞ！一切は夢であつた？そんな事はない筈だ！が、彼の眼は今は少しの痛みをも

感じない。また眼瞼を失つてもゐない。一本の睫毛さへも缺けてゐない。何といふ奇蹟！彼は斬り捨てて地上に投げた眼瞼を搜索して見たが、駄目であつた。それは不思議にも無くなつてゐた。しかし見よ！彼が投げ捨てた場所に、二株の驚くべき灌木が生えてゐた。その纖細な葉は、眼瞼の形狀を呈し、雪のやうな蕾は、今しも東方に向つて開かうとしてゐた。

すると、その偉大なる冥想に於て獲たる不可思議力の功德によつて、尊き傳道の僧は、其新たに創られた植物の祕密——その葉の奇特なる功能を知ることができた。して、彼が法華經を齎した處の國の言葉で、彼はそれを茶と命名し、且つそれに向つて述べた——

『正しい決心によつて作られ、惠み深く、生命を賦與する、汝うるはしき木よ、汝に祝福あれ！見よ、汝の盛名は爾來地球の果てまでも擴がるに相違ない。それから、汝の生命の香りは、四方の風によつて、極めて遠い地方へも運ばれるにきまつてゐる。たしかに、今後いつまでも、汝の液汁を飮むものは、疲勞も彼に勝つことができないし、倦怠も襲はないやうな爽快を見出すだらう。また彼は眠氣の混亂をも、また勤行や祈禱の際、假睡を欲する念をも感じないだらう。祝福汝にあれ！』

して、今猶ほ抹香の霞の如く、世界中から犧牲を捧げる煙のやうに、神聖なる誓の力、敬虔なる贖罪の功徳によつて、人間の心氣を爽快にするために作られた茶の心地よき蒸氣が、地上のあらゆる國々から、絶え間なく天へ立ち騰つてゐる。

沙門品

誰が人間界で始めて高陵[註十九]と磁器――美しい花瓶の骨と肉、骨骼と皮膚――の秘訣を發見したのだらう？誰が始めて凝乳の如く白い粘土の美質を見出したのか？誰が始めて氷の如く淸らかな石胎――老人の白髮の如く枯れた山の戴く灰白土、發掘を待つ死んだ巨人の岩骨石肉の如く、白くなつた粉塊――を調製したか？磁器の神々しい藝術を發見する事は、誰れ人の手に授けられたのか？

註十九　高陵 Kao-Ling ――もとは陶工に、最上の粘土を供した山脈の固有名詞であつたが、後に轉訛して今日諸國に慣用の語となつた。支那の陶工の用語によれば、kaolin 粘土を詩的に磁器の「骨」と呼び、tun 硅岩を「肉」と呼び、また兩者を合はせて燒いたものを Pe-tun-tse と稱した。兩者ともに分解せる長石斑石から成つたものである。

それは嘗て人間であつたが、今や神に祀られ、陶業組合に加入せる幾萬の人々が、その

雪白の像を拜する浦に授けられた。しかし彼の誕生地はわからない。恐らく、その傳說は、かの現代に於て二千萬の黑髮民族の生命を滅ぼし、また昔は Feou-liang の青い山脈の中に火の寶玉の如く輝いてゐた景德鎭の都會——かの驚くべき磁器の都會さへも、地球の表面から抹殺し去つた怖ろしい戰爭のために消されたかも知れない。

尤も彼よりも以前、旣に陶窯の神靈は存在してゐて、無限の活動力から發生し、絕對最高の大靈[註二十]から流れ出でて現はれてゐた。何故なら、約五千年前に、黃帝は粘土を燒いて立派な器物を作ることを人々に敎へ、それから、その時代にすべての陶工は窯火の神を知つて、祈りの囁きにつれて彼等の粘土細工を營む車輪を回はしてゐたからである。が、黃帝が死んでから三千年後に、天帝から窯神となるべき運命を授けられた人が始めて生まれたのだ。

註二十　太靈 Tao ——無限の實在、即ち宇宙的生命、一切の諸相これから發する。Tao といふ文字は第一原因といふ意味に於ける「道」である。老子は道といふ語を一二の異れる意味に使つてゐるが、彼が最も重要なる哲學的意義を與へてゐる主旨は、道經の有名なる二十五章によく說いてある。この偉大なる支那の思想家の第一原因——不可知のもの——に關する見解と、他の東西兩洋諸哲學者の說との差異は、スタニスラス・ヂユリアン氏譯「道經」の序言、第十頁乃至十五頁に明晰に論じてある。

して、彼の神聖なる靈は、いつも陶房の煙と勞作の上を逍遙しつゝ、今猶ほ模型工の思考に力を、意匠工の創作力に優美を、釉藥工の手法に光輝を與へてゐる。實際、彼が天から教へられた叡智によつて磁器の藝術は創められたのだ。彼の靈感によつて陶工のあらゆる奇蹟と、彼に追隨した人々の作れる一切の奇什珍器は完成されたのだ――

すべての青磁――明かなること鏡の如く、薄きこと紙の如く、磬の如く朗かな音を發し、欽宗帝の勅命に從つて、『雲の破れ目から[譯者注一]見える、雨後の空の如く青き』色を呈してゐる。これらは實に磁器中、第一に位するもので、柴窯[註二十一]とも呼ばれ、いかに奸惡の徒も流石にこれを破碎する勇氣が出ない。高價な寶石の如くに眼を魅するから。

註二十一 窯 Yao ――支那の製陶術の技術、歴史又は傳說に關する詳密の知識を得ようと欲するものは、チュリアン氏の名著『支那陶器史』（一八五六年巴里出版）を參照するがよい。私の『窯神譚』に擧げた諸種の磁器の名は、大抵該書から取つたものである。是等の名は支那音にては音樂的妙味があるけれども、飜譯すれば興味索然たるを免れない。大部分は單に製造の中心地又は有名なる工場の名に因んだものである。例へば Chou-Yao は Chou といふ土地の磁器である。また製造の時代によつて區別した名もある。或は役人の名を冠したものもある。直接に磁器の材料又は藝術的特質から命名したものは、遙かに稀である。

それから、汝窯[譯者註二]——すべての磁器の中、第二に位し、時としては青銅の模樣とその音調の朗々さを欺き、また時としては夏の海の如く青く、厚く浮かべる粘液狀の雄魚精かと思はれるもの。

それから、官窯[譯者註三]——すべての驚くべき磁器の中、優秀の點に於て第三位を占め、朝の色彩を帶びてゐる——空の青さを呈せる中に、黎明の薔薇色が咲いて、沼澤に住む長い脛を有する鳥の飛ぶのが朝暾に映じてゐる。

また、哥窯[譯者註四]——完全なる磁器の中、第四位て、鮮魚の體の如く、麗はしき、薄い、變はり易き色を有し、或は蛋白石質に似せて作られ、乳と火を混じたやうなもの。名聲不朽の章氏兄弟の兄、生一の作品。

また、定窯[譯者註五]——完全なる磁器の中、第五位て、寡婦の喪服の如く白く、涙のやうな美しき雫が滴つてゐて、詩人 Son-tong-po が詠じてゐる磁器。

また、Pi-se-yao 窯——色合が潛んでゐて、交互に出沒隱見する。日光の下に氷の色が變幻を示す如くだ。音に聞こえた詩人 Sin-in が讃めたゝへた磁器。

また、驚くべき Chu-yao 窯——撃つときに哀しげな叫びを發する蒼白の磁器。偉大なる詩人 Tiou-chao-ling の歌へるもの。

また、Thsin-yao 窯——色は白或は青。多くの鰭で激搖せる水面の如く皺がよつてゐる……しかも魚までも見える！

また、Tsi-hong-khi 器と呼ばるゝ花瓶——雨後の夕陽の如く赤い。それから、蠶蛾の翼の如く脆く、卵殼よりも輕い T'o-t'ai-khi 器。

また、Kia-tsing ——空虛の時は、眞珠のやうに白い茶碗であるが、不可思議な魔術的製法のために、一たび水を滿たすや否や、紫色の魚が群遊して見える。

また、Yao-pien ——その色合が火の錬金術によつて變つてくる。血の赤色で火に入つて、その中で蜥蜴の綠色に變はり、遂に天空の頰のやうな蒼色となつて出てくる。

また、Ki-tcheou-yao 窯——夏の夜の如く全く青紫色である。それから、銀と雪を混ぜたやうにきらきらする Hing-yao 窯。

また、Sieouen-yao 窯——熔爐中の鐵の如く赤いもの、透明で紅玉の如きもの、蜜柑の皮の如くざらざらした黃色のもの、桃の皮の如く柔かに紅いものなどさまざまある。

また、古い氷の如く罅燒になつて、綠色の Tsoui-k i-yao 窯。それから、金龍がのたうち廻つて、縺れてゐる Tchou-fou-yao 窯。なほまた、淡紅色に噉だちて、蟹の爪の如くに鋸齒狀の稜角ある諸磁器。

また、眼睛の如く黒く、また輝ける Ou-ai-yao 窯。それから、天竺の人の顔の如く黒褐色なる Hou-tien-yao 窯。なほまた、秋の葉の如く光澤の枯れた黄金色の黄金窯。

また、豌豆の苗の如く綠色であるが、太陽に照らされた銀色の雲と天上の龍を染め出だせる Long-kang-yao 窯。

また、琥珀色の葡萄の花や、葡萄の葉の青綠や、罌粟の花を描いたり、或は鬪ひ合つてゐる蟋蟀の形を浮彫にせる Tching-hoa-yao 窯。

また、金粉の星を散らした蒼空色の Khang-hi-nien-ts'ang-yao 窯。それから、電光の閃過する火のやうな夜にも似て、黑色と銀色の壯麗なる Khien-long-nien-thang-yao 窯。

尤も Long-Ouang-yao 窯は除外だ。淫蕩な Pi-hi、猥褻な Nan-nu-sse-sie、耻づべき春畫を描いたもので、陶窯の靈は顏を隱して逃げ去つたのであるが、奸惡なる Moutsong 皇帝の命令によつて作られた忌々しいもの。

しかしすべてその他の、驚くべき形狀と實質を有し、魔術的に關節を附せられ、浮彫模様の粧飾を施された花瓶類——花の蓴蔔のやうな鐘形を呈したり、鳥の嘴のやうに割けたり、蛇の顎の如く牙があつたり、小女の口の如く淡紅の唇を示せる孔口を有つたのや、蕈や蓮花や蜥蜴や女面馬足の龍に似たのや、不思議に半透明て、飯粒の白い光や霜の空幻な

る組紐細工や瑠璃の開花に彷彿せるものなど。

更にまた、磁器の諸神像——竈の神、墨の十二神、生れながら銀髪の貴い老子、叡智の書卷を摑める孔夫子、黄金の百合の眞中に雪白の足にて立てる、美はしき慈悲の女神なる觀音、人民に庖厨を與へた神の神農、長い眼は冥想に閉ぢ、脣は最高至上なる福祥の神祕なる微笑を洩らせる佛、白翼の鶴に跨つて空を乘つて行く長壽の神 Cheou-lao、肥え太つて、夢を見てゐる滿足と富の神 Pou-tai、それから、仁慈の手から永遠に虹色の眞珠の雨を降らす美しい才能の女神。

浦（プー）が人類に遺して置いた無類の藝術は、その幾多の祕訣は實際忘れられ、永久に失はれてゐることとであらうが、窯神の物語は記憶されてゐる。孰れの老陶工でも、また終日拮据、戸外で顏料を碾いてゐる大陶房の盲目の老人達でも、浦は甞て卑賤なる支那の職工であつたのが、倦むことなき研究と忍耐と天の靈感によつて遂に最大名工となつたことを語り得るのだ。彼は非常に有名になつたので、或る人は彼を鍊金術者と見做し、石を金に化する『白と黄』といふ祕傳を知るものと思つた。また他の人々は彼を魔術師と考へ、屋根の瓦

の下に呪文を唱へ込めた人の像を隠して置いて、夢魔の恐怖を以て、人を殺す凄い力を有するものとした。更にまた他の人々は萬物を支配する五行の神祕——星の流れの中にも、乳色の天河の中にも動いてゐる力——を發見した占星術者だと斷言した。少くともかやうに無智の輩は彼のことを噂した。しかし天子の側に侍せる、見識確固たる人々も、彼の妙技を激賞して、彼の巧みなる手觸に易々と扱はれ行く美しい材料を使用して、彼の制作の手に叶はぬといふ美術品が世にあるだらうかと話し合つた。

すると、或る日の事、浦（プー）が天子へ貴い品を獻上した。それは閃めき燃えた黄鐵礦の實質を擬ねた花瓶であつた——變色蜥蜴が燦爛たる花瓶の面にのたくり打つてゐた。しかも磁器の蜥蜴は看者が位置を變へる度毎に色を變へた。天子は作品の壯麗に驚き、その職工のことを卿相官吏どもに尋ねた。彼等がそれは浦といふ無雙の陶工て、神か又は惡魔の靈威によつて知つたらしい祕訣を有することを答へた。そこで天子は立派な贈物を持たせて官吏を彼の許へ遣はし、彼を御前へ召しよせた。

賤しい職人は皇帝の前へ出てた。して、最敬禮——三たび跪いて、それから額を三たび、九回づつ地に觸れて——を行つてから、勅命を待つた。

すると、皇帝は彼にいつた。「朕は汝の獻品を見て非常に愉快を覺えた。して、その美

しい器物に對し、汝に酬ゆるに銀五千兩を以てした。しかし汝もし朕の命ずるまゝつものを完成して呉れるならば、その三倍の報酬を與へよう。よく聽け、汝、無双の陶匠！今や朕は、汝が生ける肉のやうな色澤風趣を有つ花瓶を作ることを欲する。但し――よく朕の希望を注意するがよい！――その肉は詩人の發する言葉に應じて匍匐し、觀念によつて動く肉、思想によつて戰慄する肉なのだ。この命に服從して、違背するな。朕は旣に命令したのだ』

さて、浦は顏料を混ぜ合はせる職工の中で、花瓶の裝飾圖案家の中で、釉藥の上に彩色畫を描く職工の中で、色を光らす職工の中で、窯火を監視する職工の中で、要するに一切の陶工の中で、最も巧妙熟練を極めた人であつた。しかし彼は銀五千兩の恩賜を受けたにも拘らず、王宮から悲しみを懷いて去つて行つた。彼は獨りで考へた。『たしかに肉の美はしさの祕訣と、また肉が動く祕訣は、太上道の幽玄である。どうして人間が死せる粘土に知覺的生命の趣を附與し得られよう？無限絕對者でなくて、誰が靈を與へることができよう？』

さて、浦は製陶家の祕術たる色彩の巧妙と優雅の極致を發見してゐた。彼は薔薇の魔法的光耀や、心地よい紅色や、山綠と稱する綠色や、柔かな淡黄色や、燃えるやうな黄金色の美などの祕訣を見出してゐた。彼は鰻の色や、蛇の綠色や、菫の青紫色や、熔爐の深紅色や、西洋の琺瑯細工師が永く求めて成功し得なかつた、酒精の炎の如く微妙で捕捉し難い洋紅色と藤色を發見してゐた。しかし彼はその指定された仕事に對して戰慄した。彼の陶房の勞作に歸つて行つたときに、彼はいつた。『どうして貧弱な人間の力で、觀念につれて肉が震動するのや、思想が不可思議に戰慄するのを粘土に現はすことができよう？かの永遠の大模型師たる神の魔力を人間で眞似ができる？私が模型車の上で一個の甕を固めるよりも、百萬の太陽を作る方が、神の大能力に取つては更に容易なのだ』

しかし天子の命令は決して違背することはできなかつた。して、堅忍不拔の陶工は天子の希望を實現せんがために全力を發揮して努めた。が、幾日、幾週、幾月、幾季節の間、奮闘しても徒勞であつた。また神々の助けを祈つても無効であつた。窯の靈に願ひ求めても駄目であつた。彼は叫んだ。『汝、火の精よ、私の願を聽き、私を助けてくれ。如何に

せば、私が――粘土に生ける精神を吹き込むことのできぬ無力の私が――一聲の言下に躍り上がり、思想の一動一搖に感じ立つ肉の趣を、この無生物に活現し得られよう？」

窯の精は、火の囁きを以て、奇異な答を彼に與へたのであつた。「汝の信仰は偉大で、汝の祈禱は凄い！思想には人間がその過ぎ行く痕跡を認め得るやうな足があるか？汝は私のために一陣の疾風を測量することができるか？」

けれども、確固たる目的を以て、四十九回までも浦は勅命を完成しようと試みた。惜しいかな、彼は空しく原料を浪費するばかりであつた。彼の力と彼の知識を蕩盡しても、成功は彼に笑顔を注がなかつた。して、災禍は彼の家を訪ね、貧窮は彼の室に坐し、悲慘は彼の竈に慄へた。

時としては、試驗の際に、火に燒いてから、色彩が奇異に變つたり、或は灰白に褪めたり、或は森林の黴の模糊たる色に煤けたりすることがあつた。すると、浦はかやうな災難を見て、窯の精に哀禱泣訴した。「汝、窯火の精よ、汝の助けがなくては、どうして私は光澤ある肉の趣と、生ける色の溫かい光を作り出せるだらう？」

すると、窯の精は火の囁きを以て、神祕的に彼に答へた。『汝は天穹を美しくした無限の釉藥工の技術を學ぶことができるか？——彼の刷毛は光線である。彼の顏料は夕べの色彩である』

また時としては、色彩が變はらないで、刺黠を施し、丹精を注いで作つた表面が、熱の中で活きてきて、生ける皮膚の潑剌さを帶びさうになつてから——いよいよ最後に達してから、職工達のあらゆる骨折が徒爾に歸することもあつた。何故なら、輕佻浮薄の物質は彼等の努力に叛逆して、ただ凋れた果實の皮の上にあるやうな怪奇な皺を生じ、または荒荒しく羽毛を剝がれた死鳥の肌膚に見る如き粒狀を呈するのみであつたから。して、浦は涕泣して、窯の精に叫んだ。『汝、炎の精よ、汝が助けを與へて吳れないでは、どうして思想につれて肉が顫動する狀を模作し得られようか？』

すると、窯の精は、火の囁きを以て神祕的に彼に答へた。『汝は石に魂を與へ得るか？汝は花崗岩の山の內部に思想を浸み渡らせることができるか？』

時としては、實際すべての勞作が失敗に了はらぬ場合もあつた。色は立派と思はれ、また花瓶の實質は、龜裂も、皺も、縮れもなくて、全く無瑕のやうに見えた。しかし溫かい皮膚のしなやかさが見受けられなかつた。色合こそ肉のやうな表面も、金屬の粗糲なる樣

子と、硬い光を示すのみて、感覺ある物質の柔かな果肉性を模擬しようとの慘憺たる苦心は、何等の痕跡をも留むる事なく、窯火の息吹に一蹴されて了つた。浦は絶望の餘、窯の精に叫んだ。『汝、無慈悲の神よ、私は幾多の犧牲を捧げて汝を崇拜してゐるのに、私を棄てて顧みないのは、何の過失、何の罪のためであるか？哀れなる私は、汝の救ひがなくては、どうして言葉につれて匍匐し、思想の操るまゝに竦動する肉の趣を作り得ようぞ』

すると、窯の精は火の轟きを以て彼に答へた。『汝は靈魂を分かつ事ができるか？否！……汝の作品の生命のためには汝の生命！——汝の花瓶の靈魂のためには汝の靈魂！』

この言葉を聽くと、浦は胸に漲る怖ろしい決心を以て蹶起した。して、いよいよ最後の第五十囘目の試みとして、窯に入れる作品の準備にかかつた。

百囘彼は粘土と硅岩、高陵と石胎を淘汰し、百度それを最も清潔な水て淸めた。百囘彼は倦むことなき手て、乳狀可粘物を捏ねて、最後に彼のみ知つてゐる顏料をそれに混じた。それから花瓶の恰好を作つては、また作り直して、遂にその柔和さは生きてゐるに見え、戰慄し、鼓動するやうに見えてきた。しかもそれは內部からの活力に發し、表皮の裏面に波立つ圓やかな肉から出てるかと思はれた。實際、生命の光澤がその面に浮かび、また最奧の實質中に滲透してゐて、血液の生々と輝いた組織のやうな紅色と、血管の網狀をなせ

る紫色を彷彿せしめ、全體の上には日光色に光つて、つやつやしい釉薬を着せて、女の磨き上げた肌を欺いてゐた。世界開闢以來、人間の技倆で、これに匹敵すべき作品は、未だ嘗て作られたことがなかつた。

それから、浦は手傳ひの人々に tcha の材木で盛に窯火を燃やしつづけさせた。が、誰にも彼の決心を告げなかつた。しかし窯が赫々と輝き始め、彼の作品が熱火の中に咲き出てて紅潮を呈するを見てから、彼は炎の精の前に身を屈めて呟いた。『汝、火の精、火の主よ、私には汝の言葉の眞理がわかつた。靈魂は決して分けることはできない。だから、私の作品の生命のために私の生命！私の花瓶の靈魂のために私の靈魂！』

そこで、九日と八夜の間、窯は絶え間なく tcha の薪を供給され、また九日と八夜の間、職工達は驚くべき花瓶が炎の息吹によつて薔薇の如く輝いて、晶化するのを監視した。第九夜になつてから、浦は仕事も殆ど出來上つて、成功は確證されたからといつて、すべて疲れた連中を寢に就かせた。『もし夜が明けてから私がこゝにゐなくても、花瓶を窯爐から取り出すことを恐れるな。勅命通りに、仕事は完成されてゐると思ふから』と彼はいつた。職人達は歸つて行つた。

しかしその第九夜に、浦は炎の中へ入つて、彼の身命を窯の精に獻げた——彼の生命を彼の作品の生命とし、彼の靈魂を彼の花瓶の靈魂としたのであつた。して、十日目の朝、職工達が珍妙なる陶器を取り出すためにきた時、浦の骨さへも亡くなつてゐた。しかし不思議！花瓶は生きてゐた。言葉につれて動き、思想の操るまゝに匍匐する肉のやうであつた。して、指で輕打する毎に、聲と名を發した。その作者の聲、その作者の名——浦。

かくて、天子はこの話を聞き、また驚異すべき花瓶を見てから、側近の者どもにいつた。『いかにも、信仰の力、服從の力によつて、奇蹟が演ぜられた！しかしかやうな殘酷な犧牲の行はれることを、朕は決して欲したのではなかつた。朕はこの無双の技術家の力は、神々から來たものか、惡魔から出でたものか——天からか、地獄からか——を知らうと欲したのみであつた。今や實際浦は神々の中に位を占めたのだ』して、天子は痛く彼の忠實なる臣のために悲しんだ。しかし彼はこの驚くべき藝術家の靈に對して、神のやうな尊敬を拂ふべきこと、彼の名は永遠に崇めらるべきこと、それから、中華國のすべての都會と、すべての陶房に、彼の立派な像を設けて、幾多の職工は常に彼の名を呼び、彼等の勞作の

上に彼の祝福を求むるやうにすべきことを命じた。

譯者註一　柴窰の色について、形容句の原文は左の如くである。

「雨過ギ天晴レテ雲破ルル處、者ノ般顏色作スチ二將來一ヲ」

この窰は河南鄭州に在つて、柴世宗の創めたもの。右の句は世宗が陶器の式を欽宗帝に稟請する狀に見える。柴窰は雨過天青を主色とし、滋潤細媚、實に古來諸窰の冠冕である。

譯者註二　汝窰は河南の汝州にあつて、北宋時代の創設に係る。

譯者註三　官窰は宋以來、官吏の監督を受けて製し、內府の用に供したのである。宋の大觀、政和の間、汴京（河南省開封府）にあつたもの。

譯者註四　哥窰は宋の處州龍泉縣の人、章氏兄弟、窰業を營み、兄の生一の作を哥窰と名づけた。

譯者註五　定窰は直隸省定州で作つたのを北定といふ。宋初の建設である。宋の南渡後、景德鎭で作つたものを南定といふ。

大清國

解説

『大鐘の靈』――この物語は『百孝集』(Pe-Hiao-Tou-Choue)と題せる物語集から取つたものである。支那の物語作者は、頗る簡明に此話を語つてゐる。博學なる佛國領事ピー・ダブリー・ド・チールサンは一八七七年に該書の一部を譯して出版した。その中にこの鐘の傳說も收めてあつた。譯書は澤山の支那の畫で飾られ、Ko-Ngai が鎔けた鐵中へ跳り込む奇異なる小畫も附してある。

『Ming-Y 秀才の話』――私のこの話は『今古奇觀』といふ有名なる物語集の第三十四章にある妖怪談に基いて書いたもので、もと博學なるグスタフ・シユレーゲルによつて、始めて該書の第七章と第三十四章は佛譯されたのであつた。シユレーゲル、ジユリアン、ガードナー、バアーチ、ダントルコル、レミユザ、パヴイー、オリファント、グリゼバッハ、エルヴエ・サン・ドニー、その他の諸家が、該書の第二、三、五、六、七、八、十、十四、十九、二十、二十六、二十七、二十九 三十、三十一、三十四、三十五、三十九章、

合計十八篇を歐洲語に譯出してゐる。支那の原著は十三世紀に溯つてゐるが、既に當時に於て最も人口に膾炙してゐた說話を集めたのだから、その多くは更に古い起原に屬するものと思はれる。『今古奇觀』には四十個の物語が載つてゐる。

『織姬の傳說』――私の此話は『太上感應篇』第三十四章に見える、次の傳說から取つた。該書は老子の作と稱せられ、約四百の頗る珍らしい逸話傳說を收めてゐる――

『漢時代に住んでゐた Tong-yong は極貧に陷つた。父を失つたので、彼は葬式を營み、墓を建てる資を得るために自身を賣つた。天帝がこれを憐んで、女神 Tchi-Niu を遣はしてその妻とした。彼女は夫が自由の身となるまで每日絹を織つた。後、彼のため一子を生んで、それから天へ歸つた』――デユリアン氏佛譯第百拾壹頁。

この話の中で、幽靈、醫療、婚禮等の詳細なことに亙つて、私は全然私自身の空想によつて書いたのではないといふことを證するため、私は讀者に、チャイルズ氏著『支那畫房奇譚』第九十六章『不思議な妻』と題する一篇を參照されんことを望む。それによつて、私の物語は、少くとも支那思想と合致することがわかるだらう。(この物語は、初め『ハーパーズ、バザー』雜誌に現はれたのを、今回同雜誌の許諾を得て、こゝに收めたのてある)

譯者註　『宋藝文志』に『太上感應篇』一卷があつて、抱朴子が漢時代の道教の誡を述べたものである。この書は宋以來、大いに流布したが、專ら閭巷細民が誦習したので、士大夫間に於ては、鄙薄視され、その註釋諸家もまた淺陋卑里の言が多かつたと、『太上感應篇纘義』（上下二卷）の序文に見えてゐる。譯者が手にし得たこの『纘義』（德清俞樾撰）にも、また更に手に入れ得た『太上感應篇註』（東吳、惠棟撰）にも、本書引用の二つの物語は載つてゐない。多分一層通俗的な註釋書から取つたものだらう。

『Yen-Tchin-King の歸還』――私のこの飜譯には、思ひがけなき時代錯誤が含まれてゐるかも知れない。原文の物語は、『太上感應篇』に頗る簡勁に述べてある。說話家は帝王の名を舉げてゐない。また叛亂の起こつた時代をも、全く憶測に委ねた形になつてゐる。バーバー氏著『回想錄』には、本篇に見えるやうな强弩善弓の一例として、彼が目擊した蒙古の射手は、耳と耳が合はんばかりに廣く兩臂を張つて、二百斤の弓を曲げたといふことを記してゐる。

『茶樹の緣起』――私のこの昔噺は、一八七一年發行『支那事誌』に見えたブレットシユナイダー氏の簡單なる記事に據つたものである――

『日本の傳說によると、西曆五百十九年頃に、一人の佛僧が支那へ渡つた。彼の全靈全心を神に獻げんがために、彼は晝も夜も常住不斷、冥想をつづける誓を立てた。精進多年、

非常に疲れた擧句、彼は睡眠に陷つた。翌朝目が醒めてから、彼は誓を破つたことを大いに殘念がつて、兩方の眼瞼を切つて、地に投げ捨てた。翌日その處へ歸つて見ると、彼は眼瞼が各〻一本の灌木となつてゐるのを發見した。これがその當時まで未だ知られなかつた茶樹であつた』

ブレットシュナイダー氏は、この傳說は支那人には知られてゐないと附言してゐる。しかしもともと佛敎とその一切驚くべき傳說は、支那から日本へ傳つたのであるから、この傳說もまだ支那に淵源を有し、後になつて日本の年代で作り變へられたものと思はれる。私の佛敎經句はフエルナン・ユー氏の譯及びレオン・フキーア氏の西藏語よりの譯から採つたのである。若し閑暇の際、拙著に一瞥を賜はる東洋學者があれば、彼は私がまた梵語詩人のバーミニー・ヴイラーサからも、一つ二つの思想を藉りてゐることを見出すであらう。

『窯神譚』――始めて支那の製陶術の祕訣を歐洲へ傳へた宣敎師ダントルコル氏は、百六十年前に書いた――

『支那の帝王は彼等の存命中は、最も恐ろしい神のやうなものである。して、彼等は何ものも彼等の希望を妨げ得ないものと信じてゐる……

嘗て或る皇帝が一つの見本通りの陶器を作るやうにと嚴命した。その製作は全然不可能であるといふ答を得たので、彼の願望は却つてますます募つてきた……半神の如き皇帝の命を受けて、その事業の監督と促進に當つた官吏は、職工輩を遇するに粗暴を極めた。可愛相にも職工達は、その資力を蕩盡し、非常なる骨折を拂つて、しかも報酬としてただ打擲を受けるのみであつた。一人の職工は絶望窮策の餘、烈火の中へ跳び込んで、直ちに灰燼となつた。しかし恰もその際窯中で焼いてゐた陶器は、完全に美麗なる結果を呈し、皇帝の嘉賞を博したとのことである……それから、かの不幸なる最期を遂げた陶工は、英雄として仰がれ、彼の像は製陶守護の神として祀られた』

ダントルコル氏は安樂の神 Pou'T'ai の像を、眞正の窯神の像と間違へたらしい。それはヂャックマール氏及び他の諸氏が指摘してゐる通りだ。しかしこの謬誤はその神話の美を壊はすものではない。またダントルコル氏は景德鎭に於ける支那人の友が、彼に話したままを寫したものと思はれる。この他の諸點に關して、この天主教宣教師の記事の信憑するに足ることは、スタニスラス・ヂュリアン氏並びに他の諸大家の研究が、ただますます保證して行つたばかりである。ヂュリアン氏並びにサルヴエター氏の兩大家は、その天晴れ立派なる佛譯の『景德鎭陶錄』（この書は私がこの小話を書くに當つて、非常に役に立つ

た）の中に、ダントルコル氏の書簡から長いことを引照し、また眞摯なる研究家として最上の賞讃を彼に捧げてゐる。私の知り得た限りでは、この神話については、彼が唯一の典據となつてゐる。また他の事柄に關して彼が確言したことが、歳月の精嚴なる取捨によく堪へてゐるのは驚くばかりである。して、長髮賊の亂が景德鎭を亡ぼし、その貴い工業を萎靡させてから以來、佛國宣教師の文書と記事は、廣くその價値を認めらるゝに至つた。物語の主人公の名として、私は安樂の神と區別するため、ただ添附字を省いて、單に浦（プー）という名を用ひた。

チタ

チタ
ラスト島の記念

されど自然はそのあらゆる風もて鳴り響き、
己が思ふが儘に振舞ひて、去り行きぬ。

エマスン

ニユウ・オルリアンズのわが友
ドクトル・ロドルフォー・メイタスへ。

余は大なる矛盾なり——
波の如くなる時は地に爬ふ長蟲にも似通ふべく、
　風の如くなる時は空飛ぶ鳥にも譬ふべし。
強き力と弱き逃避、而して厭離と愛着と、
さながら一つの大濤の、或は追はれ
　或は追ふが如し。

ヸクトル　ユーゴー

ラスト島物語

一

ニュウ・オルリアンズから沿岸諸島へと南へ旅行すると、紆曲して居る種々な水路に依つて、奇妙な陸を通つて奇妙な海へ出て行く。墨其古灣へは、したいと思へば、ラガー船て行ける。が、バイウー旅行の爲めに特別に造られて居る輕い細長い蒸氣船でやつた方が、その航海は遙に早く且つ愉快に出來る。その蒸氣船が通例乘客を迎へる處は、砂糖荷揚場のつい傍の、古いサン・ルイ街の河下口から程遠からぬ處で、其處にはいつも蒸氣船が幅輳して居て、その防波堤へ、肩を並べて、その白い胸を休める餘地を爭うて求めて居る樣は、疲れて居る大きな白鳥のやうである。が、諸君がそれに乘つて墨西哥灣への旅をするあの小形な汽船はミシシッピ河には長くぐづついては居ない。河を横斷して、或る堀割の口へ辷り込み、暫時其人工の水道を骨折つて進んで、それから歡喜の一聲と共に其處を去

つて、影濃き幾哩かのバイウーを、プッフと湯氣を吐いて、氣儘に下流へと進む。多分それから船は水浸りの稲田の茫々たる靜寂の中を諸君を運んで行くであらう。其處の黄緑の平坦を破るものは、長い間隔を置いて眼に映ずる、灌漑機械の黒い半面影像である。——然し、五つある異つた行路のどれを取るにしても、——寄生の鬚苔で眞つ白になつて居る、野蠻人が崇める物神の聚合のやうな奇怪な、糸杉の群れ集つた中を通つて、——濕地森林の薄暗い迷路の中に浮かんで居ることを、一度ならず諸君は見出すであらう。絶えず川から或は小さな湖水から、又も堀割或はバイウーへ——バイウー或は堀割から、更にまた湖水或は入江へと汽船は辷り込む。そして時にはその濕地森林が顯然水路の岸邊からうすれ去つて、葦繁る廣漠たる沼になる。其處は、そよとの風の無い夜すら、磯打つ波の雷音に似た音にそのぶくぶくした土は震へて居る。抑揚合はせて歌ふ——素ばらしい漸次强音と漸次弱音とて節奏正しく起伏する——幾千萬の爬蟲の聲の嵐の吼號なのである。蛙の！異大な凄まじい合奏なのである。……

喘ぎながら、叫びながら、その底を砂の洲に擦りながら——その沼澤地の下方の、日光が洽く光り輝いて居る青海原へ早く出て行かうと、日一日その小蒸氣船は努め勵む。多分幸にも日暮れ時分に墨西哥灣へはひるてあらう。乘客の便を計つて船は日中だけ進行する。

が、冬夏ともバイウーの迷路を縫うて、夜も亦、進行する別な船がある。時には北極星をたよりにその針路を定めたり、――時には霧の白い季節には竿で手探りをしたり、――時にはまた、其處の空では月の如くに皎々と輝いて、通つて行く時その無言の沼澤へ、わななく銀火の一條の跡を垂らす、あの太白星に依つて、舵を操つたりするのである。

物影が長くなる。そしてしまひには林は背後に遠のき縮んで青味を有つた細い線になる。――陸と水とが共に明かるい色を增す。――バイウーは開けて幅廣い水路となる。――潮水は入江と繋がる。――そして海風が――強い、涼しい、光に充ちた海風が――突として襲ひ來る。船は初めて――潮流の生きた大きな脈搏に調子を合はせて搖れて――動搖しだす。眸を凝らして甲板から四方を眺めると、眼を遮る森の壁は一つも無く、こゝの低地は嘗て海の爲めに切れ切れに裂かれて、妙不思議な破片を爲して墨西哥灣のあたりに撒き散らされたものに相違無い、といふ氣がするてあらう。……

風になびく一面の野甘蔗に抽んでてオアシスの――常磐の樫の圓うなつた枝葉て陰の濃い隆起若しくは小山の――突立つて居るのが時折見える。シエニエールと呼ぶものである。それから、輝く海原からも亦、それに似た綠の圓い岡が――可愛らしい小島が――立ち現はれて居る。それはいづれも、黄白色の、まぶしい砂と貝殼との、濱の帶を有つて居り、

——それは總て、マアトル樹や棗棕櫚、香橙やたいさんぼく、といつた半熱帶樹の葉に光り輝いて居る。そんな樹木のエメラルド色の影の下に、棗棕櫚で葺いた茅屋から成つて居る小さな妙な村々が睡つて居る。其處には皮膚の黑い東洋人が——自分等の母語のタガル語も話せばフイリピン人が使ふ西班牙語交じりのクリオール語も話す、また西印度の正統な傳說をルイジアナ州に不朽に傳へてくれる、馬來の漁師共が——住まつて居るのである。人の餘り知らぬそんな村々には、如何なる彫刻家をも感激さすに足る女の子が——赤らんだ靑銅のうつくしさ——彼等の頭上に搖らぐ棗棕櫚の如く、すらりとしてたをやかな女の子が、——居る。……もつと、海に近い方へ行くと、支那人部落を通ることが出來る。幾百本の柱の上に、水上に、立つて居る廣大な露臺のぐるりにかたまつて居る、木造小屋の妙な部落である。——そこの小つぽけな荷揚場の上の、深紅な表意文字が描いてある白い看板に、諸君は目が留まらずには居らぬ。その大きな露臺は魚を天日で乾かすに使ふので、その看板の奇妙な文字は、文字通りに譯すると、『堆積——小海老——夥多』である。……それからしまひにはそこの陸地は全く消え盡くして、荒涼たる海沼になつてしまふ。その沼の靜けさは滅多に破られない。唯、時に、脚の長い鳥の陰氣な鳴き聲がしたり、荒れの季節には不可思議な海の樂師がその偉大なオルガンのベースの樂鍵に手を觸れる折の、

全海岸を震はすあの音がきこえたりするだけである。……

二

その海沼の先きには奇妙な群島が横はつて居る。今日その海島へ蒸氣船で行くとすると、大抵グランド・バス水路を通つて、グランド・テル島の縁を通つて、墨西哥灣へはひるに極つて居る。此島は群島中で一番能く人に知られて居る島なのだが、それは近いからでは無くて、崩れかかつて居る大きな堡壘と優雅な燈臺、バラテリアの定置白色光燈臺、とがその島に在るからである。それが無ければ、其處は甚だ殺風景なところで、漂流物や腐敗しかかつたもの――蟲が穴をあけて居る船材、海豚の死骸、といつたやうなもの――がいつも點々散在して居る細い濱邊から、風に吹かるゝ芝草や筋張つた雜草が、あちらへおいでと、おいておいでをして居る荒地に過ぎない。東の方、朽葉色の其處の平坦地は、彼の燈臺の圓柱形の半面影像に斷たれて居て、それからその先きの處で、更にまた矮樹の小さな木立に斷たれて居て、その木立の上に、煉瓦造の古い堡壘の赤味がかつた角張つた建物が聳えて居るのである。その堡壘の濠には蟹が群を爲して棲まつて居り、その水門溝は廢

物になつた砲彈で半ば塞がれて居て、その砲彈は今は牡蠣の貝殼の皮が厚く蔽うて居る。……四方は全く大圓盤のやうな、鮫住む漫々たる灰色の海である。……

秋の夕暮の時折、うつろな大靑空が聖餐盃の內側の如くに燃え輝き、波と雲とが高低起伏の金の一大亂軍になつて走つて居る時に、そこの黃褐色の草が何れも皆莢のやうな物に蔽はれて居るのが見えることがある。それは小麥色の莢で——大きくて、平たくて、そしてその兩端だけが風に當たるやうに、搖れ動いて居る草の莖一本一本の風下の側に、平らにくつついて居る。ところが、それへ近寄るといふと、淡色のその莢が突然に開いて、白と黑との唐草模樣の斑紋のある、不思議にも華麗な深紅と海豹鳶色とを見せる。莢が不可思議な生きた花に變はる。そしてその花が眼の前で莖を離れて空中に立ち騰つて、幾千となくひらひら飛び去つて、遙か離れた處へ落ち着いて、又もや小麥色の莢に化ける。……睡りむさぼる胡蝶の！花吹雪なのである。

西南のかた、水路を横ぎつて、美くしいグランド・アイル島がほの光つて見える。元は棗棕櫚（ラタニエー）の生えた荒地であつたのだが、その後西班牙の砂糖栽培者が排水を行ひ、溝渠を通じ、開墾を爲したもので、今は主として海水浴地として人に知られて居る。

戰後は大洋がその本領を恢復した。――甘蔗島は衰頽して、平らな濱邊までうねうねと軌道のついて居る砂の野原になつて居る。――栽培者の住宅は田舍じみた旅館に變更され、ネグロ部落は浴客を迎へ容れる居心地好い田舍家の村に改造されて居る。然し檉の木の壯大な木立があり、黃金なす柑橘樹が豐富にあり、香氣馥郁たる莢竹桃の小徑があり、野生のローマカミツレが黃な星を撒いたやうな廣大な牧場があるして、グランド・アイル島は依然として墨其古灣の最も綺麗な島で、そのうつくしさは無類である。といふは、他の島島は殆んど總てグランド・テル島の荒涼さを反覆して居るからである。カイユウ島、カシユテート島、カルメ島、ワイン島、テインバリエの雙子島、ガル島、それから灰色なペリカン島が棲んで居る多くの小島、――これ等はいづれも、針金のやうな草や野甘蔗や矮樹の木立が蔽うて居る砂洲に過ぎぬ。ラスト島（リル・デルニエール）は――これに違いに拘らず、前は長い間滯在の價値が充分あつたのだが、――今は長さ二十五哩の凄涼たる荒地である。それはグランド・アイル島の西約四十哩も離れた處にあるのであるが、それにも拘らず三十年前には、人口がグランド・アイル島よりか遙か多かつた。此一群の島のうちて一番有名な島であつただけては無い、貴族的な合衆國南部諸州の一番流行の海水浴地てもあつた。――今日は漁師だけが訪づれる、それも長い間を置いて。そのすばらしく立

派な濱邊は多くの點に於て今日のグランド・アイル島に似て居つた。田舍家から成つて居る美くしい村が一つ西端近く灣に面して居て、設備も、より結構ではあつたが、餘程似よつたものであつた。ホテルそのものは堂々たる二階建の木造で、中には澤山な部屋があり、大きな食堂と舞踏室もあつた。そのホテルの後ろにバイウーがあつて、旅客はそれから上陸したのであつた。今でも『村バイウー』と水夫は呼んで居る。——だが、少し東へ行つた處で此島を今二つに切つて居る、あの深い水道は、その村が在つた時分には無かつたものである。海が一夜にして——樹木も、野畠も、住宅も悉く灣の中へ消え失せて、唯々あの木造家屋と貯水槽とがその上に築き上げられて居た、丈夫な煉瓦の支柱と土臺とが少々殘つただけて、前の人間住居の痕跡何一つ殘さなかつたあの夜——切り斷つたのである。その大激變後生きて居る物で見つかつたものが一つあつた——それは一匹の牝牛！てあつた。事實この島を二つに斷ち裂いたあの大洪水の狂暴に、どうしてそのただ一匹の牝牛が生き殘つたものか、今に至る迄奇蹟とされて居る。……

三

こんな島々の灣に面した側では、樹木が――樹木が一本でもある場合――みんな海から陸の方へと曲つて居ることが認められよう。風が眠つて居る若い照り輝いた日にも、樹木の悶え苦しんだ恐怖の狀には怪しくも悲哀なところがある。グランド・アイル島の一群れの樫の木が特に暗示的であつたことを自分は記憶して居る。それは地平線を背に一列に身を屈めた五株の影像で、――髮は風に吹き亂され、上衣はしりへへなびかせて、逃げ走る女のやう――痛ましげに腰をかゞめて、倒れまじと北の方へ一所懸命に雙腕を突き出して居るのであつた。實際また後から追跡されつゝあるのである。海が陸を喫ひつゝあるからである。これまでに幾哩もの地面が大洋の騎兵隊の倦まざる突擊に降服し來たつて居る。古昔砂糖黍がその幾百萬の小旗を振つて居た處に海豚が戯れて居るのを諸君は上等な雙眼鏡で遙か遠くに見ることが出來よう。また鴫がククと鳴いて居た場處の上を今は海深く鮫の鰭が縫うて居るのである。人間は堤防を築く。然し、攻圍する潮汐はその破城槌を以て――漂流の森林全部を以て――水樫や重い糸杉の巨大な幹を以て向かつて來る。とこしへ

にかの黄色なミシシッピは建設しようと力める。とこしへに海は破壞しようと努める。――そして兩者の永久の鬪爭のうちに、島と海角とは、空行く雲よりは緩やかではあるが、それに劣らず奇異に、形を變へる。

それから研究の價値があるのは、不可抗な侵略に手向かつて林がその最後の勇敢な抵抗を試みた暗澹たる古戰場である。それは、波打つて居る砂が廣く緣取つて居る、海沼の長い尖端にあるが常てある。浪がそんな尖端を越えて渦卷きかへる丁度その處に、黑ずんだ、枝株の恰好をしたものが、澤山に水の上に突き出て居るのが見分けられよう。破れた煙突に似て居る程に高いのもあり、また――甲殼類が造り成した白い物が、其處此處に、取れ殘つた外皮のやうに附着して居て――馬鹿に大きな骸骨の足、骸骨の手、に驚く計りに類似して居るものもある。それは水づかりの樫の木の――貝の殼がそのところどころ一寸も着いて居る程長く水につかつて居る樫の木の――胴體と手足なのである。濱邊のずつと奧の方には、非常に大きな樹の幹が打仆れて居る。その或るものは、巨大な毀れ圓柱の如くに見え、或るものは地中に埋れた大きな胴だけの像を思はせ、そしてその深くなりゆく墓の中から、手足を斷たれた根株を絕望に擡げて居るやうに見える。――そしてそんな物の横に、殘忍な潮汐が二十年の間それを襲擊し來たつて居り、その根の上下の土を次第にむ

しりとつてしまつたにも拘らず、愕く計り强情に足を踏んばつて居るのがある。そのさはりの砂地は——下の方は柔かい、表面も上皮が薄いその砂地は——毛むくぢやらな脚を有ち、ぎろぎろする大きな眼を有ち、そして乳白色の爪足を有つた、美しい斑紋のある半透明の蟹がつくつた穴に到るところ貫かれて居る。——一方また、そのさきの綠の萱の生えた處には、强風が葦の中を吹き渡る時のやうな、絶え間無しのさらさらいふ音がする。それは『胡弓ひき』蟹が驚く計り多く這うて居るからである。それが銘々其の一本の爪足を翅鞘のやうに身體の上に折り重ねて、横に走り廻つて居るのを見ると、無經驗な訪客は初めはそれを奇妙な甲蟲だと見誤るかも知れぬ。そのさらさらと音のする綠色の狹い地面は年々に狹うなつて行く。その砂地は、生きた鳶色の皮膚の如くに身震ひしまた皺を寄せて、延びて沈む。そして傾いた濱邊へ、死んだむきだしの足でいつまでもとしがみついて居る、樫の木の共立つたまゝの最後の死骸は、その垂直の姿勢から次第々々に傾く。砂地が沈むと、その根株は這うて居るやうな風になり、その撚れ合ひ絡み合つた蛇のやうな根の塊は——章魚の延ばした腕のやう——腹這ひして居るやうに、悶えて居るやうに見える。……

……グランド・テル島は失くならんとして居る。海がその堡壘の底を掘つて居るから、數年ならずしてその堡壘は强襲され奪取されてしまふであらう。グランド・アイル島は失

くならんとして居る、徐々てはあるが確實に。濤がその牧場の陸へ三哩も喰ひ込んで居る。ラスト島は失くなつた！どんな工合に此島が失くなつたかといふことは、自分は或る老練な水先案内者の脣から初めて耳にした。それは或る夕方、いつかの高潮がグランド・アイル島の濱邊の奥まで深く推し込んだ、と或る流れ木の糸杉の幹へ二人で腰かけて居た折のことである。その日は熱帶的に暖かかつた。二人は生きて居る空氣を一息吸ひに海岸へ出たのである。日暮になつた。するとそれと共にその重苦しい暑さが上がつた――突然の微風が吹いて來た――暗くなり行く地平線に稲妻が閃いた――風と水とが爭ひ始めた――するとやがてその低い海岸すべてがどうどうと鳴つた。その時自分の伴侶の男はその話を始めたのであつた。多分風の襲來がその男を鼓舞して口を開かせたのであらう！自分は其男の物語を聽き、また海岸の囂々たる音を聽いて居るうち、ブレトン的な妙な空想の思ひ出がチラと頭に歸つて來た。それは、海の聲は決して一つの聲では無くて、多數の聲の――溺死した人達の聲の――入り亂れた音である、――夥多の死者の囁き聲である、――嵐の妖魔の招喚の大聲をきいて、生けるものに對して暴れ狂はんものと立ち現はれた、無數の幽靈の呻吟の聲である、といふのである。……

四

斯んな島の海岸で味はれる夏日の妙趣には、それが唯の一日であつても、實に言ひ現はすことの出來ない、一生忘れることの出來ない或る物がある。色彩の淡い温帶寒帶では、天地が斯んな光輝を發することは稀れにしか無い。西印度の空の光耀を見た事のある人達だけが自分の言ふことが能く分かるであらう。でも、この墨西古灣の晝の日には、西印度諸島には存しない、色の柔らか味があり、色の和らぎがあり、永久の熱帶の春の如き、一種の靈性がある。ゼノフアネスが古昔その眼を上げて、無限無窮の青空は神なりと斷言したのは、斯んな空を見上げてのことであつたに相違無い。――デ・ソトが米國南部諸港のあの最も洪大な最も壯偉なものにエスピリトュ・サント――聖靈灣――といふ名を與へたのは、まこと斯かる空の下に於てであつたのである。この光りかゞやく墨西古灣の空氣には我々に畏敬の念を否でも起こさせる、何とも言ふに言へぬ或る物が存して居るのである、――生氣のある或る物が、神聖な或る物が、汎神的な或る物が在るのである。だから眼に見る所のもの、洵にそれはプニウマではないか、無限無窮の氣息ではないか、聖靈ではな

いか、不可知なるものの青い靈魂ではないか、と斯う恭しくも我と我が心に訊ねるのである。この靜穩界にあつては――脚下の低地を除いて――總てが、一切が、靑である。その低地も、玲瓏たる永遠の日に浮かんで居る綠色の小さな片としか見えないから、在つてもその存在を我々は忘れてしまふ。すると徐ろに、愛撫的に、それに反抗の出來ないやうに、無限無窮なる者の魔力が我々を襲ふ。我々は時間と空間とを脫却して、眼を開いたまゝで夢を見はじめる――事實を忘却して、氣持のいい夢幻鄕へ漂ひはじめ――過去、現在、實體を忘れはじめ――永久にそれへ全然融合したいものだと希ふ、その無限無窮な靑い靈魂の存在のほか、何事をも理解しなくなりはじめる。……

そして此の靑色の眞晝日の魔法は時によつて數箇月も繼續する。一點の雲無しに黎明は菫色の東方に赤らむ。その咲き出づる『神祕な薔薇』には――過ぎ行く鷗の、深紅を背にその鎌なす翼をひるがへす、影像のほか――毫末の汚點も無い。日がいや高く浮かぶにつれて、海は絕えず其色を更める。或る時は滑かに且つ灰色に、しかも朝の金色をきらめかせて、約翰の幻であり――火を混じた默示錄の玻璃の海である。――するとまた、吹き募る風と共に、西印度の風景を描く畫工は大抵は知つて居る彼の嘘のやうな紫の色味を帶びる。更に又、日中の炎光の下に、一面の高低のあるエメラルドに變ずる。夕暮と共に、地

平線は言ふに言へぬ美はしい色を——眞珠の光、牛乳と火とのオパール色を——帶びる。そして西の空には黄玉（トパーツ）の灼熱の輝きがあり、眞珠母が有つ如き驚くべき紅ら味がある。それから、海が眠ると、海はそんな色總てを——微かに、妙不思議に——それを空の際までも映じて——夢見るのである。

それからまた美くしいのは、晝夜平分日が近よると、風の來るのを表示する彼（あ）の白い幻像である。輝いた雲が一つ海の緣の上へ徐々とその頭をもたげる。登つて來る。と、他の雲がそれと一緒に——右にも左にも——現はれて、初めはゆるやかだが、後には段々速く立ちのぼる。いづれも皆きらきらした眞つ白て、ふんわりして居て、丁度ほぐした新綿のやうてある。巨大な橫隊を爲して灣上高く靜々と上ぼり、卷き絡まり、擴ごつて進行するアーチになり——地平から地平へ彎曲する。淸らな冷たい呼吸（いき）がその來るに伴ふ。それが天心に達すると、世界の兩下側からその無限な架徑を上に延ばして、最高天界にアーチ形に架かつた妖異な橋となつて——暫らくの間釣合を保つて——じつとして居るやうに思はれる。すると、この巨大な幻が、恰も空氣を旋回軸にしての如くに——その曲線の均勢はいつも保持しては居るが、眼には見えぬその兩端をその圓空の向うの方て、下の方て、動かして——廻轉をし始める。そして終には、しゝへに風を從へて、世界の青い眼界裡の先

きへ、跡切れずにその儘に浮かび去つてしまふ。此の白い弧は、日々、殆んど同じ時刻に、立ち現はれ、旋回し、そして過ぎ去る。……

……此の低い海岸には岩は影さへ無い。――黄褐色な滑かな沙から成つて居るなだらかな長い濱邊と洲とだけてある。その砂とその海は生氣に充ちて居る。――砂丘はどの砂丘にもさわさわといふ不斷の囁きがある。それは蟹類のうぢうぢ走り廻る音である。――海は到る處歇み間無しに白銀なす稻妻の閃きがある。それは無數の魚の驅せひらめく影である。微小な透明な、蟹のやうな生物が――寒天のやうにまるで色の無い生物が――時には淺瀬に、群集して居る。或はまた――その透明な包皮を永久に收縮し開張して、心臟の如く鼓動する、脈理のある美くしい――無數の水母が漂うて來る日がある。半透明な空色又は薔薇色をした或る物は、水の中に在つて、鐘形の異大な花の影か靈かのやうに思はれ、――或る物は、生きて居る奇異な植物の外觀を――やつと芽を吹きそめた、乳色の大きな球根の外觀を――有つて居る。だがその影の如き芽生と幽靈の如き雄蘂に！そつとてもさすられた人間の皮膚は災難である。白熱の鐵に觸はつたとてもこれ程痛くは無い。……その出現後一時間か二時間の內に、このぶよぶよ震へて居る寒天どもは、來た時同樣に不思議にも消えて居無くなる。

大膽な泳ぎ手なら、或は獨りで遠くまで泳ぎ出ることもあらう――だが、一度だ！二度とはせぬ！伴侶（つれ）があつても。水が段々深くなつて行き、深い證據に、下から上への冷たい波の流れが增して來るのを感ずる時に、盲目探りする手指が觸はるやうに、物が無數に身體（からだ）に觸はるのを――岸の方へ逃げ走る魚が、無數の魚が身體（からだ）に觸はるのを――感じ始めるであらう。遠く進めば進む程、層一層澤山に魚がやつて來るのを感ずる。そして頭の上を、首のまはりを、右に左に、恰もぶつちがひに飛び流れる銀の水の噴水の迸りの如く、見る眼をくらます許りに迅速に跳び上がつて水へ落ち込むのもある。鷗が、氣味のわるいきいきい聲を出して、圓を畫いてその水泳者のあたりを低く飛ぶ。――或は、その深みの處で、下へ卷き込むやうな衝動を與へて、身近く過ぎ去る重い早いしなやかな者に足が一寸の間觸はる。すると奈落の恐怖が、聲無き巨大な海の夢魘が、襲うて來る。ちらと光を見せて横を走り逃げるそんな蛋白石色の幾百萬の物が抱いて居るその無言な恐怖心がまた水泳者の頭へも入つて來るであらう。……

何物からして彼等は斯く間斷無く逃げ走るのか。あの巨大な鋸鮫からか、或はあの暴食の鯊からか。――海豚の群からか、或はグランド・エケイユ――如何なる網もそれを捉へることの出來ぬ、銀色の鱗甲に頭も身も武裝したあの華麗な怪物――からか。――或は又、

いつも蝙蝠の翅の如く擴げた廣大な脇鰭を有つて居る、黒い、軀の扁平な、すばらしく大きな、墨其古灣の鮟鱇――ラガー船の船員を戰慄せしむる物、大錨を根扱ぎにする物――からか。或は、此等總ての物からであらう、そしてまた、同じく他の怪物共からで――それを妨げなければ、深海をば、生物の無量の波立たぬ沸騰に濁らし濃からしめん、彼(あ)の驚く可き豐饒に對する破壞者として、均衡者として、抵抗者として、大自然が進化し發達せしめた化物姿の者共からで――あらう。……だが水泳者が多勢居る時には、そんな危險は忘れてしまふ。――多數といふことが勇氣を附けて呉れる。――それで眼見るを得可からざるものを恐るゝの念を抱かずに、誰れしも震ひ戰く電氣的な長時の海の愛撫に、自己を委ね得るのである。……

五

三十年前に、ラスト島は丁度そんなやうな魔力のある日の異常な光に浸つて居た。七月は將に盡きんとして居た。幾週の久しき、大空の永久の青い夢を破る一點の雲も無かつた。風は呼吸(いき)を止めて居た。ゆるやかな小波が、口づけの如き囁の如き音を發して、鳶色の溫

和な濱邊を愛撫して居た。そこの村の境界外の處で、村の人聲のきこえない處で、たつた一人で居た人には、此の大いなる無言、此の大いなる光は、不可思議に充ちて居るやうに思はれた。ところが斯んな沈默は、斯んな透明さは、いつも根據の無い危懼を起こしはせぬ。それは時に前兆だから――來たらん暴風の前兆だからである。大自然は――理解し難きスフインクスであることよ！――その忿恚を最も偉大に爆發する前に、いつもその最も靈妙な魔法を現はし、その畏るべき美しさを一層顯著ならしめるものである。……

ところが人は今記憶してゐない此夏には――日は薔薇の光に生まれ、金色に埋められて――魔法は永の幾日も續いた。それは季節の眞盛り時であつた。マアトル樹の蔭深い此の長い村には避暑の人達が蝟集して居た。その大ホテルはその客全體にやつと部屋と食事との供給が出來た。脫衣場は朝と夕方と水へ群がり集ふ多勢の人に數が足りなかつた。あらゆる人への娛樂が――狩獵釣魚の會、ヨットでの遠行き、乘馬、音樂、競技、散步が――あつた。馬車の車輪は、恰も音消しをされて居るやうに、無聲にその滑かな砂地に轍を留めて、輻を日に閃めかせて廻つた。戀が砂の上へその夢を書いた。……

……すると或る無類の快晴の眞晝、底無しの青空がこれまでに無く深く下界の上で欠伸して居るやうに思へた時、海の水銀のやうな平らかささへ或る突然の變化が觸れた。それは

或る偉大な運動のゆすぶれの影なのであつた。最初、圓盤なす海全體が、空へ向けて一時に起ち上るやうに見えた。地平の曲線が直線に昂まつた。その線が黒ずんて來て、――素敵に大きな皺になり、綠の水の際涯無しの襞になつて、日光に追はれる雲影の如く迅く動いて――近寄つて來た。だがそれはその廣濶たる大海のそれ迄の靜穩さと驚く計りに對照を爲してゐた爲めに、ただその爲めに怖ろし氣に見えたのてあつた。高さはやつと二尺位なものてあつた。それが濱邊へ近寄ると、ゆるやかに捲き返つて、そして低い重いドーという囁の雷音と共に、一面の羊毛のやうな泡を立てて、サアーッと引いて行つた。すぐその後を追うて別な浪が押し寄せた――と思ふと又一と浪――それよりも弱い、四番目の一と浪、それから海は少し搖れただけて、再び靜かになつた。數分經つと、その無邊際の高まりが又始つた。一度、二度、三度、四度と、……今度は長い大うねりが七度やつて來た。そして灣は又もや元の平らかさに復した。不規律に此の現象が幾度も續いた。度ごとに大波は段々重くなり、平靜の間隔が段々短くなり――しまひには海全體が動搖し、色を更め、綠をちらつかせた。――そのうねりが段々短くなつて、形が變つた。それから地平線から岸まて、跡切れ目無しの凹凸の波面になつた。うねうねした物がうぢやうぢや綠色に一面につながつて、そのうねうねがシーッと濱へ卷き轉がつて來ては、砂地の處て扁たくなる

のであつた。でも菫色の大空何處を見ても、卷雲の唯の一點すら見えて居なかつた。そよとの風も無かつた！――諸君は、海が下(した)からもち上つたのだと想像したかも知れぬ。……

實際また、風無くして起こる大浪が其の根源を地震に有つて居るのではなからうかとの想像は、斯んな低緯度の地に在つては全然根據の無いものとも思へぬてあらう。晴れ切つた美くしい日にも、東南の軟風が、眠から驚き目覺めしむる程の妙な臭氣を――魚油のやうな、鋭い强い臭ひを――もたらすことがある。そして其海を凝視して見ると、うねりの上に一面に、水の上に廣く油の大區域が、方々に突然見られるのに更に一層喫驚することがあるであらう。それはこれまで聞いた事が無いから驚くので、海底の不思議な油井戸で、――掘鑿せずして、灣(かい)流の永久の脈搏と共に湧き上がる、火山の噴井なのである。……

然しラスト島の遊樂追求者共は、その日何處かに「大あれ」があつたに相違無い、といふことを知つた。海は猶ほもうねつた。そして岸打つ美事な大波が夕方の水浴を愉快なものにした。それから、丁度日沒時に、美くしい雲橋が出來上がつて、淡紅い綿のやうな水蒸氣のたつた一つのアーチて上空を横に跨いだ。それが虹色の空がうすれると共に色を變へまた色を深めた。それからその雲橋が近づいて來て、擴がつて、張つて、そしてしまひにぐるりと廻轉して强風に道を讓つた。夢見る如きテシユ川の上に架かつて居る輕い橋々

が、ラガー船の水夫がその法螺貝を吹きならして、近く來たといふ吼へるやうな長い合圖をすると、ぐるりと開いて道をあけると丁度同じであつた。

それから、七月の最後の日が經つと共に、風が吹き出した。東北から吹いて來た。淸らかな、涼しい風だつた。巨大な溜息をついて吹いて、氣息つきに休みてもするやうに、規則正しく間置いて靜まつた。夜どほし吹いた。そして吹き休む度毎に、高まる大波のそれに應ずる呻吟の聲がきこえた。恰も海の旋律が空氣の旋律を模して造られるやう、――恰も水の波動が正しく風の波動に答へるやう、――一と吹き毎に一と大波、一と溜息毎に一と巨浪、が來るのであつた。

八月の朝は晴れやかな空に明けた。風は東北から相變はらず涼しく淸らかに吹いて來た。浪は今は海岸に鋭角を爲して寄せ來りつゝあつた。羊の綿毛を――その靈的な毛を取られに風に驅られて走る、形態が確と分からぬ綠色の、無數の羊の群の如き浪を――持つて來だした。濱邊は眼の及ぶ限り遠くまで、その水際の斜面は、その羊の摘み毛で眞つ白てあつた。雲が出て來て、猿狽の體て日の面へ飛んて來て、そして走り去つた。その日まる一日、そして其夜一と晩、それから明けの朝までも、恰も晝夜平分時の强風のやうに、その風は東北から吹き續けて居つた。

それから日に日にその偉大な氣息が實着に勢づいて來、波も亦高くなつて來た。それから一週間經つと、海浴は危險となつた。岸に碎ける巨大な浪が、動いて居るレヴィアサン獸の如くに、人の脊丈の倍に、群を爲して押し寄せて來た。なほもその强風は募つた。高浪は倍々その大を增した。そして千切れ雲が頭上を層一層迅く飛んだ。九日の灰色の朝は水泳の達人をも恐れしむる巨浪を青白く照らした。海は泡の激烈な一大苦悶て、風は浪頭を吹きちぎつて地平線を汐飛沫の霧で隱して居つた。その日は一日影無して灰色て居た。時々氣ちがひ雨が土を打つて降つた。夕方に、西の方雲の裂け目にほの明かるく、薄氣味の惡い物が――綠の空へ深紅な日輪が――窺はれた。其鮮血と紅い圓盤は、異常に廓大されて居て、帶をまとうた惑星のやうに、橫に棒の條があるやうに思はれた。と見る間も無く、その深紅な妖怪は消えた。そして無月の夜が來た。

それから風の吹方が妙になつて來た。呼吸では無くなつた。世界を橫ぎつて呻る『聲』となつて、――フウ！――フウ！――フウ！と女夜叉の聲を發して――唸つた。そしてその大きな梟聲の度每に海のモウモウ聲が、その暗黑の夜どほし、層一層底知れず、深まるやうであつた。此の入江の岸波は、西北から砂地の濱の斜面を越えて、鹽水の沼地へ高く打ち込んで來はじめた。村のバイウーは幅びろうなつて浪の唸りの海になつた。……斯く

てその騷動は倍々强まり、その擾亂は愈々高まつて、朝に――灰色の薄暗い、ヒユウヒユウ雨の朝に及んだ。雲が破れ裂けての雨と、煮えくり返る大苦悶の海からの風に吹きとばされての鹽水の雨と、であつた。

蒸氣船『星』丸が其恐ろしい朝にセント・メリイの港から入つて來る筈であつた。來るであらうか。誰れも實際それを信ずるものは無かつた――誰も。にも拘らず人々は怒號して居る濱邊へ、其船見にと、希望は理性よりも力が强いから、大骨折て出て行つた。……

今日と雖も、このクリオール諸島では、蒸氣船の到着は一週中の大事件である。電信線一本あるては無し、電話線一本あるては無い。郵便船が、朋友や新聞や書翰を齎して、外界との交通の唯一の信頼すべき仲介者である。蒸氣といふ魔力は、ニユウ・オルリアンズの位置を、テインバリエへよりかニユウ・ヨークへ近いものに、ワイン島へよりかワシントンへ近いものに、バラテリア灣へよりかシカゴへ近いものにした。そこで波や風が最も深い眠に陷つて居る間でも、餘りに人の知らぬ此の群島に滯在して居る客には、時折一種の恐怖心たる心細いといふ感じが――人間の世界から孤立して居るといふ或る淋しい感じが――深山の靜寂の中にあつて、或は花崗岩より成る絶壁の海岸の永久の擾音の裡にあつて、人を襲ふ彼の孤獨の感とは全く異つた孤獨の感じが――手緣り無い不安な念が――起

こつて來る。其處の陸地は海床の一波動に過ぎぬもので、その一番高い隆起といつたところが、兩側の鹽水沼から言つて、人の脊丈ほども高まつては居ないのである。——その鹽水沼がまた滿潮時の水平と殆んど同一水平なのである。——その潮汐がまた變はり易くて、賴みにならぬもので、神祕な者である。が、此の絕えず變化しつゝある海岸の四方と上とで、空と海といふ雙子の廣大無邊な奴が、鬪爭の無限無窮の力として、銘々そのすさまじい啓示を發言し始めるといふと、人間からかけ離れて居るといふ此の觀念は、實際人を戰慄させる。……多分斯んな感じが、一千八百五十六年八月の十日若しか『星』丸が來るかと人々に希望の出來ぬ希望を抱かしめ、遙かに遠きテルボンの方へ人々の眼を見張らしめたのであらう。『地面へうつむけになつて居なければ倒される風でした』自分の友達のその水先案內者は曰つた。

……『おや!』とその暴風の叫聲よりかも高い或る聲が叫んだ。『來よる、來よる!』……如何にもさうだつた。アチャフアラヤ灣を下つて、それからバイウーや小さな湖水や溝川の不思議な迷路をば、最善な水先案內者だけが知つて居る裏路を通つて遣つて來て、この脆弱な川蒸氣は、本海岸に近く接して航走して、ケイユウ灣へやつと漕ぎつけたのである。そして今度は恐ろしい海を渡つて、風を背に、島を目かけて眞直ぐに舳先きを向け

て居るのであつた。遣つて來る、――前後に搖れ、左右に傾き、跳び込みして――雲の如くに船體を包み、船體の動くと共に動く、大きな眞白なものと一緒に！――飛沫の暴れ渦卷と一緒に！――幽靈の如く白く、且つ又幽靈の如くに、遣つて來るのであつた。といふのはその煙突がどれも目に見える煙を吐かぬからである。――風がそれを呑んでしまふのである！岸での騷ぎは猛烈になつた。男は叫んで聲を嗄らした。女は笑つたり泣いたりした。ありとあらゆる望遠鏡ォペラグラスは近寄る此の怪物へ向けられた。水先案內者がどうして立つて居られるのか誰れも不思議に思つた。船長の狂氣に誰れも愕いた。

が然し船長エブラハム・スミスは氣は狂つては居なかつた。老巧な亞米利加航海者たる彼は、この大墨其古灣をば、學者が幾卷の部厚な書册を諳記してゐる如くに、知つて居たのである。彼は此の灣の暴風の生まれ場所も、此の灣の潮汐の祕密も、其颶風の前兆も知つて居つた。ブラシア市に船がかりして居る間に、此の嵐はまだその絕頂に達して居ないといふことを知つた。偉大な危險の來たらんとして居るのを朧氣に前知した。そしてもはや風を待つべきではないと決心した。『おい、みんなの者』と彼は言つた。『萬難を冒して船を出さなければならぬ』。そして『船を出した』のである。あらゆる危險の中を、船員は終始彼に忠實であり彼の命令に服從した。朝の九時迄に風は――或る時は遠雷の聲に

弱り、或る時は耳を聾せん許りの無量の轟聲に耳もと近く碎けて——怒號に强まつたのであつた。そこで船長は『星』丸は『死』と輸贏を爭つて居るのであると知つた。『船が勝つ』彼はつぶやいた、『抵抗が出來る。……乾度今夜己は必要な人間になる』

船は果たして勝利を占めたのであつた！朗々たる凱歌の汽笛を鳴らして、この勇敢な小船は到頭バイウーへ乘り込んで、いつもの休息所の直ぐ横、歩道板を下ろす程迄に岸に近くはなかつたが、ホテルが充分に眺められる處へ、碇を投じた。……だがその汽笛はその臨終の哀哭の聲であつた。東北から押しに押し寄せる入江の波で、鹽水沼も、島の半分も、旣に早、大理石模樣を呈して居つた。それても風はなほその發作的な偉力を增すのであつた。

村の田舍家がゆれ始めた。賴みにして居る堅固な支柱からずれ下がつたのもあつた。煙筒が一つ倒れ落ちた。鎧戶は捥ぎとられ、廊下椽は破碎された。輕い屋根は吹き上げられて、下へ落ちて、ぴしやんこに潰れた。樹木は頭を地べたまで折り曲げた。しかも猶ほ暴風は過ぎ行く時刻每に層一層聲高くなり、層一層暗澹となつた。

『星』丸は海が高まると共に身をもちあげて、その錨を曳きずつた。更に二つ錨を投じたが、やはり曳きずつた、——苦悶の餘りに身を捥ぢ、身を震はせ、身を傾けて、曳きず

るのであつた。夜になつた。砂が風と共に動きだして、細かな銃丸の絶え間無しの射撃の如くに人の面を刺した。そして氣狂になつたその疾風は前の方へ、横の方へ、かの蒸氣船を擲り倒しにやつて來た。そのうち船の甲板の桁構が一つ、大きな釣鐘をガーンと鳴らすやうな音を立てて、取れた。すると又一つ！……そこで船長は部下に命じて船の上部の一切の造作物を、甲板だけになるやう、すつかり伐り倒させた。沸き返つて居る水の中へ、その煙突も、その舵取部屋も、その船室も飛んで行つた――そして、くるくる舞ひして流れ去つた。それでも猶ほ三つの錨を曳きずりながら、裸體になつた『星』丸の船身は、その時はやその幾百の窓が炎と明かるくなつて居たホテルの巨大な半面影像の方へ段々と近く、暗黑の裡を、じりじりと寄つて行つた。その宏大な木造建築は、その暴風を蔑視して居るやうに思へた。風は――その幅廣い廊下緣を怒鳴り廻つて居つたが――ありとあらゆる隙間を蒸氣のやうな音と力とてヒユウヒユウ唸つて居たが――その狂暴を浪費して居るやうに見えた。ところが二度の怖ろしい突風の間の半凪の折に、恐ろしい事が群れ來て居るその夜にしては不思議だと考へられる音が――音樂の！音が――船長の耳にきこえた。

……

六

……その季節を通じて、殆んど毎晩のやうに、其處の廣部屋で舞踏があつたのであつた。

――その晩も舞踏があつた。ホテルの人數は、自分等の田舍家を避難所として不安だと思つた家族達が島の方々から遣つて來た爲めに、增して居たのであつた。四百に近い客が集まつて來て居たのである。演藝がいつもよりか大規模で準備せられて、はやりの舞踏會の姿を執つたのは、多分此の理由からであつたらう。そして、アッセンションからであらうがアサムプションからであらうが、セント・メリイからであらうがセント・ランドリイからであらうが、イベルギユからであらうがテルボンからであらうが――古風なその首府の、張出し露臺の澤山にある、種々雜多な色を呈して居るクリオール部落の住民であらうが、或は又、テシユの夢の如き樂園地の居住者であらうが、そんなことにはお構ひなして、――クリオール諸郡の富と美とを代表して居る此の快樂追求者達は總て、――お互に知り合うても居るし、また――血緣で續き合ひになつて居るか、社會階級の爲め性質が似て居るのか、又は單に階級的感念、階級的利害の傳統的な同情に互に結び合はされて居るかし

て——何だか親族同志のやうな氣で居るので——それで愉快に交じり合つて居たのである。或はその晩の尋常以上の陽氣さには、幾分の神經興奮が——元氣で以て疑懼に反抗しよう、娛樂によつて不安と戰かはうといふ、熱病的な決心といつたやうなものが——認められたかも知れぬ。だが幾時間かが歡樂の裡に經つた。最初にみんなが感じてゐた沈欝が客の頭に次第にその重みを減じだして來た。その巨大な建物の堅牢さに信頼すべき理由を發見したのである。何等積極的な怖ろしい物も無ければ、何等眼に見えての恐ろしい事も無いのであつた。それてみんなの新しい自信が、旅館の主人公の『イル、ニア、リアン、ド、ミユー、アフエール、ク、ド、サミユゼ〔遊んで居るが一番上策ですよ〕』といふ言葉に現はれたのであつた。甘蔗畠の豫想的荒廢を悲しみ、或は收穫の破滅を談じて何の役に立つ？暴風の亂暴なオーケストラの不協音に耳傾けんよりは、舞踊のハアモニーに、優雅な運動と完全なメロデーとの節奏に、慰藉を求める方が宜い。——外の海の狂暴を眺め、濱に打ち上げられた海藻の飛ぶのを見んよりは、巴里式化粧のみやびさを、——泡とまがふ巧緻のレースの笹縁のある外袍の裳裾が渦と曳きずらるゝを、——光澤うつくしき肩と寶石煌く喉のさながら象牙の如く滑かにあてやかなるを——繻子の上靴穿つ足のほのきらめくを——惚れぼれと見て居る方が賢いのである。……

斯くて音樂と歡樂とは續いた。彼等は——その上品な客達は——自分で悅樂につとめた。彼等は戲言を言つて芳醇な葡萄酒を啜つた。——一千八百五十六年八月の十日のその夜、翌日の事は夢にも思はずに彼等は、二人の間の誓言もした、樂しい未來の希望も抱いた、愛しもした、約束もした。自分等の最も親愛な最も近親なものの未來の天福を計畫して居る、注意深い兩親がゐた。——たをやかな、若木の松の如くに優雅な、そして外國の大學修業の研きをかけて歸つたばかりの、美貌な青年の、母と父がゐた。——その飾り氣の無い態度に魅力のあるあてやかな娘、の母と父がゐた。若い頰は赤らんだ——若い心臟は舞踏の興奮よりも有力な或る感情に波打つた。若い眼は、眼より思慮深い唇が洩らすまじと思つた幸福な祕密を、裏切つた。奴隷召使は、この貴族的な込み合ひの中を、珍味の皿と美酒の罎を手にして、謙遜て同時に生意氣な言葉を使つて——躾の好い召使が斯んな場合に使ふやうに敎はつて居る立派な佛蘭西語をいつも使つて——通らせて貰ふ許しを乞ひながら、走り廻つた。

……夜は更けた。その照り輝いて居る床板は依然として舞踏者の足に動悸打つてゐた。ピアノは依然として鳴り響き、ヴィオリンは依然として歌つた、——そして彼等の歌ふその聲が、その烈風の息切れの間に、暗黑をとほして、『星』丸の飛沫にづぶ濡れの甲板て

足を取られまいと力めて居る船長スミスの耳に響いた。

『驚いた！』と彼はつぶやいた、『舞踏！この風がひよいと南へ廻ると、てんてこ舞になるんだのに！……が此の船は流されはすまい』……

それから半時間經つたかも知れぬ。依然として燈光は穩かに輝いて居り、ヴイオリンは震ひ聲を出して居り、馥郁たる渦は續いて居つた。……と、突然に風が方向を轉じた！

又も『星』丸はよろめいた、をののいた、横へかしいだ、そしてその有りたけ下ろした錨を曳きずりだした。だが今度はその大きな建築とその光とから沖の方へ——恰もその瞬間ベルリオーズ作曲エーベル原作のメロディー、ランギタシオン、ア、ラ、ヴルスの大歡喜を、——その驚くべき奔放な拍子で——注ぎ出して居る、大ピアノの奔放艶麗な雷音から沖の方へ——錨を曳きずるのであつた。

——『ワルツを踊つて居る！』と船長は叫んだ、『神よ、彼等を助け給へ！——神よ、我々總てを助け給へ！……今夜は風がいかいかいかいか海を相手にワルツを踊る！』

嗚呼偉大なるワルツ旋風よ！嗚呼巨大なる舞踏者よ！一！二！三！東北から東へ、東から東南へ、東南から南へ。それからその南方からして、その兩腕にかゝへた海をくるくる

舞はさせて、風はやつて來た。……

……誰か酒宴の最中にヒヤアと叫んだものがあつた。――その綺麗な上靴が濡れて居るのを見出した或る娘であつた。どうしたんだらう？水の薄い流れが水平な板敷の上に擴がつて――舞踏者の足のあたりにうねり曲りつゝあつた。……どうしたんだらう？陸地總てが身震ひしはじめた。つい一瞬間前に、そこの磨かれた床板が輪形に舞ひ廻る足踏の壓力に震動したと丁度同じに、陸地總てが身震ひしだしたのであつた。――建物全體が今度はゆすぶれた。梁と言ふ梁がみんな唸り聲を發した。どうしたんだらう？

叫喚！恐慌！風の夜への突進！上も向ひも無限の暗黑である！が、高まり渦巻く黑い水の斷え目無しの圓圏の上に、遙か遠くて、船燈の灯が踊つて居つた。無量の海水は、こつそりと、迅速に、高まりつゝあるのであつた。

――『メッシュー――メダム、ス、ネ、リアン。大したことぢやないんですよ、本當に。……メイ、ヌー、ザナヴン、ギユ、ビヤン、スウヴン、レ、ザノンダション、コム、セルシ。サ、パス、ギット！今迄も毎度あつたんですよ、斯んな大水は。直ぐに減きますよ。――これよりか高くはなりはしません。ちつとも危險なんかありやしません、えゝ、本當です。あなた、ちつともそんな――おや！ありや何でせう？』……

一瞬間人聲は物凄くシーンと靜まつた。するとその靜寂を突き破つて、誰もの耳へ、南の方からして稻妻の連發と共に轟きのぼる――大砲の巨大な連發射擊のやうな――恐ろしい、今迄聞いたことの無い音が、突然鳴り響いた。廣大に且つ迅速に、いや近くいや近く遣つて來た。地震の折の長いドーといふ低い聲のやうに怖ろしい、連續した、非常に重味のある、雷音であつた。

一番近い本土は――海の沼地へ、浪わき狂ふカイユウ灣を間に――北方十二哩の處にあるのであつた。西の方では、墨西哥灣の水を隔てて、堅固な土地で一番近いのは二十哩離れて居るのであつた。船はあつた、さうだ、あつた。――だが、どんな强い人でも、もう斯うなつてはそれ迄泳いで行くことは出來まい！……

するとすさまじい叫聲が起こつた、――希望の無い恐怖心が發する、しやがれた、ぞつとする、何とも名狀の出來ぬ叫び聲である。――準備無くして、慰安無くして、猶豫期間のありさうな見込み無くして、突然に『無有』と面と向かはせられた時に、人間が放つ絕望の動物的な叫びである。……ソウヴ、クイ、ピユウ！助かれるものは助かれ！扉をもぎ取つた者もあつた。重たい食卓に、長椅子に、或は玉突臺に捉まつた者もあつた。――恐ろしの一刹那の間に――無効な義俠行爲を押しのけて――無駄な仁慈的行動を排して――

我利のあらゆる狂激が、恐慌のあらゆる殘忍が、その威を逞しくした。すると――すると――暗黒の裡を雷音あげて巨大な怒濤がやつて來た。ドドドーン、ドドドーン！…… ガダン！――その巨大な木造建築が搖籃の如くに搖れる。上がりつこ下がりこをする。物の倒れ砕けるドシンガチャンといふ音！人間の叫喚の聲は今は何んてあるか？颶風が叫喚をして居るのである！又もガダンといふ音！――天井からの枝形燈架が粉々に砕ける。明かりが消えて眞つ暗になる。奔流が瀧の如くに突入する。その廣大な部屋が浮き上る――ぐらぐらする――樞軸の上に在るが如くに廻轉する――メリメリいふ音がする――ドシンと落ちて粉微塵に砕ける。更にまたガダンといふ音！――渦に巻込まれて居る破砕物はちらばつて次の巨大な怒濤に呑まれる。そして幾十軒もの田舎小家は顛倒する、突然の渦巻にくるくる舞をする、震ひゆらめく、番目が離れる、そして沸き立つ水の中へ溶けてしまふ。

……斯くして颶風は――巨大な波浪の頭をもぎ千切つて一百尺の空に抛げ上げ――海を陸へ押し重ね上げ――林を仰向けにくつがへして――去つた。入江も水路も脹れ上つて底知らずとなり、川は水を嘔き戻し、鹽水沼は浪荒れ狂ふ一面の水と變つた。ニユウ・オルリアンズ市の前ては、幅一哩もあるミシシッピ河の水が最高の水準よりか六呎高くなつた。百十哩離れて、ドナルドソンギユはラフルシユ川の高まる流れに震へた、湖水はその四圍

の境界を突破せんと力めた。遙か遠くに居た川蒸氣船は——夜生命取る者の近づく咆哮を耳にする、鎖に繋がれた動物の如くに戰慄して——その鎖綱を亂暴に曳つぱつた。煙突は船外へ投げつけられ、舵取部屋は捥ぎ離され、船室は切れ切れに吹き飛ばされた。

それから、唸り哮るカイムバック水路では——悶えあがくカイユウ灣では——逆捲く大波が何の抵抗も蒙らずに墨其古灣から突進し來たつて、その進路に當たる陸を引搔いて呑んだ。——つい三四時間前にはつやつやした牛の群が草を食んで居た處へ、海ほども深い河床を刳り掘つた。——幾多の島を二つに捩ぢ裂いた。——そして、夜どほし、破壞物と死骸の澤山な青白い漂流との巨大な渦卷を、それと共に絶え間無しに持つて來た。……

だが『星』丸は殘つて居た。そして船長エブラハム・スミスは、丈夫な長い綱を腰に結へて、幾度も幾度もその恐ろしい怒濤の中へ飛び込んで、海の水が早瀨と迅く流れ去るが中に在つて、眼の前を流れ行く手を捉へ頭を抱へ衣物を摑んで、幾多の犧牲者を死の手から奪ひ取り——飛沫に眼を眩まされ、漂ふ破碎物に打たれながらも、救ひ、助け、勵ました——が、終にはその衆寡敵せぬ奮鬪に體力盡きてしまつて、部下の者に船上へ引き上げられた時には正氣を失つて居た。それでも其時半ば溺死して居た美くしい娘を兩手から離

さずに居た。だが四十に近い人の生命が彼によつて救助されたのであつた。そして『星』丸はその間ずつと浪風に堪へて居た。

此船がどんなに能く耐へたか、その雄々しい證人となつて、そのやさしげな骸骨の、草の生えた肋骨が、ラスト島の砂丘から、曲がつて突き出て居るのをその後、長年見ることが出來たのであつた。

七

風に吹き飛ぶ海草の中に、海の無限のうねりの上に、荒廢して茫漠となつた低地の上に、夜が明ける。妖魔のやうな東雲である。死にかかつて居る太陽の光のやうな、蒼白い光である。

風は萎へてそして向きが變つた。海水は徐ろに沈んでその深淵へ還る――その掠奪物を遺棄して――その哀れな主無し物を砂洲や砂丘の上に、淺瀨や沼の上に、マンゴの澤の靜寂の間に、砂芝や水づかり草の、長い低い地面の上に、一百哩以上に亙つて、撒きちらして。――ポアント・オウ・フエルの貝殼暗礁からしてペルト灣の淺瀨に至る迄、高く積み

上がつた漂流物に交じつて死骸が横たはつて居る。――禿鷹は其糸杉の森から立ち現はれて、ギヤアギヤア聲の軍艦鳥や、キイキイ聲の海鷗と共に、この饗宴の分け前を爭ひに來る。そしてこの恐ろしい汐がその驀進し來る浪を引き込ますと、その白い薄光りの大退却の後に跟いて、空中の海賊共總てが出て來る。大波なす翼と金切聲の喉との一と嵐が今度は吹くのである。

それから海鷗や軍艦鳥の後から早速破船掠奪者が來る――死者の遺物の分捕人が來る――海上の獰猛な上皮掬ひが來る――暴風に逆つてその帆布の翼を張るに慣れた颶風騎手が來る。シシリア生れコルシカ生れの公權無しの浪人も居れば、沼澤地からのマニラ人も居り、海軍の脫走兵も居れば、東印度水夫も居り、島流し者も居り、世界各國の亡命者も居る。――名だけは漁夫とか鰕捕りとかで、機會がありさへすれば密輸出入者になる奴が居る。――人目に遠いバイウーや誰も餘り知らぬシエニエールから出て來る、亂暴な水路發見業者が居る。こいつ等は兇狀有ちの最も老巧な水先案內者すら全く知つて居ない、色んな不可思議な河海の祕密にいづれも熟して居る奴共である。……

あらゆるものへの――鳥へも人へもの――分捕物があるのである。溺死した羊が群を爲してあり、山と積み累ねられた牛の死體がある。赤葡萄酒の樽や、ブランディの小樽や、

無數の鷗が、岸打つ浪に泛子のやうに浮き沈みして居る。砂濱に玉突臺がひつくりかへつて居る。――寢椅子があり、ピアノがあり、足置臺がある。ピアノ彈きが坐る腰掛があり、贅澤な椅子があり、竹製の長椅子がある。杉の木製の長持があるし、花梨木製の化粧部屋簞笥があるし、中には貴重な衣裳が詰まつて居る、模様附の美しい革のトランクがある。數限り無しのオブゼ・ド・ルックスがある。子供の玩具がある。驚く許り美くしい衣裳を着けて居る佛蘭西製の人形、玩具の一頭立二輪馬車、木製の馬、木製の鐵、大きなナウチルスが沈沒した折の烈風に漕ぎ出して行つた勇敢な木造の小舟がある　金がある、札でまた金銀貨で――財布に、紙入に、またポケットに。しかも澤山にある！溺死者の軀から剝ぎ取らるべき絹着物、繻子物、レース、美くしいリンネルがある。――それから頸飾、腕環、懷中時計、指環、それに立派な鎖、襟留、小珠飾がある。……『キ・ビディッツア！――オウ・キ・ベッダ・ムギエーリ！おい、何んてうつくしい女だらう！』その舞踏服は巴里で造つたものだよ、あの何が。だが、お前は、その裁縫師の名を聞いたことはあるまい。おい、シシリア生れのギセンツ！……『ケ・ベラ・スポシナ！可愛らしい花嫁さんだな！』おい、その女の婚約の指環は脫けはしなからう、ジユウセペよ。が、その花車な骨は容易くぽきと折れる。腱はお前の牡蠣小刀で切れよう。……『ガルダーテ！キ・ベダ・

ピチオータ！氣をつけよい！何んて可愛い子だらうな！』その女の胸の上にあるだらう、おい、ヴレンチノよ――髮毛で編んだ瑞西製の細い鎖に下がつてるロケットが。――『カヤ・マナン！』――奥さん！今、そんなに亂暴にあなたの着物をぬがせて居るのは、あなたのカドルーン下女ぢやないんですよ。この馬來人の手はあなたの下女の手よりも不器用でさ。だが、あなたの下女はあなたと遠く離れた處で眠つて居ます。眠から覺めはしますまい。――『ナ・キタ・モ！ダラガ！――ナ・キタ・マガンダ』……おい、ジユアンよ、そのダイアモンドの耳飾の留め金は込み入つてて到底も、お前のごつごつ指ぢや取れはせん。引き千切つてしまへ！――『ディスペンゼ・キウリタ！』……

……突然、大きな長い銀のやうなピイイといふ音が皆んなの耳へ一パイにはひる。と思ふと、大周章大狼狽！すばやく、次から次と、あまる程荷積んだガラー船は翼を延ばして羽ばたき忙しく逃げて行く。

三たびその大きな叫び聲が、灰色の空に、――綠色の海の上に、――そして、大きな白い閃光が、岩に碎ける大浪の一面の電光の如き閃光が、見える水をかぶつた貝殼暗礁の上に、――そして、岸へ流れ寄る死骸の氣味の惡るいただよひの上に――波紋を描いて鳴り響く。

それは生者を救助し、死者を収容せんと、急ぎ来る救助船の汽笛なのである。
驚天動地の悲劇はそれですむ！

海の力

一

ルイジアナ州の海岸には、その様子が現代のものとは見えずに、人間の記憶に存しない太古のものと――茫々たる低い平たい最初の大陸が初めて形態を成して志留利亞紀の海から立ち現はれたその時代のものと――思はれるやうな地方がある。そんな地質學的な夢に耽るには、其處の、いつか風の無い酷暑の日に、キヤトヘッドやブラドキードや野生甘蔗やマーシユグラスが全體に波とゆらめいて居るが中に、色のその珍奇な閃きを見せようと圖つて居るその幾つかの青色のえぞぎく或はコリオプシス種の幾つかの菊科植物の花が示す進化論上の異議を無視しさへすれば宜いのである。といふ譯は、無頓着にちらと見た處では、此處の沼地の青草の概觀が、それが砂地の方へずつと生え延びて居るのが、如何にも曖昧で、水陸どつちつかずの植物であらう――水產の習慣と形態とを保有して居ようか、

それとも地上のものの習慣と形態とを採らうか、まだ決定しないで居る原始的な植物であらう――といふ考へを醸すに足るからである。――それにまた時折驚く許りの形態のものが見つかるので、その空想を强めもするのである。横に扁平に延びて、枝の澤山に生えた妙變なもので、水氣があるのとその色合と堅いといふ點に於て海草に似て居るものが、踏み行く足の下でしよつちゆうパチパチ音を立てる。そこの濕つた重い空氣は上からよりも下の方から餘計に熱を――太陽からよりも冷め行く地球の放射熱から餘計に熱を――受けて居るやうに思へる。そして朝や夕の霧が、噴火力の――潜んでは居るけれども、まどろんで居るだけで、氣持の惡るい程地表に近い噴火力の――蒸發氣の眞似をして居るやうに考へられる。そして實際また地質學者が斷言して居る處に據ると、土地のこんな珍らしい隆起は――これは、いづれも常綠な木の葉の濃厚な冠を着けて居て、見たところ島のやうに思へる許りでは無い、此海岸の佛蘭西語名稱ではさう呼ばれて居るのであるが――太古の泥土噴火山が造り成した突起物なのである。

西班牙の漁師のフエリウ・ギオスカといふ男の一家族が、墨其古灣海岸に餘程近い斯んな或る小島を――自分が今述べたやうな丁度そのやうな沼地の海岸十四哩が中で一番高い地面を――嘗て占領して、そして其處へその名を附けた。陸の方は、見るのがいやな程

の荒凉たる地を見下ろして居た。一面の葦の生えた泥地で、ブタクサが簇生した處や、エルボーブッシユの叢や、ヒトモトススキの廣い地域が、間置いて點在して居て、末遠く地平線を閉ざす森の、靑味がかつた綠の一線が見え、そして絕え間無しに海へ惡水を吐く小さな粘泥のバイウーがあるので、どんな乾燥な季節にも排水が不完全であつた。此地點は地質學者に大いに論評されたものであつた。沼澤地、クマガイサウ、高さ十五呎乃至二十呎の樹木のやうな雜草、そんなものの中で實測を試みることに倦んで居る合衆國の測量者共にはそれは天の賜物であつた。野蠻な漁獵者共が、記錄に殘らぬ遠き古昔に、蛤貝の—幾百萬度の饗宴の廢物の——小山を此の高みの上へ積み上げたのであつた。土がまた、多分無數の世紀を通じて働いた地蟲の盲目的な力によつてであらうが、その貝塚の上に出來たのである。そしてその新たな土壤が、繁りに茂つた植物を生み出したのである。千年も經つ樫の木がその地面の下でその根を絡み合はせて、もつと弱い幾種の灌木や樹の——野生蜜柑、水柳、なつめ椰子、はりゑんじゆ、柘榴、其他綠色のや灰色の、卷鬚のある多くの匍匐植物の——保護を請合つて居るのである。さて——多分五十年位前であつたらう——四五の白人漁師が此の木立の中で一と處自分共の爲めに伐り拓いて、なつめ椰子で小屋を三四軒建て、バイウーに面して船を入れて置く家と荷揚場とを造つた。その後此の一

時的な漁獵滯在地が永久の移住地となつた。なつめ椰子造りの好い香のするか弱い小屋の代りに、重い材木と、樫や糸杉に匐ひ上る苔を交ぜた漆喰とで、住宅が建造された。でもその住民そのものは昔のまゝの浮遊的性質を有つて居て、季節と事情次第で、海の耕作の運不運次第で、去つたり來たりした。此の移住地の元祖のギオスカは何時も居殘つて居た。いつもどうにかして立派に暮して行つた。ラガー船とスループ船とを幾艘か所有して居て、それを大した賃貸で貸し出した。ニユウ・オルリアンズの魚商人と盛んなそして有利な取引をすることが出來た。そして何かもつと祕密な財源を有つて居るのだと朧氣に疑はれて居つた。彼は嘗ては大膽な密輸入者であつたもので、その妻のカルメンの——西の世界で夫と運命を共にしよう、と遙々バルセロナから夫の後を追うて來た鳶色の小女だが——その嘆願でやつと改心したのだ、といふ込み入つた色んな話が行はれて居つた。

　木陰が微かな好い香に充ちて居る、暑い日には、其處には熱帶的な魅力があり、眠氣をさそふ平和があつた。灣に面して居る一列の樫の木の特別な風體を除いては、蟋蟀のチチと啼く聲や鳥のピイピイ囀る聲が歇んでしまふ晝の日を、沼地のあらゆる聲が恐ろしさに鎮まりかへる夜を、此處へ來る人に思ひ浮かばせ得るものは何一つ無かつた。その巨大な一列を爲して居る此の老木は、肩と肩とを駢べてはゐた。が、沼地の方へ無理に押しかへ

されて、――一千年の久しい間戰ひ來たつたあの靈的な敵の――『叫ぶ者』の、『空を掃ひ去る者』の、恐ろしい『海風』の――力に畏縮しなければならぬやうにされて――敗けた巨人といつた姿勢を執つて、立つて居るのであつた。

風が彼等と相撲つた相撲のうちで、千八百五十六年八月十日の夜の相撲ほど怖ろしいものはそれ迄に無かつた。興奮した墨其古灣の浪といふ浪が悉く、見物でもするやう、群らがつて來、その聲を張り上げ、白人の眼がこれ迄に眺めたことの無いやうな巨浪の爲めに此のシエニエールが島になる迄、押し寄せては唸り哮つた。樫は堂々とその地歩を維持して居たが、その節瘤だらけな筋の纖維といふ纖維はこの不權衡な奮闘に精一パイ緊張して居つた。そしてその巨大漢が二人も、投げ倒された。倒れる時タイタンズの蛇の手足のやうにうねうねした大きな根を空にして。この小島は、海がその威嚇を增して、打ち倒れたその巨木の處まで白くなつて突き進む間、腹の底まで、ぶるぶる震へて居つた。が然し殘餘の樫の木は依然として立つて、横隊になつて奮闘して、終にその守護して居るこの住所を救うた。……

二

『聖母と子』の蠟製の小さな像の前で――フエリウが墨西古へいつか航海して行つた時土産にと持ち歸つた、印度人の顏をした妙な小聖母の像の前で――カルメン・キオスカは蠟燭を點して祈禱をして居つた。或る時は數珠を爪繰り、或る時は空で覺えて居る連禱をつぶやき、或る時はまた長い間使つた一組の骨牌のやうに、擦れ切れて手垢にしみた祈禱書を披いて讀んだりして居るのであつた。一と頁が殊に汚れて居つた。幾度か淋しい夜それへ涙を垂らした頁で――天上界の燈明と、暗黑を射貫いて居る表象的な光線と、兩側に翼を收めて跪いて居る天使とが描いてある無細工な木彫の繪のある頁で――あつた。そして此の『永久の平穩』のお粗末な表象の下に、大きな荒い活字で、西班牙の水夫のおかみさんが、多分幾世紀も捧げ來たつて居る祈禱の文句の――コントラ・ラス・テムペスターデスの文句の――表題が見えて居つた。

或る時彼女は非常にびつくりした。少し凪いだ後で、暴風が不意にその力を增した。地面が搖れた。家は震へてミシミシ鳴つた。風は吼え、叫び、表の戶を押して摑み合ひの爭

をした。家の隙間といふ隙間から跳び込んで居た水が、急にどつと敷居の上へあがつて居場所に溢れた。カルメンは指を水へ浸けて味はつて見た。鹽からかつた。

ところがフェリウの船は一艘もまだ歸つて來ては居なかつた。――屹度此の暴風て何處か遠方のバイウーへ押し込められて居たのであらう。此の移住地に今殘つて居る唯一艘の船カルメンシタ丸は、その三日前に水中に隱れて居る木にぶつかつて、すんでのこと難破するところであつた。之を修繕するのは、デッド・サイプレス・ポイントの船大工の少くとも二週間仕事であつた。處がフェリウは、何も別に平常と變つたことも出來して居らぬげに眠つて居つた、――騷動も物聲も氣に懸けずに、水夫がいつもする深い眠に陷つて居つた。そしてその手下の、ミグエルとマテォとは此のシェニエールの向ひの端に居つた。

叫聲と共にカルメンはフェリウを起こした。フェリウは肱を立てて身體を起こして、兩眼をこすつた。そして癪に障はるほど落ち着いて、『クエ・ティエネス？クエ・ティエネス？』（おまへ何處か惡るいのかえ？）と尋ねた。

『フェリウよ、海の水が上がつて來をるよ』と、夫が使つたと同じ國語て答へた。然しその恐怖心が起こした言葉を一こと叫んだ。『セ・ノス・ヸエネ・エル・マル・エンシマ！』（海が頭の上へ來るよ）とは叫ばなかつたが、『セ・ノス・ヰエネ・ラ・アルトュラ』（高いのが來る）と

叫んだ。アルトゥラといへば、水が高く吸ひ上げられた深さを――『高海』の高さを――思はせるのである。

『ノ・ロ・クレオ！』（おれはさうは思はぬ）と、フェリウは、床を眺めてつぶやいた。それから、部屋の片隅の櫂を指さして、穏かな、太い聲で『エカメ・エセ・レモ』（その櫂持つて來い）と言つた。

彼女はそれを與へた。矢張り片方の肱で身體をつつかへながら、フェリウは櫂の身の濡れた處を拇指の爪で寸をとつた。それから煙管に火をつけて呉れとカルメンに言つた。カルメンは夫が落ち着いて居るので安心した。それからあと半時間も、フェリウは風の叫喚にも海の怒號にも驚かずに無言で煙草をふかして櫂を見守つて居つた。水は少し高く昇つた。そして彼はも一度水嵩を量つて見た。――それから水はまた少し高くなつたが、さう急にては無かつた。それから、三度目に水嵩を計つた時、カルメンを見て微笑した。『コモ・クレイア！ノ・アイ・ポルクエ・アススタルセ。エル・アグア・バハ』（何と思つたんだえ、おまへは。恐がる譯は無いぢや無いか。水は引きをるよ）と叫んだ。それからカルメンは續けて御祈禱をしようと思つたのであるが、夫フェリウはその恐がるのを叱つて、少し休むが宜いと言つた――『バスタ・ヤ・デ・プレガリオス・クエリダ！――ヱテ・イ・ドゥエルメ』（もう御祈りは澤山だ。――さあ、行つて休めよ）その聲

音は、親切ではあつたが、命令的であつた。だから、いつも夫の命には從ふカルメンは、夫の傍で横になつた。そして非常に疲れて居たから、直ぐと眠つた。

寢入りはしたが、恐ろしい音で――自分の神經の加減で大きくきこえる音で――間短く置いて害はれる熱病的な眠であつた。妙にその暴風の印象が交じつて居る夢が訪れる眠で、そして一度ならずその心臟の鼓動を止めさせ、それが止まつたのでまた鼓動をし始めさせる夢が襲うて來る眠であつた。その夢の一つはどうにも忘れ得ないものであつた。コンチャ坊やの――初めて出來た子で、今は遙か遠く故郷のバルセロナの古い墓場で眠つて居るコンチャ坊やの――夢であつたのである。カルメンは此子のことは思ひ諦めようと力めたのであつた、――考へまいと試みたのであつた。然しその子の方で夜毎々々歸つて、――地面がその軀の上を厚く蔽うて居るのに、夜毎、――時間空間の長い距離を通つて夜毎に、――戻つて來るのである。嗚呼！赤ん坊の脣が乳房に吸ひついて居る氣がするのである！――靈の如き小さな手が觸れて身がぞくぞくする思がする！――母親の情を苦しめるあのいろんな幻の愛撫！……　苦痛の幾月を、夜毎々々なのであつた。すると暫くの間、そのやさしい幽靈が彼女を惱まさなくなつた、――丈高い輝かしい草と黄色な花の下で、永遠に眠に横たはつたのであらうと思はれた。どうしてそれが、夜もあらうに斯んな夜に、自分

に接吻しに、自分にまつはりに、自分の腕に抱かれに、歸つて來たのであらうか。……

といふのは、カルメンは、夢に、その夜の暴風の恐ろしい物共が――風の狂ひ叫ぶ聲や、海の轟々鳴る音や、地面がぶるぶる震へる響が――自分の身のあたりに絶えず強くなりつつある間、かの蠟製の聖母の像の前に矢張り跪いて居るつもりで居たのである。すると自分の前で、丁度その夢裡の祈禱を捧げて居るうちに、かの蠟製の聖母が女のやうに丈高くなり、次第に高くなつて、――天井までも高くなつて、大きくなりながら、にこにこして見て居られる。そこでカルメンは恐ろしさに叫び出さうとしたが、何だか物が自分の聲を塞いだ――その舌を痲痺させた。すると聖母は無言で彼の女の上に身を屈めて、抱いて居られる『幼兒』を――印度人の顔をした鳶色の幼兒を――その胸の上へ置かれた。するとその『幼兒』が自分が抱くと白くなつて、顔色が變つた、――そしてその變はる時に、自分の胸を貫く鋭い痛みを送るやうに思はれた。それは、風の吹く晴れやかな西班牙の岡や、橄欖の森の夏のかんばしい香や、光りある『過去』一切のいろんな記憶と、どうかして關聯のある古い痛みであつた。――その幼兒は、柔かい黑い瞳を凝らして、あの……死んだコンチタの……忘れられない微笑をして、自分の顔を眺めるのであつた。

そこでカルメンは、微笑して居られる聖母へ此の無上の天福を感謝しようと思つて、眼

を捧げた。が、眺めた時、あの厭な靈的な恐怖心が歸つて來た。といふ譯は、その聖母は死んで長く經つた女のやうで、その微笑は肉の無い微笑で、兩眼のあつた場處は空で暗黑てあつたからである。……すると家がぐらつく程の巨大な怒號を海が送つて來た。

カルメンは眠から驚き覺めた。自分の心臟は寢床がそれと一緒に振ふ程に動悸を打つて居るのであつた。夜は灰色にならうとしてゐた。丁度その折表の戶が開いて、ドンとまた鎖まつた處であつた。見ると、雨が敲いて居る窗の硝子を透して、海岸の方へ向いて行く夫の姿が——風に向かつて身を屈めて居る、肩幅の廣いそして鬚のある影繪が——彼女に見えた。蠟製の聖母は依然としてその墨其古風な微笑を湛へて居られる。然し今は丈は七寸しか無かつた。そしてその數珠玉硝子の眼は、消えかかつて居る最後の一本の蠟燭の炎が、その足下の土製の蠟燭承けの中で死ぬまいともがいて居る間、親切の光を瞬いて居らるゝやうに思はれた。

三

雨が降つて居り、空は暗くて見えず、海は荒れ狂うて居る。フエリウと手下のミグエル

とマテォとは、恐ろしい大汐の雷なす音と稲妻なす閃きとを眺めた。風は落ちて居つた、そして灰色の空には海鷗が一パイに飛んで居た。シエニエールの後ろは、幾哩遠くの低い林の雲のやうに漾とした線のところまでも、鉛色の水が一面に蔽うて居つて、此處其處と、緑色な點がそれから抜け出て居る。それは此の大水の上へ頭が出せる程に丈の高いエルボーブッシユの叢や野生甘蔗なのである。然しその大汎濫は眼に見えて減りつゝあつた。――一刻一刻と經つに連れて、段々と緑色の小さな地點や切つ尖が姿を現はしつゝあつた。次第にバイウーの途筋が――遙か遠くの糸杉の沼地の方へ水の中を横切つて居る、丈の低い材木樹と灌木の茂つた簇りとの、うねうね曲つた平行した二線が――くつきりと見えて來たのであつた。シエニエールの前はといふと、貝殼の濱邊の斜面は何處も漂着物で山盛りに――まだ生ま生ました枝葉がそれに着いて居る根こぎにされた木や、何處から來たとも知れぬ割れ裂けて居る船材木や、斧の深傷を負うた澤山な丸太で、――山盛りになつて居つた。フエリウとその伴とは、岸打つ波に腰まで浸して、綱や竿や船の鉤を使つて、小さな町が建てられる程の木材を取込んだのであつた。海は難船の漂流物で一パイであつた。非道いなあ！まあ素敵な難破があつたに相違ないのだ！カルメニシタ丸を海へ出せなかつたことを思ふと、あゝ有難い！

三人は朝のうち東の方へ向けて行く他のラガー船を見たのであつた――或るものはその帆で、他のものはその恰好で――それも海の縦揺れと爭つて居るので大きくなつて見えるので――それと見分けがついたのである。サン・パブロ丸、ガスパリナ丸、ニンリクエタ丸、アグエダ丸、コンスタンツア丸が居たのだ。非道い海だ、如何にも非道い！――然し破船貨物の掠奪者には何といふ好い機會であらう！……餘程大きな船が粉微塵になつたに相違無い。――何百といふ樽が――葡萄酒の樽が――波間にだぶりだぶりして居る。難船したのはマニラ丸かも知れぬ――或はナウチルス丸かも知れぬ。

牝牛の死骸がその片方の角へマテオに綱が投げかけられる程近く浮いて居つた。三人助け合つて陸へ上げた。それは高價な品種の搾乳用の牛であつた。そして所有者の烙印が角の上に烙きつけてあつた。――Aといふ文字と、Pといふ文字を一字風に結び合はせたものであつた。フエリウはその烙印を知つて居ると言つた。持主は、夏の間ラスト島に搾乳場といつたやうなものを設けて居る人で、その所有の牛は皆んなそんな印をつけることにして居る、ベル・アイル島のプルオール翁だと言つた。どうも妙だ！

ところが、三人がさうやつて働いて居るうちに、なほ妙な物が見え出した、――海で溺れた水夫の手や顔とは見えぬ色の白い、死んだ顔や死んだ手なのである。その折引潮が强

く流れ始めて居たので、そんな物は潮につれてバイウーの口の向い側へ流れて行くのであつた。――恐らくそんな屍體は、海の水が大突進して來た夜の中に、沼地の中へ追ひやられたものであつたらう。それから三人は水の中を出て、深い襞をつくつて居る墨其古灣を隈無く眺めに、小高い地面へ退いた。――三人の熟練の眼は――鷗の通つて行く跡を見張つて居る鳥の凝視の如く鋭い眼は――海流の筋道を捜索し始めた。そして直ぐと樽や漂着物のことは忘れてしまつた。といふのは、汐が人間の屍體で――行列を造つて外海へと流れ出る屍體で――つまつて居るやうに思へたからである。遙か遠く、大うねりが遠さの爲め、ぱちやぱちやと連打つて居るだけのやうに小さく見える處には、水面は屍體を撒いたやうに思へるのであつた。――此處にそれから其處に、不規則な間隔を置いて、消えて見えなくなつたり、また見えたりする、――そして東の方に一番濃く浮いて居て、白い或は淡紅い或は青い或は黑い大きな斑點様のものを上へあげたり横に搖つたりして、海がその屍體を上げたり下ろしたりする時、それぞれその小さな肉色の點を見せるのであつた。岸に近い處には餘り無かつた。だが、そのうち二つ、殆んど見分けのつく程近い處にあつた。ミグエルが初めにそれを見付けた。水が一番深い處――バイウーの口の前のずつと沖の方で、今は水が蔽うて居る砂の淺瀨の向うの處――に浮いたり沈んだりして、西へ、貝殼晴

礁の方へ、流れて行きつゝあるのである。その二つは殆んど並んで漂つて居つた。一つはネグロの屍體で、打見たところ立派な衣裳を着て居て、白い前垂を掛けてゐた。――今一つの方は、有色人の若い娘のやうで、紺の衣物を着て居つた。これは顏を下にして浮いて居た。その娘は髪が殆んど眞直ぐで、結んで赤いリボンで括つて居ることが三人に見られた。二人とも確かに家婢で――奴隷で――ある。然し何處から來たのであらう？ラガー船が戻つて來る迄は何も分かるまい。が、まだ一艘も眼に見える處に居らぬ。でもフェリウは、自分の船は此海岸切つての一番立派な水夫が乘り組んで居るのだから、心配はしなかつた。此邊のルイジアナ漁夫は突然の暴風に生命を失ふなんてことは滅多に無いのである。他の人の眼には一切の樣子が極めて平穩であり、空は極めて美事に靑く澄んで居る時でも、彼等は遙か先きの危險をば、海鷗の如くに、豫知するのである。そしてまた海鷗の如くにその輕い船を陸の方へ矢と漕ぎ歸るのである。こんな男共は、大氣の膨脹や壓縮の眼に見えぬあらゆる變化に絶妙に敏感な、生きて居る風雨計のやうである。暗黑が船を襲ひ、長く睡つて居た海がそを呑まうと泡立つて飛びかかるまで、惡夢を見て居る時のやうに、不意に船の翼を痲痺させて船をどうにも出來ぬやう、その魔力にかかつた圈内に引き留める、あの怖ろしい死の如き靜穩に容易く捉へられることは無いのである。

――『カラホー！』

此の一語が、強い興奮を表はす、あの喉から出る特殊なルといふ唸りを以て、だしぬけにフェリウの口から飛び出した。そして貝殼暗礁の泡立ちの先きの方で、輪を描いて飛んで居る海鷗の下の處で、引潮にだぶだぶ搖られて居る或る物へ指さしした。死骸がまだあるのか？さうだ、まだ澤山にあるが、震へて居る黄金の一點の如くに、生きて居て動いて居るものが居る。マテオも亦それを――きらきらした髮毛の光を――認める。――とまた瞳を凝らして一寸見た後で、ミグエルも、それを認める。生きて居る子供一人、――生命を失つた母親一人。ポブレシタ！可哀相に！手近に船は一艘も居らぬ。ただ、寄せ打つ波と戰ふ偉大な勇士だけが、そこへ泳いで行つて、そして戻つて來られるのであつた！

だが早、一と言も言はずに、鳶色なフェリウはそを試みようと着物を脱いだ。――と思ふ間もあらず、頭と手と、白波の山の中をくぐつて、彼は寄せ打つ浪の中を突き進んで居る。……第一線を――第二線を――第三線を突破した！――第四線！――其處は波が初めてその頂上から碎けそめる處なのである。――第五線！――其處へ達すれば彼はもう大膽に波に乘つて行けるのである！……それからは、速かに、容易く、彼は力強い長い胸泳ぎて進んで行く、――漂流物を見張る爲めに、その鬚の頭を餘程高く保つて。浪から浪へと

振子の如くひよいひよいと辷つて行くやうだ――浮き上がつては、沈んで――かたみがはりに胸か肩か浪に向けて。マテオとミグエルの眼には段々小さくなつて行く。しまひには浪のうねりの混雜に、其後を追ふことが時折困難な位に、動いて居る一點としか見えぬやうになる。……フエリウ！お前には鮫は恐くないのだ！――さうだ、鮫の方でお前を恐がつて居るのだ。玖馬の沿海警戒隊の鐵砲玉がお前の身のまはりをピユーピユー飛んで居る間、口にナイフを銜へて、西印度の海を生命がけでお前が泳いだあの朝は、お前の來るのを見て鮫は右往左往に逃げ去つた。あの日は、物に充ちてゐたあの海は暖かかつた――スウプのやうに暖かかつた――そして漣一つ一つがエメラルドの閃きを見せて澄んでゐた。今日の此の墨其古灣のやうに、どんよりしたそして騷々しいものではなかつた。……ミグエルと其伴侶は心配して居る。綱はほぐして、つなぎ合はせて一本になつて居る。ミグエルは濱に居殘つて居る。が、マテオは、其綱の一端を手にして、浪と鬪つて海へ出て行く、――代はる番に泳いだり徒渉したりして、ずつと遠くの砂の淺瀨まで行く。其處は――碎ける波が來る折旨く飛び上がることを知つて居れば――淺いから立つて居れるのである。

　ところがフエリウは、水がかぶさつて居る貝殼土手へ近よると、水の白い閃きをじつと見て居る。――水が平らになつて、長い長い一と呼吸をつく時の來るのを知つて居るので

ある。一度續け樣に盛んに白浪が湧く、——眞つ暗になつて蒸氣が吹き出す時のやうなシユーといふ音を立てる。大搖れに持ち上がる。パッと光を放つ。また續け樣に白波が湧いて、煮え立つ暗黑になる。もう一度する——もう、今度はこつちのものだ。底の方の水が上がつて來る冷たさを感ずる、——眼の前に、碎けぬうねりの綠色の大ゆるぎが見える、——そして遙か向うに、砂の淺瀨で飛び上がつて居るマテオが見え——自分の橫に、殆ど手の屆く處に、波にゆられて居る大きな玉突臺と、それにしがみついて死んでゐる女と、そして……かの子供が……見える。

間もあらせず、フエリウはその漂流物の橫に身を擲げて居る。……死の如くに强いあの一つの力で——子思ふ親の愛の一所懸命の力で——摑んで居るやう、その死んだ女が、どんなにしつかとしがみついて居ることか！無益ては無かつた。母の屍體へ絹の襟卷て結はへてあつたその弱いをさな兒は、それでもまだ——ママン！ママン！と——泣き叫ぶ體力を有つて居たから。が、今は時間が生命てある。その小さな手を、美くしい死人の首から引き離して、その襟卷を取つてそのをさな兒をフエリウの廣い肩へしかと——早く、亂暴に——結ばなければならぬ。引潮は待つて呉れぬからである。……

さあフエリウには重荷が出來た。だがその泳ぎ樣が全く變つた。——彼はトライトンの

如くに水から身を擡げ、その力强い兩腕は、走つて居る車輪の輻のやうに、輪になつてくくる舞をして居るやうに見える。今度こそ、本當に海との相撲である。海はその餌食を摑まうとして、大うねりがさつと來る度毎に、次には下の方から非常な力で引張るのである。だがかの暗礁の處へ達する、――それを通りぬける。――此の大海の荒馬共は、自分等を斯んなにも旨く乘りこなす事を覺えて居る此の泳ぎ手を知つて居るやうである。なほも鳶色の雙腕は、漸次近づく飛沫の霧の中でくるくる廻つて居る。外側の砂土手は遠くは離れ居らぬ――しかも其處には、寄せ打つ波に飛び上がつては、丁度牛飼ひがその輪索を振るやうに、頭のあたりに何かを振り廻はして、マテオが叫んで居る!……ビユーッ!バシヤーッ!――綱はフエリウの横の浪間にゆれる。と、その逞しい手はそれを握る。『テイエネ!――テイラ!引張るんだ――綱を、ミグエル!』かくて二人の足は再び、地に觸れる!……

冷たくなつて居る、その子供は。そして眼を閉ぢて、じつとして居る。

――『エスタ・ムエルタ、死んでる?フエリウ』とマテオが尋ねる。

――『いゝや』と、後を追ふかの如くに、波が白くなつて、砂の上へと上がつて來るう

ち、水を飛び出て、フゥフゥ喘いて居る泳ぎ手は答へる。――『いゝや、ギヱ！――レスビラ・トダギア！生きて居る！―― まだ呼吸がある！』
彼の後ろの大海は、その幾百萬の手をさし上げて、歡呼の如き大雷音を發する。

四

フエリウが、海神の如くに、眞つ裸て飛び込んで來て、喘いて居る、雫したゝる女の赤ん坊を差し出した時、カルメンは其朝餉の支度を打棄てて『マドレ・デ・ディオス！――ミ・スエノ！おや！わたしの夢は！』と叫んだ。だがその時夢なんかの話をする暇は無かつた。その子は死ぬかも知れなかつた。カルメンのすり早い器用な手は直ぐとそのほつそりした小さな身體の衣物を剝いだ。そしてマテォとフエリウは乾いた衣物と興奮劑とを探し、ミグエルは事の仔細を――呼吸急き早く、熱した身振りで――話して居る間に、此親切な元氣な婦人はこの風前の火の生命を復さうと手を盡くした。フエリウは直ぐと手傳ひに歸つて來た。一方、二人の手下は朝食の跡絕えた支度をし了せに取り掛かつた。か弱い手足を摩擦しにフランネルを暖めた。水を割つたブランディを暖めて、それをカルメンは、ど

んな醫者も叶はぬほど上手に、一匙一匙飮ませてやつた。するとやがてのこと、その小さな子は兩眼を開いて、しくしく泣き出した。なほも啜り泣きして居るのを、毛織の掛物で旨く卷きくるんで、カルメンの暖かい羽毛布團の上へ置いた。急場の危險だけは、兎も角、助かつた。でフエリツウは誇と愉快とにほゝゑんだ。

そこでカルメンは始めてその夢物語を敢てした。夫の顏は再び眞面目になつた。夫婦は、共に同じ不思議な身をのゝきを――『知り得ざる者』を畏れ憚る念の發現たる、過ぎ行く風の如き、あの神祕な身うちが微かにぞくぞくする思ひを――感じて、互に一寸の間、顏を見合はせた。それから二人は、血が戻つて來た赤味て頰を桃色にして、其處に横になつて居る、その子を眺めた。すると今は此世に居らぬコンチタの眠つて居る可愛らしい顏を、二人で上から覗き見た時に長年前に覺えたやうな、あんな可愛いといふ念が突然二人の胸に觸れた。

――『クエ・オホス！何んといふ眼だらう！』と、腹が減つた風をして、あちらへ出て行く時フエリツウはつぶやいた。……（腹が減つて居るのではなかつた。だがその眼が、霞て曇つたやうに、少し曇つて來たのであつた）『何んといふ眼だらう！』大きな、黑い、そして不思議な緣毛のある、珍らしい眼であつた。その子の髮毛は黃色だつた――その生

命が助かつたのは髪毛の閃きの爲めてあつた。だがその眼と眉毛とは美しいほど黑かつた、眉目美しい子であつたが、妙な華車な眉目うつくしさで、コンチャの丈夫な美くしさとはまるで違つてゐた。……折々、その子は其啜り泣きの間に少し唸つた。そして到頭、か細い甲高い聲で『かあちやん！――かあちやん』と泣き叫んだ。するとカルメンは床の中から自分の膝へ抱き上げて、あやして、コンチャの爲め幾晩もやつたやうに、輕く前後にゆすぶつて、『ヨ・セレ・トゥ・マドレ。アングル・ミオ。ドュルッラ・ミア。――セレ・トゥ・マドレシタ。パロミタ・ミア！』（あたしがお前のかあちやんよ、私の天使よ可愛い子よ！――あたしがお前のかあちやんて、お前はあたしのいとし子よ！）と靜かな聲で歌つた。するとその子の眼の、絹のやうな長い睫毛が重なり合つて、その小さな頰を影らした。そして、自分の頭をカルメンの胸へ押しつけて――ずつと前にコンチタがしたと同じやうに――眠つた。

フエリウは內側の戶の處へ再び姿を現はした。合圖に合點して、用心して音立てぬやうに近寄つて眺めた。

『この子は物が言へますよ』とカルメンは西班牙語で囁いた。『母親を呼びましたよ』――ハ・ラマド・ア・ス・マドレ。

――『イ・ディオス・タムビエン・ラ・ハ・ラマド』と、荒つぽくはあつたが哀れげにフェリウは答へた。――『神樣がまたその子の母を呼ばれたのだ』

――『だが聖母樣が此子を私達に下すつたのです――コンチャの代はりに此子を』彼は直ぐとは返事しなかつた。非常に深く考へ込んで居るやうであつた。――カルメンは心配さうに夫の無感じな顏をつくづく眺めた。

――『判るもんか』、しまひに彼は答へた。――『判るもんか。他の誰れのものでもないものになつて居るのだらう』……

次から次と、フェリウのラガー船は帆を羽ばたいて歸つて來て、かの大災害の消息をもたらした。そして漁夫の誰れもが、順々に、その子を覗いて見た。一人もこれ迄此子を見たものは無かつた。

五

それから十日後に、武裝した人を滿載したラガー船が一艘はひつて來て、ギオスカの波

止場に纜を繫いだ。來航者は、大抵は地方の紳士で――フランクリン並びにその附近の都會の住者か、又はテシユ地方の耕作主共で――かの大暴風の爲めに生命を失つた親類や友人の遺骸を發見しよう、そして死者の持ち物を奪つた奴等を處罰しよう、といふ目的で編成された、幾多の遠征隊の一つを成して居るものであつた。彼等は此あたりの海岸の、無數のひつこんだ入江入江を搜索したのであつた。多くの屍體に墳墓をつくつてやつたのであつた。多量の寶石を取り戻したのであつた。そして――これはフエリウが後で知つた事であるが――不正な手段で得た貴重品を所持して居るのを見つけられ、また溺死者の手足を切斷した罪に問はれた、無賴極る一類の難破物掠奪者をば、隨分と多く、大ざつぱに裁判して處刑したのであつた。だがギオスカの埠頭へは、ただ消息を得に來たのであつた。能く顏も知られ、人に好かれもして居たので、嫌疑のかかる人物ではなかつた。その上に、此一行には親切な友人が一人ゐた。それはニユウ・オルリアンズのカピテン・ハリスで、これは老練な汽船乘りで、そして此男へフエリウは新しいボムバノーや、シイプスヘッドや スパニシユマクレルの荷を幾度も賣り捌いた事のある市場の請負商人であつた。……ハリスが眞先きに上陸した。――一行のうち十人許り後に跟いて來た。殆ど誰れもが今度の大惨劇に親類か友人を失つたのであつた。――フエリウのあたりに集まつた此一團は、

生眞面目で、無言で——物凄い許りであつた。

マテオは、子供時分に此地方へ來たのだから、此のシェニエールの他の者共よりか上手に英語を話した。——フェリウが質問を了解したりそれに答へたりに少しでも困難を感ずると、いつも通辯の役を勤めた。そして、あの大荒れの朝、救助した子供の事、フェリウが泳いで行つた事を一同に話した。其詳しい物語は興味と興奮のつぶやきを惹起し、次いで色んな込入つた質問を招いた。さう、自分で御覽になつたら宜いでせう、とフェリウは言つた。が暫く待つて下さい、——子供はまだ身體が弱つて居るから——おびやかすのは危險かも知れぬから、と述べた。『萬事君の好きなやうに取り計らはう。先きへ行き給へ、フェリウ』とカピテンは答へた。……

一同、大きな樹木の下の、その家へ行つた。フェリウとカピテン・ハリスとが先頭に立つて居つた。蒸暑い日で、日はかんかん照つて居た。——海風さへ暖かかつた。木陰には氣持のいい香がし、木の葉の言葉と蚊のうなりとの一種眠を誘ふ囁があつた。カピテンだけフェリウと一緒に家の中へ入つた。餘の者は外に殘つてゐた。樫の木の下の、厚板の粗末な腰掛に腰をかけて居る者もあり、草の上へ身を投じて居るものもあり、二三人はその小銃にもたれて猶ほも立つて居つた。するとカルメンは瓢で造つた水呑みと新しい水を容

れたバケツとを持つて出て來た。その水を皆んな喜んで飮んだ。
皆んなは幾分も待つて居た。非常に暑くて非常に疲れたと皆に思はせたのは、其處が靜かで涼しかつた爲めであつたらう。互の話はだらけて居た。そして一同の疲勞は、終に木の葉のさざめきが一々聞き分けられさうな程の、全くの無言となつて發露した
やがてその沈默はその小屋から出て來た老カピテンの太い聲に終に破られた。見るとその子の手を曳いて居て、後にカルメンとフエリウとが居た。休んで居つた者は皆んな立ち上がつてその子を眺めた。
片方の小さな手をカピテンの大きな鳶色の拳に握られて、明かるい處に立つて居るその子は、如何にも可愛らしい顏をしてゐたので、皆んな覺えず驚きの叫びを發した。垂れて陽の炎に浸つて居る、その光つた髮毛は、後光のやうにその子を輝かした。そして、鹿の眼のやうな穩かな憂を含んだその大きな黑い眼は、はにかむやうな物珍らしいやうな風に、眼の前の見知らぬ人達の顏を見守つた。その子はフエリウが見つけた時の儘の衣物を――柔かい白のモスリンて、嘗ては靑かつたリボンの飾が附いて居るのを――着て居つた。そして、二度もあんな勇ましい奉公を此子にして吳れた、今は色が褪せて居る絹の襟卷が、その兩肩にふはりと投げかけられてゐた。カルメンは衣物を頗る立派に洗濯して繕つたの

てある。然しその小さな細つそりした足はむき出してあつた――あの恐ろしい夜、穿いてゐた鹽水に浸つた靴は、初めそれをぬがさうとする時に、ぼろぼろになつてしまつたのである。

――『皆さん』とカピテン・ハリスは言つた。『この子は何處の誰れか全く手懸かりが見出せないのです。着物に何の標もありません。寶石といつた方のものは何も着けて居ませんでした、――ただ此の珊瑚の數珠だけてした。此處に居るものは大抵亞米利加の者ですな。この子は英語は少しも話せないのです。……此處に居られるどなたか、此子の事を何か知つて居られますか?』

カルメンは氣が滅入るやうであつた。自分が新たに見出した祕藏兒が、斯くも早く奪はれてしまふてあらうか。だがカピテンの問に對して何の返事も出て來なかつた。此遠征隊のうちのもので誰れも此子を見たものは無かつたのである。珊瑚の數珠は手から手へと渡された。襟卷は綿密に調べられたが何の效も無かつた。その子は獨逸語か伊太利語か話せぬのか、と誰れかが尋ねた。

――『伊太利語と仰しやるのですか?いゝえ』と首を振つてフエリウは言つた。……フエリウが傭つて居るラガー船乘の一人の、チヨアキノ・スパリシオといふのが、これはシ

シリア生れの者ではあるが、自分の土語のほかに、伊太利の方々の俗語が話せるので、既に試みて見たのであつた。

――『何か言へるだらう』とカピテンは答へた。――『だが英語は話さぬ。おれの言ふ事が判らんかつた。それに此邊で人が話す下等な言葉は大抵皆んな知つて居るフエリッも、自分の言ふ事が此子には通じぬと言ふ。このうち誰れか佛蘭西語の話せる者が一寸話して見てはどうだ。……ラルウセル、なぜ試つて見ないんだい?』

斯う言ひかけられた青年は、初めにはカピテンの提言に氣がついて居る風には見えなかつた。それは、黑いしつかりした顏の、脊の高い、しなやかな男であつた。その子が姿を現はすその瞬間から、その黑い瞳をその子から離さずに居たのである。その子の眼がまた彼には一切を語るものゝやうに――彼がじつと見て居るのを一種の漠たる快感を以て、半狂暴な自信を以て、見かへすやうに――思はれた。……それは其小さな腦髓の中に眼を覺まして居る、最初の芽生的な同族觀念であつたらうか?――說明し得られぬ、直覺的な、同血觀念であつたらうか?獨逸語で話しかけたドクトル・ヘッケルには尻込みした。伊太利語で返事させようとした辯護士ソラーリには頭を振つた。そしてその顏はいつも悲しげに、人相の惡るい色の黑いラルウセルの顏へ――ついその前の晩、落ち着いて人間一人の

生命を、不逞な人間一人の生命を、取つたラルウセルの顏へ――向きかへるのであつた。

――『ラルウセル。此の人數のうちクリオールはお前だけだ』と、カピテンは言つた。『話して見い！ガムボで話して見い！……屹度此子には獨逸語は能く判るんだ、伊太利語も』と言つて――だが、諸君紳士達が發言するやうな發音ぢや判らんのだ』と意地惡る氣に言ひ足した。

ラルウセルはその小銃を友の手に渡して、その小さな女の子の前にしやがんで、そしてその顏を見入つて、微笑した。その子の大きな美くしい眼球は、何か物を探すやうに、眞面目に一寸彼の眼へ光を射た。そして……その微笑を返した。その男の裡に潛んで居る或る物に、稀な或る物に、觸れたやうであつた。といふのは、その男の顏の表情が全く變つたからである。そして其處にゐたもの誰れもが、そんな顏になり、そんな聲が出せるとは信じられなかつた程の、可愛らしい顏で可愛らしい聲で、かう彼は聲高に口をきいた。

――『フエー　モアン　ボ。ピチ。――キスしてお呉れ』

その子はその可愛らしい唇をとんがらして、彼の黑い口髭を接吻した。

彼はその子にまたかう言つた。

『ディ　モアン　ト　ノム。ピチ。――ディ　モアン　ト　ノム。シエール。――何ん

といふ名？』
すると初めて銀のやうな甲聲でその子は斯う返事して言つた。
——『ヅウヅウヌ』
みんな呼吸を凝らした。カピテン・ハリスは指を其脣に當てて靜かにして居れと命じた。
——『ヅウヅウヌ？ヅウヅウヌ　クイ？シエール。——ヅウヅウヌ誰れの？』
——『ヅウヅウヌ　サ　セ　モアン。リリイ！——ヅウヅウヌ、わたへ、リリイ』
——『セ　パ　トゥツ　ト　ノム。リリイ。——ディ　モアン。シエール。ト　ロート　ノム。——名前皆んなぢや無いぢや無いか。も一つの名は？』
——『モ　パ　コンニン　ロート　ノム。——も一つの名前知らない』
——『コンマン　イエ　テ　ペレ　ト　ママン？ピチ。——おつかちやんの名は？』
——『ママン——ママン　デール——かあちやん、デール』
——『エ　コンマン　イエ　テ　ペレ　ト　パパ？シエール　そいから、とうちやんの名は？』
——『パパ　ジユリアン』
——『ボン！エ　コンマン　ト　ママン　テ　ペレ　ト　パパ？——ディ　サ　ア　モ

アン。シエール。――えらい！それから、とうちやんは、かあちやんに何んと言ふの？』

子供はうつむいて、指を一本口に銜へて、少し考へた。そして斯う返事した。

――『リ　ペレ　リ　「シエリー」リ　ペレ　リ　「パプート」――かあちやん、とうちやんにシエリー。かあちやん、とうちやんに、とうちやん』

――『アイ、アイ！――セ　トゥッ　サ？――ト　ママン　テ　ヂヤメン　ペレ　リ　ドート　ショーズ？――それだけ？かあちやん、ほかのことは言はない？』

――『モ　パ　コンニン。モアン。――知らない、わたへ』

子供は男の時計の鎖に附いて居る小飾を弄り出した。――非常に小さな金の磁石が、その小さな針が震へてきらきらするので、殊にこの子に欲しと思はせた。そこで甘えるやうに、小さな聲で斯う言つた。――

『モ　ウレ　サ！ドンニン　サ　ア　モアン。――これ欲しい。これお呉れ！』

彼はそれを出來るだけ旨く利用して、直ぐと斯う答へた。――

『ウイ！モ　ヴ　ドンニン　トア　サ　シ　ト　ディ　モアン　ト　ロート　ノム。――あゝ、他の名を言つたら、これ上げよう』

此の立派な賄賂は確に非常に心に銘じたらしかつた。答へる時に涙がその鳶色の眼に浮

かんだから。

――『モ　パ　カパーブ　ディ　サ。――モ　パ　カパーブ　ディ　ロート　ノム……モ　ウレ。モ　パ　カパーブ！――言ふこと出來ないもの！――言ふこと出來ないもの、他の名は。――欲しい』

ラルウセルは說明した。此子の名はリリーである、――多分ユウラリイといふのを縮めたのであらう。それから、いとしんで呼ぶクリオール名はヅウヅウヌである。自分には此子は富裕な家の娘に相違無いと思ふが、此子は、どうした理由（わけ）かその一家の名が言へぬ。或は旨く發音が出來んので、人に笑はれるのを恐れて居るのであらう。古風な佛蘭西の名前には、子供が土語を話す癖のある間は、發音に餘程困難なのがある。それて或る年齡に達すると、奴隷の乳母が使ふ訛をやめて、佛蘭西語だけ使ふやうに慣らす爲め、その間違つた發音を笑ひ草にするのである。或はまた、此子には眞實その名が想ひ出せぬのかも知れない。あの恐ろしい夜の衝動の爲めに或る某々の記憶がその纖弱な頭腦て朦となつたのかも知れぬ。この子の言ふ處ては、母の名はアデールて、父の名はジュリアンてある。然し此の名は兩方ともルイジアナ州ては極く普通な名前て、この子の母は父に向つて『あなた』（セリイ）と言ふとか――或は『おとうさん』（パプート）と言ふとか、いふ無邪氣

な陳述同様、殆ど手懸かりにはならぬ。それからラルウセルは別な手段で手懸かりを得ようとしたが、駄目であつた。何處に住まつて居るか――其處はどんなやうな處かとその子に訊ねた。するとその子は庭に無花果の樹があるとか、縁側があるとかバンケットとか言つて、それからフォーブーといふ事を口にしたが、町の名前を言ふ事は出來なかつた。父は何をしよるかと子に尋ねたら、どんな事でもする――父に出來ない事は何も無い、と答へた。子供の信念といふものは實に不合理で居て、それで神々しいものである！子供の愛といふものは、何處まで造り飾りの無いものであらう！……多分その小さな女の子の兩親はニユウ・オルリアンズの住民であつたのだらう――昔の移住者部落に住まつてゐたものだらう――子供がフォーブーといつたのはフォーブールのつもりなんだらうから。斯う説明するのであつた。

『それぢや、皆さん』とラルウセルがその訊問を絶望して打切ると、キャピテン・ハリスが言ふに『諸方へ問ひ合はせをするより外もう道はありません。子供は此處へ殘して置いた方が宜いと私は思ひます。まだ餘程弱つて居るし、丁度こんな暑い季節の最中に、町へ連れて行ける狀態では居ません。それに此處で世話を受けて居る程能く、誰れだつて此の子の世話をやく事は出來はしません。それからまた、私にはさう思へるのですが、フエ

リウが此子の生命を助けたのだから——しかも自分の生命を賭けて助けたのだから——どうしたつて、フエリウに先取權があります。そしてその細君が此子には氣違のやうて養女にしたがつて居るのです。この子の親類が見つかれば、それに越した事は無いが、どうでせう諸君、親類があれば、それに自分で直かに此處へ來させて、當前の事だが、それに御禮を言はせては。私の所存はさうなんです」

カルメンにはその短い演說が分かつた。——その少女時代の西班牙風の色香は數年前に褪せてしまつたのであつた。然しキャピテンへ向けた素早い感謝の一と目に、それがまた戾つたやうであつた。——その一瞬時彼女は美しかつた。

『キャピテンの言はるゝ處は至極尤もだ。今の今、あの子を連れて行くのは非常に危險だ』とドクトル・ヘッケルが述べた。誰れにも異議は無かつた。

——『皆んないいかえ』とキャピテンは問うた。……『さあ、出かけなければなるまい。あばよ、ヅウヅウヌ！』

處がヅウヅウヌはわつと泣き出した。ラルウセルがまた去らうとして居たからである。

——『それをやれよ、ラルウセル！兎も角、キスして呉れたぢや無いか——己にはして呉れなかつたのに』とキャピテンは叫んだ。

ラルウセルはこつち向いて、その小さな磁石を時計の鎖から外づして、その子にやつた。彼の別れのキスに子は可愛らしい顔を差し出した。

六

處がフエリウの手中の漂着物は、どうしても持主の知れぬといふ、天命を有つて居たやうであつた。精出して問ひ合はせを發したり、印刷した布告を廻はしたりしたが、共に無效であつた。海と砂とがそれが呑み込んでしまつた小世界の、一切の記錄を隱すか消したのであつた。全家族が絕滅したり、種族悉くが滅亡したりした爲め、死者を識別しようとのあらゆる努力を無效ならしめた例は、一にして止まらなかつたのである。腐敗と曝露の爲めに脹れて色が變はつて居り、魚や、爬蟲類や、鳥に形を壞され咬み耗らされて居る、遺骸の人名を知るといふ事は、長年親交したものの微妙な眼力を要する事であつた。――搜索者がやつて來ると、たらふく食つた黑鳶が眠から飛び起きたり、コトンマウスがとぐろをほぐしてシイシイ言つたりするやうな、沼澤地の低い棗椰子の下で、暗い糸杉の陰で、死んで居るのが見つかつた眼球の無い顔を見て見るといふ事は、愛が有つ非常な勇

氣が無ければ出來ぬ事であつた。それにまた時にはその死者を愛して居たもの總てが、それが生死不明の人數のうちに加はつて居つた。で、名前の完全な點呼はいつまで經つても出來なかつた。――異常な錯誤が演じられた。世間で死んだものと思つて埋葬したものが、幽靈のやうに――自分の墓の銘を讀みに――戻つて來りした。

……ラルウセルがクリオールの土語でかの子供に問をかけて居ると殆ど同じ時刻に、この海岸に沿うて屍體搜索をして居た別な遠征隊が、ペリカン鳥の巢窟として有名なと或る低い小島の濱邊て、或る子供の死骸を發見した。頭蓋骨にまだくつついて居た幾筋かの光つた髮毛、一とくさりの赤い數珠、白モスリンの衣物、頭文字の A.L.B. が縫ひ取りしてあるハンケチ――これが手懸かりとして手に收められた。そしてその子供はその發見された場處に埋められた。

それから、それより數日前に、救助船エステル・ブルウソー丸の船長ホタードが、テーブルを捉へて離さずに居た綺麗な髮毛の女の屍體が、墨其古灣の外海（北緯二十六度四十三分、西經八十八度十七分）て漂うて居るのを發見したのであつた。身體は見分けの出來ぬ程損はれて居た。手のほつそりした骨すら海鳥に突つかれて取れて居たが、ただ指が一本、左手の三番目のが、殘つて居つた。それも、恰も魔法てのやう、金の指環の爲めに保

存されて居たやうであつた。何の飾も無いその黄色な環の内側に日附が――一八五一、七月と――彫つてあつた。そして、十字を間に置いて――アデール+ジュリアンと――名前があつた。エステル丸は其の日棺を載せて居た。それは大抵もう人が入つて居たが、でもアデールを納める棺が一つはあつた。

その女は誰れであつたらう？――その夫ジュリアンといふは誰れであつたらう？……エステル丸や他の多くの船がその氣味のわるい積荷を卸した時、――身内のものを亡くした其處の土地の人達が、これをそれと確かめに、出來る限り急いで集まつた時。――姓名や月日や出來事を探して、――今は空しい言葉を喚起したり、消えた昔時を懷ひ出したり、なつかしの約束を思ひ浮かべたりて――記憶が殆ど狂氣の如くに緊張された時。――その時に、混雜の際なので、ペリカン島の島で見附かつた小さな屍體は、結婚指環を嵌めて居た婦人の娘である、その婦人は、生死不明のうちに數へられて居る、ニュウ・オルリアンズのドクトル・ジュリアン・ラ・ブリエールの妻の、生れはフロランのアデール・ラ・ブリエールである、斯う信じられまた布告された。

そこでそのアデールの屍體を船にして――うねりくねつた木陰深い川を遡り、繫がつてきらきら光つて居る湖水や小さな湖水を通り、綠の薄光りを放つバイウーを幾つか通りぬ

けて——かのクリオール市へ持ち歸つて、古いサン・ルイ墓地の何處かへ埋葬した。そしてその婦人の名を記して居る墓牌には次記の文句がまた刻んであつた。——

……………………

なほまた

千八百二十八年五月二十九日

サン・タンドリ教區に生れし

その夫

ジユリアン・レーモン・ラ・ブリエール、

併びに兩人の娘

四歳五ケ月

ユウラリイ

の紀念の爲め之を建つ。

千八百五十六年八月十日

リル・デルニエール島を一掃せし

大暴風に

三人とも死亡。

…………十…………

祈願冥福

七

ところがそれから六ケ月經つと、ジュリアン・ラ・プリエールの顏が再びニユウ・オルリアンズの街路で見られた。人々は、日の光に立つて居る化物を見るやうに、彼を見てびつくりした。にも拘らず此の化物には影があつた。人々は立ち停まり、近づき、古風に半ば手を開き、急にそれを止めて、通り過ぎた、──どうしてその人は死んだのだといふことを忘れたのだらうと不審に思ひながら、どうして馬鹿な間違ひをすんでの事しさうであつたらうかと自分と自分に尋ねながら。

それは二月の或る日であつた、──雪を見ぬ我が亞米利加南部の冬の、あの水晶のやうに透き通つた日で、空氣は淸く澄んで、涼しくて、そして物の輪郭が、ダイヤモンド硝子の燒點を通して物を視るが如くに、日の光にくつきりと見える日であつた。──そしてそ

の晴れやかな明かるみて、ジュリアン・ラ・ブリニールは自分自らの墓の短い銘を讀んで、水死したアデールの刻んである名を凝視した。自分の妻が墓の高い壁の中に――黒文字が彫つたり青銅の牌が貼つたりしてある、四角な大理石の後ろに、列を爲して死者が眠つて居る、あの奇異な移住民地の遺骨安置場の中に――葬られてから、やつと半年しか經つて居ないのであつた。でもその――一番上の段にある――永眠の場處は、早古びて居るやうてあつた。一體我が合衆國南部の太陽の下に在つては、墓地の植物は自發的に飛び出して來るやうに――突然に延び廣がつて繁茂するやうに――思はれる。妻の遺骨をその中に閉ぢ籠めて居る大理石の板には、顯微鏡的に微小な、苔に似た物が斑に附き出して居つた。――その表面には、或る珍らしい匐ひありく動物が、小さな爪足を碑銘の刻んだ文字の中へ置いて、這うて居つた。それから、下の濕つた地面からは、小斑點のあるタカトウダイが生え上がつて居つた、――それから朝顏も絡んで居り――それから、彼には名の分からぬ美しい綠色の、縺れ絡む蔓草もあつた。

それから、その深紅な革嚢を日にふくふく動かしたり、或は墓銘をはすかひにうねうね這うたりして、そして人が近くへ寄るとその色をエメラルド色から灰色に變へる、可愛らしい蜥蜴を眺め、――石だたみの小さな隙間から隙間へ旅をして居る蟻の隊商の列を眺め、

――恐らくはその幼根は幾代の人の骨肉の腐敗からして榮養分を得て居るクレト・ド・コックの濃麗な花から蜜を得つゝある蜜蜂を眺め、――墓場でのそんな盛んな生を眺め見て居ると、『復活』といふ考が――『自然』の復活的な仕事といふ考が――肉の驚く可き變形、靈の驚く可き轉住といふ考が――頭へ浮かんで來た。……ただそれだけが妻と天地に洽き日光との間の境を成して居るその墓の屋根の、或る忘れられて居る隙間から、丈夫な雜草が生えて居つた。青空を背にして葉を振るはせて居るその植物を彼は知つて居た。シユー・グラとクリオールの子供はそれを呼ぶのである。その黒い實はモノマネドリの好きな餌食となつて居る。――その草の根は、暗黑の裡を探し求めて、何か珍奇な滋養をその中に見出して居るのではなからうか。――死人の心臟の何ものかが――半透明な葉の汁液となり、野生の漿果の葡萄液となり、紫色やエメラルド色の生を得――『妖魔の歌手』の血と混じ――その戀ひ慕ふ聲のメロディに不思議な美はしさを假して居る、――といふやうな事はなからうか。……

……血氣盛りの年若で、富は有つて居り、愉樂と人生の雅趣とには慣れて居る男が、人間の聚合體に對する自分の眞の關係がどんなに微細なものであるか、――社會の有機體の

生きた一分子としての自分の役目はどんなに些々たるものであるか、――それを短いただの一週間で發見するといふ事は、これは實に稀にしか出來しない事である。この廣大複雜な『生の流』にあつて、自分は一滴にも當たらぬものであるといふ事、そして、丁度血液がその流の量にも力にも何の變易を來たさずに、其微分子を失くしたり滿たしたりすると同じで、個々の生存は一國民の生の脈搏にあつて、少しも其偉大なつぶやきを中止する事無しに、除かれたり充たされたりするものであるといふ事、これをただ經驗だけで以て、二十八の齡に、理解が出來るやうになつた人はこれまで滅多には無い。ところがこれを總て、否、これ以上を、ジュリアンは無慈悲な七日のうちに――次から次への七日の、胸のつぶれる經驗で――知つたのであつた。此巨大な世界は、彼を惜みはしなかつたのである。そして世界に於ける彼の地位は空では無かつた――ただ社會が彼といふ者を忘れただけであつた。彼が世界の人のうちにあつて行動して居た間は、彼が自分の友人だと思つて居た人は皆、その一寸した利他的な役割を演じて居たのであつた、――その人間としての小さな義務を盡くして居たのであつた、――其本性の最も利己的ならざる方面をいつも彼の方に向けて居たのであつた、――思想や恩惠の可なり平衡な取引を彼として居たのであつた。そして彼が自分等の間から姿を消した後で、至當にも彼の死を――自分等の爲めに！――

悲しんだのであつた。彼の一生といふ重要ならぬ戯曲の最後の一と幕を彼等は演じ了はつたのである。もう一度繰り返して呉れと要求するのは實際餘りに多くを求める譯である。……彼の豫想外の歸來が起こした感情に就いては、自己を欺く事は不可能であつた。――同情ある歡迎を期待して居たのに、伴つた憐憫を見出した。狂喜して呉れる事と豫期して居たのに狼狽を見出した。そして、それよりか屢〻、斷念の風や、下手によそはうた失望を見出した。そして、いつも、上品な假面をかぶつた或は冷淡にも赤裸々な、不誠實を見出した。己が家庭に他人を見出す爲めに、自己の財産に關して親類と法廷で爭ふ爲めに、自己をば生者の中への闖入者と思はれる爲めに――不吉な客と思はれに、幽靈だと思はれに――歸つて來たのであつた。……世間といふものがどんなにうつろな我利な世界に見えた事であらう！でもその世界には愛があつたのである。その世界て、父の愛と母の愛とを以て、妻の愛と子の愛とを以て、利己的て無しに、熱烈に、愛されたのであつた。……それが總て葬られて居る！それが總て永遠に亡きものとなつて居る！……嗚呼！あの石が語つて居る事が嘘て無い事が願はしい！――自分も亦死んで居る方が寧ろ願はしい！……

夕方は影になつた。菫色は濃くなつて、ブツブツと星を突き出した。――陽は西に低く沈んで、その通つた跡へ瞬時の朱色の光耀を殘した。……我が合衆國南部の日は黄昏て長

びくといふ事は無い。そしてジユリアンの思は日が暗くなると共に、暗くなるのが早いと同じに早く、暗くなつた。といふのは、物が見える光がある間に、自分が能く知つて居た別な名前を――ラミレといふ名を――玖馬島シエンフエゴス生れラミレといふ名を――讀んだからてある。……何の爲めに生まれたのであらう？――どんな永久の目的の爲め、ラミレは、――あの『百の炎の町』て生まれたのであらう？ラミレは其若い妻の墳墓の前で自分と自分て頭を射ぬいて死んだのてあつた。……其墓は別々な二重の窖て、大きな櫃のやうな形をして居つた。もう餘程荒廢して居た。――川蝦が絶え間無しに下て穴を掘るので、倒れさうに傾いて、大分一方へ沈んで居るのであつた。そのぎざぎざな、煉瓦と漆喰の裂け目からして、或るいまはしい聲が斯う言ふやうてあつた。――『お前も行つて、同じ事をせよ！……大地は今てさへその重荷て――人間といふ重荷て――ウンウン言つて居る。お前を載せて置く餘地は無いのだ！』

八

……その聲が彼の冷たい部屋の暗がりの中まで隨いて來た、――その住居の靜寂の中て

彼につきまとうた。それから此男の心の裡で、勇氣と絶望との、辛抱强い理性と狂氣な反抗との、無氣力と力との、暗黑と光明との、あの物凄い鬪爭が始まつた。これは敏感なそして寛大な性質を有つた人なら誰れも、その一生のうちに、少くとも一度は——或は幾度も——自分の心の中で、戰はずには居れぬ鬪爭なのである。そんな瞬間には、記憶といふものが電擊の如き働をする。——全く我れ知らず、彼は自分の一生を眺めかへして居るのであつた。

長い間忘れて居た出來事が珍らしくも生き生きと還つて來た。彼はそれが『現在』であつた間は見なかつたところの『過去』を見た。——家庭の記憶が、幼時の追想が、恐ろしい程烈しく心頭に浮かんだ。——無邪氣な快樂や些細な悲哀、つまらぬ心の痛手ややさしいあまやかし、彼を愛して呉れた者共の希望や心配、奴隷の微笑や涙、——それ等がしみじみ懷ひ出されるのであつた。……それから彼の初めてのクリオール小馬、それは彼が一箇處も發音の間違ひをせずに——グラースといふべき處をクラスと言つたりしないで——その祈禱の文句を正確に佛蘭西語で諳誦の出來る事を示した翌日、父から貰つた褒美の品であつたのである。——それから黃色い身體のミシエル、泳ぐ事や、魚捕る事や、獨木舟を漕ぐ事を敎へて呉れたあの男。——それからバイウー、其處には龜や鳥や匐ひありくも

のの不思議な世界があつた、あのバイウー——それからその獨逸人の家庭教師、それはチヤ行の發音の出來ぬ男であつたあの教師。——それから甘蔗畠での歌、妙に氣持のいい、鶴の啼聲のやうな長く哀音を延いた、震ひ聲に充ちた、——トゥー　トゥー　ペーイ　ブラン！といふ、あの歌！……後ちカマニエールは其地面を人に貸せたのであつた。——一切の事物が變はつて居るに相違無い。あの歌すら同じではあり得まい。さう、トゥー　トゥー　ペーイ　ブラン！——ダニエ　クイ　コムマンデ……嗚呼あの歌！

それからまた巴里の都！亂暴な裏面生活のある——負債をしたり放蕩したりの　あの大學！そして故郷からの懷しい毎度の手紙！もつとしげしげ返事を出せばよかつたのに！——才能はそこでは凡庸のあの巴里！雷音とどろき、光華かゞやき、情熱沸き返る、あの巴里！——藝術の狂熱があり、『口言ふ事叶はざるもの』を口にせんとの狂激な奮勵があり、『手達する事叶はざるもの』を捉へんとの痙攣的な努力があり、『不可能』の大空さして靈火の翱翔がある、人間努力の無上の焦點たる、あの巴里！……

自分が歸り來たつた時はどんなに嬉しかつた事か！——自分の眼の前には長い『未來の道』がどんなに平坦に且つ光り輝いて、開いて居るやうに思へた事か！——到る處に友人が居り、前途の希望があり、祝賀があるのであつた！それから自分の初めての本氣な戀！

ヽ　そしてサン　マルタンギユでの舞踊會の夜！——光のまぼろし！椰子の如くたをやかな、そして如何にも質素でそして同時に如何にも典雅な白衣裳のあの女が、ありとあらゆる美の夢想を此上無しに實現したもののやうに自分に思へたのであつた。……そして自分の熱烈な嫉妬。そしてラルウセルからの平手打ち。そして行つて見て段違ひだと知つた、長劍を用ひての屈辱的な二分間の決鬪。傷は深かつた。何故あの折ラルウセルは自分を殺さなかつたのであらう。……心の邪な男では無かつた、ラルウセルは。——二人は其後出會ふと互にいつも會釋した。そしてラルウセルの微笑は懇ろであつた。何故自分はその微笑に報ひる事をしなかつたのか。あのラルウセルは今何處に居るか知ら？

　自分を矯正する爲めにあんなに犧牲を拂つて呉れた寛大な父の死の代りに、それからつい間無しの、寛仁極まつた母の死の代りに、自分はそのやさしい言葉や、愛らしい唇や、嬉しい愛撫で自分を慰め得る一人の美くしい女を發見したのであつた。その女がヅウヅウヌを、——二人の生涯を結ぶ鎖のいとし兒を——毎夕方、自分の歸つて來るのを待つて黒ん坊のエグランチンと一緒に門口に立つて居て、パパ　ラペ　ギニ！——パパ　ジユリアン　アペ　ギニと、鳥のやうに家中を叫び廻つたヅウヅウヌを——迎へて呉れたのであつた。……それから一度、業務上の一かたまりの書類の上へインキをひつくりかへして自分

を怒らせて、自分が平手打ちをした（いつか自分を許す事が出來得ようか！）時、あの子は、驚きと痛みの啜り泣きをしながら、『トレイマン　モアン？――トバッテ　モアン！』（とうちやんはわたへを可愛がつて？――とうちやんわたへを打つね！）と大聲出した事があつた。生きて居れば來月でまる五つだ。トレイマン　モアン？――トバッテ　モアン！……

悲しみの猛烈な發作が彼の身體を捩ぢ曲げ、彼の呼吸をつまらせた。身體のうちの何かが破裂するに相違無い、破れるに相違ない、やうな氣がした。彼はその寢床の上へ身を投じて、その泣聲を止める爲め、その絶望の聲音を殺す爲め、掛け布團を嚙んだ。こんな苦しい思ひをさせられるやうに、どんな罪を自分は犯した事があるだらう。嗚呼神よ。生きさせて貰つたのは、――何の手傷を受けずに海で助かつて、方々へ行かせられたのは、――此のつらい思をさせる爲めなのか？昔を懷ひ出し、苦しみ、悶える爲めに生き延びて居る理由（わけ）があらうか。ラミレの方が賢くは無かつたのか。

心裡の此苦闘がどれだけの間續いたか、彼には分からなかつた。だが其終らぬうちに、色んな方面に於て、全く變つた人間になつてしまつたのであつた。初めて――尤もこれが最後ては無かつたが――人間の弱點について、人間の苦痛について、一層深い一層高尚な

理解が少しく彼の胸に現はれて來たのであつた。――それ無くしては義務といふ念は決して完全に得る事の出來ないあの一層大きな智慧が、それ無くしては我利ならざる善といふもの、慈愛の精神といふものが判らない處の、あの一層大きな智慧が、彼の心に少しく現はれて來たのであつた。自殺する者は卑怯者では無い。自殺する者は自我中心の人である。

一道の光明が彼の濡れた枕に觸れて――彼を覺ました。彼は窗の處へ突進して、格子のシヤタアをさと左右に披いて、外を眺めた。

美くしいそして靈的な或る物が――凍てた霞が――あらゆる通景(みとほし)に充ちて居つた。そして不思議にその霞が一時の閒大空の色に染みて居つた。瑠璃色の霧！その霧を透して、其處の棊盤縞の古めかしい街路が――未(まだ)ほんの半分だけ陽の光に照らされて――この世にありとも覺えぬ色調を呈して居つた。その眺めは微かな青味がかつた色合から薄らいで、透明な種々な紫色になつた。――影といふ影は總て藍色であつた。何んたる美くしい朝であらう！人の一生は如何にも住むに値するもののやうに思はれた！太陽が凍(いて)の不思議な面紗を透してその顏を見せたからであつた！……

かう言つた古昔の思想家は誰れてあつたか？――ハアーミーズてあつたか？

「日は笑なり。人間の思を樂しからしめ、無限無窮の世界を喜ばしむるものは彼なればなり」……

潮の影

一

カルメンはその祕藏子が祈禱の仕方を早教はつて居る事を知つた。每夜每朝この信心深い婦人がその祈禱をしはじめると、その子は小さな手を合はせてカルメンの橫で跪いて、可愛らしいはつきりした聲て、空て覺えて居る文句を何か小聲で言ふのであつた。カルメンは之を非常に嬉しい事に思つたが、西班牙語で述べなければ、その子の祈禱の效驗が足りないやうな氣がした。――といふは、西班牙語は神樣が御使ひの言葉であり――ラ レングワ デ ディオス（神の言語）であり、エル イディオマ デ ディオス（神の言葉）であるからである。そこでサルヱ マリアとパドレ ヌエストロとをカスティル言葉て言ふやうに、――それから、マドレ サンティシマ トダ ドゥルセ イ エルモサの語で始つて居る聖母への自分の好きな祈禱も、カスティル言葉て言ふやう――敎へようと決心した。

そこでコンチタは――あの恐ろしい海の洗禮と共に、新しく名を斯く與へられたのである――初めて西班牙語の授業を受けた。敎へて見ると此子は頗る利發な生徒であつた。間も無くフエリウに片言ばなしが出來るやうになつた。――夕方など、その歸つて來るのを見張つて居て、『アクイ　ギエネ　ミ　パパシト、――とうちやん歸つて來るよ』と叫んで、その歸つた事を知らせるのであつた。――また、カルメンから、フエリウを迎へる色んな一寸した言葉の御追從も敎はつた。フエリウの性質は陽氣といふ方ではなかつた。彼には暗い時間があり、陰鬱な日があつた。でも、その頸つ玉へつかまらうと飛び上がつて、『ダメ　ウン　ベソ、パパー！――アシ――イ　オトロ！オトロ！オトロ！とうちやん、キスして！さう、――そいから、も一度！も一度！も一度！』とその接吻をせがむ時に、この子の甘えるのにほだされない程に不愛想な事は滅多に無かつた。段々この子が眞の自分の子のやうに可愛ゆくなつて來た。――實際また、自分がその死ぬのを助けてやつた事だから、自分の眞の子では無かつたのか？それに彼の權利を爭ひに誰れもまだ出て來なかつたのである。次第々々に、週また週、月また月、季節また季節と經つて行くに連れて、この子が彼の生命の一部分と――自分がその爲め働く一切のものの一部分と――なつた。初めには、此の子供は、充分な報償の受納を主張が出來るほどの、寛容なそして富有な親

戚に取り回しされるだらうといふ希望を、半ば腦裡に造つて居たのであつた。そしてカルメンはその代りにバルセロネタへ愉快な見物をしに行つて慰安を見出す事が出來るであらう、と思つて居たのであつた。ところが今は、どんな寛容な報酬もその子を無くする償ひにはなり得ない氣がした。そして無意識な愛情の我欲で、この子の身許の知れる事を非常な不幸な事として恐れるやうになりだした。

　察する處この子は上品に育て上げられて居たもののやうであつた。飲んだり食べたりする仕方に可愛らしい氣取つた處があつた。人と一緒に坐つたり、人に物を言ひかけたりする、その仕樣に妙なところがあつた。着物の色合に、自分の髮の結び方に、妙な考を有つて居つた。そしてギオスカの居住地の共和主義とは全然調和するといふ譯には行かぬ社會的偏見を、早も少々吸ひ込んで居るやうに思はれた。時折訪ねて來る顏の黑い客――マニラ植民地の人達――それを輕蔑的に『黑ん坊(ネグ・マロン)』と呼んだ。そして或る時は、夕の祈禱の途中自分は色の白い聖母へ御祈禱が言ひたいと述べたり、カルメンがグアダルペの奧樣と言ふのは、何んだ、あれは黑い(ネグラ)人だと言つたりして、非常にカルメンを驚かした。カルメンはその時、始めて、その子が恐れるやうに、意地の惡るい口のききやうをした。が信心深い此の女の心は、次の刹那に、その初めての手荒い言葉を後悔した。――カルメンは此の

母無しの子をいたはり、慰め、元氣づけ、そしてしまひに、その小さな聖像に就いて非常に不思議な事を、畏ろしさにチタの眼が大きく開いた程の事を——どういふ風に述べたのか自分は知らぬが——この子に說ききかせた。その後は此子はいつも此の蠟製の聖母を可思議なそして神聖なものと思つて居た。

それから、チタの人並外づれた一寸した特質は、大抵は、その發達しつゝある生と思想とから、一つづつ、次第に除かれて行つた。特に怜悧な子であつたから、自分の新しい環境のあらゆる變化に適應する事を、尋常普通の子供よりも遙か速かに覺えた。ただ然し、世故に長けた人の眼には、習慣と心との傳統的な上品がある、と思はせるあの何とも言葉では述べ難い或る物は殘して居つた。それは生來のしとやかさ、擧止の全くの上品さと氣易さ、物を見るすばしこさと細やかさ、であつた。

彼女は再び丈夫になり活潑になつた——陽の光が餘り激しくない折は、濱邊で長い間遊べる程に活潑になつた。そしてカルメンは頭と顏とへ日の當たらぬやう、帆木綿の帽子をつくつてやつた。それ迄は日向でそんなに長く遊ぶ事は許されなかつたのであつた。處が今は、そのむき出しの小さな手足は銅のやうに黑くはなつたが、身體の爲めには好いやうであつた。尤も、初めのうちは、色んな妙な不幸な目に遭つたり、非常に我儘をしたりし

て、その養母を隨分と困らせた。――蟹に咬まれたり、『胡弓ひき』を追つかけてバイウ ―へはまつたり、夜お月さんと駈けつくらをするとか、『世界の果』まて歩いて行くとかいふ、向う見ずな事をした擧句路に迷つたりして、養母を困らせた。天の端へ行けさへすれば、『天へ昇れる』んだがと言つた。心の善良な子供の魂だと聞いて居る星を彼女は見たがつた。そして、神樣は自分を天へ昇らせて下さると思つて居た。『それが自分の心配事だ』斯うカルメンは思ふのであつた。――『神樣はあの子を昇天させ給ふかも知れぬ――小さな靈にならせて』處が或る日の事いけずのチタは手非道い敎訓を――服從の價値の判る、永久の敎訓を――受けた。

チタは、森の後方の、其處には雜草が非常に高く生えて居る、その沼地のこれこれの場處へは決して行つてはならぬと、殊に警められて居たのであつた。蛇が咬むかも知れぬ、とカルメンは恐れて居たからである。だがチタの鳥のやうに鋭い眼は、其の方向にほの白く光る物を見つけたのであつた。そしてそれが何てあるか知りたかつた。その白い物といふは、一點からだけ見えるので、地面が高くなつて居る處に建つて居る、一番奧の家の後にあるのてあつた。カルメンは『決してあそこへ行つてはいけませんよ。あそこには「死んだ人間」が居ますよ――それが咬みますよ』と言つた。さう言はれて居ながら、或る日

の事、カルメンがいつもに無く忙しい折、チタは其處へ行つた。

此の移住地の初期に、西班牙生れの或る漁師が死んだのであつた。そこでその仲間の者共が、ギオスカの小家を建てる爲めにバイウーを船て運び下つたその煉瓦や他の材料の餘り物を使つて、小さな墓を建ててやつたのであつた。だが、恐らくあちこちさまよひ歩く鴨獵人の外、幾年もその墳墓の近くへ行つたものは一人も無かつた。丈高い雜草や芝草がそのあたり一ぱいに押し合うて立つて居て、沼の四周の平地からはそこが全く見えぬやうにして居つた。

チタがそのじめじめした地面を進んで行くと、胡弓彈き蟹が、横へそれ行く時に銘々その大きな一本爪を擡げて、群を爲して逃げて行つた。――それから、草が一層生ひ茂つて居る處へ行くと、蛙がピョンピョン前を飛び始めた。――それから、次第に密に繁る青草を押し分けて行くと、脚の長い鳶色の蟲が右に左に雨のやうに飛んで行つた。進み行くうちに、ぶたくさは無いやうになつた。――節のある草や、その草よりも丈の高い黑い筋張つた植物がチタの身の丈よりも高く茂つて居た。嵐のやうな蟲の啼聲て耳が聾になりさうになり、蚊の來襲が非常に盛んになつた。と、突然或る長いそして黑いそして重たい物が、その素足の殆ど眞下からうごめき出て――一二分の間恐ろしさに身動きの出來ぬ程氣味わ

るくうねうね動いて行つた。だがそれは何處かへ這ひ逃げて、姿を隱した。それが動かした雜草も、その通つて行つた跡で震はなくなつた。そこでチタの勇氣は恢復した。その腕白な好奇心に滿足を與へるのが、恐ろしいやうで面白いやうで何とも言へぬ愉快であつた。すると、全く思ひがけなくも――嗚呼、どんなにびつくらしたらう！――コトン・マウスが口を開けて居るやうな氣味の惡るいそして癩病やみのやうな、あの淋しい白い者がひよいと眼の前に見えたのであつた。一體ルイジアナでは墓は直きに崩れる。――チタが見たその墓も今にも倒れさうであつた。一方の端にぎざぎざな大きな穴があつた。風の爲め雨の爲め、それから多分蝦蟇や地蟲が掘る爲めに、其處の處の煉瓦がゆるんで、それをずらせたのであつた。裡は非常に暗さうであつた。だがチタは何が在るのか知りたかつた。そこで細い、腐れて居る、一列の杙の隙間を潜りぬけ、下品な大きな桃色の花の咲いてゐる高い雜草の中をかき分けて進んで行つた。――そしてその黑い穴の前で、兩膝を突き兩手を突いて蹲つて、そして覗き込んだ。思つて居た程内部は暗くはなかつた。日光が、その屋根の小さな裂け目から、斜に射して居たからである。それでチタには中が見えたのである！

見ると、鳶色な頭が一つ――髮毛も無く、眼も無いが、齒のある、大變に澤山に齒のあ

る頭が一つ——チタを見て笑つて居るやうに思はれた。そしてそのつい横に一匹の蝦蟇が、今迄見た事の無い大きな大きな蝦蟇が、坐つて居つた。そしてその喉の白い皮が膨れたり引つ込んだりしつづけて居た。チタはキャッと叫んだ。そして非常な恐ろしさに飛んで逃げた、——カルメンは聲をききつけて迎へに走つて出て、家へ連れ歸つたが、それ迄途中叫びつづけて居た。養母の腕に抱かれて大丈夫と思つた時さへ、恐怖の餘り啜り泣きして居た。この子の烈しい空想には、眼を据ゑて見て居た蝦蟇と、鳶色な、眼玉のうつろな、凄い笑顔をして居た頭蓋骨との間に、何か忌まはしい關係があるやうに思はれた。

この突然の驚愕の爲めチタは熱病に罹つた、——その熱病は幾日も續いて、身體を非常に衰弱させた。だが此經驗は、命に從ふ事を教へた、——自分の身の爲めになる事をカルメンが一番能く知つて居る事を教へた。その上にまたチタに非常に物を考へさせた。家の中にじつとして居る、心の善い女の子は、死人が脅かさぬものだ、といふ事をカルメンは語つてきかせたからである。

——『かあちやん。私のママさんは死んだの？』とチタは尋ねた。

——『ポブレシタ！可哀想にね！……さうだよ、お前。神樣がお前のかあちやんを御呼びになつたのだ、——お前の可愛い、かあちやんを！』

――『かあちやん』とまたも尋ねるのであつた、――恐ろしさに眼を大きくして、『あたしのママさんは今あんなになつて居て？』……さう言つて、大きな木の後ろの、あの白い光を放つものの方へ指さしした。

――『いゝえ、さうぢやないよ、お前』と、その凄い質問に自分も恐く思つて、カルメンは叫んだ。『お前のママさんは可愛い、心のいい神様と一緒に――あの美しい空に住居つておいでの、――あの雲の上に、お日さんの向ひに、すまつておいでの――神様と一緒においでだよ！』

だがさういふカルメンの眼は涙に充ちて居た。そしてこの子はその意味を察した。肉の假面を剝ぎ去る者が、言ふに言はれぬ或る一瞬時、この子の顔をじつと見入つたのである。――此子は骨までも赤裸々に、その殘忍な『眞』を見たのであつた。

でも、そのやさしい虛僞の言葉が起こした、身に沁みる少許の慰安がこの子にやつて來た。といふのは、日中自分の眼で辨へ見たあのものは、殆ど夜毎その眠のうちに見る所のものを說明し得ぬからであつた。自分の可愛い母親の顔は、聲は、姿は、まだ何處かに生きて居らるゝのである、――あの優しい姿が夢に自分の處へ來て、自分の方へ身を屈めてにこにこ笑つて、自分を愛撫して、自分に物を言ひかけて――時折は穩かに叱る事もあ

るが、いつもキスして叱つたりさるゝのだもの、全然自分から去つてしまはれた譯は無い、と斯う思つた。母が來て吳れると、眠つて居ながら笑つて、クリオール言葉で御喋舌りをして、――その光のある影に物語をし、死んだその母に日中にあつたいろんな事や思つた事を話したりするのであつた。……どうして神樣は母を夜だけ來させなさるのであらうか知ら、斯う思ふのであつた。

……チタの神といふものに就いての考は、天地創造の佛蘭西の古風な繪を――岸の無い海が黑い空の下に在つて、その暗闇から顎鬚のある、眞面目な顏の灰色の頭が出て居て、その濛とした手を透して星がきらめいて居る版畫を――見た時初めてはつきりと頭に描いたのであつた。神樣といふは、自分の家を能く訪ねて來て、遠雷のやうな低い聲で話をする、老人のドクトル・ドゥ・クウランジュのやうな方であらう、と思つた。……その後、神は『同時に到る處に』居られる、――萬物の外にも內にも、下にも上にも、居られると聽かされた時、この考は幾分か變つた。あの恐ろしさうな鬚面、あの大きな影のやうな手、それはその考から消えはしなかつたが、世界に充滿して星の處まで屆いて居る或る物――眼に見えぬ空氣の如くに透明でそして理解の出來ぬ、また大空の高い靑い色の如くに遍在して永久な、或る物――といふ、もつと大きなもつと漠とした考と、その二つの物とが奇妙

にも混合して來た。……

二

……チタは海岸の生活を知り始めた。

別な國語を覺えると共に、海の世界に關する多くの事の理解がまた出來て來た。自分を取り圍んで居る自然に關して毎日言ひきかさるゝ多くの事を――天空の多くの祕密を、――都市に住んで居る者は、その上の大氣が濃くなつてゐて停滯して居るが爲めに理解の出來ない、そして、壁があつたり白塗の幹の樹木がいやになる程長く列を爲して居たりして地平線が眼に見えぬが爲めに見る事さへ出來ない、天界のあの色んな徴候の多くを――新たなる悦を以て記憶した。荒天を豫め語つて呉れる徴候を、卽ち異常な日沒とか、雲が疾く走つて大空に橋の如く跨る事とか、――海の地平線が際立つて來て黑ずむ事とか、――まだ透明で居る空からして水平な飛び樣をして陸地めがけて急ぐ海鷗の啼聲とか、――それから月のまはりの暈とか、――そんな徴候の見かたをば、人の話を聽いたり、人に訊ねたり、その上自分で觀察したりして、覺えた。

チタは、胸の白い翼の鳶色な海鳥が何處に人目に見えぬ砂の巣を造るかといふ事や、――それから、鶴はその餌を漁りに何處を渉るかといふ事や、――それから、繻子のやうな光澤のある藤色と、絹のやうなすべすべした綠色の羽毛を有つた美しい鴨は、何處でその食物を見附けるかといふ事や、――それから、フエリウの赤粘土製の煙管の羅宇になる一番上等な葦は何處に生えて居るかといふ事や、――それから、赤いシイビーン貝は海岸の何處の處に一番しげしげ打ち上げられるかといふ事や、――それから、灰色のペリカン鳥は、丁度人間のやうに、大きな半圓形に立ち並んで行動して、前の方へ魚を追ひやるやうに翼で水を敲いて、皆んな一緒になつて魚を捕るといふ事を、覺えた。

それからカルメンの口からして、海についての物語や格言を、――海の聲について、その貪欲について、その奸策について、その恐ろしい力についての諺を、――殊に、その後一生頭に附き纏つて離れなかつた或る諺を――知つた。その諺といふは、シ　クイエレス　アプレンデル　ア　オラール　エントラ　エン　エル　マール（祈る事を覺えようといふなら、海へ行け）といふのであつた。海はなぜ鹽辛いか、――『女の涙が海の浪をつくる』事、――それから、海には『友達が無い』事、――それから、猫の眼が潮につれて變はる事、――これもチタは知つた。

都會の塵だらけな生活からして、打開いた絕大な自然の自由へ早く移り轉じた爲めに、チタは人生の何を損したのであらうか。何を利したのであらうか。

躾のいい都會の子供は誰れも皆、多少不自然な社會生活に對しての共訓練の途中蒙らざるを得ぬ、彼の小さな苦痛や抑制や失望の多くをば、確にチタは身に感ぜずに居れるのであつた。卽ち——慧敏な神經が悉く無言の反抗を爲してぴりぴり震へて居るのに、じつと靜かに構へ込んで居なければならぬ色んな義務がある。——厄介視されて、自分の年長者の愉樂の爲めに早く寢床へ追ひやられるといふ不公平がある。——鳥は囀る事が出來、晴れやかな風は外の樹木にはたはた出來るのに、自分は陰氣な學校の敎室の穢い机に對つて、一度に長の幾時間も續けて、可愛い眼を見張つて居なければならぬといふ殘酷な必須がある。——理解の出來ぬ事を說敎して居る聲の單調な反響に充ちて居る、暖かい敎會の嚴肅な壓迫と非常な睡氣とがある。——起居の稽古、舞踏の稽古、音樂の稽古、衣物を皺にしないやうに又汚さぬやうにして置くといふ不可能な術の稽古、の漸進的に增し行く疲勞がある。恐らくチタにはそんな事をせずに居るが惜しいと悔む理由は更に無いのであつた。

野鳥と共に眠に就き、野鳥と共に眼覺めた。——その生活は、その綺麗な足が靴の束縛を受けないやうに、形式の束縛を受けずに居た。カルメンの古い祈禱書、それをチタは少

し讀む事を覺えたのだが、その本を除いて、その幼年時代は書物といふもの無しに、——また、繪といふもの無しに、旨い物無しに、音樂無しに、劇場的娯樂無しに——過ぎた。然し、天地の如くに古くはあるが、しかも美の神聖さに永久に新しく永久に若いもの、——永久に神祕なまた靈妙なもの、——永久に不可思議なもの——の多くを眼にし、耳にし、心に感じた。大自然の氣分の正體むき出しの莊嚴さを感じ、——風が賦し浪が詠ずる永遠の詩歌を聽き、——天空の永劫の華麗を眺めた。

黎明が深くなると——炎と燃ゆる薔薇の花瓣を遙か遠くに繽紛と撒き散らすが如くに——朝の呼吸に縮れる海の、打ち顫ふ石竹色——それをチタは見た。——晴れに晴れた夏の日の、岸無き、雲無き、驚嘆すべき二重圓圏の瑠璃色——青玉が氣化したのかと思ふ許りに、寶石の光が漲つて、世界の魂が寂と靜まつて居る間、相映發して居る雙見的な無限の深淵の壯麗さ——それを見た。

眼に視えぬ魔法遣の風が、その顏に呼氣を吹いてそれを綠にすると、海は色を更める、——『敷布を變へる』、——それを見た。

この夏も次の夏も、小さな魚の軀て數哩に亙る彎曲した濱邊を銀色ならしめる——音の無い、閃めき熒く——無際限の恐慌。恐怖の爲めに其本來の住所から追はれて他へ移住の

大民衆の、海鰐の大民族の、年毎の虐殺。——それから鮫の鰭の扇遣ひ——それから海豚の突貫——それから炎の柱の如きグランド・エカイユの直立——それから軍艦鳥と海鷗との潜水や落下や鬪爭や——それからその屠殺と饕食とが濟んだ後ち、濱邊を清めに群がり出づる甲冑をよろうた蟹の大部隊、——それを見た。

空の色んな夢を、畝なす白浪の走りながらの物眞似を——それから長く延び出て居る岬と海岸と海角との影の如き成層を——それから山の葉狀體の、色數々の、形像を、それから鋸歯の上に白む鋸歯を——それから光り耀く鹹湖に四方を取卷かれて居る幻の島を——それを見た。

素晴らしい大火のやうな日沒の——終には暗黑に滅し行く白熱の——後の雲の世界の倒壞と燻ぶりと。それからその後に、その暗黑の裡に——探照燈の如くに——星が動いて登つて行くのを、——それを見た。

神祕な夜祭の爲めかと思はるゝやうに、海が無數の妖靈的な蠟燭を點すのを、——そして空の暗きが下にあつて海が輝き光る大うねりを立てるのを、それから沸くかと火の泡を泡立たすのを、それから燐の白沫をくるくる廻らせうねうね這はすのを、——それを見た。

月の催眠術を見た。——月の前にぶつぶつ言ひながらその命を奉じて自づと高まる魔法

にかかつた潮を見た。

夜もすがらの沼地の音樂をチタは屢〻聞いた。小さな兩棲動物が出す笛聲と鈴聲との——數限り無き小さな錫の角笛を低く吹くに似た、幾萬億の小さな鈴をチリンチリン鳴らすに似た——無窮の音である。——そして、間々に、ギオロンセロのやうな、震へる重い、深い音色が交じる。それは大きな蛙の合奏である！そしてそんな音總てに交じつて、——鋸の鋼の言葉のやうに鋭い——一つ連續したキイキイ聲がある。それは蟋蟀の癇高いキイキイカチカチの電信である。

が然しいつも——夢見て居る折も目覺めて居る時もいつも——如何な人も聽けばそれを畏れずには居れぬ、如何な音樂家もそれを知る事の出來ぬ、あの不思議な永遠な讃歌を盲目な大海が吟誦するのをチタは聞いた。

太古からの語を、『火の如き、又岩石を微塵に碎く槌の如き』語を、——海のエロヒム語を——年老いた此說教師が——エル　プレゴナドールが——說くのを聞いた。……

自分ではそれと知らずに、心と世界の魂との太古からの共鳴を、——その灰色な氣分が惹起する陰鬱を、——その霧のむら氣に感應しての幻想を、——その、風噪がしき歡喜の日の、容を變へる光の時刻の、絕大な欣喜の浮き立つ嬉しさを——チタは知るやうになつ

た。

静かな静寂の重さを、――唯束の間浪立つだけの水と草、雫を落とし涎を垂らす苔に灰色の綱を着せられて居る林、水蒸氣が爲す幻を浮かべて居る水平線、沼の中で默想をして居る鶴、青空高く浮いて居る鳶、總ての物が夢を見て居るやうに思へる此の地面の低い地方での、空と海との森嚴さを――自分では知らぬながらも――チタは身に感じた。……此邊では子供すらも妙に靜かであつた。そして彼等の遊戲は――チタにはその相違の判りやうがなかつたらうが――都會の子供の遊戲よりも、騷々しくなかつた。一時間叉一時間と婦人は無言て縫物をしたり機織りしたりした。そして鳶色の――いつも素足でゐて、いつも地の荒い紺のシャツを着て居る――男子は、用の無い日に波止場のあたりをぶらついて居る時は、自分達が知つて居る事若しくは知り得る事悉くをずつとの昔にお互に話してしまつて、もう何も言ふ事が無い、といつた風に見えた。海の流の搖れ樣を、雲と黑鳶との漂ひ工合をじつと見て居る――滅多にお互の顏は見ぬ、そしていつもその黑い眼を、退屈相に再び空か海かへまた向けるのであつた。それでも、ブンブン唸る蠅を脫れようと濱邊を求める、海岸に居る馬や牛は見える。――岸へ打つて來る長い波を皆んなじつと眺めて居る。そして時たまその頭を一寸の間向けてお互の顏を見るが、或る神祕に感心をして居るやうに、

いつも又も波の方へ顔を向けるのてある。……

何度かチタ自らも感心した事か！――押し寄せ來る波一つ一つが幾通りにも形を變へて居るのを、――蜥蜴や魚の奇異な冷たい生命よりも、無限にもつと微妙な、そして陰險さうな、そして妖怪的な、生命を示すが如く思はれる、色合と恰好と運動との變化を、不思議に思つた事か！それからそれが總て――一つの法則或は衝動に從つて――秩序正しく行動するやうに思はれた。　浪は銘々に獨得の聲を有つて居るが、しかも總ての波が全然同一な永遠な歌を歌つて居る。チタは波の姿を眺め波の聲を耳にして居ると、其運動には同一の意志がある、その發言には同一の威嚇があるといふ考が――奇怪な複雜な一箇の生命を有つて居るのだといふ考が――朧氣にチタに起きて來た。海は生きて居るのである。海は後へも前へも這ふ事が出來るのである。物を言ふ事が出來る！のである。――或る惡意の籠つた目的の爲めに靜な振を、眼の見えぬ風を、して居るだけなのである。斯う思つてから後は海と二人きりて居る事が恐ろしくなつた。海がぶつぶつ言つて、そしてその白い齒を見せて、切りと突進しようとするのは……自分が獨りきりで居る事を海が知つて居るから、それて……自分目がけて來るのでは無いか知ら。……シ　クイエレス　アプレンデル　ア　オラール、エントラ　エン　エル　マール！（祈ることを覺えようといふなら、海へ行け）ところがコン

チャは祈る事は充分能く知つて居るのであつた。然し海は彼女には、神もその思ふが如くに、其命に從はしめる事の出來ぬ一つの偉力のやうに見えた。或る日信經を口にして、その最初の文句を極くゆるやかに唱へた。――『クレオ　エン　ウン　ディオス、パドレ　トドポデロソ、クリアドール　デル　シエロ　イ　デ　ラ　ティエラ』（天地の創造者たる、全智全能なる父たる、一人の神を信ぜよ）――こゝ迄唱へて來て、口を噤んで考へた。『天地の創造者』だらうか、神は。『かあちやん、クイエン　エントンセス　イゾ　エル　マール？』（誰がそれぢや海を造つて？）とカルメンに訊ねた。

――『ディオス、ミ　クエリダ。神樣だよ、お前。……一切の物はみな神樣がお造りになつたのだ』（トダス　ラス　コサス　フエロン　エーチャス　ポル　エル）

心の曲つたあの海も！そして神樣はそれに向つて仰しやつた、――『そこ迄はよし、それより遠くは』……海がその浪の手を突然に延ばすので、恐ろしくて走りさがると、追つかけて來て自分を呑まないのは、此御言葉があるからか知ら。そこ迄は……？だが神樣の命を聽かぬ時が――ずつと遠くまで突進して、世界を震はせた時が――あつた！それは其時神樣が眠つてお出てて――神樣の耳にきこえず、眼にも見えなかつた爲めて、見えた時は早時機が過ぎて居た、といふ譯てあつたらうか知ら？

斯くて騒々しい海は段々チタを恐れさせた。その眠は始から終まで途徹も無い惡夢てあつた。――山なす影となつて夢に海が襲うて來て、――その魔力で捉へ、叫ぶ力を塞ぎ止め、星のある處まで高まつて行つたりするのであつた。

カルメンは愕いた。毎晩うなされるので起こしてやらなければならぬ、そんな惡夢を見て居るうちに、何時か此の神經質な花車な子が、その爲め死にはせぬかと心配した。だが、フエリウは、その好きな諺の一つてカルメンの心配に答へて、或る勇ましい治療法を提案した。

――『世間は海のやうなものだ。泳ぐことを知らぬ者は溺れる。――そして海は世間のやうなものだ』と言ひ足して、『チタに泳ぐことを教へなければならぬ』と言つた。

そして彼はチタに教へる時間を見出した。毎朝、日の出に、海へ連れて行つた。この初めての折は、カルメンが思つた程チタは恐がりはしなかつた。フエリウの手につかまつて初めて水の中へ浸る前に、哀れ氣に泣きはしたけれども、フエリウに信賴して居るやうてあつた。フエリウの指南は優しくはなかつた。水が自分の頸まで高まる迄、肩の上へ載せて、沖へ連れ出すのであつた。そして其處で肩から投げ落として、出來るだけ力を盡くして、自分の處へ泳ぎつかせるのであつた。初めの三日四日は落とすや否や殆んど直ぐ引

き上げてやらなければならなかつた。だがその後は、フエリウは前ほど憐みを見せぬことにして、實際本當に危險だと自分が思つた時でなければ、助けてやらなかつた。鹽水に息を塞がれないやうにするには、大聲出してはならぬといふことをチタが覺る迄は、他の何等の指導も企てなかつた。そして此の苛酷な經驗に慣れて來る頃までに、一寸の間身體を浮かして置くことを、兩手で少々水を搔くことを、早本能だけで覺えたのであつた。此時期に達してからフエリウは初めて手の使ひ方を――手を水の外へ充分に上げて、何か物へ屆けてもするやうに前方へ投げ出して、そして水音を高く立てずに、或る角度で櫂の身を漬けるやうに漬けることを――敎へ始めた。そして足の使ひ方もまた示してやつた。チタは迅速に且つ驚く許り上手に覺えた。二ヶ月經たぬうちに、自分の小さな弟子が示す進境にフエリウは眞實誇を感じた。そのか細い腕をば、他のあらゆる自然な動作に現はすと同じ立派な優しみを以て、急速な容易な曲線を描いて、水の上へもたげるのを見て居るのは愉快であつた。後になつて、海が少々唸つて居る時でも、恐ろしがらぬやう、――うねりに乘ること、岸に碎ける波に面と向かふこと、水を潛ることを――敎へた。それからはチタは練習しさへすればよかつた。そしてカルメンは、自分も亦泳ぎが出來たから、子の健康が此の新訓練の下に不思議なほど增進するのを見て、朝が冷た過ぎない時、或は海が荒

れ過ぎない時は、いつも稽古を怠らぬやう、能く氣をつけた。

自分が人手を藉らずに水の上を辷つて行けることを知つての初めての嬉しさと共に、チタの海に對する迷信的な恐怖は無くなつた。成人にとつても、水泳者が有つ歡喜よりも烈しい肉體的喜悅は少いものである。況して想像力の逞しい子供が――その活潑な空想は、取るに足らぬ極みの瑣事に、言語に絕した價値を置き得、醜草茂る小さな地面をエデンの樂園に變じ得る子供が――新たに感ずるその恐悅はどんなにより大なものであらう！……目を覺ますが早いか、自ら進んで朝の水浴を乞ふのであつた。――水の中に餘り長く居させぬやうにするのに、少々嚴酷を必要とする位であつた。海といふものが、自分の爲めに從順になつた或る物のやうに、仰山に亂暴に可愛がつて吳れる或る物のやうに思はれ、自分の足を舐めに、跳つて吠えて來るのを見ても、もはや恐ろしくない素敵に大きな遊び友達のやうにチタに思はれた。それから、どんな眠氣も、熱病氣も、疲れ氣味も――空氣は燒けるやうに思へ、蚊は澤山の釜で煮えたぎつて居る湯のやうな音を立てて、部屋一ぱいに居る、どんな蒸し暑い夜の後でも――それに冷たく抱かれると、一度に退散してしまふその怪物の不思議な醫治力愛撫力をも、少しづつ知るやうになつた。そして海が一緒に遊ぶには餘りに拗ね曲つた氣分で居る朝なんぞは、その好きな遊びが出來ぬのをどんなに遺

憾に思ひ、その靜まるのをどんなに祈つたことか！チタの花車な體質は變つて來た。――軟かい青白い肉がしまつて黑くなり、瘠せた手足が丈夫な、釣合のいい恰好に圓くなり、肉の無い頰が生き生きと桃色になつた。海の力がその子の中へはひつたからであつた。海の鋭い呼吸がその若い血しほを新たならしめ、鮮かならしめたからであつた。……

……その畏ろしき古けさは一切の神話を啞然たらしめる、汝、天地と共に古き海よ！――その齡の幾百千萬はその物古りた動作の多種多樣なるにも勝さる、汝、皺最も多き生ける海よ！――怪物と神々との母たる、汝、あらゆる形態を具有して神祕極りなき海よ！――汝の永遠の青春は何處から享けたのか？天地開闢の折、汝の面を見下ろし眺め給うたあの神靈の無窮の動悸を、汝は今も猶ほ保持して居るのである！――生命を得ようとて汝へ逃れ行く者共には――古昔の魔術者が老衰者の爲めに處方したところの、妖術者の書卷のうちに、凋み枯るゝ老人へ處方してあるところの、年若い女の子の呼吸の如くに、子供の呼吸の如くに――生を與ふる汝の呼吸は、今も猶ほ一種の不老長生の靈藥である！

三

……年は千八百六十七年。――時はペストに襲はれたニュウ・オルリアンズ市での眞夏。暑さは少しも動かず、又重くるしかつた。空の鋼色の靑さは、鎔鑛爐なす圓圈の地平線の處から白ずんで居た。――生ぬるい水は、溶けた蠟の流の如くに、音無しに黃に流れて居た。音すら空氣の重々しさに鈍つて居るやうであつた。――車輪の響き、跫音の反響、それがまどろんで居る頭腦を訪づれる響の如くに、耳へは半音にされて入つて來るのであつた。

每日、殆ど同じ刻限に、大氣壓迫の絕え間無しの感じが濃くなつて來た。――腹を低く垂れた一塊りの雲が墨其古灣から重々しく浮かび出る。日を背に黒々とかたまる。ピピと光を放ち、雷鳴を發し、崩れて瀧なす雨と――生ぬるい、垂直の雨と――落下して、そして全く綺麗に消えてしまふ。すると日の光は、以前よりかなほ猛烈に、下界を焦がす。――屋根と石鋪道とは湯氣を立てる。街路は煙つて居るやうに見える。空氣は水蒸氣で呼吸が塞がるやうになる。そして此光り輝く全市が、微かな、むかつくやうな臭氣に――濕つ

た土壤から急に掘り出された朽葉のやうな、洪水後に腐れかかる草のやうな、微くさい臭氣に――充ちて來る。鬱金色の物が點々と下水のねばねばした水に浮いた。硫黃だと或る者は呼んだ。或る者はそれへ名を付けることさへ恐ろしがつた。それは何か無害な植物の、風に吹かれて來た花粉に過ぎなかつたらうか。自分には分からぬ。だが多くの人には『目に見えぬ破滅』が、目に見える種子を！撒きつゝあるやうに思はれた。……さうした日が幾日も續いた。そして日毎に、恐怖に打たれた此町は、その多數の犧牲を死に捧げまつつた。ところが死者の顏はいづれも炎のやうに黃色！であつた。『死亡（デセデ）――』、『死亡（デセデ）――』、『死亡（ファルレシオ）』……門の柱に、電信柱に、緣側の柱に、街燈の柱に、――政府の郵便受箱に、――到る處に死亡の白い掲示がひらめいて居た。全市がその掲示に斑點を打たれて居た。そして下水へは石灰が注がれた。日沒後に巨大な淨めの火が方々て燃やされた。

夜は暗澹たる暑さで始つた。――そのうち幾時間かは、その侵蝕性な空氣が停滯の爲めに醱酵して、氣管支を燃やすやうに思はれた。――それから、夜明け近くなると、毒氣のある蒸發氣て、病氣を起こす露て、寒くなり――やがて太陽が上つて來てその蟄伏して居る濕氣を上昇させ、窯場の光を家々に漲らすのであつた。そして哀悼者と棺車と馬車との

際限無しの行列が、また生の中心と死の中心との間を循環し始めた。――そして長い列車や汽船が、避難者を滿載して、その港から馳せ出た。

　富有な者は逃げ出すことが出來た。だが逃げるのにも危險があつた。家に居れば熟練な看護婦の手腕に依つて生命の助かり得る者で、西部並びに北部の醫者の知らない病氣の毒素を知らず識らずの裡に自分の血液に入れて居て、外見は健康で、急いで町を去つたものが澤山にあつた。――そしてそれ等は途中で、――路傍で、川土手で、森の中で、人氣の無い停車場で、避病院の小屋で――死んだ。松林の清潔な處へ、或は又其處の爽かな海風が、四方へ傳播し行く毒をばお葬ひ氣分のする沼地へ、瘴煙の籠む低地へ、いつも吹き拂ひのけて居るあの近い墨其古灣諸島へ、逃げ場を求めた者は賢かつた。海浴場は人が餘つて雜沓を極めた。――それから漁村は――少くとも汽船やラガー船で容易く行ける漁村は總て――押し寄せて來た人で詰つてしまつた。そして到頭ギオスカの住地すら――邊部で人の知らぬ處なのに――他國人を一人かくまふことになつた。それは名をエドワアヅといふ、稍〻健康の衰へた、人のいい老紳士で、――海氣を欲しもしたが、また閑靜をも欲して來たので、そしてキャプテン・ハリスからフエリウの處へ懇ろな紹介をされて來た人であつた。此人は幾年か心臟の或る病氣を煩つて居たのであつた。

確に此老齢の病身者は、休養と閑靜といふことだけて云へば、此處よりも適當な場所を見出し得なかつたのである。この年の季節は、初期に餘り前途の見込が無かつたので、此處の人は隨分と多く他處へ赴いた。それで此老年の外來者に、そのうちから住み家を一軒選ぶことの出來る空き小屋が二三軒あつた。彼はそのうち一番遠いのを擇んだ。それへ苫て造つた涼しい寢床や、いろいろ必要な家具を――そのうちに大きな木製の搖り椅子もあつたが――カルメンは備へてやつた。さうした設備て、彼には頗る住み心地が宜さささうてあつた。三度の食事はフェリウ一家の者と一緒にし、日中の大部分は自分の住居て費やし、殆ど人に話をしかけず、極めて遠慮して日に立たぬやうにして暮して居たから、此人が此地に居ることとは、無言の動物が居るほどにも――或る家畜が居るほどにも――それが辛抱強くじつと待つて居る、いつもの場處に四五日姿を見せなくなり、さては死んだのかと知つて、初めてそれと一家族との關係が充分了解が出來るといふやうな、手飼ひの動物が居る程にも――殆ど感じられないのであつた。

四

或る八月の朝の二時半に、根氣よくも續け樣に又猛烈にドクトル・ラ・ブリエールの夜間使用の玄關の鈴をスパリシオは鳴らした。懐中に五十弗と、手渡すべき一通の手紙を持つて居つた。此ドクトルをギオスカの住地へ連れて歸れば、更に五十弗（それは今フエリウの手に預けてある）を儲けることになつてゐた。その金の爲めに彼は生命を賭したのであつた。――だから恐ろしく熱心であつたのである。

　ジユリアンは下衣を着た儘で下りて來て、玄關入口のラムプの光で其の手紙を開封した。これまで受取つたことが無い程の多額な謝禮の銀行小切手が封入してあつて、發送者は刻刻瀕死の危險に迫つて居るのだから、スパリシオに連れだつて早速ギオスカの住地へ來て呉れとの緊急な請求が述べてあつた。その手紙は、震へた細長い字で認めてあつて、『ヘンリ・エドワーヅ』と署名してあつた。

　彼の父の親しい舊友なのであつた！ジユリアンは行くことを斷る譯には行かなかつた――病人に恢復の見込はあるまいとは思つたが。『胸悸（アンギナ、ペクトリス）』――しかも七十の齡になつて三度

目の病氣だ！病人の病床へ間に合ふやうに行くことすら出來るであらうか？『ドゥエ　ジヨルノ――コン　ヱント。風がありや　二日で行けます』とスパリシォは言つた。でも、行かずには居れぬ。しかも直ぐとだ。それは金曜日の朝であつた。――風がよければ土曜日の夜には行けよう。……彼は女中頭を起こして、必要な一切の指圖をして、その小さな藥箱を用意した。――そして薔薇色と金色との最初の日の光が、その市の尖塔に閃めくよりずつと前に、漁用のスループ船の小さな船室で彼は疲れ果てた熟睡を貪つて居つた。

……ジユリアンは十一年の間、始めには將來の本職としてよりは、むしろ上品な技藝として勉强した、その職業の實行に、衷心、身を委ねたのであつた。彼は私慾を離れて義務を遂行することに、その恢復しがたい損失に對する唯一の慰安を見出したのであつた。で、かの戰爭がその財産を一掃すべく來たつた時、彼は人間に反抗して力爭する爲めにては無く、死に對して自己の學問を使用する爲めに、雄々しくもその戰鬪に加つた。あの大打擊は米國南部の封建制度の壯大華麗な建物悉くを永久に破壞の儘に殘したのであるが、その大打擊が終はると、その職業が彼に大いに役に立つた。――それを充たしてやらうと彼が欲する所の、あの身に付いた色んな需要に供給をしてやることが出來る計りでは無い、その上に、富有の時分に知つて居た多くの人達の今の困窮を輕めることも、出來るのであつ

た。――毎週々々、パンと蜜柑の葉の茶とで私かに暮して居ながら、その微笑の假面を決して脱がない高貴な困窮があつた。――空腹の餘り半ば見えなくなつて居る眼で（モンドゥ　ピエテ――官營質店――に謝絶された）懷中時計を見つめながら、晩餐の招待を折角だから承諾しようといふ風をよそほふ困窮があつた。――嫁入盛りの娘三人に晴衣が一枚しか求められない――訪問日には、三人が交はる交はる裝飾無しの衣物を着て出る――といふ困窮があつた。美食に飽いて居る求婚者と笑つたりふざけたりして、御菓子の『御馳走』を餘り戯談半分にねだつたので、その願に返事が無く、その求婚者が歸つた後で空腹に泣くといふ――若い、凜々しい、美しい――可憐な困窮があつた。彼の心は幾度か、如上の困窮の爲めに自分の財布を相手に辯論して、そして『我』の無言な法廷で、その訴訟に勝つた。ところが困窮して居る人達に、いつも不可思議に賭金が入つて來るのであつた、――或る時は元の奴隷の手からかのやうに、或る時は自分の名前を書くのを恥ぢた後悔した債主からのやうにして。ただ顔の黄色なギクトリンだけが知つて居た。然しドクトルのこの女中頭は、このドクトルの名前が市の人名簿から消えて數年經つまで、そのスフィンクス的な唇を決して開かなかつたのである。……

ジユリアンは、髮も少し白くなつて――餘程瘠せて居つた。かの流行病が、彼の弱い體

力の堪へ切れぬ程の種々雜多なそして重い責任を、彼に背負はせたのであつた。異常に長引いた職務の爲め、絶え間無しに精神を緊張したのと、睡眠を絶えず妨害されたのとで、彼の意志すら殆どへたばつてしまつたのであつた。そこで町からの此の暫時の不在が、自分の恐ろしく多忙な仕事が出來るやう、體力を恢復して呉れゝばと、それを希望するだけであつた。

蚊が獰猛に咬むのであつた。それに暑さが段々激しくなつた。――そしてまだ風がちつとも無かつた。スパリシオとその傭ひ子供のカルメロとは、――堀割やバイウーの粘土の中を、長い竿で、一尺一尺と船を推し進めて――ジユリアンの頭の上の船板を、幾時間も、前へ後へと歩んで居つた。竿を強く推す度毎にその疲れた男の子は『畜生!――畜生!』と溜息つくのであつた。不愛想なスパリシオも、しまひには聲高に不機嫌を洩らした、――

――『サント　アントーニオ?――アア!サンティッシミュ　エ　サントゥ　ディアヴル!……サクラメントゥ　ポエシテ　ヹグヌ　ウン　アシデンテ!――マリディットゥ　ルシニユウリ!畜生?あゝ、極道だ!惡魔だ!神も糸瓜もあるけえ!』午前中は初からしまひまで、二人は船の上を艫から舳へと歩いては竿を推した。足重さうに歩いては溜息をついて呪つた。そして一分一分の時間は、二人が足を引摺るよりも、もつと大儀さうに、足

のろく經つて行くのであつた。『マナッジャ　クリスト　コ　トュッタ　ア　クロッエ！耶蘇も糞もだ！』……『サンティッシミュ　エ　サントゥ　ディアヴル!!惡魔め!!』

だが、船が輝かしい廣い湖水の最初のへ到頭行き着くと、暑さが上り、微風が跳び出して來て、うなだれて居た帆がパタパタいつて膨らんだ。そして、この古いサン。マルコ丸は、氷滑りする人のやうにやさしく身を屈げて、青い水の上を一直線に矢と進み始めた。すると、その男の子が舵の柄を手にして居る間に、スパリシオは下て、小さな炭火での爐に火を起こして、簡單な食事を調理した。山羊のチーズで風味を添へた、黄色い、おいしいマカロニと。食慾をそゝるやうな香の、油揚げの魚少しと。東洋風な香氣と濃さとの、黑いねつとりした珈琲とであつた。ジュリアンは少し食べて、また横になつて眠つた。今度はその休息は蚊の邪魔を受けなかつた。そして、涼しい夕暮に目が覺めた時は、殆ど爽快な氣持になつてゐた。サン・マルコ丸はバラテリア灣へ飛び込まんとしつゝあるのであつた。既に燈臺の火は小さな月の如くに輝きそめてゐた。そして、海の丁度緣の處に、朱色の巨大な太陽がその顎を載せて居るやうに見えた。灰色のペリカン鳥が幾羽か、檣のあたりへ來て翅を飜してゐた。——海鳥が、その白い胸を舂く西日に薔薇色に染めて、すうつとその檣を驅け過ぎた。……又もスパリシオの小さな爐は働いた、——また魚、また〻

カロニ、また黒珈琲。その上に、肩の四角なヂンス入の罎が一本姿を現はした。ジュリアンは此の二度目の食事には前よりか差控へずに喰べた。そしてスパリシオが、俄かに非常に上機嫌になつて、ぺらぺらと下手な西班牙語て、それから西班牙語よりもつと下手な英語て、饒舌るので、甲板て長い間一緒に煙草を吹かした。それからかの男の子が二三時間の眠に就いて居る間、ドクトルは悦んで此の小船の操縦を手傳つた。彼は數年前には上手なヨット乘りてあつたからてある。スパリシオは、ジュリアンは立派な漁師になれると言つた。眞夜中ちかくサン・マルコ丸は長い、搖れる歩容（あるきぶり）をして走り始めた。——深海へ出たのである。ジュリアンはぐつすり眠つた。このスループ船の落ち着いた動搖が、その神經を鎭めるやうてあつた。

翌けの朝その小さな寢棚から起き上がると、斯う考へた。『要するに、何か斯んなやうな事が今丁度自分に必要なんだ』……熱い珈琲の芳ばしい香氣が彼を迎へた。——カルメロが艙口を下りて來て、それが入つて居る錫のコップを渡して呉れたからてあつた。それを飲んてしまふと、實際空腹を覺えた。——今迄そんなに喰べたことが無い程、澤山にマカロニを喰べた。それから、スパリシオが眠つて居る間、彼はカルメロを手傳つてやつた。そしてその日の中頃はまた休んだ。彼はこの幾週間、これほど邪魔無しの休息をしたこと

はなかつたのであつた。身體が丈夫になりよるのが自分で判るやうな氣がした。夕食時には――誰れにも充分にありにはあつたが――食べるものが不足なやうに彼には思へた。

日一チ日、いつも正しく同じな波の皺が、青い水に映つて居るサン・マルコ丸の帆の白い影を歪めて居つた。――日一チ日船は、低い、綠色のリボンと細い沼澤地や、遙か遠く後ずさりして行くパイン・エロウ色の砂濱が、此宇宙の完成された色の、纔か裂け目かと思へる程の、それ程の寶石の青味に充ち滿ちた一世界の水平を掠め飛んで居つた。――日一チ日雲無き空は、その絕妙な、透明を通して、如何なる畫工も如何なる詩人もそれを再現することの出來ない彼の言語に絕した美はしさを、――戀をする女の眼を見ると、我々を驚かす言ふに言へぬ光ある魅力があるが、それに不思議にも似て居るとは感じはしても、人間の如何なる藝術も遂に之を朧氣にも示し得ない、且つ又如何なる人も遂に之を理解し得ない、彼の名狀すべからざる美はしさを――現はして居つた。

夕方になつた。そしてかの偉大な優勢な上天的な色調が濃くなつた。――船を輪に取卷いて居る水平線は、靈的な色合に――妖怪的ないろんな綠、いろんな灰色、いろんな眞珠色、いろんな魚色に――充ちて居つた。……カルメロは、舵の柄を手にしやがんで居ながら、明亮な低いアルトで、何だか物哀れな短い歌を歌つて居つた。海の上に、船のうしろ

の方に、陸の海岸の低い長い腕が、黒く延びて、横たはつて居た。――前方には落日の光耀が燃えて居た。船は巨大な榮光の中へと――宏大な素晴らしい金色の光明の中へと――帆走しつつあるのであつた。

スパリシオは手を眼の上に翳して、そを後に船は走りつゝある陸の長い細い腕を指示して、ラ ブリエールに斯う言つた。

――『御覽なせい、ドクタ！ラスタ、アイランてさ！』

ジュリアンには分かつてゐた。――うなづいて返事しただけで、あらぬ方を見て居つた――神の榮光の方を。それから、この漁師の注意を別な題目へ向けようと思つて、カルメロは何を歌つて居るのかと尋ねた。スパリシオは直ぐとその子供に大聲でわめいた。――

――『おい！……こりや！カルメロ！――畜生！……大きい聲で歌へ！ドクタが旨いと仰しやる！歌へ！歌へ！』……その特有な陰氣な微笑を浮かべて、この船頭は『あいつ、じやうず、うていめす』と言ひ足した。するとカルメロは、さつき歌つてゐた歌を、聲高高と明亮に歌つた。それは軟か味のある母音と、青春の熱情と、憂愁の美と、に充ちたあの地中海邊の、飾り氣無しの小唄の一つてあつた。――

ママ　アンコル　ベルタ　フルゲンテ、
　コメ　トュ　ママスティ　アロール。——
アスコルタル　ノン　デイ　ゲンテ、
　ソロ　インテロガ　イル　トュオ　コル……

〔戀しておくれよ、いとしの少女、
　戀したやうによ、あの折わしを。
耳にしやるな、世間の噂、
　聽きやれ、心が言ふことを〕

——『じやうず、うていめす、——ずゐぶ、うめい！』と、その漁師は小聲で言つた。そして突然——船板の纖維すべてを震はすかと思ふ程の、豐富な見事なベースで——スバリシオがその歌に助音した、——

ママ　プル　ダモレ　エテルノ、
　ネ　デリットオ　セムブリ　ア　テ。
タッシキュウロ　ケ　リンフエルノ
　ウナ　フアヴラ　ソル　エ…………

「幾世渝らぬ戀しておくれ、
　罪ぢや無いぞへ、お前に、それは。
忘れしやんすな、地獄といふは、
　笑ひ草では無いぞへ、ほんに」

この男の粗暴なところが全く無くなつてゐた！これはと驚いたジュリアンの空想の眼には、目前の此二人の漁師は姿が消えて居た。――見よ！カルメロは氣高いお小姓であり、スパリシオは王侯であつた！二人の聲が如何に能く相和して居ることか！――二人は情熱を以て、力を以て、眞實を以て、どんな粗野な伊太利人にも生まれながらに具つて居るあの不思議な自然な技巧を以て、歌ふのであつた。やがて諸星が天空に戰き現はれた。そして榮光は西天に消えた。そして夜はその胸を開いた。そして無始無終なものどもの光彩が、船のあたりに落ちた。なほも二人は歌つた。そしてサン・マルコ丸は、東南の風が變はらずその帆を膨らまして居るので、いつも少しく身を曲げて、――そのへさきのあたりに波飛沫の、同じ縮の襞飾をいつも着けて、――背の平らな、同じうねりにいつも伴なはれて、――通る後へ綴り織る白沫の、同じ長い裳裾をいつも曳きずつて――せつせとその和やか

な暗がりの中を進んだ。ジュリアンは空を仰いだ。夜は絶えず無言の瞬きに次第に身震ひを増した。――光の點々は次第に數多く無始無終なものを指さしして輝いた。――宵の明星は今にも落ちさうな、白い水の火の大きな雫の如くにわなないた。――天琴星は――夥多の太陽の航走と、幾百千世界の群る〻艦隊と、を嚮導すべく――上天の諸航路を照らす燈明臺の如くに輝いてゐた。するとその菫色の夜の偉大な美はしさが、彼の血の中へ入つて來た、――『無限無窮』といふ感じが齎す、如何にも悲哀に類した、あの畏ろしいやうな悅ばしいやうな念に彼は滿たされた。これは詩人といふ詩人のうちの、最も古い最も優れた詩を味讀して、人間なるものの醜陋と我欲とに相對照して考ふる時――其處へは神聖な青い光が決して純乎としては入らない、そして無言が與ふる淨化が決して來降しない都會の――天空とは壁で遮斷されて居る狂暴な都會の――盲目と殘忍とに相對照して考ふる時、――直ちに感ぜられる念である。……嗚呼！斯んな風にいつも、いつも、斯んな夜をば――星が撒き散らされて居る、斯んな菫色の光の中を船に帆かけて進んで、そして――いつも、同じ節(ふし)でも宜い、いつも同じ歌であつても構はぬ――スパリシオとカルメロとが歌ふのを聞くことが出來るなら！

……『御免なせい、ドクタ！――一寸頭を！』大きな帆桁が緩められて、其頭の上で横

へぐるりと廻つたので、ジユリアンは身を屈めた。サン・マルコ丸は――其故郷へ頭を向けて――岸の方へ進路を轉じつゝあるのであつた。スパリシオは大きな法螺貝を甲板から取り上げて、それを脣へ當てがつて、深い肺の呼氣を吹き込んで、夜の中へ、深い、甘つたるい、ぼーと響く角笛のやうな音を――三たび――投げ出した。一分間經つた。すると、靈の如く仄かに、遙かはるか遠くからの木精の如くに、ぼーぼーと三度應答した。……

すると長い紫色のものがうすぼんやりと浮き出て見え、高くなり、近くなつた――影の暗い陸地と樹木であつた。それからゆれて居る火影が見えた。……サン・マルコ丸は、と或るバイウーへ辷り込んだのである。それから木材で築きあげた高い波止場の下へ着くと、鬚のある漁師が其處に一人待つて居た。女も一人居た。スパリシオは綱を投げ上げた。鬚のその男は提燈の光でその綱を捉へて、サン・マルコ丸をいつもの場處へ繫いだ。それから底深い聲で斯う尋ねた。

『アス　トレイド　アル　ドクトル？御醫者さんをお連れ申したのかえ？』

『えい！』とスパリシオは答へた。……『イ　エル　ギエホ？そしてあの御老人は？』

『アーエ！ポブレ！アセ　トレス　ディアス　イエ　エスタ　ミュエルト。お可哀想にな！死くなられて三日になる』とフエリウは答へた。

ヘンリ・エドワアヅは死んだのであつた！

スパリシオが舟出したそのつい翌けの日、搖り椅子に休んで居た儘、老人は一と聲も立てず一と言も物言はずに、極めて突然に死んだのであつた。其處の沼地に――丈高い雜草の中に、あの西班牙漁師の崩れた墳から遠くない處に――早墓が出來て居たのであつた。だがスパリシオは公明にその百弗の金を儲けたのであつた。

五

そこで休むほかには何もギオスカの家でする仕事が無かつた。フエリウと傭人共はその翌朝用事でバラテリアへ行くことになつてゐた。――ドクトルは一緒に其處へ隨いて行つて、月曜日にニユウ・オルリアンズへ向けて出帆するグランド・アイランド島の汽船に乘ることが出來るのであつた。――さう考へてジユリアンは――人が住まつて居ない或る小屋で、自分に用意してあつた上等な寢床で、身體を長々と延ばして寢られることを惡るくはないと思つて――引つ込んだ。ところが翌けの朝、日の出ぬうちに目が覺めると、非常に疲れた氣持で、激しい頭痛がし、食ひ物のことは思つただけでも厭で、五時に朝餐へと

のフエリウの招待のことを考へると、胸がわるくなる程であつた。多分輕いマラリアであらう。兎に角不快で町へ歸るのは危險でもあり且つ無用なことでもある。それにフエリウも、その容態を見て、パラテリア行きは止めるやうにと勸告した。此處を水曜日に立つことの出來る別な機會があるのである。それてその間カルメンがよくドクトルの世話をしよう、といふことになつた。……船は出て行つた。そしてジユリアンはまた眠つた。

日が高く昇つてから起き出て衣物を着たが、氣分は少しも良くなつては居なかつた。其處いら歩き廻つて見たかつたのだが、日に照らされるのが神經的に恐ろしかつた。これ迄こんなに弱つた氣分になつた覺えが無かつた。搖り椅子を窓際へ引き寄せて、葉卷を吹かさうとした。葉卷は尙ほ更胸をむかつかしさうなので、彼はそれを投げ棄てた。サン・マルコ丸が初めて大海へ出た時に搖れたやうに、部屋が搖れて居るやうな氣がした。

輕いさらさらいふ音が近寄つた、――足早に草を踏んで來る人の跫音であつた。すると人影が閾際に斜に映つた。開いて居る戸口の明かるい處に年若い娘が――たをやかな、丈の高い――珍らしく見事な眼の――美くしい金色の垂れ髮の下から、彼を覗き見て居る鳶色の眼の娘が、――立つて居るのであつた。

――『ムシユ　ル　ドクトゥール。ママン　ドマンド　シ　ヴ　ナヱ　ビゾアン　ドゥ

クク　ショーズ？御醫者さん。何か召し上がりませんかつて、母が。』……斯うその娘は漁村て使ふぞんざいな佛蘭西語で物言つた。此あたりの漁村では、佛蘭西語は大抵無茶苦茶言葉になつて生きて居て、他の色んな國語の詞や語法と混ぜこぜになつて居ることが多いのである。その娘は何だか輕い地で造つた、鋼色した灰色の、ふわつと垂れた衣物を着て居つた。――男の子が穿く短靴がその足にあつた。

彼は返事をしなかつた。――目に見えて顏の色が眞つ蒼になつて居る――死骸の青白さに褪めて居る――その御醫者が、妙に眼を据ゑてじつと見て居るのを不思議に思つて、娘はその大きな眼を尙ほも大きく見開いた。無言の數秒時が過ぎた。しかも猶ほもその眼は――この男の生命が眼の裏に集中したかのやうに燃えて――諦視して居るのであつた。

彼の聲は、激情の一瞬時、震へ高まつて、絶叫となつて喉へ飛び上がつたが、――呼ばうと踠くのに、聲は出ずに、唯唸るだけの、夢の裡でのやうに――其聲が口へ出なかつた。……あれだ！忘れられないあれの眼、あれの眉、あれの脣だ！――卵形の、あれの顏だ！――夜明けの光の、あれの髮だ！……アデールそつくりの立ち姿だ！――あれそつくりのしとやかさだ！――首のあの曲りかたさへ！――鳥のやうなあの聲音さへも！……自分を惱まさうとして、墓が幽靈を送り出したのであらうか？――あの不信義な『海』がその死

者を送り出したのであらうか？一分時の幾百分の一の間、いろんな記憶、いろんな疑惑、いろんな恐怖、いろんな突飛な空想が、電流の節奏的な鼓動の如き突進を以てその頭腦を通過した。――それからその衝動が通つてしまふと、理性が斯う語つた。――『馬鹿な！――お前が初めて斯んな姿のあれに會つてからの長の年月を數へて見よ！――最後にあれの顔を見てから經つた月日を算へて見よ！歳月は立ち停ることはありはせぬ、馬鹿な！――死もじつとしては居らぬ！』

……『プレイティル？何んて御座います？』――その若い娘のはつきりした聲が尋ねた。自分にしかと聞えなかつた返事をされたのだと思つたからである。

心臓が躊躇して再びその職務を果たし、元の色がその脣へ上がつて來た時、彼は一寸の間我と我が心を抑へて、佛蘭西語で斯う娘に答へた。――

――『御免なさい！――きこえませんでした。……本當にびつくらさせましたよ、あなたは！』……だが丁度その時、別な途方も無い想が彼の胸に閃いた。――て、親が子に向つてする、隔ての無い言ひ方で、その娘が殆ど恐がる程の優し味もこもつた、抑へ切れぬ大聲で、彼は斯う叫んだ。――『まあ！不思議だね！――何んて能く似てるんだらう！――名は何んといふの？お前さん。――聞かしてお呉れよ、何んといふのか』（ディモア

クイ　トゥ　エー、ミニヨンヌ。――ディモア　トン　ノム）

これと同じことを、別な方言て、――さう、ずつと昔のことてあつた――私に尋ねたのは誰れだらう？眼の黒い、鼻が鷲の嘴のやうな男、――さう、磁石を呉れた人だつた。此の人ては無い――確かに、此人ては！

はにかんだ、眞面目な怪訝な顏して

――『チタ・ギオスカ』

と答へた。

彼は娘の顏を猶ほも見守つて居て、その名をゆるやかに繰返した、――不思議だといふ音調て――『チタ・ギオスカ？――チタ・ギオスカ！』と反覆した。

――『本當は……』と自分の足下を眺めながら『コンチャ、といふのてす――コンチタと』娘は言つた。妙に嚴かな顏をして居るので、娘は微笑した。ほかにどうして宜いか分らぬ内氣がさせる微笑てあつた。ところがそれがまた死んだアデールの微笑てあつた。

――『有難う』とだしぬけに――早い、嗄れた、縺つた調子て――彼は叫んだ。（もつと長く此娘を見て居れば、自分の感情が亂暴に跳んで出るやうな氣がしたからてあつた）『今夜お前さんのおつかさんに會ひたいんですが。今は氣持が惡くて外へ出られません。

少し休息して見ようと思つてゐます。』

――『何か持つて參りませうか？――新しい牛乳でも』と娘は尋ねた。

――『いえ、今は何も。後で何か欲しければ、おつかさんが御出の時言ひます』

――『母には佛蘭西語が能くは通じません』

――『構ひません（ノン、イムポルタ）、コンチタさん。――レ　アブラーレ　エン　エスパニョル。西班牙語で話します』

――『ビヤン　エントンセス！それなら宜しう御座います』斯う、前と同じな非常に可愛らしい笑顔をして答へた。『左樣なら（アディオス）、旦那樣（セニョル）！』……

處がその娘が行かうとしてあつちへ向いた時、彼の炯眼はその右の耳の可愛らしい耳朶の下に、――丁度頸と顏の間の、桃のやうにふうわり膨らんだ處に――鳶色の小さな點を見附けた。……あのヅウヅウヌ坊にも、あんなやうな黒子があつた！――自分のインキ壺を引つくらかへしたので平手で打つた日に、その黒子の上下へ、自分の指が殘した薄桃色の痕を懷ひ出した。……『ト　レイマン　モアン？――ト　バッテ　モアン！』と言つたつけ、あの時！

――『チタ！――チタ！』

娘には聞えなかつた。……まあ、どんな考へ達ひをするところであつたらう！大自然の偶然の一致は、小說よりも不思議なものでは無いか。まあ、待つて、――あの子の母に先づ訊ねて、そして確かめるが宜い。

とはいふものゝ――偶然の一致が多過ぎる！あの顏もさうだ、それからあの笑顏、あの眼、あの聲、あの全體の魅力。――それからあの黑子、それにあの美しい髮毛。ヅウヅウヌはアデールに實に不思議な程似て居つた！あの金髮はフロラン家へのスカンディナギア遺傳なのだ。那威の船長の、丈の高い娘が、昔フロラン家へ嫁に來たのであつた。ギオスカ？――ギオスカ家にあんな髮毛をした者は一人もありはせぬ、でも、此邊の西班牙移住民は、時たまブロンドな獨逸人の娘を妻にする。……これまた隔世遺傳の一例かも知れぬ。此處のギオスカといふのは誰か知ら？あの男の妻がそれなら、――あの色の黑い小さなカルメンがそれなら、――チタの金色の髮毛はどうした譯だらう？……

それに此處は、ラスト島の死人があの非常な大浪で漂ひついた、その人跡稀な海岸の一部分だ！霽れた日には、上等な望遠鏡で見れば、あの物凄い海岸の、長い靑い帶のやうなのが此處から見分けられる……何處か――此處とあそことの間で……不思議だなあ！……

……ところがまた！チヤンスロルズギルでの戰鬪の前夜の、あの露營の折、ラルウセル

が不思議な物語を自分にしだして居つた。……偶然に戰爭で一緒になつたのだつた、——昔時の敵同志が一緒に。死に面と向つた爲めに、二人は親しい友達になつたのだつた。自分はあの男をどんなに少ししか理解して居なかつたらう！——何といふ勇ましい、信實な、質朴な魂が、あの日戰爭の神の膝下へ昇天したことか！……何だつたらう——ラスト島の海嘯に助かつたクリオールの幼兒のあの物語は——終りまで聞かずに濟んだあの物語は？……あゝ、何んて苦しいことだらう！

これは屹度勞働が過ぎて、睡眠が不足だつたのだ。明かに神經衰弱だ。横になつて、眠らなければならぬ。頭と背中のこの痛みが堪へられなくなつて來をる。休むよりほかには良法は無い。

彼は蚊帳の中で身を伸ばした。非常に靜かで、暑くて、風は少しも無かつた。毒を有つた蟲が澤山に居た。眼に見えぬ釜が、頭の上で煮えたぎつて居るやうに、絶え間無しの沸騰の音を部屋に漲らしてゐた。暴風襲來の徴候だ……それにしても、どうも妙だ——汗をかかぬ。……

するとラルウセルが——騎兵の軍服を着たラルウセルが——身を屈めて彼を上から見て居るやうに思はれた。『ボン　チユール、カマラード！——ヌー　ザロン　サヴアール

アン　ビヤン　モーヅー　タム。モン　ボーヴル　ジユリアン。やあ！君！お互に非道い目に遭つたな。可哀想に、ジユリアン！』何だと？非道い目にだつて？『コンマン　アン　モーヅー　タム？どうして非道い目にだつて？』……彼はラルウセルの顔を見入つた。その微笑には何だか變なところがあつた。あゝ、さうだ！今それが憶ひ出せた。傷があつたのだ！……『アン　ギレン　タム！本當に非道い！』と、ラルウセルは囁いた。するとその姿が見えなくなつた。……何處へ行つたのだらう？

——『シエリ！あなた！』

その囁にびつくりして起きた。……それはアデールの囁き聲であつた！アデールは、古昔の樂しい夜な夜な、あの聲でたまたま自分を呼び起こしたのであつた——煩つてゐるユウラリイを見てやつて呉れと賴みに——樂しい宵の間に言ひ忘れた一寸した內證事を話しに！……いや、思ひ違ひだ。あれは木の音だ。空は一面に曇つて居る。風が募りをる。……どうも心臟が非道く打つ！蟀谷(こめかみ)が大變な脈動をする！おや、これは熱病だぞ！背中と頭とが斯んなに痛むのは！

ても彼の皮膚は乾いて居た、——羊皮紙のやうに乾いて居て燃えるやうてあつた。彼は起き上がつた。すると頭蓋骨の底の方の、破れるやうな痛みの重さて、酔ひどれのやうに

ふらふらした。壁へ釘で掛けてある小さな鏡の處へよろめいて行つて、眺めた。どんなに眼が光つて居たか。――それに口へ血が出て居る！脈を計つて見た、――痙攣性て、恐ろしく速い。これは若しかしたら――？……いやいや、これは何か惡性なマラリヤ熱に相違無い！クリオール人は――他地方へ出かけて故郷を久しく留守にして居た後でなければ――此熱帶病に容易く罹ることは無い。さうだ！軍隊に四年勤めて居たのだ！だが今年は千八百六十七年だ。……彼は暫時躊躇した。それから――その藥箱を披いて、調合をして、規尼涅を三十グレンぐつと呑んだ。

　それから又横になつた。頭は段々痛みを増す。――頸椎が液體の鐵に充たされて居るやうな氣がする。だのにその皮膚は依然として鞣したやうに乾いて居た。すると苦しみが激しくなつて、氣息を吸ふ度毎に呻らずには居れぬ程になつた。……嘔氣がする、――そして喉へせり上がつて來る規尼涅の刺すやうな苦さ！。――眩暈がする、そして胃の中が捩れるやうてある。見るもの總てが桃色に見え出した。――燈火が石竹色てある。それが次第に濃くなる、――色合が段々濃くなつて燃える。何だか眼の前てチラチラ光つて、くるくる廻り續けて居る。花火のやうてある。――すると藥の苦味と一緒になつて血がどつと口一ぱいに出た。燈火が赤葡萄酒のやうに深紅になつた。……これは――これは……マラ

リヤては無い。……

六

……カルメンにはその病氣が判つてゐた。が、此の勇敢な小女（こをんな）はそれを恐れなかつた。ハヷナて暮した幾夏の間、何度か之に面と向つたのであつた。これと戰ふ戰ひ方を知つて居つた。——愛の力さへ挫く程の、長の奮鬪の後、終にその黄色な把握からしてフエリツの生命を捥ぎ取つたのであつた。今一番チタのことが心配になつた。どんな事情があらうと、決してこのお醫者の部屋近くへ來てはならぬ、とかの娘に命令したのであつた。

ジユリアンは、毛布を幾枚か身體の上へ積み重ねられたことを感じた、——優しい手が酢を加へた水で自分の焦げるやうな顏を塗つて居るのを感じた。それから又朧氣に、今は夜だといふ考が浮かんだ。赤い燈火を向う側にして、動いて居る女の影が壁に映るのが見えた、——ラムプが點つて居るのが見えた。

すると人事不省に陷つた。呻つた、啜り泣いた、子供のやうに泣いた、——折々、譯の分からぬことを、佛蘭西語や、英語や、西班牙語て、話した。

――『メンティーラ！虚僞だ！――お前さんがあの子の母である譯は無い。……でも、若しさうなら――。あの子を此處へ來さしちやいかん、――ジアメ！決して！……カルメンさん、アデールを御存知てしたか、――アデール・フロランを？あの子に能く似て居ましたよ、――ほんに能く、――口に言へない程です！……私には分かつてますが――どんなに似て居るか――本當には、充分には、判りません！……シ！シ！――エス　エル　ヲミト――ヨ　ロ　コノッコ　カルメン！え、分かつてゐます。吐き物です。……彼女には二度死なしてはなりません……私は二度死にました。……私は今また死にかかつて居ります。彼女は一度きり。空が無くなる迄は、彼女は起きて來はしません。……モア、オーコントレール、イル　フォーク　ジユ　ム　レーヴ　トゥージユール！私はといふと、彼女とは違つて、いつも起きなければなりません！患者には私は必要な身體です。――石盤には患者の家の名が一ぱいに書いてあります。玄關の鈴は鳴りどほしてす。私が死ぬると、あの鈴を鳴らして私を呼ぶてせう。……そこで私はまた起きます！――レスルガム！復活！……どうしてあの男の生命を助けることが出來ましたらう――私は自分て、自分の生命を助けることが出來ませんてした。病氣の性が惡るかつたのてす――七十歲てしたから！……おや！クイ　サ？誰れだい？』……

彼にまた――赤い煙の渦卷の中から彼の方へ手を延ばして居る――ラルウセルが見えた。その手を握らうとしたが、出來なかつた。……『ナンポート、モン　ナミ。トゥヴ　ラヴアール　ビヤントー。いゝよ、君。直ぐに會へるから』誰れに直ぐ會へるのであらう？――『キ　ドンク、ラルウセル？誰れにだへ？』だが、ラルウセルは返事をしなかつた。その赤い霧を透して微笑して居るやうに思はれた、――すると、その姿が消えた。

カルメンは暫くの間は――この病症は絶望のやうに見えたが――自分の力で此病人の生命を取り止めることが出來る、と信じて居たのであつた。ジュリアンのは、屢ゝ羅病者の生命をたつた一日で片附けてしまふやうな、そんな急速激烈なものであつた。彼女は、玖馬の病院で、非道い實例を幾つも幾つも見たことがあつた。强壯な靑年が――西班牙から戻つたばかりの軍人が、――それが喘いで居るのを、夜明けに、熱病患者病室へ搬んで、夕暮に、それを墓地へ搬んだことがあつた。革命の彈丸に穴あけられた騎兵ですら、死ぬるのにもつと手間取つたものである。……でも、ジュリアンの一命は自分に取り止められる、と彼女は信じて居たのであつた。その燃えるやうな額が一度珠の汗をかき出し、その燃えるやうな手が濕つて來たからである。

ところがその折風が唸りつゝあつた。――空氣が輕くなり、稀薄になり、涼しくなつて來た。暴風が東部に押し寄せつゝあつたのである。ところが熱病患者には、氣候の變化は即ち死なのである。……今カミナダの僧をつれて來ることは不可能である。船で一日の中に迎へて來られる僧は他に一人も無い。カルメンは祈禱するほかなかつた。病人の生命を救ふ自分の力へは、全く望を失つてしまつたのであつた。

でも、病人は猶ほ譫言を言つてゐた。だが、間を長く措いて、そして言葉と言葉の間に以前よりか長く間を置いて、自分と自分に向つて物を言ふのであつた。――聲が段々弱くなり、言葉が次第に聯絡の無いものになつた。彼の思想は、風前の燈火の如くに、搖らめいて歪んだのである。

怪しくも過去が現在と混同して來た。眼の印象と音の印象とが――チタ・ギオスカの顏や、募る暴風の囁き聲が――妙に絡み合つた。するとキラキラと妖魔の電光が、燃ゆるが如き動脈の鼓動毎に、眼の中を、腦の中を、通つた。それから全くの暗黑に――影暗き海の周流の如くに、波立ち唸つて居る暗黑に――なつた。その呻き聲を通してまたその唸り聲に抽んでて、大勢の人間の叫び聲が一つ、いろんな叫號叫喚の入り亂れたぞつとするやうな一と聲が響いた。……或る女の手が自分の手に握られて居つた。……『もつと强く』

彼はつぶやいた。『もつと强く握つておいて！出來るだけ長くつかまつておいて！』これは千八百五十六年八月十日の夜のことなのである。……

――『あなた！』……

又もその不思議な囁が彼の意識をはつと覺ました。――ルビイ色の明かりが一ぱいに充ちて居る、部屋に居るのだといふことが朧氣に分かり、――酢の强い臭が分かつた。家はゆるやかに搖れ廻つて居た。――ラムプの深紅な炎が、代り番に、長くなつたり太くなつたりした。――すると今度は一々の物が眼の眩むほど早く廻つた、――渦卷の中でくるくる舞をするやうに旋轉した。……何ともいへぬ嘔氣がする。すると身體のうちを齒が嚙むやうな――段々猛烈にその胸の肉を捥ぎとるやうな――素敵な痛みがする。すると身體が捩れるやうで、裂けるやうで、燃えるやうで――と思ふと、脣から鼻の孔から、呼吸が詰まるほど、どつと血が流れ出た。とまた、稻妻が見え、家が搖らめいて、ずつと前の暗黑になつた。『早く！――早く！――そのテーブルにつかまつてるんだよ、アデール！――離すんぢやないよ！』……

……上へ、――上へ、――上へ！何んだ！まだ上へ昇るのか？赤い空だ！――赤い――赤黑い……その朱色が失くなる折の、熱した鐵の色だ。また、この恐ろしい大水！そして

音がしない。重くて、ねばねばして——濃くて、暖かくて、胸が惡るくなる……さうだ、血かな?斯んな大水の重さなら、地面が震へさうなものだが!……何んてアデールは西班牙語で物を言ふんだらう?誰が祈つて吳れて居るのだらう?……

——『アルマ　デ　クリスト　サンティシマ　サンティフイカーメ!聖き極みなる基督の御靈よ。祝福を與へ給へ。

『サングレ　デ　クリスト、エムブリアガーメ!基督のおん血しほよ、醉はしめ給へ。

『オー　ブエン　ヱサス、オエ　メ!善きイエスの君よ、願叶へ給へ』……

あんな暗い處から——まあこんな明かるい處へ!瑠璃色の靄だ!嗚呼——いい氣持の霜だ!……街路は總て美しい青い靄に充ちて居る。……この『町』は物聲がきこえぬ、そして白い。——この狹い路はうねうねして居て、雜草が生えて居る!……墓ばかりある古い街路だ、これは。……おや!妙な習慣だな!——どの家の門口にも夜間用の呼鈴がついて居る。や、さうだ、その筈だ!——夜の間使ふ呼鈴だ。死者は魂の醫者である。夜だけ招かれ——暗黑と靜寂の中から、呼び迎へられるのだから。……でもあの女は?——日中でも呼鈴て呼ぶことをしてはならんのだらうか?……これは可笑しい、日中だと思つて居つ

た！——何だ、暗いては無いか。星も見えぬ。……そして妙に冷たくなりをる。……どうして彼女が見つからう！斯んなに暗いのだもの……こんなに寒いのだもの！……

——『あなた！』

その非常な囁き聲で家ぢゆうが震動した。

外では大きな樫の木がその根もとまで震へて居つた。——海の怒號に、海岸一帶がゆすぶれて白くなつて居た。

そしてカルメンは、死者の足下に跪いて、その夜自分獨りて、叫んだ。——

——『オー　エスス　ミゼリコルディオソ！——テネド　コムパシオン　デ　エル！悳深きイエスよ。彼を憐み給へ！』

ユーマ

西印度奴隷の物語

私の友
デヨゼフ・エス・トュニスン
に捧ぐ。

ユーマ

保姆(ダア)は昔の植民時代、マーチニークの富有な家庭に於ては高い地位を有つてゐた。彼女は普通西印度の黒人で、それも、色の薄いメスチーヴ種のものよりは、黒いカプレス種が多い方であつた。しかし彼女の場合に限つて、皮膚の色に關する人種的偏見は存してゐなかつた。彼女は奴隷てはあつたものゝ、彼女の有するやうな社會的特權は、解放された女の、いかに美しいものも、教養あるものでも、享有することを得なかつた。彼女は母として敬愛され、乳母であり、且つまた子守であつた。といふのは、クリーオール人(譯者註)の子供は、二人の母をもつてゐた譯だ。彼を生んだのは貴族的な白人の母であつて、彼の養育一切の世話をしてくれるのは、奴隷の黒人種の母であつた。彼女は子供に乳を飲ませ、入浴をさ

譯者註　クリーオール人は、主として西印度に移住した歐洲人(大抵西班牙人及び佛國人)の子孫を指す。しかしこの語の使用法は漠然としてゐて、往々西印度地方の混血種(白人と黒人との)或は時としては黒人を指すこともある。

せ、奴隷の語る柔かで音樂的な言葉を教へ、兩腕に抱いてつれて出てて、美麗な熱帶の世界を見せ、夕方などには、不思議に滿ちた昔噺を語つてきかせ、賺かして眠につかせ、晝も夜も子供のためにあらゆる面倒を見るのであつた。だから、幼い間は、白人の母よりも彼女が一層に親しまれ、愛せられたのも、怪しむに足らぬことであつた。どちらかといふ場合には、殆どいつも保姆（ダア）の方が優勢であつた。子供は眞の母よりは彼女と共にゐる方が多かつた。彼女ばかりが、彼のさまざまの小さな要求を滿たして呉れた。彼に取つては、母よりも彼女の方が一層寛大で、辛抱强く、恐らくは一層愛撫してくれるものであつた。保姆（ダア）自身の心が子供なのであつた。子供の言葉を話し、子供らしい事柄に娛樂を見出し、無邪氣で、遊び好きで、愛情に溢れてゐた。彼女は幼兒の思想、動機、苦痛、缺點を理解してゐたが、白人の母はいつも必らずしもさうではなかつた。彼女はすべての場合に彼を賺かしたり、面白がらせたり、彼の想像力を勵ましたり、あやしたりすることを直觀的に知つてゐた――そこには絕對の調和が、彼等の性質の間に存してゐた――好惡の旨い一致と、生活の動物的悅樂に於ける完全な同情同感があつた。それから、後になつて、子供の年齡が加つてきて、男又は女の家庭教師から始めて學科を授けられ、佛蘭西語を學ぶやうになると、知的啓發の程度に從つて、保姆に對する愛情と母に對する愛情が、差異を示し

てきた。しかしたとひ母がもつと愛せられるやうになつても、保姆の懐かしまれることは、以前に劣りはしなかつた。保姆を愛する念は一生涯續いた。して、家族に對する保姆の關係は、滅多に止むといふことはなかつた――彼女が他の奴隷所有者からただ單に雇ひ入れてあつたやうな、殘酷な場合を除けば。

大抵の場合、一家の保姆は該家の所有地て生まれたもので、同じ家庭の中て二代の間、保姆の奉公を勤めることがある。家族が殖え、分家したり、息子や娘が成長して父や母となつてくると、今度は更に一切彼等の子供達の世話を勤める。主人と共に一生涯を過ごして了ふ。假令彼女の身は法律上は所有物であるにしても、彼女を賣つてしまうといふことは殆ど破廉恥と思はれてゐた。永年の奉公に對して、感謝のため、解放されることがあつても、彼女は獨立の家庭を起こさうとは欲しなかつた。愛着を持つた人々が死んで、彼女獨り殘つた場合を除いては、自由は彼女に取つてさほどの價値はなかつた。彼女自身の子供もあるから、自身のためでなく、子供のためにこそ自由を希つたてあらう。またそれを求めても充分正當てあつた――他人の子供のため、自身の母たる快樂を犧牲にしたことは、多大であつたから。彼女の無私獻身は、いかに冷酷な人にも感謝を禁ぜざらしむるほどであつた――この人種固有の善良さは、彼女に於てその最高の發達を示したのてあつた。元

この人種は、智的には發達する處なく、屈從のため半野蠻の情態に置かれてゐても、しかも、氣候や環境やその他クリーオール人の特性を作る一切の神祕的影響によつて、肉體的には驚くばかり立派に仕上げられたものであつた。

保姆はもはや過去のものとなつた。彼女の如き特別な型の人物は、奴隷制度の一つの產物で、概して自然淘汰によつて作られたのだ。恐らくは奴隷制度が作つたものの中では、愛惜してもよい唯一のものだらう——その制度の殘酷な土地の、毒々しい暗い繁叢の中に咲き出でた、一つの珍らしい花である。奴隷解放時代となつてからの自由な雰圍氣は、必らずしもこの型の永續に致命傷を與へるものではなかつたが、自由と共に幾多思ひもよらぬ變化が起こつてきた。外國の競爭と新發見に基く產業上の大不景氣——要するに商業上の危機——が、普通選擧權の確立、政治的動亂によつて黑人に對する白人の服從、及び舊社會組織の全き崩壞に伴つた。その變化は好結果を奏するには、あまりにも過激であつた。あまりに急速、且つ無差別に與へられた政權の濫用は、宿怨を深め、新恨を促した。諸種族は互に最も提携し合ふ必要のあつた際に、永遠はなればなれになつた。やがて增加し來たつた生活難は、迅速に利己主義を發展させた。寬宏と繁榮は共に無くなつた。クリーオール人の生活は狹隘な範圍に縮まり、すべての階級の人々の性格は、これまで知られなか

つた窮乏に壓迫されて、ありありと無情なものになつた。

……事實もはや保姆(ダァ)は存在しない。今はただ番人(ガーディアンヌ)の女または子守女(ボンヌ)——三ヶ月以上勤續するのは滅多にないやうな——があるのみだ。保姆の忠實と質樸は口碑に歸してしまつて、新時代の有給使用人の中には、その匹儔を求めようもない！しかし保姆であつたもののうち、若干は生き殘つて、まだその名を帶びてゐる。一たび受けた名が、一生涯の間、名譽の稱呼として維持されてゐるのだ。まだサン・ピエールの市には幾名か見受けられる……例へば『本町通り(グラン・リユー)』の海岸の側に、頗る立派な家があつて、玄關の大理石の階段の上に、殆どいつも晴天の朝には、餘程年老いた黑人の女が、日向ぼつこりをしてゐる。それは保姆(ダァ)ショットなのだ。商人や裁判官など、富有な、または地位の高い紳士達が、傍を通つて行くとき彼女に會釋する。家族の人々——白髮の老父と綺麗な息子ども——が、會社へ出勤する前に、霎時立ち停つて、彼女と喋々の語を交はすのを目擊する人もあるだらう。若い貴婦人達が、馬車を驅るため車上の席に著く前、身を屈めて彼女に接吻する光景の見られることもあるだらう。もし誰でも長くその邊に逍遙して居れば、すべての訪問者は微笑を帶び乍ら、親切に『御機嫌よう御座いますか、ショットのお婆さん？』と、彼女に挨拶するのを見出すだらう……彼女がただ召使に過ぎないものと思つて、粗末な言葉を向ける

客こそ災難だ！『彼女がもし下婢に過ぎないなら』と、その家の主人は、かやうな客を咎めていつた。『それなら、あなたは、ただ取次人に過ぎませんよ』保姆を侮るのは、その家を侮るに同じことだからである。彼女が死ぬると、金銭だけでは營むことのできぬやうな葬式を受けるだらう――それは第一等（プルミエール・クラス）の式で行はれ、市の最も富めるもの、勢力のある人々が會葬するだらう。その日、棺側の附添人を勤めるために、丘陵を超えて二十哩の騎行を辭せざる農園主もあるだらう。平素は殆ど歩道を踏むこともなく、また自家用の車でなくては、滅多に外出しない貴婦人達でも、熱天の下、徒歩で『碇泊場の墓地（シメチエール・ド・ムーイラージュ）』まで、はるばるその黒人の老女の棺について行くだらう。して、大きな棕櫚の木の絶頂が、鐘の響につれて戰く際、人々は保姆を一家の納骨窖に葬むるだらう。

一

今猶ほサン・ピエール市には、レオニー・ペロネット夫人の所有であつた、丈高き、カプレス種の黒女、ユーマを記憶してゐる老人達が生きてゐる。召使の方が女主人よりも世間によく知られてゐた――富める商人であつた彼女の夫が、充分氣楽な暮しの出來るやう

な財産を殘して死んだ後、ペロネット夫人は、あまり外出をしなかつたから。
ユーマはペロネット夫人のお氣に入りの奴隷で、且つまた敎子であつた——その譯は舊制度の時代には、クリーオール社會で、貴婦人達が小さな奴隷の敎父となるのは、稀らしいことではなかつたから。ユーマの母のドウスリースは、ペロネット夫人の獨り子、エーメーのために保姆として買はれたのであつた。して、エーメーが殆ど五歳になつた頃に死んでしまつた。二人の子供は大抵同じ年齡で、また互に頗る仲よしのやうに見えた。ドウスリースの死後、ペロネット夫人は小さなカプレス種の少女を、娘の遊び相手として育てることに決した。

二人の子供の氣質は著しく異つてゐた。して、彼等の成長するに從つて、差異はますます顯著になつた。エーメーは表情的で、愛情に溢れ、敏感で、熱烈で、欣びから悲みへ、涙から微笑への方向轉換が迅速であつた。これに反して、ユーマは殆ど無口で、滅多に感情を露はさなかつた。エーメーが絶叫する時にも、靜かに遊んでゐたり、エーメーが母を喫驚させるほど猛烈に笑つても、殆ど微笑を洩らさなかつた。このやうに性格の差異があるにかゝはらず、或は恐らくはその差異のために、二人の間柄は極めてよかつた。彼等は決して大きな喧嘩をしなかつた。して、家庭教師が與へ得るよりは、一層完全

な教育を受けるため、エーメーが九歳の時、修道院へ送られることになつてから彼等は始めてわかれわかれになつたのであつた。エーメーがその伴侶と袂を分かつたときの悲哀は學校の中には若いカプレスよりも、もつとよい遊び相手があるだらうといふ斷言を聞いても和らげられなかつた。この變化によつて、たしかにエーメーよりも更に一層の損失を受けたユーマは、外面的には落ち着いてゐた――『申分のない振舞であつた』とペロネット夫人は云つたが、流石に微妙な觀察家だから、『申分のない振舞』を無情冷淡に歸することはなかつた。

しかし二人の友達は、その後も始終逢つた。といふのは、夫人は每日曜必らず彼女の馬車を修道院へ驅つて、いつもユーマを伴れて行つたから。して、エーメーは母に逢ふ嬉しさにも劣ることなく、以前の遊び友達に逢ふのが嬉しく見えた。始めての夏休とクリスマスの休暇の間には、幼兒同志の交情は無邪氣に囘復された。して、それから、關係の自然的變化があつた後にも相互の愛情は亡びなかつた。たとひ名義上は子守(ボンヌ)として、エーメーを主人と呼んでゐたものゝ、ユーマは殆ど乳姉妹として待遇された。だから、令孃が學問の修業を終つてから、若い奴隷の下婢は彼女が祕密を打明ける相手であつて、また幾分は友達であつた。ユーマは讀書習字を學ばなかつた。彼女を教育するのは、到底いかなる努

力も彼女の地位をたかめ得ない運命の範圍に對して、ただ不平を感ぜしむるのみだと、ペロネット夫人は信じた。しかしこの娘の有する天稟の聰明は、各方面に於ける知的訓練の缺乏を補つた。彼女はあらゆる場合に、いかに行ふべきか、また如何に語るべきかを知つてゐた。彼女は發達して立派な婦人となつた――たしかにその市區の最も美しいカプレスとなつた。彼女の色は淸らかな深紅で、容貌には漠然とした、優しい美しさがあつた――殊に横顔には、何となく、スフキンクスの摑みどころなき顔に彷彿せる趣が見えた。髪は黒い羊毛の如くちぢれてゐても、長くて、美しかつた。その上に、彼女は風姿が優美で、また身長が高かつた。十五歳で、最早大人のやうに見え、十八歳で、彼女の若い女主人よりも頭と肩だけを拔いてゐた。だから、エーメー孃は、人並より低くはなかつたが、二人相携へて歩くとき、ユーマの顔を覗くためには、彼女の眼を擡げねばならなかつた。若い子守は世間一般から賞讃された。彼女はマーチニーク島民が混血種美人の一つの模型として、他國人に誇示したい容姿の一人であつた。奴隷[譯者註]制度の時代にさへ、クリーオール人は、青銅或は黄金の場合には、誰れ人も稱揚を憚らぬ色合を、人間の皮膚の上に歎美するとい

譯者註　この物語の結尾にも見える如く、佛國政府は千八百四十八年に奴隷を解放した。

ふ樂しみを敢て辭せなかつた。彼等は明からさまにかゝる色合を絶妙だと告白した――審美的には彼等の『皮膚の色の偏見』なるものは何等の存在をもたなかつた。しかしユーマへ向つて遠慮なく彼等の胸裡の賞讃を告げようとした白人青年はあまりなかつた。彼女が養成された家族の道徳的勢力と全然同じほどに、彼女の雙眸にある一種の力と、眞面目な風采が、この若い奴隷の女を保護したのであつた。

　ペロネット夫人は彼女の下婢を誇りとしてゐた。して、當時黒女達が着けた華出やかで優美な衣服によつて、できうる限りユーマの美粧を見るのを愉快とした。服裝については、ユーマは解放された階級のいかなる人をも羨望すべき理由を有たなかつた。彼女はその地方に於ける色彩配合の觀念に基いて、カプレス種の女が着ようと欲する一切のものを有つた――絹と繻子の袴――ローブ・デザンドと稱する衣裳、それに配合する髮飾及び頸卷用の薄絹――淡藍色は橙黃色と、赤は青紫色と、黃は青と、綠は薔薇色と對照させて。エーメーの初めての聖餐式、夫人の祝名節(譯者註)、舞踏會、家族が結婚式に招かれた折など、かやうな特別の場合に、ユーマの服裝は目も醒めるばかりであつた。丁度胸の下に、彼女の長く

譯者註　天主教に於て、自分の名の根源の聖徒の誕生日には、その日を祝する。

裾を曳いた橙黄色の繻子の袴をつけて、その上方に、笹縁と刺繍をつけた襦袢を露はし、半袖は腕輪をはめた腕を裸出し、黄金の留めがねを以て、肘て結ばれ——彼女の黄白色の頸巻には、緑と青の筋がついて——彼女の三重の頸飾は、彫物をした黄金の珠で——彼女の燦めく、垂れた耳飾は、一つ一つが厚い黄金の圓筒形を結び合はせた一團となつて——彼女の黄金の帶を巻いた印度風の頭布（ターバン）には、『戰慄する留針』、小さな鎖、黄金製の『顫へる樫の實』と呼ばれる寶石などの閃いた姿は、シーヴァ[譯者註]の女王として畫工のモデルに立つてもよいほどであつた。ユーマの裝身具のうちには、エーメーからの種々の綺麗な贈物もあつたが、寶石類の大部分は新年の贈物ごとに、ペロネット夫人が彼女に買つてやつたものであつた。ユーマは彼女が願つても正當と思はれた快樂を、一つとして與へられない事はなかつた——自由の外は。

譯者註　ソロモン大王の智慧を慕つて、非常に華麗な行列を作つて亞弗利加から來た女王。（舊約聖書、列王紀略上、第十章一—十三節參照）

恐らくはユーマは、この自由といふ問題を、少しも念頭に懸けたことはなかつた。しかしペロネット夫人は多大の思慮を費やし、また既に決心してしまつてゐた。二回までも、

夫人はエーメー孃の懇願と熱涙にもかゝはらず、ユーマに自由をゆるすことを拒絕した。その拒絕は、そのときまだ若いエーメーには、充分に理解され得ないやうな動機に促されたのであつた。夫人の眞意は、自由になることがユーマをして幾分でも幸福ならしめ得るやうになるや否や、解放を與へようといふのであつた。現在の場合、彼女が奴隷であることは、道德的保護てあつた。それは法律的にもまた、彼女を最も愛してゐる人の管理の下に彼女を置いた。それは彼女がまだ毫も知らない危險から彼女を防禦した――就中、それは彼女の女主人の不賛成な結婚を、彼女にさせないやうに豫防した。敎母はこの女の將來に對する成算を有した。他日ユーマを勤儉な解放された男――船大工、指物師、建築師、何かの職工長とか、彼女のために善良なる家庭を作り得るやうな人――に嫁がせようと決心した――して、その場合には彼女に自由を得させ、また恐らくは幾らかの持參金をも與へようと思つてゐた。今の處では、彼女はたしかに、得らるゝ限り幸福の身分と思はれた。

……十九歲でエーメーは戀愛結婚をした――相手はルキス・デリヴィエールといふ遠い從弟で、十歲ばかり年上の男であつた。デリヴィエール氏は東海岸に親讓りの財產で、繁昌せる耕作地を有つてゐたが、多くの富める畠主同樣、一年の大部分を、好んで市の方で暮した。だから彼がその若い花嫁を伴れて行つて住んだ處は、市の山の手の彼の母の邸宅

てあつた。ユーマはエーメーの希望に從つて、彼女の新家庭にお伴をすることになつた。本町通りのペロネット夫人の家から、ルー・ド・ラ・コンソラシヨン街のデリヴィエール家へは、さほど遠くはなかつたので、夫人の娘も、敎子も、この分離を心苦しくは感じなかつた。

十三ケ月の後、ユーマは或る東洋風な姫君の如き服裝をして、敎會の受洗盤へ女の赤ん坊を運んだ。この女兒が植民地の小世界へ出現したことは、海軍（譯者註）記錄に『ラウール・エルネスト・ルキ・デリヴィエールとアデライード・オルタンス・エーメー・ペロネットの娘、ルシイル・エーメー・フランシエット・マリー』と登錄された。それから、ユーマは小さなマヨットの保姆となつた。幼兒が一般から呼ばれるのは、命名式に於て與へられた名の中で、最後に附屬せる名、或は寧ろその指小辭であつた……マリーの指小辭はマヨットであつた。

譯者註　佛國海軍が、この植民地へ軍政を布いてゐたためである。

兩方の家族で、マヨットは母よりも父の方に肖てゐるものと思はれてゐた。彼女は灰色の眼と褐色の髮を有した。その輝いた髮は、昔の植民時代家庭の子供の場合、大きくなる

と、目に見えて黒くなるのが常であつた。彼女には將來美しくなる末頼もしさが現はれてゐた。

また一年經つた。その間、これほど幸福な家庭は無いほどであつた。すると、青天霹靂の殘酷さを以て、エーメーは死の見舞ふ處となつた。彼女は夫と共に幌を外づした馬車に乘り、ユーマに子供を託しておいて、ラ・トラスと稱する美しい山路へ車馬遊山に出掛けた歸途、いつも季節によつては、案外な暴風を伴つてくる、冷たい、瀧のやうな大雨に遭逅した。しかもそれはいかなる避難の場所からも離れて、且つ殊の外暑い午後の最中であつた。夫妻とも忽ちびしよ濡れになつた。して、猛烈な東北風が起こつて、歸りの全道中を通じて、眞正面から彼等に吹きつけた。生來纎弱の若い妻は急性肋膜炎に襲はれ、あらん限りの介抱の效もなく、翌朝日出前に絶命した。

して、ユーマは優しくまた巧みに、これを最後と、若い女主人に衣裳を着せた――エーメーの最初の舞踏會のためには、薄青の衣を彼女に着せ、彼女の結婚の日には蒸氣のやうな白色の衣裳を着せたと同じやうに。しかし今度は、すべてクリーオール人の死んだ母の風に隨つて、彼女は全部黒衣を着せられた。

デリヴィエール氏は若い妻に熱愛を注いでゐた。彼は鮮新潑剌たる情愛と、まだあまり人生の粗暴無情な方面に觸れて荒んでゐない性質を以て結婚したのであつた。彼に取つて、この災難は怖ろしいものであつた——一時は彼がそれを凌ぎ得ないかと心配された。悲歎の餘り、惹起された激しい病氣から、いよいよ囘復し始めると、彼は最早思ひ出の纏んだ家庭の中に、低徊してゐるに堪へられなくなつた。できるだけ早く彼は耕作地へ行つて、そこで多忙な事業裡に沒頭することにした。子供はペロネット夫人が無理に世話をするといひ張つたので、折々市へ出掛けて逢ふことにした。しかしマヨットは母と同樣、纎弱であつた。それで、約半年ほどしてから、流行病の季節に當つて、ペロネット夫人はユーマに委ねて田舍の親許へ送つた方が得策と決めた。アンス・マリーヌは植民地の內で、最も健康な場所の一つとして知られてゐた。して、子供はそこで段々元氣になつた——丁度合羞草が暑い海風で强靱になる如く。

二

サン・ピエール市から山を越えて、アンス・マリーヌの耕地——以前デリヴィエール家

が所有してゐた――へ行くには、長い時間、馬に乘らねばならぬ。しかし熱帶の太陽の下、鞍上六時間の疲勞も、幾多道中の勝景奇觀に心を惹かれ易い人に取つては、さほどに感じられないだらう。時としては、道は殆ど常に巨峰の頂を蔽ふ白雲へまでも上つて行く――時としては、原始林の欝蒼たる薄明裡を通じて下つて行く――時としては、奇形異色の山山で圍まれた大深谷を瞰下する――時としては、甘蔗で蔽はれた、うねうねした土地の上を迂餘曲折して行く。その一望黃色な高原の向うには、殆ど紫色と思はれる海の、霞める水平線が見える。

恐らくは、道中幾時間も、旅人の目に動いて見えるものは、ただ木の葉とその影の動くのみだらう――聞えるものは、ただ彼の乘馬の蹄音のみだらう――或は沙羅木の蔽へる綠色の谷の緣から、名も知れぬ鳥の笛のやうな、長い、低い聲が聞えるのみだらう。しかし早晩、道の曲がつた處で、更に人間的興味あるものに遭遇するだらう――異國的魅惑に滿ちた生ける事件、卽ちココ耕作地の產物を頭上に載せて市場へ運んで行く、若い黑人娘の一隊とか、パンの木の果實を驚くばかり澤山脊負つて、走つて通り過ぎる黑人など。

恐らくは、一隊の黑人がディアブ――きいきいいふ音を發する軸をもつた、低い㨂疊な車――の上へ、もはや中を空虛にして、獨木舟の形に作つた護謨樹を積んで、海岸の方へ

曳いて行くのを旅人は見るだらう。一同力を協せて、車の後から押し、前からは曳いて行く。同時に、一人の鼓手は、一同の歌――『ボム！チ・カノー！――アレ・シャーセ！――メーチー・ヴキニー！――ボム！チチカノー！……』――の調子に合はせて、未成の小舟の底を叩く。

また恐らくは一隊の樵夫が、新たに伐り倒した木を路傍で挽いて、板を作るのに出逢ふだらう。木の名はわからないが、木髓は鬱金色又は朱色を呈してゐる。巖疊な材木の枠臺に載せて、三人がかりで一個の長い鋸を使つて――一人は上から、二人は下から――いづれも皆シャツを脱いで働いてゐる。上の男の胴は橙黄色で、下の挽手の一人は肉桂色で、他の一人は漆黑に光つてゐる。皆彫像のやうな筋肉だ。して、挽き乍ら歌ふ――

アイーエ！ドス・カレー！
　　アイーエ！
アイーエ！ドス・カレー！
アイーエ・シイエ・ボア、
　　アイーエ！
プウ・ヌ・アレー……

かやうな事件は、長い降り道になつてくると、段々稀れになつて、甘蔗園やココ栽培地を通過し、林丘から彼方の海へと下りると、涼陰を後にして、熱日に曝された野原に馬を打たせて行くことになる。しかし非常な平靜は、人を撫て劬はる如く、一望開豁の壯觀は、人間の活動が見受けられないのを埋め合はせに慰めとなる。旅人の背後に、北に、南に、圓丘が黄色の甘蔗の蜿蜒起伏せる野の上に聳えてゐる——して、圓丘の向うの方には、全部青紫色の鋭峰がぬつと浮かんで——それから、高く青紫色の上に、色の一層薄い尖頂や鋸歯狀の山脈が、疊々と渦卷いて、幻の青や眞珠色を帶びてゐる。前面には、數哩も續いた黄色の野の上に、遠く半月形の海が、空の方へ消えゆく乳光色の帶の如き水平線の下を紫色に染めてゐる。して、强い風が旅人の顏を眞正面から吹きつける。騎行をつづけて行くと、時としては低い廣い丘を上り、時としては高原を越え、最も多くは幅の廣い阪を下つて——海は或は隱れ或は現はれつゝ——本街道を離れて、遂に以前は丘岡によつて見えなかつた道に沿つて行く。これは耕地の道路で、椰子の樹が路傍を劃してゐる。左右の眺望を遮る甘蔗の間を長く迂曲して行くと、世界中最も美しい谷の一つに達する。少くとも旅人が或る圓丘の端に馬を停めて、柔かな皺を刻んだ丘が、殆ど完全な半圓を描いて、海

に向つて開展してゐるのや、海の泡の線は、左右二個の綠峰間に連らなる、一帶の黑檀色の濱邊の上に、雲の絲が震へてゐる如く延びてゐるのや、眼下に渺茫と黃金色の甘蔗が連らなつてゐるのや、またその間に通ずる川は、川緣に竹藪が生え、段々擴がり、寄せては返す白浪へ達して行くのや、水蒸氣のために青味を帶びた森陰の柔らかさや、銀を碎く瀑布に日光のちらちらするのや、最も向うの方には、水天相觸れてゐるのを賞する時、かく思ふてあらう。最後に彼は眼下の岡の上に、椰子樹の森の中に耕地の家屋を認めるだらう——轟々たる水車と高い煙突を有する、黃色に塗つた長い水車小屋——製糖所——小さな庭にはバナナの葉がひらひらしてゐる葺[譯者註]屋根の小屋の聚落——風と地震に抵抗するやうに建てた、畠主の一階造りの邸宅——監督人の小邸——颶[譯者註]風避難所——それから、その小植民地への向うの方の入口に立つ高い木造の十字架の白い影法師。

譯者註　熱帶地方だから、椰子の葉、篠の葉などで葺いてある。

譯者註　西印度群島は暴風雨の被害頗る多い處である。土語でこの颶風をハリカンと呼ぶ。

すべてこれが——濱邊から丘陵の頂に至る全部の谷——嘗てデリヴィエール家の所有てあつた。製造所には約百五十名の人夫がゐた。その後、この耕地は幾たびかの賣買を經て、

クリーオール人並びに外國人によつて開墾され、さまざまの運命に逢つたが、しかも土地そのものは左程の變化なく、殆ど五十年乃至百年前と同じ光景を呈してゐる。

しかしデリヴィエール家が、このアンス・マリーヌをもつてゐた頃の耕地生活と、今日のそれとは大いにその趣を異にしてゐる。この耕地に於ては、その生活が特に族長制度風で、また華やかなものであつた。それは奴隷解放以後のみの植民地を知つてゐる人には、殆ど想像し得られないほどであつた。奴隷輩は宛然、子供のやうに過せられた。奴隷の内で、體罰を加へないでは管理ができないやうな者だけを、止むを得ないから賣るといふのが、この家の傳統的政策であつた。成人には各自勝手に耕すやうな小さな庭を與へ、そのために毎週二回の半休を割り當てた。して、その産物によつて得た金額を、奴隷に貯へさせた。法律上、奴隷は一物をも所有することは出來なかつたが、デリヴィエール家の人夫の中には、主人の奬勵により、相當の金高を剰ますやうになつたものが若干名に及んだ。仕事は歌を歌ひ乍ら、太鼓の音に伴れて營まれた。祭休日があつたり、特別な舞踏の夕もあつた。一年中の大きな催しは、若い畠主の母なる老刀自、デリヴィエール夫人の誕生祝日であつた――其日はすべての奴隷が緣廊に於て夫人から接見を與へられ、一人々々彼女の手に接吻すると、各自その中に一個づつの銀貨を見出すのであつた。しかし旅人に取つ

ては、彼がもし特に歐洲人であつたならば、この植民地の田舍生活の日常茶飯事にさへ、異國的偏奇と無意識的詩趣の横溢せるを見るのが樂しみであつた。

毎日の課程は、兒童輩の足の朝の檢査といふ面白い光景を以て始まつた。彼等は九歳又は十歳までは、ただ遊んで食べる外に殆ど何もしない。亞弗利加人の老女タンガといふ看護婦が、彼等を管理してゐる。彼女はその娘達の補助を得て、兒童輩の質素なる食事を調へ、また彼等の母達が野外に働いてゐる間は、彼等の世話をした。タンガは日出後、間もなく、監督者と相伴つて、彼等を招集し、病舍の日庇の下にある長い板のベンチに列坐せしめる。それから、『足を上げ』といふ命令の下に、彼等は一齊に小さな足を上げて、檢査が始まる。タンガの鋭い眼が蚤の存在を示す小圓形の膨脹を見つける度毎に、その兒は早速治療を受けるため病舍へ送られ、監督者は譴責を與へるためその母の名を記入する。—すべての母は兒童の足の蚤を宵越し打遣つて置いてはいけない。この檢査に當つて、皆くすぐつたり笑つたり叫んだりするので、タンガはいつもそれを終はるまでに數回兒童輩を威嚇せねばならなかつた。

今一つの面白い朝の光景は、農園の種々の產物——ココ、珈琲、肉桂、それから、椰子の實、檬果（マンゴー）、蜜柑、バナナ、蕃茘枝、肉桂林檎——を頭の上に載せて、歌を歌ひ乍ら市場

へ運び行く女や娘の一隊が、出立するのであつた。

それから、殆ど毎週起こつた快事は、護謨樹の舟が出てて行くことであつた。それは一本の巨木から作られた長さ約六十尺の大獨木舟で、舵は無く、兩端とも舳で、いづれの方向へも均しく自在に進むやうになつてゐる。十二人の橈手の座席が備はり、中央には鼓手のために高い座があつて、兩舳に指揮者が居る。ラム酒十二樽と砂糖六七樽を積むことが出來、主としてそれらの物產を、危險なる磯浪に近寄り難いサン・ピエールからの小船へ運搬するために用ひられ、突出せる絕壁が灣を成して深淵を湛へた上へ、特設された傾斜せる船架からやつと海へ卸し得られるのである。荷物が積まれ、漕手が席に著くと、鼓手が合圖の太鼓を打つ。船臺が外づされ、鎖が弛められて、長い舟は海へ射出される——すべての橈は、太鼓又は銅鑼の拍子に合はせて、一齊に水を撃つ。

每日曜の午後、ケラムブルン師が隣村から馬に乘つてきて、黑人の子供等に敎義問答を敎へた。彼が小さな級を集めたのは、大抵製糖所であつた——廣い戶は前後共に開放されて、海風を入れ、日光は床の上に棕櫚の頭の蛛網狀の影を射し込んでゐた。老僧は子供等に彼等の母國語で敎へる方法を知つてゐた——再三再四、クリーオール語の敎義問答を繰返したので、子供等はそれを諳記して、歌尾の疊句の如く吟誦することが出來た。

『クーマン・ウー・カ・クリエ・フキ・ボン・ディエ？』（惡深き神の子を何と稱するか）と師は問を發する。

すると、童音一聲、問とその答を合はせて、鋭く叫ぶ――

『クーマン・ウー・カ・クリエ・フキ・ボン・ディエ？――ヌー・カ・クリエ・リ・ゼヅウ・クリー』（惡深き神の子を何と稱するか、――耶蘇基督と稱す）

『エ・サ・イ・フエー・プウ・ヌー・ザァウト・フキ・ボン・ディエ・ア？』（また、その惡深き神の子なる彼は、我等に何をなせしや）

『エ・サ・イ・フエー・プウ・ヌー・ザァウト・フキ・ボン・ディエ・ア？――リ・バイエ・ブウ・ヌー・バルレ・ダン・ランフェ・リ・バイル・トゥ・サン・リ・プウ・サ』（また、その惡深き神の子なる彼は、我等に何をなせしや――彼は我等の地獄に行かざらむため犠牲となれり。彼はそれがために、一切彼の血を與へたり）

『エ・キレ・プリエ・キ・プリ・メーレ・アダン・トゥ・プリェ・ヌー・カ・フェー？』（また、彼等の唱ふる一切の祈の中、最もよき祈は何ぞ）

『エ・キレ・プリエ・キ・プリ・メーレ・アダン・トゥ・プリェ・ヌー・カ・フェー・？――セ・ノート・ペー・――パス・ゼヅウ・クリー・モントレー・ヌー・リー』（また、

我等の唱ふる一切の祈の中、最もよき祈は何ぞ——そは『主の祈』（譯者註）なり——そは耶蘇基督の教へたまひしものなればなり）と、最後の句だけ、一齊に歌つて答へる。

〔譯者註　『主の祈』は基督の山上垂訓の中にある祈禱。〕

それから、毎日の仕事が終つて、ランビ貝の貝殼が、すべての人々を畠や水車場から呼び集めるため、最後に吹奏されると、古い植民地の習慣なる、晩禱の族長的光景が見られた。主人と監督者は、農園の小村の前に設けれた十字架の側に立つて、すべての人夫の集合を待つてゐると、彼等は銘々一定の糧秣の束を負つてきて、草の包を前に置き、帽子を脱ぐ。して、男女一同跪いて、聲を合はせ、『われ汝を呼ぶ』『聖母マリー』『主の祈』及び『使徒信經』を繰り返す——この時しも星の光は瞬き始めて、黄色の夕陽は峰巒の後に消えて行く。

奴隷達は空が晴れて暖かい夜、夕食の後、老齢のため筋肉勞働を免除された男や女どもの話す物語を聞くために集まることが毎々あつた。それらの珍らしい物語は、讀書を禁ぜられた人民の有する、不文の文學の粹を成すもので、その頃、かゝる口碑文學は、子供にも、成人にも、黒人にも、白人にも娛樂を與へ、加之、植民地の性質の上に一種の顯著な

る影響を及ぼした。保姆（ダア）といふ保姆は、悉く講談家であつた。彼女の物語が、其委任されたる白人の子供心に、始めて空想力を啓發した——恐らくは後になつて教育の作用を以てしても全然除去し難きほどまで、その空想を亞弗利加化して、珍妙不可思議を愛好するに至らしめた。誰れ人もこれらの物語の屢〻くり返さるゝのに飽きなかつた。何故なら、それは名狀し難き技巧を以て語られ、且つ物語毎に伴ふ小歌或は疊句——時としては亞弗利加語で作られ、更に多くは太鼓歌や、カレーンダといふ樂器で歌ふ卽興詩に模した無意味押韻で成れる——は、大音樂家さへも認めるやうな怪奇な魅力を有つてゐたからである。また、其上に是等のクリーオール小話——それが全然亞弗利加産であらうと、或は單に舊世界民謠寓話の亞弗利加的飜案であらうと——に於ては、地方色が顯著であつて、いかなる反譯でも保存し得られぬほど、植民地の思想生活が反映されてゐる。話の舞臺は、西印度の森林丘陵の間、或は時としては、植民地の古い港の最も風變はりな界隈に置かれてゐる。歐洲の傳說の小屋は、竹の壁や、乾した[illegible]の葉で葺いた屋根を有する熱帶の小屋（カース）となり——お伽噺の「眠れる美人（スリーピング・ビューティー）」は、原始的森林の中で必らず逃亡黑人によつて發見され——「シンデレラと畳女」は、粗末に見られぬ衣裳をつけ、美しい混血種の娘となつて現はれ——舊世界神話の仙女は、「慈深き神」或は「處女マリア」に變はり——「青髯」と互

人は惡魔に化し　　惡魔自身も（彼等が欠伸をして咽喉の火を示すときの外は）帆布のズボンとその他特有のものを着けた半裸の西印度耕地の勞働者に酷似してゐたので、容易に識別し難く、赤い髮と深紅の眼、それから素晴らしいバクーエ笠と稱する帽の陰に見える角の根など、かやうな惡魔の象徵を發見するには、鋭い鑑識を要する。

それから『惠深き神』は、最も善良で、親切な白人の老翁として現はされてゐる――それは優しい白髮の農園主で、その住む處はペレー山（譯者註）の上の雲中にありと稱せられ、時々彼の有する群などが天空に見えることもある。また、魔法の力を解き放すのは、村の僧侶であつて、彼は綺麗な不埒な娘の頸に、袈裟を巻きつけて救つてやる……マヨットが物語に興味を感ずる年頃になつてから、ユーマが語つた物語は、大抵このアンス・マリーヌの土地で聞いたのであつた。

譯者註　海拔四四二六呎、マーチニーク島の雲表に聳立し、海までなだらかに傾斜し、山麓の半圓を描いた海頭に、爆發前までは、サン・ピエールの市が連らなつてゐた。

……この谷の農園では、生活はさほど變化なく、百年間も、かやうな風であつた。疑も

なくその中には暗影もあつた――決して吐露されなかつた悲み、如何なる歌ひ女の文句にも上らなかつた事件、野畠は淋しく、歌や笑聲のない日などもあつた……しかし熱帶の太陽は、いつも眩しいばかりの色彩をその上に浴びせ、大きな月はその上に薔薇色の光を作り、して、いつも渺茫たる紫色の海からは、大きな呼吸――始終變はらぬと云はるゝ風、卽ち貿易風の呼吸――が、その上へ淸く暖かく吹いてゐた。

三

朝、ユーマは、いつもマヨットを川へ伴れて行つて、水浴をさせた――そこは淸らかな淺い淵で、竹藪に蔽はれ、澤山珍らしい小魚がゐた。時として夕方、日沒の一時間前、彼女は少女を濱邊へ伴れて行つて、微風を賞し、磯浪の飛び揚がるのを眺めることもあつた。しかし日中暑い間、少女は農園の驚異すべき世界を、ただ家の緣廊から見ることを許されたばかりなので、時間が長く思はれた。附近の畠で太鼓の音に合はせて甘蔗を刈るのや――切り取つた莖を山積した荷車が、軋る音を立てて、去來するのや――砥石で短劍を磨ぐのや　甘蔗汁の心地よい香氣――機械の轟音――水車を回はす小流の騷がしい泡沫――

すべてかやうな農園生活の光景、香氣、音響は、彼女の心に戸外に出てその間に參加しようとの渴望を滿たした。最も多く彼女をして懊惱遣る處なからしめたのは、草地の上て、或は農舍の邊に、奴隷の兒童輩が嬉遊する光景であつた――彼等の面白い遊戲に彼女も加はりたいのてあつた。

『あたしも黑人の少女であつたら、よいわ』と、或る日彼女は玄關から彼等を眺め乍ら云つた。

『まあ！』と、ユーマは喫驚して叫んだ。『何うしてそんなことをおつしやる？』

『さうなれば、お前は、あたしを日向てかけつたり、轉がつたりさせて吳れるだらう』

『でも、日光は黑人の子供の害にはなりませんが、あなたには障はりますから、お孃さま……』

『だからあたしは黑人の少女だつたら、よいと思ふのよ』

『そんなお考へはよくありません』と、ユーマはきびしく斷言した。

『なぜよくないの？』

『いけませんよ。みつともない黑人の少女になりたいなどと……』

『ダアやも黑人の女だよ。黑人の女と同じやうなものだわ。でも、ダアやは少しもみつ

ともなくないわ。お前は美しいのよ。チョコレートのやうだね』

『クリームのやうてしたら、もつと美しいてはありませんか？』

『いえ、あたしはクリームよりかチョコレートの方が好きだ……一つお話をして頂戴、ダアや』

話を聞かせることが、彼女を靜肅にしておく唯一の途てあつた。彼女は四歲になつた。して、物語に對する異常な熱情を有するやうになつた。天へまで成長して行つた、魔力を有するモンタラといふ蜜柑の木の話――鬼と結婚した、マザリン・グキンといふ高慢な娘の話――羽毛に幽冥界の色彩を帶び、食べた人の胃のなかで歌をうたひ、それが　また完全な鳥に化するゾンビといふ鳥の話――聖母を教母に持つたラ・ベルの話――惡魔の流儀によつて胡弓を彈ずる事を習つた。ピエ・チク・アの話――嘗て世界中に唯一つしかない太鼓をもつてゐて、『惠深き神』が道普請をする場合、黑人共は太鼓が無くては働けないと云つたけれども、それを貸すことを欲しなかつた蜂鳥コリブリの話――鬼の背に坐つて、起きることが出來ないので、その母は五十人の大工を雇つて、夜半までに、その上へ家を

譯者註　熱帶地方の產で、ぶんぶん音をたてて飛び、鳥類中最小のもの。

建ててやらねばならなかつた貪慾な女兒、ナニー・ロセットの話――森の中で蝸牛を炙つてゐる老盲鬼を發見し、老鬼の瓢簞から食物を盗んだが、それが見附かつたため、老鬼を家へ運んで歸つて、永久に養つてやらねばならなかつたイエーの不思議な話――是等の話、また幾多これに類した話は、もはや小さなマヨットに話されてしまつて、その結果、更に他の物語に對する嗜慾を鼓舞したのであつた。假令これらの物語が、彼女の農園滯留中の最大娯樂とはならなかつたにしても、それは少くともすべて彼女の他の快興に味を加へ色彩を施し――現實の周邊に、心地よき想像的雰圍氣を開展し――無生物に賦與するに架空的人格を以てし――暗影裡にゾンビ鳥を群がらせ――叢林、樹木、岩石には言葉を語らせた……甘蔗さへも、年老いて囁き聲をする免役の奴隷バボーのやうに、シュウワ、シュウワといふ音を立てて彼女に物語をした。農園のあらゆる住民――一番小さな黒人の子供から丈高いガブリエル、卽ち總員の指揮者ガブウに至るまで――は、彼女に取つては物語の中の人物を代表した。また、彼女がユーマと朝の散歩に行つた丘や濱邊や峽谷の一つ一つの地點は、ありさうにもない挿話の舞臺を提供した。

『マヨットさん！』と、ユーマは叫んだ。『物語は晝間致すものではありません。晝間

お話をしますと、夜分ゾンビを見ると申しますから』
『いえ、ダアや……一つお話をして頂戴…　あたし怖くないのよ』
『まあ！嘘を……あなたはお怖くていらつしやいます——ゾンビを大變お怖くていらつしやいます。それに、もしお話を致しますと、今晩ゾンビを御覧になりますのよ』
『いえ、ダアや、お話をして頂戴』
『今夜私をお起こしになつて、ゾンビが見えるとおつしやりませんてせうね？』
『いえ、ダアや——わたし約束するわ』
『では、今度だけですよ』と、ユーマは云つて、クリーオール人の講談家が準備の出來たことを知らせる傳統的合圖の『ボボンヌ・フォア？』といふ言葉を發した。
『面白いお話だよ！』と、嬉しさうに少女は叫んだ。して、ユーマは始めた——

ケレマン婆

むかしむかし、年取つた婆さんがゐました。みんなから魔法遣ひで、惡魔の親類だと謂はれてゐました。それから、いろんな惡るい噂は、大抵その通り眞實でした。
或る日、可哀さうな少女が森の中で迷ひ子になりました。澤山歩いた後に、もう歩くことの出

來ないやうになつてから、地上に坐つて、泣き出しました。長いこと長いこと泣きました。

ぐるりは、樹木やライアナ（攀援莖）ばかりで、外には何もなく、地面は滑つこい緑色の木の根で蔽はれてゐました。樹木は高く聳え、ライアナがその間に絡んで、光線を洩らさないほどでした。少女は大森林（グラン・ボア）――蛇の群がり住む大森林の中で、道を失つたのでした。

少女がそこに坐つて泣いてゐますと、不意に、極近い處で、不思議な音が聞えました――歌の聲と舞踏の音でした。

彼女は立ち上がつて、音の聞える方へあるいて行きました。木の間を通して見えたのは、あの世間で噂の高い老婆が、箒に跨り乍ら、數多の蛇や大きな醜い蟾蜍と輪を作つて、ぐるぐる回つて踊つてゐるのでした。して、彼等はみんな歌つてゐました――

キングエ、キングエ、
ヴォンヴォン、マラト、ヴローム、ヴォーム！
チャンビ、キングエ、トゥ、ガレ、
ゾー、ガレ、ヴローム！

少女は喫驚して、ぼんやり其處に立つたまゝ、最早泣くことさへも出來ませんでした。

しかし老婆は木の葉の動くのを見つけたのでした。そこで、彼女の滿身に炎を燃え立たせ乍ら、やつて來て、少女に尋ねました――

『木の下影でお前は何をしてゐる？』

『をばさん、わたしは道に迷ひましたのです』

『では、お前は是非私の内へきてお呉れ……お前は機會があれば、私を釋き、弛め、亡ぼすことが出來るかも知れん』

少女は老婆の言つたことを、全部はわかりませんでした。それはこの惡るい老女はただ魔法の道ひだけの知つてゐることをいつてゐましたから。

老婆の家へ達するまでに、可哀さうにも、少女は非常に疲れました。彼女に魔女が椅子に使つてゐる瓢箪の上に腰をおろしました。それから、彼女は老婆が護謨の松把で――それは拝香を燻らすやうでした――土床の上に二つの火を起こすのを見ました。一方の火の上に、老婆はマンマンシュウ、カマニオック、薯蕷、クリストフォン、バナナ、茄子その他、幾多の名も知れぬ草を入れた大鍋をかけ、他方の火の上では、蟾蜍と穴蜥蜴を炙り始めました。

正午になつて、老婆は一切のものを平氣で鵜呑みにしました。それから、餓死せんばかりになつた少女を眺めて、申し渡しました――

『私は何といふ名であるか。それをお前が告げ得るまでは、何も食べるものを與へないから』……さう言つて、老婆は少女を獨りぼつちにしたまゝ、去つて行きました。

少女は啜り泣きを始めました。すると、突然、何か身體に觸れるものを感じました。それは大

きな蛇でした――これまで見たことのないほど大きな蛇でした。殆ど死なんばかりに喫驚して、わつと叫びました――

『オーティ、パパ、モアン？――オーティ、マンマン、モアン？ラティトーレ、ケ、マンゼー、モアン！』

しかし、蛇は少しも害をしませんでした。ただ彼女の肩にやさしく頭をなすつて、歌ひました――

『ベネメー、ベネペー、――タンブウ、ベライ！イシユ、バクートゥメ、タンブウ、ベライ！』

少女は一層聲をあげて叫びました。

『オーティ、パパ、モアン？オーティマンマン、モアン？ラティトーレ、ケ、マンゼー、モアン！』

が、蛇はまだ彼女にやさしく頭をなすりつけて、静かに歌ひました――

『ベネメー、ベネペー、――タンブウ、ベライ！イシユ、バクートゥメ、タンブウ、ベライ！』

それから、彼女が幾らか恐れなくなつたのを見て、蛇は少女の耳元に近く頭をもたげて、何かをささやきました。

それを聞くや否や、彼女は家から駈け出して、また森の中へ入り込みました。そこで彼女は出逢ふ動物毎に老魔女の名を尋ねました。

彼女は一切の四足獸に尋ねました――彼女は一切の蜥蜴と鳥類に尋ねました。しかし彼等は知つてゐませんでした。

彼女は大きな川へ行つて、一切の魚に聞いてみました。魚は一匹づつ皆知らないと答へました。が、芭蕉の實のやうに黄色の川蟹が知つてゐました。川蟹が世界中でその名を知つてゐる只だ獨りの動物でした。その名は『ケレマン婆』といふのでした。

そこで彼女は一所懸命で家へ走つて歸りました。彼女の小さな胃袋は痛んできて、苦しくてたまりませんでした。老婆はもはや家に歸つてゐて、マグニオックをけづつて、粉とカッサヴをこしらへる處でした……少女は近寄つて、いひました。

『ケレマン婆、わたしに食べさせておくれ』

ぴかつと二個の閃光が老婆の眼から飛んで出ました。老婆は非常にびつくりして、鍋を載せかけてゐた鐵鑛にぶつつかつて、殆ど頭を碎くところでした。

『お前は勝つたのだ!』と、老婆は叫びました。『一切のものを取つてよろしい!何でも食べなさい――この家一切のものはお前のものだから』

それから、老婆は火藥の閃きのやうな速さで、戸口から飛んで出ました。森や野の中を飛んで

行くやうに見えました。……川へ一直線に走つて行きました――それは悪魔が彼女に與へた名を葬つて置いたのは、河床の下の深い處でしたから。彼女は土手の上に立つて、歌ひました――

『鮨、鮨！――私の名がケレマン婆だと告げたのは、お前であつたか？』

すると、川の黒い石のやうに黒い鮨は、頭をもたげて叫びました――

『いえ、をばさん！いえ、をばさん！あなたの名がケレマン婆さんだと申したものは、私ではありません』

『チチリ、チチリ！――私の名がケレマン婆だと告げたのは、お前達の中のものではなかつたか？』

すると、透明な小動物のチチリは、石に縋りつき乍ら、背鰭を合はせて答へました――

『いえ、をばさん！いえ、をばさん！あなたの名がケレマン婆さんだと申したものは、私達の中には居りません』

『川鰕、川鰕！――私の名がケレマン婆だと告げたのは、お前であつたか？』

すると、川の大きな鰕は頭と鋏をもたげて答へました――

『いえ、おばさん！いえ、おばさん！あなたの名がケレマン婆さんたと申したものは、私ではありません』

『蝌斗、蝌斗！私の名がケレマン婆だと告げたのは、お前であつたか？』

すると、鐵鑛にくつついてゐて、鐵鑛のやうな灰色の蝌斗は答へました――
『いいえ、をばさん！いいえ、をばさん！あなたの名がケレマン婆さんだと申したものは、私ではありません』
『山鼠、山鼠！私の名がケレマン婆だと告げたのは、お前であつたか？』
すると、岩陰に眠つてゐる、懶けものの山鼠が目を醒まして、起き上がつて答へました――
『いいえ、をばさん！いいえ、をばさん！あなたの名がケレマン婆さんだと申したものは、私ではありません』
『マタヴァレ、マタヴァレ！私の名がケレマン婆だと告げたのは、お前であつたか？』
すると、日光が鱗に觸れる時、銅のやうに閃めくきらきらしたマタヴァレは口を開けて答へました――
『いいえ、をばさん！いいえ、をばさん！私はあなたの名がケレマン婆さんだとは決して申しませんでした』
『ミレー！ボーク！ビスケツト！ザングヰ！ザビタン！私の名がケレマン婆だと告げたのは、お前達の中のものであつたか？』
しかし彼等は皆叫びました――
『いいえ、いいえ、いいえ、をばさん！私共は誰れもあなたの名がケレマン婆さんだと申したものは

ありません』

『川蟹、川蟹！お前であつたか？私の名がケレマン婆だと告げたのは』

すると、川蟹は眼と黄色の鋏をもたげて、絶叫しました――

『さうだ、老ぼれの魔女め！さうだ、老ぼれの呪はれ者め！さうだ、私だつたよ、お前の名はケレマン婆だと告げたのは』

老婆がこの言葉をきくや否や、猛烈に地團駄踏みをしましたので、惡魔がその音をききつけて、彼女の足下の大穴を開きました。して、彼女は眞逆さまにその中へ飛び込んでしまひました。すると、土地がその上を蔽ひかくしました。二日經て、そこから棘だらけのアレート・ネーグとい ふ雜草の叢が生えました。

さて、老婆にこんな事の起こつてゐた一方では、蛇は人間に變はつてゐました――それは魔女が或る人を蛇に變へてゐたからでした。この人は少女の手を執つて、その母の許へつれて行きました。

翌日人々が老婆の小屋を探しに行つて見ました。彼等は小屋の中に、死人の骨で滿たされた七個の樽を發見しました。それからまた澤山の金銀をも發見しましたので、少女は大金持ちになり

ました。彼女の結婚のときには、この國始まつての立派な式が擧げられました。

　マヨットがユーマと朝の散歩に毎々河へ行つたことが、この愚かな小話の終りの方の空想的場面となるべき材料を與へたので、彼女はこの話を非常に面白がつて幾たびも繰り返し繰り返しユーマに語らせた。彼女は川鰕が淵の上に頭を出すのを見たことがあつた。手の中へチチリを捕へて持つたこともあつた。鯰や蝌斗やマタヴァレやザビタンや山鼠や川蟹は、一目でわかつてゐた。また痛い經驗で、アレート・ネーグをも知つてゐた。ケレマン婆は怒つたときの老婦人タンガのやうな顔を持つてゐたに相違ないし、また森で迷ひ子になつた少女は、毎度タンガに叱られて、『アイエ・ヤイエ・ヤイエ・ヤイエ・ヤイエ・ヤイエ！』と烈しく泣いた或る黒人の少女のやうな顔であつたらうと、マヨットは想像に描いた。

　しかし彼女の歡喜の最中に、ユーマの警告の思ひ出と共に、微かな恐怖が彼女に起こつてきた。

　『ダアや』と、彼女は臆病げに尋ねた。『わたし今晩ゾンビを見ないだらうね』

　『もうこれからは、晝間お話をおねだりになつてはいけませんよ』と、ユーマは警戒的

にいつた。

『でも、いつておくれよ、今晩わたし見はしないといふこと』

『もし御覧になつたら』と、ユーマは無慈悲に云つた。『私をお呼び下さい！私が去らせて上げますから』

四

その晩ユーマは少女と二人きりでゐた。といふのは、デリヴィエール氏はサント・マリーへ馬で出かけて、留守であつたし、召使の者どもは隣りの建物に住んでゐたから……彼女は少女が叫ぶのを聞いて睡眠を醒まされた――

『ダアや、おゝダアや！』

聖徒の像の前に點じたまゝの小さな燈光は、最早消えてしまつてゐた――幼いマヨットは怖がつてゐた。

ユーマは躁てて起ち上がつて、彼女を劬つて撫でてた。

『おや！この室に何だかゐるのよ、ダアや！』と、少女はいつた。少女はこつそりした

物音を耳にしたのであつた。

「いえ、お孃さま、あなたは夢をみていらつしたのです……ダアやが燈を點してあげませう」

ユーマは寢室用の小卓の上にマッチを探つてみた――見つからなかつた――隣りの客室に殘して置いたことを思ひ出した――戶の方へ進んで行つた――して、彼女の片足は不意に或るものを踏んだので、彼女のあらゆる血管に冷たい激動が走つた――何となくねばねばした、冷たい、生きてゐるもの！卽座に彼女はその柔軟輕快な、強い身體の全重量をその足――左足――に打ち込んだ。どういふ理由でさうしたのか、彼女にはわからなかつた――恐らくはその衝動は本能的であつたらう。彼女の蹠の蹠下で、彼女が踏み潰さうと努めた冷血動物は、突然彼女を殆ど擲げ倒さんばかりの力を發して跳いた。して、同じ瞬間に、彼女は何か或るものが、彼女の踝の周はりを、それから膝の上を卷いて、踵から股まで碎くやうな力で、肉を纏繞するのを感じた……蛇の彎曲を！

「タンブウ！」と、彼女は齒を喰ひしばつて呟いた。して、彼女の筋肉を固めて、とぐろ卷きの緊まつてくるのに抵抗し、足の壓力を强めて目に見えぬ敵を踏みつけた……靴のために畸形化されない混血種の足には、攫握力が保存されてゐて、手の如く握りしめるこ

とができる――動物が逃げようと、のたくり廻つても駄目であつた。もはや寒い戰慄は去つてしまつて、ユーマはただ決心の靜かな憤怒を感ずるのみであつた。半野蠻人種に於ける如く、彼女に於ても、恐怖心は神經的驚愕の最初の瞬間以後に、存續することは殆ど無かつた。彼女は靜かに少女に呼びかけた。

『お孃さま』

『ダアや』

『私が申上げるまで動いてはいけませんよ。寢床にぢつとしてゐらつしやい。室内に一匹の動物がゐますから』

『アイエ・アイエ！』と、駭いた少女は啜り泣きをした。『ダアや、何？』

『怖れるに及びません。私が捉へてゐますから、あなたがお起きなさらねば、咬むことはできませぬ。私はガブリエルを呼びませうよ。動いてはいけないのですよ、お孃さま』

して、ユーマは彼女の澄んだ聲に全力をこめて呼んだ――

『助けて！助けて！ガブウさん、來て下さい！』

『何？何がゐるの、ダアや』と、少女は咽んだ。

『さう泣いてはいけません。お泣きになると、私は怒りますよ。暗いから見える譯が無

いのですから……』

彼女は再三再四叫んで救助を求めた……南無三！動物の力の强いこと！とぐろを卷き緊める壓力は、痺れるやうな痛苦となつた。流石に彼女の力も、最早この頑固な、氷の如き、次第に加つてくる緊縮の下に、弱り始めてゐた。この上にまた痙攣が手傳つてきたらば、どうしよう？……それとも、この奇異な、ちくちく刺すやうな痛みと、わなわな身體の顫ふのは、血管へ毒が入つたのだらうか？……彼女は身を刺されたやうには覺えなかつた――が、僅々先月のこと、農園の人夫が暗い處で知らずに咬まれて、しかも、たうとう助からなかつた……『おーい！ガブウさん！』……離れ座敷の召使達さへも熟睡して死人のやうであつた。それから、もし彼女の警告に從はないで、マヨットが寢床を離れたら、どうしよう？……

『おや！皆がくるわよ、ダアや』と、マヨットが叫んだ。『ガブウがくるのよ！』彼女は條板のついた鎧戸を通して、ガブウの提燈が閃めくのを見たのであつた。『しかし戶に錠が下ろしてあるわ、ダアや』

『寢床にぢつとしてゐるのですよ、お孃さん！動くと、咬みますから』客室は人聲と跫音で滿たされた。すると、寢室の戶を押す音がした。

『錠が下ろしてありますよ』と、ユーマが呼びかけた。『そこを壊しなさい！戸を破つて入つて下さい！私は動けないのですから』

……めりめりと砕ける音！室は澤山の提燈の光で輝いた。して、ユーマは動物の蒼白な咽喉が、彼女の足の下に踏まれてゐるのを見た——忌まはしい頭は、彼女の踵の邊で烈しくもがいてゐても駄目であつた。

『バ・ブウエネ・ピエス！』と、指揮者の聲が叫んだ。『ぢつと動かずにゐるのだよ！必死になつて、そこにそのまゝ、ぢつとしてゐて呉れ！』

彼女は立像のやうに立つてゐた。ガブリエルは拔き身の短劍を提げて、彼女の側にゐた。すると、劍光一閃、切りはなされた頭が、腰板の方へ飛ぶのを彼女は見た。して、それはとぐろまきは、ぐつたり弛んで落ちた。ユーマが足をもたげると、蛇の胴體は床板を打つて、口を廣く開いたまゝ壁際へ落ちて——眼はまだ炭の火花の如く燃えてゐた。同時に、とぐろまきは、ぐつたり弛んで落ちた。ユーマが足をもたげると、蛇の胴體は床板を打つて、捻れて、頭と結合しようとするかの如く、這はうと努めた——短劍數下、撃たれて、切斷された胴片は、しかも一つ一つうごめいてゐた。

『お前怪我しなかつたか』と、親切な聲が尋ねた——デリヴィエール氏の聲であつた。彼は一切のことを目撃してゐたのであつた。

『御心配に及びません』と、彼女は足を見ながら答へた。しかし彼女は、まだ自分の様子を知らなかつた。主人は彼女を椅子へ導き、跪いて、自身で調べた。一方、マヨットはユーマの頸に攀ぢ上つて、すがりついて、接吻して、泣いた。『ダアやを咬んだの？蛇が咬んだの？』……『いえ、お嬢さま、いえ、御心配には及びません』彼女は覺えず眞實を語つてゐた。蛇は結局その毒牙を使ふことが出來ないのであつた。しかしその卷いた痕は、宛然烙印を施したやうに、滑らかな赤い皮膚の上に殘つてゐた……ガブリエルは短劍を捨てて、彼の腰の周はりの長い布片をほどいて、繃帶を作らうとした。彼は農園の外科助手であつた。

『それに及ばない。咬まれてゐないから』と、デリヴィエール氏がいつた。

ガブリエルは驚いて、啞然としてゐた。

頓て、室内は武器を携へた農園の人夫で滿たされ、感歎の叫びが喧囂を極めた……『まあ！何といふ蛇だらう！』『ミ・テート・ラ・カ・レ・モーデ・トウデユゥ！』『セ・ギアブ・メーム』……しかも長さ殆ど六尺に餘る蛇！誰れもかやうな天晴れの技倆を話に聞いたこともなかつた。ユーマが頗る簡單に、また落ち着いて、事件の始末を語つたとき、一同は眞に打たれて鎮まり返つてゐた。その靜肅は指揮者ガブリエルの荒い低音で始めて

破られた。『何といふ勇ましさ！大膽さ！何といふ嚴しさ！』と、彼は叫んだ……黑人が勇氣の形容に使ふ最も强い言葉の『嚴しさ』といふ方言には、一種異樣な敬虔的な意義が保たれてゐる――近代英語で、それを藝術と眞理に適用する場合、幾分その意義が殘つてゐる。現今クリーオール人は嘲弄の場合の外は、滅多にそれを使はないが、ガブリエルは覺えず知らず痛切にも、この語を吐いたのであつた。して、デリヴィエール氏もその語を稱揚した。

マヨットは泣いて、保姆に愛撫を浴びせかけ、父に言ひ譯をした。彼は微笑んで、ユーマの額に接吻を與へた。

『これはみなわたしが惡るかつたのです』と、マヨットは、再び咽び出しながら云つた。『わたしが晝間ダアやにお話をさせたからなのです』

しかしその蛇はゾンビではなかつた。人々はその這つた痕を辿つて行つて、客間の側棚の下に、鼠が板を齧じつてあけた穴を發見した。

五

その晩から、ユーマはアンス・マリーヌ農園に於て一種崇拜の目標となつた――いかなる性質も、肉體的勇氣ほど黒人の歎賞を博するものはない。製造所のもの全部が、彼女に對して殆ど拜物的尊敬を示し始めた。彼女の勇壯は、彼女の都會風の樣子と生來の無口が激發してゐた、つまらない嫌惡心を征服し、また新參者によつて地位を奪はれたと思つてゐる主人の家の召使共の卑劣な嫉妬心を敢無くも破碎し了つた。彼等は今や汲々として彼女の厚意を占め、彼女の微笑を獲ようと努めるのみてあつた――農園は彼女を誇りとした。附近の耕地の奴隷に對して、彼女の豪膽を自慢した――人夫達は彼女が通るとき、恰も女主人てあるかのやうに彼女に會釋した。カレーンダ歌の郎吟者は、その歌の中に彼女を讃美した。規律の八釜しい監督者コミール氏でさへ、最早、彼女に挨拶する場合、マフヰイといはないで、マンツェルと呼びかけた。

しかし何よりもひそかにユーマの心を欣ばしめたのは、ガブリエルが彼女に注意を向けてきたことてあつた。彼は急に彼女が好きになつたやうに見えた。農園中最も多忙な身で

あり乍ら、彼は時間を工夫して、かやうな粗野な性質では、殆ど出來さうにも思はれない、いろいろ細やかな親切と慇懃をつくして、彼の情誼を示した。彼は正午の休憩時間と、まだ夜間――清潔と秩序が一切規則通り小屋毎に行はれ、衣服は洗濯され、殘滓は捨てられてゐるかを調べるため、夜ごとの巡囘をする前後――に、彼女と逢ふ機會を作つた。彼の訪問は當然短かつた――また奇妙なほど無言であつた。直接に質問を受けるか、或はマヨットにねだられ、彼女を膝に載せて、たは言に答へる時のほか、彼は滅多に語らなかつた。大抵は單にユーマの搖り椅子に近く、緣廊に腰をおろして、彼女が少女と喋つたり、或は物語を語つたりするのを聽いてゐた――彼女の方へ顏を向けることさへ稀で、各小屋の騷騷しい生活情態に、意を注いでゐるやうに見えた。しかし殆ど來る度毎に、何かを少女に持つてきた――少女がそれをダアに分配するのを知つてゐたから。それは彼の庭から取つてきた果實であつた。例へば、一房のフィーグ――長二吋もない小さな食後用のバナナ、ザブリコ（熱帶の杏）――昔のヘェーチー島の土人が、幽靈の食糧として尊んでゐた珍果。巨大な梅の實――最大の蕪菁ほど太く、麝香を含んだ果肉で、核は家鴨の卵位に大きなもの。或は蜜柑の重く垂れた芳香ある枝や、或はクリーオールの傳說によれば、イヴが蛇に誘はれて食べたといふ、甘味津々たる淡紅色の果肉を有し、南瓜よりも巨大なる一種の太

い蜜柑を齎すこともあつた、……或る日――マヨットの誕生の祝日――ガブリエルは非常に綺麗な贈物を呉れた。竹の條片と攀援莖を用ひて、自身で編んだ籠に、農園の産物の殆どあらゆる見本を滿載したものであつた。その中には、美しい小さな角砂糖――チョコレートの小條を包んだもの――褐色の砂糖を滿たせる半瓢箪――一罎の精製糖蜜――蒸した玉蜀黍に甘い味をつけて、バリジエの葉に包んで、蔓草の莖で束ねたもの――削りおろしたココを糖液に漬けたもの――シャンベリー籐を籐の葉で結んだ立派な束などがあつた。……また或る日、ユーマが少女を朝の水浴に川へ伴れて行つた時、小さな淵の傍の堤上に、背と座席に割り竹を用ひ、ポンミエ・ローズの長い硬い幹で作つた、幅の廣い立派な田園風の長椅子が設けてあるのを見出した。ガブリエルは夜間それを製作して、ユーマに一驚を喫せしめるため、味爽前に川邊へ運んで置いたのであつた。

ガブリエルの訪問は無言であつたが、ユーマの身の上に一種の影響を與へ始めた。彼女はその訪問に云ひ難き快樂を感じて、我れ知らず熱心に、それを待つやうになつた――彼が來なかつた場合は何となく淋しくさへ覺えた。しかも案外長く彼に逢はなかつた後でも、彼女は決して彼の訪問し得なかつた譯を尋ねたことはなかつた――彼女は彼の冷淡を恐れるといふことを、彼女自身の心にさへも承認したくはなかつた。また彼の方でも決して辯

明を與へなかつた。この奇異な性質の兩人は、言葉なくして互に理解し合つた――啞のやうな、原始的な、半野蠻風に、相互を牽引し制馭した。

或る日の午後、彼は立派なサポタといふ果實を持つてきた――この果皮の黑く滑らかに光つた風趣を、クリーオール人の想像力は混血美人に見立ててゐる。その扁平な黑い種子の中には、核の兩半部の界に、一枚の薄膜がある――乳皮の如く、脆くて、心臟形をしてゐる――それを破らないで外づすのには、巧妙な手練が要るので、戀人同志は愛情の試金石として、互にその手練を競ふことがある。

『マヨットさん、あなたが私を愛してゐらつしやるか、どうか知りたいものです』と、ユーマは二人で果實を食べた後にいつた……彼女は齒間で種子の堅い殼を割つた――それから薄膜を取りのけやうとして、それを破つた。

『まあ、ダアや！』と、少女は叫んだ。『それは間違つてゐるわ！わたしお前を愛してゐるもの……』

『あなたは少しも愛して下さらないのです』と、ユーマは少女を揶揄し乍らいつた。

しかしガブリエルが一つの種子を求めたので、ユーマは彼に一個を與へた。彼の指は硬く、荒々しいものであつたが、彼は完全に小さな心臟形を取り出した。して、それをマヨ

ットに與へた。

『ダアはあなたよりも、私の方をもつと愛してゐますよ』と、彼は意地惡るげにいつた。

『さうではありません！いえ、嘘です、お孃さま』と、ユーマは少女に斷言した。しかし彼女はそのいつたことに對して、自身に確信を有たなかつた。

甘蔗刈取の季節が終はつてから、ガブリエルは或る休日の朝、許可を求めて、ラ・トリニテの町へ出かけて行つた。夕方彼の歸つてきたのは、彼が平常若いカプレス種の女の緣廊に居るのを見出す時刻よりは遲かつた。しかし彼女はまだそこにゐた。彼が近寄るのを見て、彼女は兩腕に眠れる少女を抱き乍ら起ちあがつて、彼女の指を脣邊へもたげた。譯者註

譯者註　いふまでもなく、子供の眠を醒まさないやう、靜かにせよとの合圖。

『クキンベ！』と、ガブリエルは囁いて、ユーマの掌中へ、薄葉で包んだ、扁平て、方形のものをそつと入れた。それから、一言も發しないで、彼の宿舍の方へ濶歩して去つた。

マヨットを寢床に入れてから、ユーマはその包を調べて見た……小さな厚紙函であつた。その中に淡紅色の綿を敷いた上に、二個の大きな輕やかな無地の金製の環が燦然と輝いて

ゐた――植民地の鍛冶屋のみが造るやうな野蠻的の耳環であるが、有色人種の服裝と銅色の皮膚によく適合するのである……ユーマはすでにもつと美しい寶玉類を有つてゐた。しかしガブリエルはこれを求めるためにはるばる三十キロメートルを徒歩したのであつた。

翌朝彼女の窓の邊を通るとき、彼は微笑した。して、彼女の双耳に耳環のきらきらするのを見た。彼女がその贈物を受け納れたことは、無言の間に對する承諾を示したのであつた――この問を發することは、文明國人の躊躇する處であるが、クリーオール人の奴隷は、言葉を用ひずに問ひうるのだ。

六

『何の用だ?』と、デリヴィエール氏は、彼に特別に話したいことがあると願つたガブリエルが、大きな麥稈帽を指間で弄り乍ら、もぢもぢして立つてゐるのに向つていつた。

『御主人』と、彼は臆病げに云ひだした。『私はあなたの保姆を愛します……』

『ユーマか?』と、デリヴィエール氏は愕然として尋ねた。

『さうです、御主人』

『ユーマはお前と結婚を欲してゐるか？』
『さうです、御主人』
暫くの間、デリヴィエール氏は何の返事も出來なかつた。この兩人が結婚することのあらうとは、未だ彼の念頭に上つたこともなかつた。だから、ガブリエルの告白は殆ど彼を愕然たらしめた。指揮者ガブリエルは、たしかにその人種中、肉體的には最も立派な人物の一人であつた――若くて、勤勉て、聰明だ。しかしユーマのやうな育ちの娘に取つては實際粗野な配偶者たるを免れないだらう。彼女もまた奴隷て、敎育は無い。しかし彼女は家庭の訓練を受けてゐるため、彼女の儕輩よりも著しく優れてゐる。またガブリエルよりは遙かに高尚纎細なる道德的性質を有つてゐる……就中、彼女はエーメーの幼年時代の伴侶であつて、それから、後は彼女の召使よりも寧ろ友達であつた。エーメーの感化力は多大なものであつた――エーメーの態度、エーメーの思想が幾分か彼女のものとなつてゐた……否、ペロネツト夫人は決してかゝる結婚を承認しないだらう。考へるだけても、彼女には亂暴殘酷に思はれ、彼女を竦然たらしめるだらう。
『しかしガブリエル』と、彼は遂に答へた。『ユーマは私のものではない。彼女は私の姑のものだよ』

『御主人、私は彼女がペロネット夫人の所有だとは存じてゐます』と、ガブリエルは麥稈帽の縁を更にはげしく廻はし乍らいつた。『しかし御主人が、私のため何とか致して下さるだらうと思つたのです』

農園主はこの暗示に對して微笑を洩らした……從來彼はガブリエルが結婚するやうになりたいものだと、幾たびも彼の希望を告げたことがあつた——ガブリエルが妻の選擇をしたならば、立派な結婚をさせてやると約束までしたのであつた。しかしガブリエルは別段選擇を急ぐやうに見えなかつた。すると、彼はアンス・マリーヌの娘に對しては冷淡であり乍らも、頻りに隣りの耕地へこつそり出かけて行くのであつた。して、デリヴィエール氏はガブリエルが頻繁に訪問する目標の女を發見するため、自身でそこへ行つて見た。して、ガブリエルに愉快なる驚愕を與へようと思つて、彼はその綺麗な娘を千五百フランで購つて、伴れて歸つた。が、彼女がこの農園のものとなつた當日から、ガブリエルは彼女に對して最早何等の注意をも拂はぬやうになつた。心中祕かに主人の餘計な世話燒きを憤つたのであつた。しかしかやうな事件があつたけれども、今や彼に取つては、ユーマを彼のために買ひ取つてくれるやう、デリヴィエール氏に賴むのは、充分當然と考へられた……しかし農園主は怒らなかつた——今回の事件は彼に面白く感じられた。彼は頗るガブリ

エルを重んじ、またよく彼を理解してゐた——彼は自分に抑制を受けることを堪へ得ないのであるが、他に抑制を加へることに於ては、大いにその力を發揮し得る性質である。指揮者としては、彼は無上の適任者であつた。勞働者としては、取り扱ふことが殆ど不可能てあつたであらう。彼のもとの所有者なる貧弱な白人は、彼は『氣むづかしい、度し難き、また險難な』人物だと、明白に斷言して、喜んで彼を賣つた。彼を買ひ取つたド・コミールは、可惜立派な材木が捨てられて、一顧も受けずにゐると看破したのであつた。して、彼は屢〻彼の取引の成功を誇つた。

『ね、お前のために私は彼女を買つてやることが出來ないのだ』と、デリヴィエール氏は情を籠めていつた。『ユーマは賣れないのだ。ペロネット夫人はどんな値段でも彼女を賣ることはない——私にさへ賣らないだらう……明日私は市へ出かけようと思つてゐるから、姑がユーマにお前との結婚を許してくれるか、聞いて見よう。私の力で出來るのは、それだけだ』

ガブリエルは麥稈帽をひねり廻はす事を止めた。暫時默然として眼を投げ落としたなゝ、顏にはありありと險相を浮かべて佇立してゐた。彼はデリヴィエール氏の富と勢力によつてさへ、ユーマの運命が左右され得ないだらうとは、決して考へたことがなかつた。農園

主の斷言は虛僞だといふ邪推が、瞬時彼の胸裡を暗くした。やがて彼は眼を上げ、デリヴィエール氏に辭儀をして、『難有うございました、御主人』と、嗄れ聲で呟いてから引きさがつた。

『誰よりもひどく苦しむのはユーマだらう』と、デリヴィエール氏は考へた。

七

ペロネット夫人の決心は、正しくデリヴィエール氏が豫期した通りであつた。夫人は彼以上に、ユーマの選擇を驚いた――それを單に肉體的、否、夫人の用語によれば、動物的の魅惑に歸し得るのみであつた。しかもこれこそ夫人がユーマのために憂慮してゐた多くの危險のうちで獨得のものであつた。夫人はこの事件に責任あるものとして、婿を咎めることさへも辭せなかつた。して、遂に早速ユーマの都會へ還つてくることを主張した。夫人は他の者をマヨットの保姆にしたくはなかつた。しかしマヨットがアンス・マリーヌに滯留しようと、しまいと、ユーマは還らねばならぬ。要するに、少女も甘蔗の莖を吸つた

り、黒人の子供と遊んだりするよりは、もつと何か大切なことを習ひ始むべき時機となつてゐた――加之、彼女は充分丈夫になつてゐた。また都會は非常に健康的であつた。ユーマは『砲臺山』のデリヴィエール家に依然住みつづけてもよろしいが、彼女に向つて愛を求めた最初の平凡な黒人に心を奪はれるほどうぶな娘は、監視の必要があつた。して、ペロネット夫人は今後最早かゝることの決して起こらないやうにと願つた……デリヴィエール氏は姑の希望に對して少しも反對を挾まなかつた。彼は成るべく早く、自身都會へ歸つてきて、マヨットとその保姆を伴れて歸らうとの意志を述べた。

この決定はユーマに痛烈な打撃を與へ、彼女を茫然自失せしめ、涙さへ出させなかつた。それから急激な苦しみが惹き起こす本能的な、また機械的な憤怒に伴つて、彼女が奴隷である――彼女を撲つた人の意志に抵抗する力のない――といふ事實の充分に鋭い感じが、始めて彼女の念頭を衝いて起こつた。彼女がこれまでに嘗めた一切の失望――彼女が幼兒の折このかた受けた一つ一つの抑制、叱責、拒絶、衝動の壓迫、小さな痛苦――が、悉く彼女の記憶に集まつてきて、それを焦がし、それを黒く汚し、これまでの生涯が不幸であつたといふ迷想と、想像に描いた、長い間の不正に對する烈しい祕かな怒が、胸一杯に溢

れて、彼女の思慮分別と、彼女の訓練された快活なる忍從の習慣を蹂躙し去つた。その瞬間、彼女は殆ど彼女の教母を憎んだ。デリヴィエール氏を憎んだ。一切の人を憎んだ——ガブリエルを除いて。ガブリエルが彼女の生活の範圍內に現はれてからは、彼女の心中に長く抑へつけられてゐたもの——奇異な衝動と神祕な情緒に滿てる、一種の更に暗黑で熱烈な第二の靈魂のやうなもの——が、彼と相呼應せんがため起こつてきて、束縛を打破して、遂に勝を得たのであつた。この性質は野蠻人種のそれであつた。して、彼女の血管の中には、その野蠻人種の血が優勢を占めてゐた。

その性質の一番最初の反抗は、折々祕かに起こる憂鬱の發作に止まつて、それ以上には別に重大の結果を生じなかつた——エーメーは學校へ去つて、ユーマは始めて、その當時繁文縟禮の高い牆壁に圍まれたる生活に引き取られた後、その發作は端を發した。短い演劇季節の夜間と、社交界優秀の士女が集まる舞踏會の折を除いては、クリーオールの貴婦人は、平生教會へ行く外に日曜から日曜へと殆ど家庭にのみ引籠つてゐた。どんな場合にも、商店へ入らないで、如何に些細な買物でも奴隷にさせた。海外から絶えず新鮮の血の注入がなかつたならば、恐らくはこゝの風土は二三代の內に歐洲分子を勦滅したであらう。植民地の白人の女は、かゝる風土によつて元氣を殺がれて、この落ち著いた、華美な蟄居

的生活に何の苦もなく馴れることが出來た。しかしユーマは日光を愛する人種から生まれたのであつた。彼女に與へられた特權、一種の養女として彼女に施された訓練は、取りも直さず彼女の本來の生活を發展させないで、寧ろ狹めることとなつた。田舍に於ては、戸外の娯樂に對する機會は、都會よりも多かつた。また或る種類の形式的束縛からも一層自由であつた。が、田舍に於てさへも、彼女の生活は保姆としての任務のため制限を受けた――幼兒の要求に應ぜねばならない彼女の生活は、自然狹小なる範圍に縮められてしまつた。ユーマはダアとなるには、あまりに若かつた。ダアの身の上には娯樂はなかつた。全然絶對の犧牲を必要とする、かゝる重大の責任は、一般に母となつた經驗を有し、女の自然的運命を果たしたことのある奴隷にのみ委ねられた。しかしユーマは子供時代を脱するや否や、再び、擧動も、考へ方も、また言葉遣ひも子供の通りにせねばならぬ身となつてゐた――彼女自身の子でない子のために。彼女の華やかな青春は、この恆久不斷の抑制に對して默々裡に反抗した。ペロネット夫人が非常に骨折つて彼女の心中に養成した個人的尊嚴といふ念――彼女の階級中で、社交的優越を有するといふ感――にも關らず、彼女に取つては、欣然彼女の位置に換はりたく思ふやうな、他の女達の運命が、却つて羨ましく思はれること、度々であつた。歌をうたひ乍ら日の照つた山路を行く娘、太鼓の音に合は

せて歌ひつゝ農園に働く黒人の女――彼等を眺める場合、ユーマは悲痛な快感を覺えた。彼女は肉體的無爲の倦怠から、非常に惱んだ、――彼女は木陰に住み、搖り椅子に憩ひ、赤ん坊の言葉を喋ることに倦きた――丁度、以前都會にゐた頃、鎖された鎧戸の背後に住み、薄暗い室で刺繍や裁縫をしたり、彼女の理解し得ない會話を聞くのに倦いた如く。しかしかゝる不平の萌した瞬間に、彼女は自身を恩知らずの惡人と判斷した。して、その不平と鬪つて、それを征服したのであつた――ガブリエルが出現するまでは。

ガブリエル！……彼こそは彼女の生命が渴望してゐた、一切のものの滿てる、光明と愉快と音調の新世界を、彼女に對してひらいて吳れたやうに思はれた。彼は何となく空と太陽、川と海の自由――森と野の新鮮なる香氣――朝の長い青い影――熱帶の薔薇色の月の出――歌手の歌――それから、雷の如き太鼓の鼓動につれた椰子樹下の舞踊の樂しさを一身に集めたものゝ如く彼女には思はれた。ガブリエルの沈着て、强く、誠實なこと！あらゆる男の中て、『惠深き神』が彼女のために作り給うた男！奴隸であつても、主人の尊敬を促し得るガブリエル――彼のために、彼女は每夜祈を捧げ、『聖處女』の像前に小さな野花を供へた。彼と共に暮らす場合には、最も賤しい小舍の中でも、彼女は非常に幸福であらう。彼のためには、若し彼女に自由があつたら、欣んで自由を與へるであらう。或は

もし、彼の役に立つなら、彼女の生命さへも……彼女はただ彼のためにのみ、美しくならうと願つた――して、人々は彼女が恰好のよい樹の如く、若い棕櫚の如く美しいと云つた……しかも彼等はそのガブリエルを彼女から奪ひ去らうとしてゐるのだ――彼は彼女に取つてはまだ不足であると併つて（彼の人物を理解してもゐないのに！）――それは彼等がいつまでも彼女を彼等と共に住ませ、いつまでも彼等のために苦しませ、暗黒と沈黙の中に生活させようと欲するからなのだ。しかも彼等は彼女に對して殘酷を行ひ、彼を彼女から奪ひ取る力を有してゐる！世界は全然惡るい――少くとも彼女に對しては惡るい。誰れても彼女を愛してゐたものは、悉く彼女から奪ひ去られた――最初に彼女の母ドゥスリーヌ、次にエーメー・デリヴィエール、それから今度はガブリエル。

デリヴィエール氏が特に彼女を呼んで告げたのは、彼が市から歸つた翌朝であつた。彼女は今しもマヨットに朝の水浴をさせて、少女を伴れて戻つてきたのであつた。彼は親切に云つたのであるが、しかも極めて明白率直に告げた――最早いかなる希望の餘地もないやうに。

長い間、彼女は彼女の室で無言のまゝ、ぢつと身動きもしないでゐた。やがて少女の要

請に應じて、少女と共に緣廊へ出た。空は爽かに晴れて、海はそよそよと微溫い風を吹き送つた。谷から近い方の側の山上では、太鼓の玲瓏たる音と亞弗利加の歌の合唱が響いた。一隊の人夫達が或る圓丘の頂へ新道を作るのであつた。最近の猛雨によつて舊道が洗ひ去られたからである。監督者は新しい線路を測量して、綱を張り渡してその迂餘曲折を表示して置いた。して、人夫達は二列になつて――すべて歌を歌ひつゝ――太鼓の拍子に、すべての鋤や撞槌を合はせ乍ら、徐々と下つてきた。時としては、彼等は鋤を空へ投げ上げて、またそれを捉へたり、或は投げ合つて、それを交換した。それでも、動作の拍子に外づれることはなかつた。そこには若い娘のクリサリーヌが、小さなコップ、水の瓶、リキユー酒の水差しなどを載せた盆を運んで、折々皆に飲料を薦めた――それは仕事が激しかつたから……ユーマは列の先頭に立つ、青い木綿のシャツと、白のズックの股衣を着た丈高い姿を探した。しかしガブリエルは見えなかつた。別の人が彼の代りに、仕事を指揮し、また蛇の見張りをしてゐた――メーリアスといふ黒人。

もう三日すると、彼女はアンス・マリーヌの地を去らねばならない――もはやガブリエルを見る事は出來なくなる……一家はこの一年中最も單調で、且つ最も暑い季節に當つて、單調熱暑の都會へ歸らうとしてゐる……ガブリエルは知つてゐるだらうか？……それとも、

彼は知つてゐるから、そのために人夫達の中に彼が見えないのだらうか?もし彼が知つてゐるなら、彼は彼女と語る機會を工夫するだらうと、彼女は感じた……

丁度この感じが起こつたのと同じ瞬間、ガブリエルは家の前へ現はれた――少女をそのまゝにして置いて、彼の側へ出てくるやう、彼女に合圖した。

彼は彼女の肩の上に愛撫の手をのせかけて、囁いた――

『主人から今朝一切の御話があつた……主人はこゝから、お前を伴れて市の方へ歸るさうだ』

『さうです』と、彼女は悲しげに答へた。『私達は市の方へ歸つてしまうのです』

『いつ?』

『來週の月曜』

『まだ今日は木曜日だ』と、彼は纔な微笑を洩らしていつた……『ね、一度都會の方へ歸つたら最後て、もうあの人達はお前を私に逢はせまい。とても逢はせはしない!さうだ、お前もわかつてゐるだらう!』

『だつて、ガブリエルさん』と、ユーマは息の詰まりさうな聲をしていつた――彼の言

葉が衰頽の調子を帯びてゐたのに、幾らか感情を害されて『私に何うしやうも、方法が無いではありませんか？』

『あるんだよ、方法が』と、殆ど亂暴に、彼は遮つていつた。

不思議がり乍ら、彼女は凝乎と男を眺めた――漠然たる新希望が、彼女の大きな双眸に浮かび出した。

『方法があるのだよ、ね、お前』と、彼は繰り返した。『もしお前が大膽でさへあれば。あれ御覧！』

彼は谷を越え、東北の海上を指した。そこにはぼんやりした美しい姿がぬつと現はれてゐた――最上の好晴にのみ見えうる幻影だ。紫色に染まり行く海洋圏から、（譯者註）ドミニカ島の影法師が、紫石英のやうな空へ高く聳立してゐた――幽靈の如き青紫の峯を戴き、その上には輝ける金毛のやうな雲が渦卷いてゐた。

譯者註　ドミニカ島は、マーチニーク島の北に當たる。英領である。

『ね、一夜の中にだよ！……』と、彼女の顔を見成り乍ら、彼は囁いた。

彼女は彼の意味を捉へ得た……奴隷の足一たび英領の地を踏めば、彼は自由の身となり

得るのだ！
『ガブリエル！』と監督者ド・コミールの聲が呼んだ。
『はい！』と、叫んで彼は答をした……『お前よく考へて置いてお呉れ！』
『ガブリエル！』と、また監督者の聲が叫んだ。
呼び聲の方へ走り乍ら、ガブリエルは『行きますよ！』と、高聲を擧げて答へた。

……彼女がいつもの緣廊の場所へ戾ると、マヨットは黑い小猫と戲れてゐた。少女の笑聲や、小猫が可笑げに戲れた時に、少女が面白がつて、彼女に見せようとして呼ぶ聲も、殆ど彼女の耳に入らなかつた——恰も半ば目が醒めたものの如く、ただ機械的に返事をした。彼女の凝視は、間斷なく水平線のかなた、遠く輝ける幻像に注がれた。美はしい氣體のやうな幻像は、彼女の意志に誘惑を與へた。彼女が注視を續けてゐる內に、それは徐々と透明な青白を帶びてきて——空濶無邊の光の中へ消え始めた。それから、太陽が高く昇つてくると共に、それは不思議に失せてしまつた。ただ殘つたものは、淸らかな色を湛へて島をとりまく海、一點の雲翳なき圓い夏の空だけであつた。……しかしかの輝ける青紫の記憶は、彼女に殘つた——彼女の心の中へ喰ひ込んだ。

彼女はその日、再びガブリエルを見なかつた。彼はわざと彼女を避けてゐるやうに思はれた――彼女に思案の時間を與へるために。

八

ガブリエルの企畫に關し、その實行力を危惧する念は、毫もユーマの心頭に上らなかつた。追蹤と捕獲、その怖ろしい海峽で狂風、或はもつと惡るい颶風に遭ふ事――何となれば、西印度特有の颶風季が始まつたから――などの想像は、彼女にさほどの心配を與へなかつた。彼のため如何なる危險を彼女は冒し得ないだらうか？――何處にまれ、彼と共に居さへすれば、彼女は安全に感じたてあらう。

しかし次第々々に、彼女の空想の興奮は落ち着き出した。他人の意志を破壞して、彼女の欲する一切のものを獲ようとする、餘りにも全く案外な提議は、彼女の猛烈なる失望の情を冷却させた。して、その冷却につれて、彼女の本來の正しい反省力が徐々と歸つてきた。すると、彼女は怖ろしく感じた――彼女の心中に起こつた何となく一種の惡るいもの――彼女はそれを惡るいと悟つた――を怖ろしく感じた。何となれば、劈頭ガブリエルが

提議を發した瞬間に於てさへ、その提議は朧げながらも彼女の良心に打撃を與へたからである――それは彼女の友人を捨て、鄕里を捨て、任務を捨て、――永久に社會の擯斥を受け――彼女に信頼を置けるすべての人々の尊敬を失ふやうになる結果を、幾ら躁急にも、彼女が較量しない以前にさへ、彼女の道義的觀念を竦然たらしめたからである。しかし今や彼女が考へ――篤と考へた時、彼女は恥辱の念が湧きあがつて、彼女の顏がちくちく痛むのを覺えた……

否――否――否！彼女の生涯が悉く不幸てあつたといふのは、事實でなかつた。彼女は幾多の樂しかつた日が、輝ける優しい連鎖となつて、思ひ出に浮かんてくるのを感じた。就中、彼女の幼年時代――本町通りのペロネット夫人邸の大きな庭て、エーメーと共に遊んだ時代を想起した。その美しい、明かるい庭には大きな葉の奇木や、鉢植ゑの棕櫚があつて――そこから眺めると、グロス・ロックからフォン・コレーに至るまて、壯麗雄大な灣が、一望靑い光の中に開展して――船舶は水平線を越えて去來したり、或は睡さうに碇泊したまゝ搖れてゐた。彼等は毎朝その庭て、園亭に住むザノリーと稱する、綠色の小さな蜥蜴に餌を與へた。蜥蜴は投げられたパン屑を食べるため、絡める蔓の綠色の圓屋根を奔下してきた……それから、丈高い若き貴婦人となつても、すべての經驗を共にしたエー

メー――情愛を籠めた臨終の手で彼女の手を握りしめたエーメーを想起した。して、エーメーが引き取る息は、囁いた――『ユーマ、ユーマ！お前わたしの子供を可愛がつてくれるね？――ユーマ、どんなことがあつても、あの子供が小さな内は、見捨てはしないだらうね？――誓つてくれるね、ユーマ……』して、彼女は――誓つたのであつた……

彼女はまたペロネット夫人の顔を見た。その銀髮を束ねた下に、湛へてゐる微笑は、指環に燦めく綺麗な白い手で、彼女の頰が撫でられるのを覺えた頃や、『お前もわたしの娘なのだよ、ね、美しい黑い教子だよ。お前は幸福に相違ない。わたしはお前を幸福にしたいから！』といふ優しい斷言を、彼女がきかせられた時と變はらぬものであつた。しかも、夫人は實際彼女をさうするやうに務め――彼女のために工夫を回らし――彼女のために計畫し――彼女が同階級の他人を羨まないやう、彼女のために多大の出費をしなかつただらうか？……それから、ユーマはあらゆる贈物、新年の意外の進物、不斷の安樂を考へた。彼女はいつも特別の室を有した。その室は園亭を瞰下して、海風に滿ちてゐた――園亭には葡萄蔓やポム・ド・リアーヌの莖が纏つて、蜂鳥は深紅と綠玉に光つて飛び回つてゐた。彼女は普通の下婢のやうに、床に擴げた質素な蒲團の上に臥することを許されなかつた。

彼女の第二の家庭に移つてからも、エーメーのために、彼女はデリヴィエール刀自とそ

の令息から、殆どペロネット家に於けると劣らざる厚遇を受けた。それから、エーメーの死後は、デリヴィエール氏の親切は、父のやうな親切であつた。彼は全然彼女を信頼してゐたから、ガブリエルが頻りに訪ね寄るのさへ彼の日に留まらなかつた。

……すべて是等の人達は、彼女をどう思ふであらうか？誰れに彼女は最も多く負ふ處があるだらうか？最大の恩人は？——彼女が最も長く知つてゐた是等の人達と、洗禮盤の側で彼女に命名した後、自身の娘と一緒に育て上げてくれた親切な夫人であらうか？或は、彼女がただ一季節の間、知つたばかりのガブリエルであらうか？……いや、決して——假令彼のためであつても、是等の人々に背くことは出來ない！——神は決して彼女を宥し給はないだらう！……しかしガブリエルは知らなかつたのだ。もし知つてゐたらば彼は相携へて去ることを彼女に求めなかつたのであらう。

今一度彼女の性質の暗黒方面は抑壓された——その急所へ咽び乍ら引込んだ。殘酷な苦痛は殘つた。しかし彼女はその夜成る可く早くガブリエルを探がして『否』と答へようと、強い決心を抱いて寢に就いた。

それでも翌朝彼女が少女を川へ伴れて行かうとすると、ガブリエルが彼女の側を濶歩して通り過ぎ乍ら、低い急はしい調子で言葉をかけた時、彼女はやゝ意氣沮喪を感じた――『今夕四時に、濱へ來てくれ。そこで出逢はう。獨木舟がラ・トリニテイーへ向けて、荷物を積んで出帆するから』

すると、彼女が一言も答へ得ない内に、彼は去つてしまつた。

九

アンス・マリーヌの谷が面してゐる海岸は、奇異な海岸である――怪奇な岬と岩礁は、怖ろしげな稱呼を帶び、惡魔の名さへ附いてゐるのもある。黑い鐵鑛が高い絶壁を成してゐるが、其上には無數の蔓草が綴り織りを纏ひ、また到る處攀援莖がぶら下がり、黑玉を粉末にしたやうな黑い砂地の上に這つて、濱邊の緣飾をなせる、パタテ・ボ・ランメといふ鮮かな綠色の葛とつなぎ合つてゐる。(其厚い葉は、それを破ると、牛乳の如き白い汁を見せる。して、それは美しい洋紅色で杯狀の花を有つてゐる) 波は非常に長く、非常に太い――耳を聾するばかりの轟音を以て崩れ、幽靈が手を振るやうに泡沫を投げ上げる。

こゝては海はいつも靜穩のことはない。南北ともに、絕壁はたえず微溫い飛沫——煙の如く空に立ち騰る——の溟濛裡に浮かんで見える……昔はさうてなかつたといふクリーオールの傳說がある。或る僧侶が漁師に侮辱されたので、海に向つて黑い僧衣を振つて、永遠不安の呪を放つた。すると、漁船と擴げた網は、漁師達が空しく海の鎭まるを待つてゐる內に、濱邊て朽ちて了つたと云はれてゐる……波の泡の線は年中消えることはない。貿易風の壓迫を受けて、磯浪が烈しくなつたり、衰へたりするにつれ、その線は廣くなつたり狹まくなつたりする。時としては河口より遙かに上流の方を白くする。絕壁の頂に跳び上がる。また全地を振り動かす——たとひ殆ど微風もなく、空に一片の雲が無くても。かゝる時には、遠く水平線に至るまでも、海は瑠璃の如く靑く、鏡の如く滑かであつ。轟音と泡沫は、海岸の沖の方へは擴がらないのだ。これはラズ・ド・マレーと呼ぶ現象で、海がどん底から搖れるのだ。この光景は二日、三日、四日も續くことがある。それから、始まつた時と同樣に、不思議にぱつたり止んでしまふ。

島の東方の耕地に働く人夫に取つては、この荒い海が奴隷と自由の唯一の境界であつた。この海岸にはあまり船はなかつた。——ラ・トリニテイー以北には、安全に船卸しをなしうる地點は殆どなかつた。しかしアンス・マリーヌにはかやうな地點が一つあつた——谷

の南端から深海へ突出せる岬が彎曲して、風下を作つて、一種の天然の入江を成してゐた。獨木舟が太鼓の響につれて進水するのは、そこからであつた。して、一艘の小舟もまたそこの小屋に藏つてあつた――主人の私用のもので、使用されることは稀であつた。ガブリエルはこれを操縱する法をよく知つてゐた。

指定時刻よりも前に、ユーマは濱邊へマヨットをつれてきた。日中の暑さは去つて、強い風は冷たいばかりで、絕壁は影を投じてゐた。こゝの濱遊びは少女に取つて面白かつた。サン・ピエールのグロス・ロック附近へ潮流によつて投げ上げられたやうな綺麗な小貝はなく、また磯浪はあまりに荒くて、彼女の欲する通りに徒涉の樂は得られなかつた。しかしその浪が崩れたり、奔流したりするのを見るのは慰みであつた。して、黑い沙の中には可笑げな黃色の毛深い肢を有する蟹や、穴を掘るため、尾に鋤を有する小さな海うぐひが澤山ゐた。時としては、今しも卵から脫して、水に入らうとする小龜もゐた

やがて子供等――黑いのや、黃いのや、褐色或は赤色――は、タンガの二人の娘、ゾーヌとガンビに引率されて、獨木舟の出帆を見物にきた。彼等は危險のために、餘りに水の深い處へ出ることは許されなかつたが、磯浪の水際て、思ふさま嬉戲することを得た。

彼等は大きな浪が沙の上に彼等を追つ驅けて、小さな裸足の邊で渦を卷いたり、シューと音を立てたりする毎に、一齊に叫んで、跳び上がつた。

すると、荷馬車がラム酒と砂糖を積んで、崖道を進んでくるのが見えた。强い肥えた騾馬に取つても、困難な仕事であつた……ユーマは馭者を助けて、騾馬を激勵するガブリエルの聲を聞いた。

それから、銅像の如く眞裸な、瘠せた褐色の少年が、馬を馳せてやつてきた――鞍を着けずに乘つて疾驅して濱邊へ下つてきた。これは監督者ド・コミールの小さな馬丁で、馬を磯浪に浴せしめるためであつた。少年はまだ子供に過ぎないし、また馬は――ポート・リコ產の黑い牡馬――なかなかの悍馬であつたが、兩者は互によく知り合つてゐた。浪が馬の膝へ達すると、少年は跳び下りて、馬を洗ひ始めた。すると、大きな激浪が碎けて、顫へる毛のやうな泡沫の布の中へ、兩者は殆ど見えないやうに沒してしまつた。馬はそれを好むと見えて、少しも動かなかつた。少年に取つても心配はなかつた――彼は巧妙に泳ぐことが出來た。彼は馬の側で戲れ、撫でたり、頸を抱いたり、水を掛けたりして、大きな碎波がくると、馬の鬣に縋りついた。

『ヨ　カレ！ヨ・カレ！』と、子供等が遂に叫んだ。進水所から太鼓の轟きが、響いて

きたのであつた。荷物は既に舟に積まれ、水夫はその席に著き、鼓手はその臺に坐してゐた。いよいよ船を卸す合圖があつた。すべての人々の眼は振り向いて、舟が水中へ突進するのを見た。して、それが無事に水に達し、縱に搖れ、それから、橈が初めて水中へ入れられると共に落ち着いて、マダム・レザビタンといふ陽氣な曲につれて、航路についた時、誰れも悉く絶叫した。子供等も遊戯を止めて見た――して、崖上からは手を拍つ音や、婦人達の笑聲や、また『左様なら』といふ滑稽じみた叫びが響いた。その内に、長い船は沖の方へ漕いで出てたので、水夫の歌は激浪の音の中に消え、顔も見えなくなつてしまつた。それでも、一二分の間は、太鼓の轟く音は聞えた。しかし船は間もなく長い岬端をめぐつて、南に向つて、眼界から去つた……その日の大事件は終はつたのであつた。

　タンガの二人の娘は、子供の小團體を糾合して、濱を引上げた――磯浪に戯れてゐた少年は、馬背に跳び跨り、馬の方向を直して、――群像のやうに輝き乍ら――風と日光に身を乾すために――また疾驅して谷を上つて行つた。見物人達は崖上から去つた――して、空の荷馬車は、轉々と音を立てて、農園の方へ歸つて行つた……ユーマはまだ躊躇してゐた。それはマヨットに取つては大滿足であつた。少女は椰子の殼――空虚で、皺が寄つて、また長い間、波に飜弄されて黑ずんだ――を發見したので、磯浪にそれをころがして、そ

れがまた――いつも投げ込んだ地點から、少し離れた處へ――投げ上げられてくるのを見て、面白がつてゐた。して、これが非常に氣に入つたので、ガブリエルが急いで彼等の方へ來るのを、彼女は毫も知らなかつた……しかしユーマは進んで彼を迎へた。

彼は兩手に彼女の手を取り、駈つてきた爲め、息せき乍ら云つた。『よろしいか、よく聽いて呉れ。……船は出て行つた。もう私達を追ひかける船はない。お前さへ大膽なら、今夜私達は行ける。……明日は自由になられる――明朝は自由だ』

『まあ！ガブリエルさん……』と、彼女は云ひ始めたが、彼は聽かうとしなかつた。彼は熱心に、早口て、彼の希望と計畫を說いて、喋りつづけたので、彼女は言葉を挾むことは出來なかつた。彼は少額の金を持つてゐる――彼はその用途を知つてゐた。兩人てその島て小さな土地を買はう――（そこは立派な場處て、すべてのものが安價て、また蛇もゐない！）彼は自分の手て、小さな家を建てることも出來る――果樹園を作らう……主人の小舟は彼等の逃亡を待ち受けてゐる――風と海は好都合だ――夜半後までは月は出ないだらう――何等心配することはないのだ。しかも旭日の昇ると共に、彼等は自由の身となるだらう。

彼は彼女に對する愛情――彼等が共に暮らし得る生活――彼が想像してゐる自由――自

由の身と生まれる彼等の子供のことを語つた——それは率直な、力ある勸說であつた。またその詳細を極めてゐたことは、いかにも熱心に、長いこと、彼がその夢を愛撫してゐた證據であつた——彼はその考を、熱帶の蜥蜴の如く、場處に隨つて色を變へるやうに奇異なるクリーオール語によつて、鮮かに想像化してゐた。彼が心中に持つてゐた一切のものを語り盡くすまでは、ユーマは答をすることが出來なかつた。彼女は雙頰に淚を浮かべ乍ら云つた。——

『ガブリエルさん！私は行けませぬ！——もう云つて下さるな。私行けないのです！……』

さう云つて彼女は語を止めた——男の顏に不意の變化を認めて、啞然としたのであつた。彼が彼女の手を放した時、彼の眼中に、これまで彼女が見たことのない表情が現はれた。しかし彼はその眼を彼女には注がなかつた。彼は振り向いて、兩手を拱んで、海の方を凝視した。

彼女はつづけて云つた。『ね、あなたは私に言葉を出させなかつたのです……私はあなたの云ひ通りに、よく考へて見ました——再三再四、篤と考へてみたのです。して、考へれば考へる程、それはいけないと思ひました…… でも、私がそれをいふ折を、あなたが與

へてくれないのです』――彼女は辯解するやうに、繰り返した――彼の視線を引き返さうとして、彼の腕に觸れ乍ら。

が、彼は答をしなかつた――彼の背後に聳ゆる黑い岩の如く堅く、怖ろしい顏をして立つてゐた　始終水平線の方――今は暮靄に蔽はれて、全く見えない、彼の希望の地――谷間に蛇の住まぬドミニカの自由鄕――を眺めて立つてゐた。

『ガブリエルさん』と、彼女は撫てさするやうに、言ひつづけた。『ね、聽いて下さいよ……』

『では、お前は來てくれないのか？』と、彼はたうとう口を開いた。『お前は來ないのか？』彼が憤怒の眼を彼女に向けた時、彼の聲は殆ど威嚇を帶びてゐた。

『私は行けませぬ』と、優しい力を籠めて、彼女は繰り返した。『私のいふことを聽いて下さい……ね、あなたを私が愛してゐることは御存じでせう？』

『私はお前に私の有つてゐる一切のものを提供するのだ。それでもお前には不足なのだ……私は私と一緒に自由になる機會をお前に與へてゐる。それでも、お前はいつまでも奴隷となつてゐることを欲するといふのだ』と、彼はにがにがしげに答へた。

『まあ、ガブリエルさん』と、彼女は喚んだ――『そんな風に私を咎めることが出來る

てせうか？私があなたを愛してゐるか、どうか、あなたの心によくわかつてゐます』
『それなら、お前は怖いのだ――海が怖いのか？』
『さうぢやないのです……』
『私はお前を大膽と思つてゐたが！』
『ガブリエルさん』と、彼女は殆ど哮り狂つて叫んだ。『私は惡るいことをする以外には、何も怖くはないのです、――私はただ神さまが恐ろしいのです』
『白人の神さまか？――ベロネット夫人の神さまか？』と、彼は罵つた。
『そんな話は私に御免です、ガブリエルさん』と、彼女は、燃える眼を向けて叫んだ。
『そんな怖ろしいことをいふと、禍を招きますよ』
彼は彼女の態度が不意に變つたのを見て、喫驚して彼女を眺めた。彼女の意志は始めて彼の意志に對抗して奮起したのであつた。
『そんな怖ろしいことをいふと、禍を招きますよ』と、彼女は彼の凝視に應戰し、傲然勝ち誇りながら、繰り返した。彼は再びむつとして、海の方を向いて、ただ彼女に語りつづけさせ、彼女の熱烈なる釋明に默然聽き入つてゐるばかりであつた……怖く思つてゐるつて？――どんなに彼女の心を彼が知つてゐないこと！しかも彼女は忘れてはならぬこと、

忘れては不正背徳となることさへ、彼の爲めには忘れたのであつた。彼と共に逃げようと考へただけでも惡るかつたのだ――幼兒の頃から彼女を育て上げてくれた敎母、娘のやうに世話をしてくれた女主人を見棄てて――亡くなつたデリヴィエール夫人が、あれほど彼女を信賴して委せた子供を見棄てて――しかもその子供は非常に彼女を愛慕してゐて、もし彼女を失へば、どんなに困るだらう――或は死ぬるかも知れない――實際ダアを失くした哀傷の極、死んだ子供もあつたから――否、そんな風に少女を抛棄してしまふのは殘酷だ――邪惡だ……

『それて、ユーマ、お前は子供のために私を捨てるのか？――お前の子供てもないもののために』と、ガブリエルは叫んだ。『お前は世界て唯一人のダアてもあるやうなことを云つてゐる。世間にダアは澤山あるてはないか』

『私のやうなのは――少くともお嬢さんに取つて、私のやうなのはないのてす』と、ユーマはいつた。『お嬢さんのお母さんが亡くなられてからといふものは、私がお母さんの役をしてきてゐるのてす……しかしガブリエルさん、それはただお嬢さんのためばかりてはありません。この長い年月、私を愛し私を信賴して下さつた方々の御恩に對してです』

して、またもとの優しさを聲に含ませ乍ら、彼女はいつた。『ね、あなたは私がこれまて

私に對して親切であつた方々に背いて、恩知らずになるを見て、私が誠實だと思はれますか？』

『お前へ對して親切だつたといふのか！』と、彼は不意に猛然絶叫した。『ただあの人達がさほど惡るくはなかつたばかりに、親切と考へるのか？それなら、どんな風に親切であつた？ただお前を立派に着飾らせて――綺麗な袴や、光澤を帶びたマドラス帽や、頸飾を與へたり、黄金の裝飾を着けさせて、世間の人に「御覽よ、あの夫人は、あの主人は、奴隷に物惜みをしないこと！」と云はせるだけだ。そんなものを與へる？いや、ただ貸すのだ。外見（みえ）を張るため、お前の身に載せるだけで、お前のものではない！お前は何一つ所有することはできない。お前は奴隷だ。お前は法律上、一匹の蟲と同じく裸だ。何物に對しても――いや、私がお前に與へたものに對しても――權利を有たない。お前の選擇した男の妻となる權利も有たない。母となつた場合にも、自分の生んだ子を世話する權利を有たないだらう――假令白人の子供を世話するために、お前の半生を、お前の若い時代を悉く犧牲にしても……いや、ユーマ、お前の女主人の娘のやうに、お前は育て上げられたのではないよ。なぜお前は白人の婦人達が知つてゐる事を教へられなかつたか？――なぜお前は讀み書きを習はせられなかつたのか？――なぜお前は奴隷にしてあるか？……お前へ

對して親切？その親切は彼等の利益となるからであつた――今日現にその報酬があるではないか――私と一緒に自由になれるものを、それがお前を引き留めて、彼等の許に居らせるのだから』

『いや、いや――あなたの言葉は御無理です』と、彼女は反駁した。『あなたは私の教母を御存じないのです――夫人が私にどんなにして下さつたかを御存じないのです――夫人が御親切でなかつたといふことを、いくらあなたが私に說き伏せようとしても駄目ですよ……ね、ガブリエルさん、ただ理窟でばかり人が親切を盡くし得るとお考へですか？あなたはデリヴィエール御主人があなたへ對して親切でなかつたとお考へですか？』

『それは親切な白人もある――比較して見れば、他の主人よりは一層よいといふだけで、親切な主人といふものは、ありやしない』

『まあ、ガブリエルさん！――して、デリヴィエール御主人は？』

『お前は奴隷制度をよいことと信ずるか――ユーマ、お前はそれを正當と考へるか？』

彼女は卽座には返事ができなかつた。奴隷制度の倫理的問題は、彼女の今回の失望によつて、始めて漠然乍らも腦裡に浮かんできたのであつた。以前には、この問題は、懷疑的に質ねることが、全く當を得てゐない種類の一つに屬するやうに思はれてゐた。

『私は奴隷に對して殘酷なのは惡るいと思ひます』と、彼女は答へた……『でも、神さまが奴隷があり、また主人があるやうに御定めなさつた以上は……』

『何といふ愚かさ！何といふ子供らしさ！』と、彼は叫んで、それから默つてしまつた。彼は最早彼女と議論するのは無効と悟つた——彼の所謂彼女の愚かさと彼女の子供らしさといふ性質は、女主人の意志以上に、彼等兩人の仲を割くものと知つた。彼女の致母へ對する義務の念、少女へ對する任務の感は、幾らか彼女の宗教觀念——それに向つて、少しでも輕侮の言を弄すれば、忽ち彼女の怒を惹き起こすやうな信仰心——と結合してゐるやうに見られた。彼はそれをただ白人の敎育によつて作られた一種の精神的無能とばかり考へる事が出來た。彼の見解に從へば、奴隷制度は一種の欺瞞手段であつた——白人の黑人に對する詐欺なのだ。して、彼等がガブリエルに與ふるに何等の筋肉勞働の負擔なき地位を以てし、彼を他の儕輩よりも一層自由に感ずる心境に居らしめてゐるのは、ただ彼等が彼を欺き得なかつたからである。それに對して彼は難有く思つてゐなかつた。主人の方から與へたどんな親切、どんな寛容も、奴隷が自由になり得る機會の自發的犧牲には値しないものと、彼には思はれた。實際彼の儕輩に優つて粗樸な聰明さを有つてゐるものゝ、矢張りガブリエルは彼の人種固有の幾多野蠻的特性——三百年間の植民地に於ける服從生活

も、依然として變化を與へ得ざる——を享けてゐた。就中、合理と不合理を問はず、一切の抑制に對する嫌惡を有つてゐた。今猶ほクリーオール人のビタコ種は、雇傭の勞役に服して快樂を得んよりは、飢餓に迫つても自由を欲求する。彼等が賃銀のために働くことを肯じない結果は、人夫の輸入を促すに至つた。しかし彼等は三人前の仕事をなし得るのだ。彼等は非常なる肉體的努力に堪へ得るのだ——自分と同じ重さの野菜の荷物、または二十四個の麵麭の木の實を、頭上に載せて、二十哩の距離の市へ運ぶことも出來る——市場へ賣る特別の藥草や檳榔子を搜すため、峯の絶巓まで森を伐り開いて登つて行くこともある——命令の羈絆を避けんがためには、どんなに異常なことでもする……抑制を免れるためには、難行苦行に殉ずることを厭はない……ガブリエルの心中にあるこの精神は、彼の地位の利益と些々たる威嚴、まだ他日或る未開の地に自己の畠を作つて、獨立の生活をするといふ野心によつて、一時は緩和されてゐた——が、アンス・マリーヌで彼を有用な人物とならせてゐた諸原因の中、彼が欲する折には逃亡し得られるといふ彼の自信は、なかなか有力な原因となつてゐた……とはいふものゝ、彼自身を標準として、ユーマを判斷して見ると、彼女が拒絶のために主張した動機そのものは、正しく彼が最も反駁し能はざる動機のやうに思はれた。その譯は、彼はそれを彼自身の超自然觀念と並立させてみたからて

あつた。彼が異常なる力を認めてゐる或る神祕な迷信になぞらへて見たからであつた。全く彼女の親切な心に乘じて、白人は彼女の智力を欺き得たのだ――して、彼は心の優しさといふことを、彼に對し、及び彼のために盡くす場合の外は、子供らしく、また愚かなものと考へた……黑人の諺に、『蟹が頭を有たないのは、優しい心を有つてゐるからだ』といふのがある。

それでも彼自身は心――粗野ではあるが――を有つてゐた。して、その心は、彼の怒りと叱責が惹き起こしたユーマの靜かな涙を見て感動を受けた。彼は彼一流の粗樸を以て彼女を熱愛した。して、あらゆる彼の執拗なる意志は、彼女を失ふことに反抗した。彼女は彼の願を拒否した。また彼女の決心の强さはよくわかつてゐた。しかし時の經過と共に、いつかは彼女を自分のものとするやうな方法が見出し得られるかも知れない。彼女自身によることもあるだらう――女主人に對して彼女が有しうる勢力如何によるやうなこともあらう。しかしそれよりも彼は猶ほ一層社會的變化の起こりさうな趨勢に信頼をかけた。ユーマに關する將來を悲觀的に描いたものゝ、彼はそれを決して絶望とは信じなかつた。博愛家の議論や運動の反響は彼の耳に達してゐた。彼は如何にして、また何故に、英領の奴隷が自由を受けたかを知つてゐた――彼はまたユーマに囁き聲でさへも告げ得ない或る事

實を知つてゐた……耕地から耕地へと、祕密の通信が傳はつてゐた――通知を受くる迄に入つて、決行の勇氣ある人々の耳へ達するやう、亞弗利加語で現はしたものであつた――最早、植民地の最も僻陬の谷間でも、人心は『解放』といふ大風に吹かれて、怪しくも動搖を始めてゐた。

譯者註　英帝國の全領地へ奴隷解放令が發布されたのは、千八百三十四年であつた。

『私が立腹したのは、お前へ對してではなかつたよ』と、彼は不意に優しい語調――彼女がまだ彼の口から聞かされたことのないやうな――て辯解した。して、彼女は彼が悔悟的愛撫を以て、彼女を近くひき寄せるのを感じた……『まあ、お聽きよ、お前が知つてゐない事があるのだ。しかし私はお前を信ずる――お前は正しいと思つてゐることをしてゐるのだ……私が立腹したのはお前に對してではない……お聽きよ、お前が來ないから、私も行かない――私はアンス・マリーヌに留まつてゐよう……』

暫くの間、彼女は彼に抱擁されたまゝ、答をしないで、嗚咽してゐた。やがて呟いていつた――

『あなたが逃亡をなさらないと聞いて、一層嬉しく存じます……ても、これでお互に永

久のお別れを云はねばなりませんから、ね、怒つたりなどする場合てはありませんわね』

『サン・ピエールへ伴れて歸られてから、お前はあの人達が別の夫を選んで呉れるまゝになる積りか?』と、彼は信賴の微笑を洩らして質ねた。

『ガブリエルさん!』と、彼女は烈しく叫んだ。『そんなことは決してさせません!……もしあなたとの結婚を許して貰へなけりや、ね、私はいつまでもこのまゝてゐますわ……いえ、決してそんなことは……』

『それては、永久の別れぢやないよ……待つてゐて呉れ!』

彼女は訝り乍ら、見上げた……が、その同じ瞬間に、マヨットは椰子の實を弄ぶことに飽いて、またガブリエルを見つけたので、『ガブウ!——ガブウ!』と、絕叫し乍ら、彼等の方へ走つてきた。して、愉快さうに指揮者の膝へ縋りついた。

『いゝえ!あちらへ行つて、もう少し遊んてゐらつしやい』と、ユーマはいつた。『ガブウはあまり疲れてゐますから、引きずり回はしてはいけませんのよ』

『さうなの、ガブウ?』と、マヨットは彼の顏を見上げるため、小さな頭を後の方へかしげながら問うた。して、彼の答を待たずに、彼女は近寄つて行つて、告げた。『ガブウ、あたし達はお父さんと一緒に市へ歸つて行くのよ』

『ガブウは知つてゐます』と、ユーマは云つた。『行つて、お遊びなさい』

『でも、ダアや、あたしもう飽きた！』と、彼女は彼が兩手に取つて彼女をだき上げることと期待して、まだガブリエルの膝に縋り乍ら、不平さうに答へた……『抱いて頂戴！抱いてよ！』と、彼女は機嫌を取るやうにいつた。

ガブリエルは彼の大きな青銅色の顏の高さまで、彼女を持ち上げて、叫んだ。『あなたはガブウやあなたの親しいお友達をアンス・マリーヌへほつて置いて行くのを、何とも思ひませんね！あなたはガブウを好いてゐないのですよ！』

『いえ、あたし好いてゐるのよ！』と、少女は彼の黑い頰を撫でながら、やさしく囁いた。『あたしほんたうにガブウを好いてゐるわ』

『あなたはガブウと遊ぶのが好きなのです。それだけです。今ガブウはあなたと遊ぶ時間がありません――仕事の終はりの太鼓を打つまでに、ガブウはあちらへ行つて、皆のやつてゐることを見ねばなりません……左樣なら！お孃さん』

彼は彼女をユーマの手に渡し、それからまたユーマに接吻した――しかしデリヴィエール氏がするやうに、ただ額の上に接吻をしただけであつた――少女の前を憚つて……『左樣なら！ユーマ』

『これていつまでも左樣なら？』と、彼女は殆ど聞えないばかりに囁いた。情が迫つて、聲が詰まつたのであつた。『いつまでもお別れ？』

『何、そんなことがあるものか』と、彼女に希望を與へるため微笑しながら、彼は答へた。『「山と山とは逢ふ(譯註)ことないが、人と人とはいつも逢ふ」のだよ』

譯者註　これはこの土地の諺。"Mône pa k'encontré — moune k'encontré toujou."

一〇

……再び彼に逢ふことがあるだらうか？と、彼女は目醒め勝ちなその夜——アンス・マリーヌに於ける最後の夜の一つ前の夜——心中で自問をつづけてゐた。しかしいつも涙が答をするのみであつた……彼女は今頃は彼と共に自由郷へ脫奔したであらうと思はるゝ時刻とそれから後の毎時刻が、客間にある小さな青銅の時計から、その玻璃製圓屋根形の蔽ひを透して、耳に痛いやうに鳴りひびくのを聞いた。彼女は兩眼を閉ぢた。それでも、その閉ぢた眼瞼から透して來る如くに、夕方の光景が見えた——ガブリエルの姿や、椰子の

寳を弄んでゐるマヨットや、黒い沙の上に黒い絶壁が天鵞絨のやうな影をさしてゐたり、また磯浪が——ただ白雲の途切れる如く靜かに——白く一面に擴がつたり、跳ね上がつたりするのが、ありありと見えた。その光景は眼前に去來出沒して、更に鮮かになつて歸つてきて、たうとう全く消え去らないやうに思はれた。やつと、夜半を過ぎてから、物思ひを休める、靜かな柔かい暗さが、彼女に始まつた。

が、また暫くすると、彼女の頭腦は、或る聲が彼女の名を呼んでゐるといふ空想に目ざめた——その聲は餘程の遠方からの如く微かであつて、夢の中で過去の夢を記憶してゐるやうな風に、記憶に殘つた聲であつた。

すると、彼女は或る顏に氣がついた——黒い柔かな眼で彼女を眺めてゐる美しい褐色の女の顏が、マドラス頭巾の黄色の襞の下から微笑を含んでゐた。して、何處からとも無く洩れくる光に輝されてゐた——それは、ただ或る遠い昔の思ひ出であつた。して、その顏の邊りの朦朧裡を貫いて、柔かな青い光が段々大きくなつた——昧爽の光であつた。して、彼女はその顏を知つて、それに囁いた——『お母さん』

……彼等兩人は昔、彼女が行つたことのある、圓丘の中の或る場處を歩いてゐるのであつた。彼女は幼兒時代に於ける如く、母の手が彼女の手を取つて導いてゐるのを感じた。

して、彼等が進んで行くと、前面に、或る紫色の漠然たる、廣大なものが、立ち上がつて開展した――それは天へまで續いた大海の光景であつた。すると、靄然たる天涯、眞珠のやうな空に、英領の島影が浮かんで見えて、青紫の峰巒には、白雲の長い斷片が幾つも懸かつてゐた……彼女が見てゐるうちに、徐々と島は明かるく輝いてきて、次第にその色を變へた。して、峰といふ峰は、悉くその絶頂にいたるまで深紅を潮した――海から空へ向つて、不思議な薔薇が蕾を開いた如くに。

して、ドウスリーヌは幼兒に向つて語る如く、やさしくいつた――

『神さまのおつくり下さつた景色は、まあ、何と綺麗なことね！』

『おや！お母さん！可愛いお母さん！……私は逃げて行つてはいけませんわね！……』

……が、ドウスリーヌは最早彼女と共にゐなかつた――して、輝いた島影もまた消えてしまつた――して、マヨットの泣いてゐる聲が聞えた……どこか樹木の後ろで。

そこて、彼女は急いて行つてみると、大きな茂つた樹が、絡んだ根を廣くあたりに延してゐる下に、少女がゐた。樹上に重く這つてゐる蔓草のために、何の樹だか見分けられなかつた。少女はそのくすんだ葉を一枚捲つて取つてから、怖くなつてゐた――何だか變なものが、彼女の指の上に滴つたのであつた。

『それはただ血蔓ですよ』と、ユーマは云つた。『それて染め物をするのです』

『でも、熱いのよ』と、少女は云つた――彼女はまだ恐怖に滿ちてゐた……やがて二人とも怖くなつた。何故といふに、山間に傳はる大砲の反響の、終り頃になつてから鈍つたやうな、重い鼓動が聞えたからであつた。大地はその音て振動した。して、光は消え始めて、太陽が滅びる時の如く、赤い暗冥に曇つた。

『それは木よ！木の心が響くのよ』と、マヨットが喘ぐやうにいつた。

しかし二人は去ることも出來なかつた。奇異な麻痺が、彼等の足を地面へ釘附けにした。すると、突然その木の根が烈しい生氣を帶びて動き始め、それから、二人に卷きつくやうに踠いて延びてきた――して、頭上の暗い梢間には、怖ろしいものが群がり集まつて、枝端にも根端にも眼があつた……

して、段々深まり行く暗黑の中から、ガブリエルの叫ぶ聲が洩れた――

『これはゾンビてす！私はこの木を伐ることは出來ません』

二

重苦しい蒸熱と瀧のやうな雨の季節――長い冬季――は、その暴風雨とともに過ぎ去つた。それから、山地が冷えてくる東北風の季節と、峰巒が雲の纒ひを脱ぎ去てる乾燥季も終はつた。今は一年の最も心地よき萬物復活の季節であつた――熱帶のこの魔法的な春季に於ては、土地は俄然虹色の蒸氣に浸つて、見渡すかぎり寶石の色合を帶び、乾燥季中に絞られ、萎びた自然は、その液汁を新たにし、其色は一切再び燃え上がつてくる。森は一齊に果實と花で蔽はれ、縮んだ攀援莖は光りかがやく綠色にかへり、無數の新しい卷鬚をのばし、大森林（グラン・ボア）の高層に、滿目撩亂たる青、白、紅、黄の花の瀑布をそゝいだ。パーミストやアンゼリンなどの幹は、枯れた羽葉をふり棄てると共に、急に高く伸びたやうに見えた。熟した甘蔗の谷の上には、輝いた靄が懸かつた。それから山間の道路は、新生の草や灌木の藪が夥しく侵入して、殆ど眞中まで綠色になり始めた。蘚苔地衣の類は、ペンキに防禦されない木石の面、到る處に發生した。草が玄武岩鋪道の接合點から萠え出した。また石垣や屋根のあらゆる罅隙から、硬い輝いた植物が、一齊に生えて、砲臺の堅固な石造

工事も、其攻撃を被つて、保護の作業を強ひられた。羊歯や、毛生類や、どんな堅岩へも卷鬚をさし込む蔓草――松葉牡丹や、野生の蕃柘榴――フラーリー・ノーエルや、惡魔の煙草や、ラケラットや――甚だしきは小さな木、例へば若いフロマーゼ或は木綿樹のやうに、家屋の安全のために直ちに拔かねばならぬやうなもの――かやうな種々のものが、障壁の頂や屋根から生え上がつたり、檐端から分岐したり、棟や蛇腹に根を卸したりした……巍然たる圓錐形のペレー山は、何週間も北風の續いた間は、青空にその噴火口の尖峰をくつきりと見せてゐたが、再び其周圍に雲を引きおろし、其皺の寄つた傾斜面の褐色は、蓊欝として水分を含める綠色に變つた。柔かな雷鳴は山間に轟き、微溫い雨はさつと折々降り灑いて土地を爽快ならしめ、空氣は香油の芳ばしさを帶び、天の色さへ濃厚になつた。

しかし土地はそのあらん限りの魅惑を露はしても、植民者達の心は重苦しかつた。長い年月の間、未だ曾てなかつたことにも、折角立派な作物の刈り入れが困難となつた。製糖所の器械も、手傳ひの人夫缺乏のため、運轉中止のものがあつた。前代未聞にも、奴隷が服從を拒み、主人が罰するのを憚ることとなつた。それは共和制度が宣言されたからである。して、解放の豫想が、黑人達の質樸な心の中に、耕地の無料贈與とか、富の自由寄附とか、働かないで獲られる永遠の休息とか、一般人民に向つての樂園といふやうな、架空

的觀念の醱酵を促したからである。彼等は特功のために與へられた自由の普通の結果を見てゐた。自由階級の生活を知つてゐた。しかしかやうな狀態は、彼等に取つて價値の乏しいものであつた。白人によつて與へられた自由は、共和制度によつて惠まるべき自由の、かの獨得な性質とは、全然似もつかぬものと思はれた。

不幸にも彼等はかゝる空想を抱かせるやうな危險な助言者を有つてゐた。それは來たらんとする社會的變革の中に、一層大きな政治的機會を豫見した黑人輩であつた。自由を與へられた人民と奴隷とが、等しく植民者の味方となつて、ロシャンボー[譯者註]と共和主義に反抗し、中產階級と愛國派の人々に反抗して戰つた時このかた、形勢は全く變つてゐた。英國が此島を略取したことは、黑人が第一革命に對して示した不信任を肯定した。して、舊制度を更に半世紀間持續せしめた。しかし其半世紀間に、黑人の自由階級は、從來偏見のため、或は警戒のために與へられてゐなかつた一切の特權を獲得してきたので、黑人の利益が白人の利益と全然相一致するといふ事は、止んでしまつた。彼等は白人との妥協提携に

譯者註　ロシャンボー（一七五〇―一八一三年）は、一八〇二年ナポレオンが三萬五千の大軍を派遣し、ヘーティー島の黑人の叛亂を討たしめた際、遠征軍の主將ルクラーク熱病に斃れた後、代はつてその司令長官となつた。

よつて得らるゝ一切のものを贏ち得たのであつた。して、彼等は今や奴隷制度はただ單に條約の法令によつてでなく、猶ほまた十九世紀の輿論によつて、到底滅亡の運を免れないことを知つた。して、前途には、普通選擧權も有望に見えた。この島に、白人は僅かに一萬二千を數へるに過ぎなかつたが、黑人と雜種は十五萬人であつた。

しかし奴隷達の狀況或は態度に於ては、まだ白人の危機切迫を充分に語るやうなものは見えなかつた。從屬民族は、かの西印度化といふ現象を生ずる氣候と環境の特異なる影響に因つて、肉體的に高尙にされたばかりでなく、猶ほまた野蠻人固有の性質の中、比較的心地よき特徴――情感的粗樸、愉快、親切、迅速なる同情心、些細なことに樂を見出す力――が、奴隷生活のために錬磨され、また强められてゐた。彼等の言語さへ――世に忘られたる亞弗利加語の型によつて作られ母音を長く充分にひゞかせて、滑かな、珍奇な方言――さながら鳩のやさしい鳴き聲の如く、聽く人の耳を撫でた……今日でもなほ旅人はこの異國的人種の溫和な特徵の中に、何ともいはれぬ魅力を認め得るだらう――たとひ新しい情態の下で、非常なる生活困難に迫まられて、性質の變化を呈したとは云へ。しかしクリーオール人だけは、經驗上、この同一な半野蠻性質の暗黑方面の可能性を知つてゐる――その急激なる殘酷の可能性――その盲目的な忿怒の興奮――その躁急狼狽的な破壞の

狂暴。

政界の出來事の公報が、まだ植民地へ達しないうちに、黑人は政府の船よりは一層迅速な、あるわからない通信方法によつて、彼等の身の上に關する形勢を知り、彼等のために如何なることがなされつゝあるかを知り、彼等は自由なるものと感じた。奴隷問題の敏速なる解決は、最も緊要であつた――猶豫は刻々危險を釀すやうに見えた。まだ敵對行動の發現はなかつた。しかし奴隷所有者は――案外な組織力と、驚くべく巧妙なる祕密手段を示したことのある突發的擾亂の歷史を知つてゐるので――世間一般に澎湃たる威嚇の氣分を感知したから、概して愼重と寬容の策を採つた。が、兎角命令に慣れた階級の中には、いつも一旦の忿怒に思慮を忘れ、如何なる結果をも決然無視して挑みかかるやうな人がある。千八百四十八年に於ける植民者中のかゝる人々は、奴隷解放の機、既に旦夕に迫つてゐる場合にさへ、敢然彼等の權利を主張した――勞役を拒んだ奴隷を手づから鞭撻した。して、市の牢獄に送つて法律の判決を待つた。しかもその法律は、今にも無效に歸せんとしてゐた。

彼等の輕躁無謀は騷動の殺到を促した。勞働人夫達は農園を去り、武裝せる隊を成し、サン・ピエールを瞰視する丘頭に集まり出した。市中の人民も蹶起して、暴動を始め、刃

物商店に闖入し、武器を奪ひ、牢獄を圍み、囚徒の解放を要求した……その怖ろしい威嚇が、始めて港の奴隷と農園の黑人間に祕密な聯絡が存することを示した——警察官も脅迫に縮みあがつて、囚徒を釋放した。

しかし從屬階級の長く壓迫されたる熱情は、なだめらるべくもなかつた。亂民は『白人を殺せ！白人を殪せ！』といふ未だ曾て聞かれたことのない叫を發しつつ、街衢を練つて行つた——共和政府から派遣されてゐる知事が、評判の臆病者だから武力干渉をしないと安心したのであつた。夜に入つても、暴動は鎭まらなかつた——白人は彼等の邸宅に監禁されたり、或は港內に碇泊せる船中へ避難した。して、丘上に住める白人達は、見張を置いて警戒してゐたが、夜もすがら、短劍や竹槍や砂を詰めた瓶などの武器を携へて橫行跋扈する黑人輩の糾合の叫びを耳にした。二十四時間の後、全島の奴隷民衆が蜂起した。して、すべての都市は、勞働人夫輩の總攻擊を被りさうに見えた。

一二

翌日は形勢が更に惡化した。商業の取引は一切停まつて、店肆倉庫はことごとく閉鎖さ

れ、市場にも人影絶え、麵麭製造所は掠奪を蒙り、食糧品は殆ど得られなくなつた。奴隷解放の決議が通過したといふ風説が傳はつた――また、その報道はまだ祕密に附してあるといふこと、自由の公表は、ただ腕力に訴へて強制するほかに方法はないのだといふ流言が行はれた……

暴動の勃發に先だつて、共和政府の行つた選擧が導因となつて、激烈なる政治的興奮があつた。奴隷所有の白人等は、彼等の利益を重んじてくれる、或る自由を得た黑人に投票した。黑人輩は彼等の新たに獲得せる特權を用ひて、或る有名な佛國の奴隷解放論者を代議員に選ばうとした。其人の肖像は、共和政府の薔薇花章や小三色旗を添へて、數千枚も配布された。人々は熱狂の涙と萬歲の叫びを以て、肖像に接吻を與へた――黑人の兒童輩は小旗を振つて、『ヴィヴ・ラ・レプブリーク！』（共和政治萬歲）と叫んだ――『ヴィヴ・ラ・イビビ！』とだけしか叫び得ないほど、小さな子供もあつた。して、黑人側の天晴れの成功は、ただますます興奮を嵩めるのみであつた……しかし牢獄事件の後は、子供等は小旗をかざして街頭に出ることをやめた。それから最早薔薇花章の配布は止んで、短劍――新らしい短劍――が配布された。何故といふに、それを磨かねばならなかつたから。して、あらゆる砥石は徵發された。

町へ出るのは白人達に取つて、ますます危險となつた。彼等は自家の奴隷とか、または群集に勢力を有し、すべての黑人の顏を見知つてゐるやうな、忠實な、自由にされた黑人の保護の下に、船舶へ逃げて行く機會を窺つた。しかし午後になると、かゝる忠實な家僕共の獻身的行動も、無效になり始めた。見知らぬ黑人が、暴徒に混じつてきたのであつた。彼等の獰猛な顏を、市中の家僕共は未だ嘗て見たこともなく、『これは善良な白人だ』といふ保證の言葉に對しては、ただ侮辱或は暴行を以て應ずるばかりの連中であつた。武器携帶の隊伍が、間斷なく示威運動を試みつつ——太鼓を打ち——歌をうたひ——『白人を殪せ！』と、叫び——逃亡者を見れば、皮肉的侮蔑の快を貪るため、わざと佛語を眞似て、『おい！市民……一寸お待ち！お話したいことがある！』といふ文句を浴びせた。彼等は窓に現はるゝ白人の顏を窺つて、惡罵の聲を放ち、小刀を以て魚の腹を開くやうな身振りを見せた。何か一種の侵擊的運動が準備されつつあるやうであつた。また人夫輩は始終山の手に集中しつつあつた。逃亡の出來なかつた白人は、生命の危險を感じて、防禦に取掛からうとした。或る家では、婦女子は彈藥包を作つた。奴隷がかゝる準備を洩らした。するると、白人は祕密に暴徒を襲ふ計畫をしてゐるといふ噂が傳つた……最早白人が一揆を鎭壓して、黑人をデノーッ砲臺の檬果(マンゴー)樹頭て、磔刑に處することが出來た時代は、夙くの昔

に去つてしまつた。しかも白人が當年黒人に對して演じた所業は、怨恨の思ひ出となつてゐた。

白人が最も不安に感じたのは、高臺にあつて、ロクスレーン川で遮斷された、市の最も古い部分、卽ち「砲臺山」方面であつた。その邊に住む人々は、特に船舶へ達することが困難であつた、——橋の上や、海岸への通路には、武裝せる黒人が群をなしてゐたから。大部分の家屋は小さいので、包圍攻擊を受けた場合には、防禦の道がなかつた。そこで、白家を去つて、數多くもあらぬ附近の大邸宅に避難したものが夥しかつた。デリヴィエール一家も、またその例に傚つて、親戚ド・カーサント家に投じた。ド・カーサント家の邸宅は非常に宏大なものであつた——二階建に過ぎないが、奥行深く、幅廣く、要塞の如く堅固な建築で、市の舊い部分の一端、嶮しい阪町に立つてゐた。この町は西の方が傾下して、屋根越しに半圓形の海が見え、東の方を上つて行くと、內地に通ずる田舍街道に合した。邸の背面の窓からは、茫々たる甘蔗の野が見渡された。その野は、十五哩のかなたに、高く雲霄を凌げるペレー山の山腹まで遙かに擴つてゐた。

ド・カーサント邸へ安全を求めて集まつたものは、三十人以上もあつた——親族の妻や

娘達がその大部分を占めてゐた。して、是等の人々の間に、非常な恐慌があつた。この朝、家僕輩は既に邸を脱してしまつた――その一人の黒人の女は、或る叱言に激昂して、『待つてゐろ！今晩わかるだらうから！』といふ威嚇の捨臺詞を殘して去つて行つた。ド・カーサント氏は七十歳の老紳士て、息子の助力を得て、出來る限り避難者を愉快ならしめてゐたが、彼等の恐怖を鎭めようと努めた。彼は今夜はただ喧騷と威嚇が非常に加はる外に、何等過激なことを見ないだらうと信じた。彼は市の群集の首領輩は、單に脅喝を企ててゐるに過ぎないと考へた。耕地の人夫輩の大擧襲來があるかも知れない――さうなれば危險は重大となるだらうが、しかし附近の兵營には五百　の兵士がゐた。まだ何等犯罪的暴行はその地方に起こらなかつた。市の他の片隅て、一人の紳士が殺されたといふ報道があつたが、しかし幾多荒唐無稽の風説が行はれてゐるのだからと、彼は婦女子達に諭した。

實際、砲臺地方の白人は――大抵奴隷や召使に逃げられてしまつたので――彼等の極めて近い界隈に起こつてゐることさへ、あまり知らなかつた。二百年間暗黑と祕密に行はれてゐたことが、今や白晝公然、堂々と行はれつつあつた。或る不思議な力が、不意に確然不拔の權威を得たのであつた――亞弗利加の幻術者の力。

砲臺（ブラス・ド・フォール）の廣場のタマリンド樹の下て、幻術者は頻りにその凄い商賣を營んでゐた――護身

符を賣り、呪物を賣り、蛇の脂油より製せる魔力的軟膏を賣つてゐた。彼の前には彈藥を混ぜ、碎き潰した地蜂の胴で濃厚にしたラム酒を滿たせる樽がひらいてあつた。彼の周圍には港の黑人が群集した――二十五呎の長い橈を使ひ慣れてゐる、半裸の、ガバール型船の水夫――重くて、扱ひ難い船を漕ぐ骨折り仕事によつて粗暴になつた、怪力ある、ネーググォー型船の水夫――唐金のやうな皮膚は、極暑の日光を浴びても、殆ど汗の玉を見せないほど筋骨の硬い艀舟の水夫――ヨール船やサバ船や獨木舟の船員――桶工場の人夫、樽轉がしの人夫、倉庫の人夫――それから、鷄貝の採集者――鮫の漁夫。『飲まないか、飲まないか？』と、幻術者はブリキ製の杯に毒液を盛りながら、絕叫した。『飲まないか、飲まないか？人間の魂を――爭鬪の精神を――倒れて起きる精神を――心を感動させるものを――地獄を破るものを』……して、人々はそれを――地蜂と彈藥とアルコールを――爭つて飲み乾した。して、飲んだ擧句に、狂暴となつた。

　夕陽が空を黃色に染めた――水平線を黃金の閃光で滿たした――海はその青色を薄紫に變へた――圓丘は燐光に變はるかと思はれるほど、その鮮かな綠色を明かるくした。見るが內に、光輝は深紅となつて――影は紫になつた。すると、夜が急速に東から擴がつてきて、黑い青紫色の空は、燦爛たる星にみたされた。

最後の朱光が消え始める頃しも、長い、凄い、胴聲の音が、砲臺の廣場(プラス・ド・フォール)から響いた。その音は大きな嗚咽のやうにすべての山々に反響して行つた。すると、他の音が碇泊場から――また他の音が河口から――して、更に幾多の他の音が、互に混じり合つて、港内のビローグ型船から、ガバール型船から、サバ型船から起つた。それは市内の黒人が、ランビ貝の殼を吹いて、山間の同胞を呼ぶ聲であつた……今猶ほ鮫の漁夫は、ブレシヤーの黒い海岸から、山上の勞働者に向つて、下山して、魚肉を分けるやう呼ぶときに、このやうに貝殼を吹く。

すると、咽ぶ如き合圖の聲が――ロクスレーン川の谷とペリネルの高臺から――ドランジュ山とミライル山とラベル山から――微かに應じた。耕地の人夫達が來つつあつた！……

……して、市場の燈下で、幻術者がまだ彼の酒や護身符や蛇の脂油を配つてゐる邊からは、重げな銅鑼の音が不吉さうに響き出した。

家屋内に阻絶されてゐた下町の白人どもは、人民の集まる喧囂を耳にすることが出來た……主人も奴隷も一様に、血と火の夢――ヘーティー島(譯者註)の記憶――に惱まされてゐた。

譯者註　ヘーティー島の黒人は、千八百〇二年拿翁の麾下に叛旗して、獨立戰爭を起こし、幾多の慘劇が演ぜられた。

一三

ド・カーサント邸では、二階の室には、男子連が集まつて警戒をしてゐた、表側の一室を除いて、すべて避難者に提供された。婦人や若い娘達の中には、寢に就くよりも寧ろ徹宵起きてゐようとする者が多かつた。階下の窓や戸は堅く鎖ざされ、また亂民の通過する際は、燈火を消すことに定められた。それから、前日の出來事、最近の選擧のこと、黒奴解放の前途如何、これまで數回の叛亂の史實――その內にはまだ老人達の記憶に存する叛亂もあつた――また、蠻人の性質などについて、人々は語り合つた。黒人の性質といふ話題は、續々と逸話を喚起した。中には怖ろしいのもあつたが、大抵は滑稽じみてゐた。或る農園主は彼の奴隷のうちで、牛を買ひうるだけの貯金をしたもののことを語つた。佛國に於ける政變の第一報道に接すると共に、その奴隷は牛を農園から取り出して、主人の家の玄關に繫いだ。『何故牛を家に繫ぐか?』と、農園主が質ねると、『共和政治が布告されたから、私はこの牛を家へ繫ぐのです。といふのは、一たび共和政治が布告されると、誰の所有物も一切一般人民の所有物となるからです』といふ返答を聞かされた。心配の最

中にも、この物語は人々を笑はせた。それから、談話は他の方向へ轉じたので、デリヴィエール氏はユーマと蛇の逸話を語つた――そこに集まつてゐた人の中には、その事件を聞いたことのない人が多かつたので。マヨットを膝に載せ乍ら坐してゐたユーマは、少女を作れて起つて、デリヴィエール氏が物語を終はらぬ内に、室を去つた。數分後、彼は彼女のゐた隣室へ行つて、彼女を呼び出し、少女の耳に達しないやうな低聲で云つた――

「ユーマ、町は今は非常に鎭まつてゐる。だから、お前は子供を私のお母樣に託して、出でて行つて、あの人達の方で夜を過ごした方がよからう……私がお前に戶を開けてやるから」

『何故ですか、御主人樣?』彼女が理由を反問したのは、未曾有のことであつた。

彼は眼に愛撫の情を含ませて、『私は今夜お前に私共と一緒に留まつてゐる事を要求することが出來ない』と、答へた。『襲撃を受けるかも知れないから、誰れも危險なのだ』と、囁きに聲を低くめて、言ひ添へた。

『それだからこそ、私は留まつてゐたく思ひます。御主人樣』と、今度は彼女は聲高く、確りと云つた。

『お父さん！』と、マヨットは兩人の間へ入つてきて、叫んだ。『何處へもダアやをや

つてはいけません！あたしお話をして貰ひたいから』

『我儘な子供だね！』と、身を屈めて、彼女を接吻し乍ら、デリヴィエール氏は云つた。

『それでも、ユーマが去つて行かうと思ふならば？』

『お前は去つて行きはしないだらう。ダアや、ね？』と、少女は喫驚して聞いた。彼女は一種娯樂の夜會にきてゐる積りでゐた。

『私はあなたにお話をするため殘ります』と、ユーマがいつた……デリヴィエール氏は彼女の手を握りしめ、彼女に少女を託して置いた。

……デリヴィエール氏がいつた通り、町は頗る靜かになつてゐた。この町は最も僻陬なので、晝間こゝには群集が打寄せなかつた。小團の黑人が、折々『白人を殪せ！』と叫んで通つて行つたが、夜に入つてからは暴動の氣配は見えなかつた。人々が冒險的に窓を開けて外を眺めると、何の意味かわからないが、ランビ貝の殼を吹く音が聞えた——港の方面で、何か新しい騷擾が起こつたのだらうとも想像された。しかし人々は一層心配し出した。山から流れてきて、嶮しい溝を馳せ下る水の音が、殊の外高く響くやうに思はれた。

『いつもこの邊では、あの音が大きいのです——阪の傾斜が急だから』と、ド・カーサント氏がいつた。

『今晩は誰れも皆、多少神經過敏になつてゐるからでせう』と、他の一紳士はいつた。

しかしユーマは不意に、男子達の話し合つてゐる室の方へ、獨りで歸つて行つて、窓の方を指して、叫んだ――

『水の音ではありません！』

混血人種の耳は音響に對して異常に敏感だ……すべての談話は止まつた。男子達は息を凝らして、聽き耳を欹てた。

一四

遠くに聞える磯浪のやうな、重げな囁きが、町を滿たした――次第に高くなつて――鈍い繼續的な轟きとなつた。それは山の方から近寄つてくるやうに思はれた。それと共に、また大火事の如き光がさしてきた……すぐに何れの家でも、燈火は消され、窓は鎖ざされ、戸は緊められた――町は墓地の如くに、荒涼たる光景を呈した。しかし二階の、條板のついた鎧戸の後から、誰れも光の輝いてくるのを見たり、轟きが近づくのを聞いたりすることが出來た……

『來ますよ！』と、ユーマが叫んだ。

すると、突然叫喚の嵐、松明の火焔が本通りへ飛び出した——帆布のズボンを着けて、腰まで裸かの數百人の黑人が、濃密な一團となつて、走つて動いてきた——耕地の勞働人夫が來襲したのであつた。彼等の跣の響によつて、家屋は振動した——あらゆる壁に、微かな地震のやうな顫震が傳はつた……彼等がただ通り過ぎさへしたならば！

數百人は既に通り過ぎたが、まだ突進してくる群集は果てしなく大きな麥稈帽の列は瀧の如く下つてくるやうに見えた——して、その瀧の上に、槍や農園の熊手や振り翳した短劍などの鐵光が、亂舞する松明の火の中で閃いた。しかし案外な停止が起こつた——跪いたり、また肩で押したり、窒息する如き壓迫——絶叫の嵐の半凪があつた。同時にアルコールの猛惡な臭氣——ラム酒の惡臭——が街上に滿ちた。亂民はまさしく泥醉してゐた。だから猶ほ更危險であつた……誰れか命令を發したものがあつた。それは誰れにも聞えなかつた。喧囂が減じた時に、大音聲でそれが繰り返されると、すべての黑い顏がド・カーサント邸を振向いて、すべての黑い咽喉がまた怒號を發した。不幸にも、小屋ばかりの町に於ける、唯一の二階建邸宅の堂々たる表側から判斷して、其持主を富有な白人と目星をつけたのであつた。白人であつて、且つ富有であるといふことは、少くとも單純な勞働者

達の信念に於ては、取りも直さず、貴族であること、解放の敵であること、また多分、奴隷所有者であることとであつた……『そこを探せ！』と、前と同じ大聲が響いた――すると、家屋全部は玄關を猛烈に叩く音に伴れて振動した。玄關の巖疊な二枚開きの戸は、錠と緊釘に加へて、鐵の閂で緊りと鎖ざしてあつた。『開け！我輩に開け！』と、群集は叫んだ。

ド・カーサント氏は、二階の表部屋の一つの鎧戸を緩めて、街上の亂民を見おろした。それは凄じい亂民であつた――その中には惡夢のやうな顔があつた。大概見慣れぬ顔であつたが、それでも數名面識のものもあつた――それはこの港の連中で、幾多かやうな市の亂暴者共は、勞働者輩の襲來に先だつて、旣に彼等の一味徒黨となつてゐた。亂民の中には、また女達もゐて、いろいろの身振りをしたり、甲高い聲で叫んだりして、中には農園の黑人の女もゐたが、さうでないのもゐた――して、後者が最も惡るい連中であつた。

『お前達、何用があるのだ？』と、ド・カーサント氏が尋ねた。

最初は喧囂のため、彼等はそれが聞えなかつた。しかし窓に白髪の白人が見えると、間もなく鎭まつてきた。誰れも聽くことを欲したのであつた。ド・カーサント氏はあまりひどく愕いてはゐなかつた――彼は群集が激しい示威運動以上に、亂暴を敢行するものとは信じなかつた。彼はクリーオール語で、同じ言葉を繰り返した――

『サ・ウーレ・メフキ？……』

こんな風に、白人は奴隷に呼びかけたものであつた――白人がメフキ（私の子供達）といふ語を使ふ場合、それは殆ど族長的愛情と庇保の意味を有してゐた。今猶ほこんな使用は、共和政治時代になつても殘つてゐる。しかしこの場合、ド・カーサント氏がその言葉を發すると、それは群集の政治的激情の火に油を注いだのであつた。

『貴樣は、おれ達の父なのか？……もう「子供達（メフキ）」はゐないよ。みんな市民（シトワイヨン）だけだよ』と、一人の嘲弄者は笑つた。

『あれはわし達の御機嫌をとらうと思つてゐる！あの年寄りの白人はずるい奴だ！』と、甲高い女の聲が叫んだ。

『市民の方々』と、ド・カーサント氏が應酬していつた。『なぜこの家へ闖入しようとするんです？これまで私が諸君の內、誰れかに危害を加へたことがありますか？』

『この家には武器があるからだよ！』と、初めに群集の注意をこの邸へさし向けた、あの脅嚇的な聲が答へた。その聲は、亂民の親分らしい、非常に丈高い黑人の胸から響いてきた。彼はただ麥稈帽と木綿のズボンを着けただけであつた。手には短刀をもつてゐた。すぐにド・カーサント氏は以前彼を見たことを思ひ出した――フォン・レーエット耕地て

指揮者として働いてゐた男であつた。

『おい、シルヴァン』と、ド・カーサント氏は答へた。『我輩はこの家に武器をもつてゐないよ。こゝには女や子供の連中が居るのだ。我輩はお前達の不平に關係はないよ』

『開けろ！』

『お前達のうち、誰れも私の家へ入る權利はない』

『開けろ！』

『入る權利はない……』

『よろしい。おれ達がその權利を取つてみせる』と、親分が絶叫した。すると、みんなから一齊の怒號が起こつた――數千の興奮した聲が『開けろ！』といふ要求を繰り返した。

白い頭は窓から引込んで、若い顔――色の黒い、美貌で、決然たる――が、そこへ現はれた。それはド・カーサント氏の息子であつた。

『さうだ、我輩は武器をもつてゐる』と、青年は叫んだ。『また、武器を使ふことも心得てゐる。此家へ入る奴があれば、僕がすぐ射撃して、黒い腦味噌を迸らせてやるぞ！』

彼は一挺の拳銃に彈丸をこめて、持つてゐた。邸内にはこの外に一個の武器もなかつた。彼は群集の卑怯をあてにしてゐた。しかし黒人は怖れてゐなかつた――老人は嘘をついて

ゐない、武器はないのだといふ事實が、彼等にわかつてゐた。或はわかつてゐるやうに思はれた。

『よろしい！開けないのか』と、親分は威嚇した……殆どこの瞬間に、或る強い手で投ぜられた石が青年カーサントの頭の邊で旋轉して、それから、部屋へ入つて、家具に當たつてがらがらと響いた。鎧戸をしめても駄目であつた。二回目に飛んできた石が、ぶつかつてそれを開け放してしまつた。第三の石は、次の窗の鎧戸を震撼した。續々と石が飛んでくる。數名ひどい怪我を受ける。或る婦人は人事不省に陷り、一人の紳士は肩の骨を破碎された。しかも、群集は『もつと、石を持つて來い！石を持つて來い！』と、叫んだ――その譯は、この屋敷の通りは、中央の鋪道が粗いセメントなので、投げる石の材料が乏しかつたから。しかし、阪道の下の横町は、河床から運んできた圓い石が敷いてあつた――『連鎖をつくれ！』といふ叫聲と共に、黑人の女どもは、攻撃地點からその町の角まで一直線を作つた――して、外づした鋪石を前垂れに一杯づつ、手から手へと線に沿うて遞送した。この擲射物を運搬供給するのに、一絲紊れざる秩序があつた。それは、黑人の女は、急流から建築地、卽ち防風壁の場所まで石を運ぶとき、一列に竝んで『連鎖を作る』ことに、昔から代々慣れてゐたからであつた。

すると、石の雨は猛烈になつた――家具を粉砕し、障壁を破壊し、部屋の戸を滅茶滅茶にして、散亂狼藉を極めた……クリーオール黑人が、どんなに巧まく石を擲げうるかは、寄りつけない高い處に生えてゐる木から、果物をおとすのを、山間の道中で見たことのある人でなくてはわかるまい……二階の表側の室の鎧戸は、もはや悉くなくなつてしまつた――人々は裏側の室に避難した。しかし階下の窻の鎧戸は、頗る重く、堅固で、且つ半ば鐵で蔽つてあるので、依然持ち堪へてゐた。また巍然たる拱廊の戸は、それに肉薄してゐるすべての逞しい肩の壓力にびくともしなかつた。

『こゝへ大丸太を打ち込め！大丸太を！』と、投石の掩護の下に、戸を押し破らうと努めてゐた連中が叫んだ。して、その叫びは山の傾斜の上の方へと傳つて行つた……邸内からは、もはや暴徒が何をしてゐるのか、見ることもできなくなつた――窻へは近寄れなかつたから。しかし町から突然非常な怒號の聲が聞えたので、何か新しいことが起こつたのは明白であつた……『あゝ！兵士！』と、ド・カーサント夫人は雀躍して叫んだ。

それは夫人の誤解であつた。重い丸太がきたので、新しい興奮が起こつたのであつた――二十人の連中が、大騷ぎをして、それをかついできた。すると、戸を押し合つてゐる者どもは、この攻城槌を充分に働かせるため、後へさがつた。

それに振動を與へながら、彼等は歌つた。『ソー・ソー！ヤイエ・ヤー！ラーレー・フォ！』それから、家屋全體はすばらしい打撃につれて動搖した。

『ソー・ソー！ヤイエ・ヤー！ラーレー・フォ！』門鎖も、錠も壞れた。家の骨組が弛んできたので、漆喰の雨をふらした――内側の幅廣い鐵棒は、まだ堪へてゐたが、それは弓の如く曲つた。して、戸はたつぷり五吋も後退りをした。

『ソー・ソー！ヤイエ・ヤー！ラーレー・フォ！』金物の壞れる響き、材木が粉微塵に碎ける音――それから、戸は倒れてしまつた。その音を、拱廊は巨砲のやうに反響させた――獰猛な歡喜の轟きが、大成功を叫んだ……内側は一面眞暗であつた。

一瞬間の躊躇があつた――暗黒と空虚が、恐怖を與へたのであつた。『火把(たいまつ)をここへ出せ！』と、親分は火把持を呼んで、『おれに一本！』と、片手をさしのべ、一本の火把を攫み取り、片手に彼の武器をふりかざしながら、跳び込んで入つた。しかし正しく彼が閾を越えるとき、耳をつぶすばかりの爆聲が拱廊を通じてひびいた。すると、その丈高い黑人はよろめいて、火把と短劔を落とした――兩方の露はな腕をふり上げた。ふらふらと半ば廻つた。して、仰向けに倒れて死んだ。青年カーサントは、彼の言葉を實行したのであつた。

入口の黒人共は恐慌を喰つて、ひき歸さうとしたが、盲目的狂暴な突撃の、背後からの壓迫には、抵抗し得なかなつた。そこで、亂民の先鋒は、拱廊の中へ投げ込まれた――跪いたり、咆哮したり、なぐつたり、死骸や、壞はれた戸の上に躓いたりしながら――しかも、非常な猛烈な勢で投げ込まれるので、倒れるものも夥しかつた……青年カーサントは、初めに彼と共におりてきた人達が、抵抗を駄目と諦めて、二階へまた上がつて行つたときにも、退却しようと欲しなかつた。彼は猶ほその空虛な銃を携へたまゝ、階段のもとに立つてゐた――自身で侵入を抑へ、精神力で威嚇しうるものと信じて。しかし奴隷の場合でさへ、恐怖は盲目的狂暴となることがある――拳銃の筒先きへ面せねばならぬ場合には、死物狂ひになつてくる。そこで、黒人共は、その恐怖の狂暴を以て、青年の上に跳びかかつた。彼が先導の男の顏へ、その無效の武器をたたきつけるや否や、竿に結んだ銃槍が彼の胴を貫いた。それから、彼は一聲を發することもなく、黒人同志が無茶苦茶に傷つけ合ふばかり、激しく斬りつけかかる短劍の下に倒れた……同時に、二個の銃身を備へた鐵砲――兩方とも彈丸を込めて――が、階段へまた戻つて行く人々へ向けて、入口の方から發砲された。して、デリヴィエール氏は倒れた。彼は殆ど卽時に絕命した。彼の仲間は、彼を室內へ引きずりこむ遑もなかつた――彈藥の裝置全部が、背部に入り込んで、脊骨を滅

茶滅茶にしたのであつた。室内の人々は、直ちに戸の內側へ、あらゆる重い家具を積んで防寨とした。

それから、瞬間の恐慌の後、憎惡といふ反動、群集の復讐慾が起つてきた――それは、その場合の激情に煽られた、白人に對する傳統的憎惡、惹き起された恐怖に對し、親分の殺戮に對し、あらゆる想像的の、或は思ひ出の不正に對する復讐心であつた。しかし階下の部屋々々は空虛であつた。白人達は二階へ退却してしまつて、そこへは追ひかけて行くのは危險のやうでもあつた――恐らくは彼等は最後の窮境のため、武器を保留してゐるかも知れなかつた。所詮彼等が脫し得ないのは、確實であつた。裏側の窓は皆高くて、甘蔗畠を繞つてゐる農園の道路を見おろしてゐた。しかもそこには、武裝せる黑人が見張りをしてゐた。それから、側面の壁は石造で固められて、一つの窓もついてゐなかつた。また屋根を傳はつて逃げようもなかつた――隣接した小舍の瓦から、充分二丈は高く聳えてゐた――白人は死ぬることは出來ないのであつた!……しかし今や誰れも自ら進んで、攻擊の采配を振らうとはしないで、ただ喧囂と恐ろしい威嚇と食人蠻民の譫言のやうな言葉が、轟くのみであつた……その內に、破はれた戸板を擔架として、親分の死骸を載せたの

が、火把をふりかざしつつ、街頭を練つて運ばれた。武器を携へた連中が、死骸の傍に沿つて、傷から滲み出た淡紅の腦味噌を指しながら、走つて叫んだ。激昂は狂亂的となつた。しかし一つの聲――女の聲、死んだシルヴァンの妻の聲――が、その中から、はつきりと叫んだ。

『火をつけろ！白人をみな燒いてしまへ！』

すると、群集はその叫び聲を取り上げて、町全體に亙つて、それを高聲で叫んだ。『火を――火をつけろ！』……しかしもし白人共が、放火者に向う見ずの襲撃を加へてきたら、どうだらう？……『階段を外づせ！』と、提議を發したものがあつた。それが、すべての躊躇を鎮めた。五分間で、どんな階段でも取り崩すに足りる武器があつた。暴民はその提議に從ふのに、それだけの時間もかからなかつた。彼等は階段を外づした――彼等はそれを薪に碎き、玄關の鋪石の上に積んで、火把でそれに點火した。欄干は桃花心木（マホガニー）で造つてあつたが、踏段は樹脂の多い、輕い、黄色の松材であつた。同時に階下の家具も毀された――可燃性でも、不可燃性でも一切のもの――肖像の額、窗掛、硝子器、青銅器、莚、鏡、帷幕類――が、火の上に載せられた……階上に、驚愕狼狽の音――荒々しく駈けまはる跫の音――戸を押へてゐた家具を引きずつて離す音――こんな音が洩れ聞えた。それから、

また絶叫の聲が聞えた……『忌々しい白人の奴共、今となつては、あまり元氣もない！』……すると、煙の中から下を覗いてゐる顔が現はれた——白髪の老婦人が、なさけある人に、哀願の言葉を聞いてもらはうともがいてゐた——一人の若い母は、無言で彼女の赤ん坊を指してゐた。二本の黒い腕が、粗暴な嘲弄の風を見せて、彼女の方にさしのべられた。して、一人の黒人の女が、嗄れ聲で叫んだ——それは眞烏賊がその餌を呑噬する眞似であつた。この憎むべき惡戯に對して、汚らはしい笑聲がどつと起こつた……しかし最早火熱と煙は堪へ難くなつた——放火者共は退却した——大部分は街頭へ、また少數の連中は、萬一の脫出者に備へるため、後方の甘蔗畠へ行つた。もはや石投げは止んだ。指が疲れたのであつた。して、群集はただ復讐の進行を傍觀するだけで滿足した。階上の絶叫はまだ聞えてゐたが、それは罵詈と呪詛で應酬された。

拱廊は赤くなつた……點火した——熔爐の如く輝き出して、その熱のため、一同を入口から後へ立ち退かしめた、…　やがて邸内の爆聲は、急流の音のやうな低い轟きとなつた。階下全部、火炎に捉へられてしまつた。火焔は長い黄色な舌を窓から出す。舌は蜿蜒長蛇の如く、煉瓦の壁をのたくり回つて、要石（かなめいし）を甜める。またその上の壁を甜めて、昇つて行かうとする。鎧戸の骨組に喰つてかかる。　……して、折々町から町へと、大きな貝殼を吹

く陰険憂欝な音が傳はつた。

全市の屋根を越えて、巨鐘の聲がひびき出した——急速度に、また絶え間なく。それは大伽藍の警鐘が、鳴らされるのであつた。續々と小寺院の鐘も、驚愕の音に合はせた。しかし今回始めて、喞筒はその屯所に留まつてゐた——黒人の消防夫は召集を無視した！それでも、まだ兵士は、背反を呟くほどであつたけれども、上長官の命令によつて、嚴重に兵營內に閉ぢこめられてゐた。しかも知事（衞戍長官、知事代理ロストラン）は市が黒人の暴徒に蹂躙され、白人は虐殺の危險に瀕してゐるのを知つてゐた。この命令は、實際それを受け取つた人々には、信じ難く思はれた、——それは佛國植民史のうちで、人をして呆然たらしむる事實の一つである。——また、クリーオール白人が、長く共和政治を不俱戴天の仇敵視するのも無理からぬと思はれる、なかなか數多き事實の一つである。

南風に煽られた火焔は、包圍されたる建物の表側よりも、裏側の部屋々々を素早く襲つた。階段のもぎとられた場處へ連接せる廊下に火が移つたので、表側と裏側の連絡に斷たれた。して、火煙の迸る間から、怖ろしい燒死の脅威にどしどし迫まられた男達は、女や子供を打ち捨てて、裏の窓から轉げ落ちたり、跳び下りたりし出した。街路の方面では助かる見込みはなかつたが、畠の方には敵の數も少かつたので、そこに絶體絶命の一機會が

あつた。その機會を捉へたもののうちて、最初の二人は、殆ど地におりるのを待つて殺された――三人目は、佛國の一旅客であつたが、ひどい怪我をしながら、一所懸命に二百碼も走つて行つた擧句、追ひつかれて、斬殺された。しかし更に他の二名は、その隙に乘じ、高い甘蔗の中へ逃げこんで、しやがんで幹莖の間を駈けて、急に方向を轉じて、後戻りをしたり、曲がつて、また曲つたりして、敏速に姿を隱してしまつた。『甘蔗の中へ逃げこんだ！』と、失望した追跡者は叫んだ。この fenne kanne（甘蔗をかき分ける）といふのは、脱走した黑奴が巧まく演ずるわざであつて、田舍のクリーオール人が知つてゐるのみである……暗黑と蛇の恐怖が、逃亡者をして追踪を免れしめた。

數名の義俠な人々――ド・カーサント氏もその一人であつた――は、その九死一生の機會を拒み、斷然あとに留まつて、哀れな女達――母、妻、やさしく育てられた若い娘など、これまで、その臭床しく、しめやかに匂へる生活に、恐怖の影のさしたことなき人々――に、力と慰めを與へた……この炎焰に取り卷かれた邸内には、まだ約三十人の男女がゐたが、兵士は依然として、兵營の內に留まつてゐた！

煙は北へ吹かれて行つたので、町の方からは、燃える家は殆ど絶えず蔽はるゝことなく見えた――しかし、始め群集が石を擲げ出してから、まだ表側の窓へは、誰れも顏を見せ

なかつた。群集は眺めながら、不思議がつた。表側と裏側は、最早まるで連絡が切れてしまつてゐて、悲劇の最後の場面の眼に映じないで了はるのは、忌々しい失望と思はれた、最初の狂熱は鎮まつてきて、殘忍な所業を演じた後に野蠻人の心に起つてくる、あの胸のわるくなるやうな冷淡のみ今は殘つた――叫喚の嵐は、憤激せる會話の低い潮音濤聲に落ちた……

『あんなに泣きわめくのは、女や子供達だ』

『畜生！あれは白人だ――みんな一緒に燒かれるがよい』

『當たり前よ。彼奴等が勢力を得てゐた時分に、思ふさま私達を火炙りにして殺したんだもの！』

『さうだよ！魔法遣ひだといつて、可哀さうに、罪もないおれ達の女どもを燒き殺したではないか。懺悔を聞いたお坊さんは、その女どもは無罪潔白だといつたさうだ』

『そりや大分昔の話だよ』

『昔は昔でも、忘れるものか。今は新時代だ』

『おれ達は今、自由のために戰つてゐるんだ』

『ホァウロー！』と、新しい轟音が起つた、――一つの窓に幽靈のやうな一個の姿が

現はれたから。
『あれは黒人の女だ！』
『あれは保姆だ！』
『靜かに！』と、叫ぶ言葉が口から口へ走つた。殆ど怨恨を含める期待のやうな沈默が、群集の中をその言葉が通つて行くと共につづいた。すると、ユーマの力強い中音部の聲が、喇叭の吹奏の如く喨々とひびき渡つた。
『卑怯者！』と、彼女は大膽に叫んだ。『男子に面と向かふのが怖い卑怯者！女や子供を燒いて、お前達の自由が獲られると思ふのか？……お前達の母は誰れであつたのだ』
『おれ達は白人を燒き討ちするのだ』と、一人の黒人の女が答へて叫んだ。『彼奴等がおれ達を殺すから、おれ達も彼奴等を殺してやる。そりや正當だ』
『お前のいふことは嘘だ！』と、ユーマが叫んだ。『白人は決して女や子供を虐殺しなかつた』
『虐殺したのだ！』と、群集の中で、儕輩よりは立派な服裝をした一人の混血の男が吸鳴つた。『虐殺したよ、千七百二十一年に、千七百二十五年に』
『そこで猿奴、お前は、今それを眞似て黒人の女どもを燒くのか？どんなことを黒人の

女どもがお前にしたのだ』

『彼奴等も白人と一緒に居るからだ』

『お前達も白人と一緒にゐたのだ。昨日も、一昨日も、始終いつも――みんな一人殘らず。白人がお前達に食べものをくれた――飮みものをくれた――病氣のときには、世話をしてくれた……混血の叛逆人奴、お前は白人から自由を與へられ、名を與へられ、お前のきてゐる着物を與へられたのだ。恩知らずめ！お前は自由のため戰つてゐるのではない。お前の黑人の母のお蔭で、疾くの昔に、お前は自由をもらつてゐるのだ。私はお前を知つてゐるよ。家族もなく、親族もない卑怯者！變節者め、黑人の女がお前の母であつたからといつて、黑人の女が燒けるのを見て居られるか』

それから、ユーマの言葉は、新たに沸騰した怒號の聲に葬られて聞えなくなつた。しかし彼女の叱責は、少くともある方面には感動を與へた。彼女は黑人が、自由を得た黑人に對する潛在的輕蔑、祕密な嫉妬的憎惡を煽動したので、混血の男の敗北は、わつと嘲笑の叫びを浴びせられてしまつた。同じ瞬間に、猛烈な押し合ひと、動搖があつた――人込みの中を切り拔けて、前方へ出ようと――素早く、猛烈に――臂でなぐつたり、肩でぶち當たつたりしてゐる黑人の巨漢があつた。彼は群集から身を脫して、燃えてゐる家の前の空

いた場所へ跳び出した——短劒を頭上で閃かしながら——それから、叫んだ。
『黒人の女を燒いてはいけない！』
輕蔑された混血の男は、進んで言葉を發しようとしたが、彼が一語も吐かないうちに、その黒人の勞働者は、急に武器を持たぬ方の手で後ろになぐつて、彼を地に倒した。
『おれに加勢しろ、皆のもの！』と、この巨漢は大音聲を轟かした。『黒人の女を燒死させてはいけない』
すると、ユーマは、そこに彼女のために死を冒して、——天晴れ堂々と、威風四邊を拂つて——獨り立つてゐるのは、ガブリエルだといふことを知つた。
『燒殺しにすべき譯はない！』と、應答するものが澤山あつた。『おれ達は黒人の女を燒いてはいけない！……梯子を持つて來い！』ガブリエルはこれらの野獸のやうな胸から、哀憐の情を絞り出し、同情を强制したのであつた。『梯子を、持つて來い！梯子を、こゝへ！』と、群衆が騒いだ。
五分間——すると、梯子が窓に觸れた。ガブリエル自身がそれに登つて行つた——頂上に達した——彼の鐵のやうな手をさしのべた。丁度彼がさうしてゐると、ユーマは窓臺に屈んで、後ろからマヨットをもたげた。

少女は恐怖のため、呆然としてゐた、――彼女には彼がわからなかつた。

『この子供を助けることができますか?』と、ユーマは金髪の少女を捧げながら尋ねた。

ガブリエルは彼の頭を振るばかりであつた――街上の群集が、怖ろしい叫びを擧げたから――

『いけない!いけない!いけない!白人の子供はいけないよ!』

『それでは、私を救つて下さる譯にゆきません!』と、ユーマは少女を胸にひき緊めながらいつた。

『ユーマ、どうか是非……』

『あなたは是非私に卑怯者になれといふのです!……ガブリエルさん、あなたは卑劣な惡人ですか?……私を助けて、子供を殘したまゝ燒くのですか?……去つて下さい!』

『白人の子供を打やつておけ!ほつておけ!』と、澤山の聲が叫んだ。

『どうして殘しておく物ですか――どうして!私は子供と一緒に神の御許へ行きます』

『そんなら一緒に燒けろ!その梯子を取り外づせ、取り外づせ!』と、黑人輩は咆哮した。ガブリエルがやつと下りると、梯子は引きとられた。少女を見てから、始めの狂熱が再び燃え上がつたやうであつた。忽然また罵詈呪詛の嵐が起こつた。

しかしそれは鎮まつて、また反動が現はれた。ガブリエルは協力奮闘の同志を得た。彼等は今一度梯子をもとへ戻した。彼等は短劍を以て、その周圍を必死に護つた。彼等はユーマに下りるやう呼びかけた……彼女はただ傲然手を振つて救を斥けた――彼女は少女を助け得ないことを知つたのであつた。

すると、梯子の下では、熱火の猛威が、護衛の連中を後へ退かしめた……突然ガブリエルは絶望の呪を發した。火炎の精に觸れた梯子は、發火して、盛んに燃え出した。

ユーマは窓に留まつてゐた。彼女の立派な顔に、今は憎悪も恐怖もなかつた。彼女の足で蛇の頸を踏みつけたまゝ、泰然と立つてゐるのをガブリエルが見た夜に於けると同じ沈着な顔であつた。

ぱつと彼女の後ろに火が燃え上がつて、輝いた。その光を背に受けた彼女の丈高い姿は、ガブリエルが『港の寺』で見た、金地の飾りを背景にした『港の守護の聖母』のやうに見えた。依然として、彼女の穏かな容貌は、何等の感情を現はさなかつた。俯向いた彼女の眼は、彼女の胸に頭をあてて隠れてゐる金髪の少女に注がれてゐた。――彼女の唇が動いた――少女に話しかけてゐるのであつた……小さなマヨットは上から屈んでゐる黒く美しい顔を瞬間見上げて、のぞき込んだ。それから、祈りをするかのやうに、かよわい兩手

を合はせた。

しかし悲しい泣き聲をあげて、彼女はまたユーマの胸に縋りついた。といふのは、厚い壁は、恰も颶風が吹くときの如く震へ――また、裏側から狂氣的な、斷腸の思をさせる絶叫が聞え――壓抑された雷鳴が、どつと轟くやうな破壞の音が起こつたから。ユーマは彼女の黃色な頭巻用の薄絹をはづして、少女の頭に巻きつけた。それから、おだやかに優しく彼女を劬りさすつた――彼女に囁いたり――兩手で輕くゆすつたり――一切平然と、まるで彼女をすかして寢せるやうに。じつと視つめてゐたガブリエルの眼に、これほどユーマが美くしく映じたことはなかつた。

次の瞬間――もはや彼は彼女を見なかつた。彼女の姿も、火の輝きもなくなつた――梁材も、床も、屋根も、すべてのものが、一齊に暗黒の中へ震動して落ちこんだから……ただ石造の骨骼が殘つた――星の空まで黑煙を靡かせながら。

して、靜かになつてきた。いぶつてゐる火のしゆうしゆういふ音、ぱちぱちいふ音、響鐘の響き、遠方で吹く大きな貝殼の音が、靜けさを破るばかりであつた。犧牲者の叫ぶ聲は止んだ。虐殺者どもは彼等の仕遂げた犯罪のもの凄さに、愕然として立つてゐた。

今度は、下から多くの炎がまたもがき出して、渦巻く煙を赤く染め、露出した石材や、

木材の破片を眞赤に照らした。それらの炎は上の方へのたうちまはつた――伸びたり、互に紺め合つたり、眞直ぐに立ちあがつたり、段々高くなり、猛烈になり、撚れて、炎の舌の集まつた、一本の巨大な流動性の螺旋となつて、ぱたぱた羽搏いて、高く夜の空へ震へあがつた。

黄色になり行く火光は、大きくなつた――岬から岬へと擴がつた――港の上に慄へた――死火山の暗い凸凹ある傾斜面を何哩ものぼつて行つた。市を繞れる蓊鬱たる圓丘は、凄壯なる照明を受けて聳え立ち――白晝に於けるより、一層高く仰がれて――火焰が騰つたり沈んだりするにつれて、かはるがはる青白めたり暗くなつたりした。すると、閃光の大きな脈搏のたびごとに、連嶺の中央丘頭に立てる白色の十字架は、その黒い基督像の奇異なる受難苦の姿とともに、ぱつと照らされた。

しかも、同時に、世界の彼方から、一艘の船は、マーチニーク島の奴隷に對して、共和政府が與へた自由の恩惠と、普通選擧權の約束を載せて、西に向つて航行中であつた。

あとがき

異文學遺聞は、原著者の飜譯て無い作品の、最初の書物て、千八百八十四年に出版されたものである。

これは原著者がその冒頭の『解說』て述べて居る通り、西洋の普通の讀書人が讀んてゐないやうな奇異な外國文學に見出した、頗る怪異な簡單な物語を素材とし、同じく奇異な文學から得來たつた、美妙な辭句を利用して、頗る典雅な文體て物した短篇の一蒐集てある　試みに、原著者がその『怪物禍の物語』をそれから採つたと自白して居る法苑珠林の本文と原著者の英文と比較して見るが宜い。本文（漢譯）ては、『此喩女色欲火所燒、男子貪毒至死不知苦也』といふ語を引き出すまての譬喩になつて居るものを採つて、それを原著者は一個の獨立した物語にして居るのてある。その本文は

舊雜譬喩經云、昔有一國、五穀熟成人民安寧無有疾病、晝夜伎樂人無憂惱、王問群臣、我聞天下有禍何類、答曰、臣亦不見、王便使一臣至於隣國求覓買之、天神則化作一人、於市中賣之、狀類如豬、持鐵鏁繫縛賣之、臣問、此名何等、答曰、禍母、臣曰、賣不、答曰賣、問索幾錢、答曰、千萬、問曰、此食何等、答曰、食針一升、臣便家家發求覓針、

如是人民兩兩三三相逢共計、使諸郡縣處處擾亂、百姓所在之處患毒無聊、臣白王曰、雖得驅母致使民亂男女失業、欲殺棄之、未審許不、王言、大善、便於城外將殺、刺便不入、斫則不傷、剖而不死、積薪燒之身赤如火便走出去、過里燒里、過市燒市、入城燒城、入國燒國、擾亂人民飢餓困苦、

ただこれだけである。原著者が如何に布衍潤色に巧みであるかが肯かれよう。

序に私事ながら言はせて貰ひたい。譯者は日本で一番早く本書を手にした一人であらうと思ふ。『此處の高等中學校へ寄附したい、また日本の友人に贈呈したいと思つて、自分の著書を少々初めて本國から取り寄せた。君へも一部贈る』と言つて、當時中學生であつた譯者へ熊本から態々郵送されたのは此書の初版一部であつたからである。明治二十五年四月二十七日落手、と譯者は表紙の裏へ書いて居る。當時能くは分からぬながら拾ひ讀みしたのであつた。そして後年、そのうち三四を飜譯して、一二の文藝雜誌へ紹介をしたことがある。今、三十三年の古昔の其書を机上にして、感慨無きを得ぬ。其全譯を初めて日本の讀者へ提供するのだと考へると、そのかみの原著者の厚意に少しく酬いる所あるやうな氣もするけれども、原著者がそのはしがきに自ら述べて居るやうに、本書は珠玉の連鎖

であるのに、譯者の譯文は玉を瓦に換ふるものだと思ふと、讀者に對し且つまた原著者に對し汗顔の至である。

チタは元ハーパース・マガジーンに載つたものを一冊に纒めて千八百八十九年に出版したものである。

これは千八百五十六年八月十日ラスト島（リル・デルニエール）全土の生靈を一掃し去つた未曾有の大暴風に就いて原著者が聞いた短い話を基礎とし、後年躬らその地方に滯留して實地觀察したものを材料として造り上げた短篇小說である。『潮の影』の後半に描かれて居る黃熱病者は、原著者自身の體驗によつて物されたものであることを、譯者は原著者から聞いた記憶がある。

このチタの一文は文章として非常に重要視されたものと見え、センチユリー字典には、語詞の用例を本書の文中から採つて居るものが少く無い。

譯文中、括弧にして六號活字て二列に組んである文字は、原文には無い、譯者の註釋である、ことを斷つて置く。

大正十五年八月

大谷正信

『支那怪談』

譯者は劈頭第一、讀者に對して宥恕を請はねばならない。本書に散見する羅馬字で表はせる支那語を漢字に改めることは、譯者の支那語の知識――それは全く零である――に取つては、不可能事に屬する。そこで、我國專門の諸人を煩はし、中華民國青年會の人々に質ね、支那留學生に問ひ、苦心と奔走を重ねたのであるが、得る處は甚だ乏しかつた。それもその筈、本書は半世紀前の佛國支那學先輩の著譯に據つたので、佛國學者は南清の無教育者の口から耳にしたまゝの發音を、佛語の綴りにて表現せるもの多く、北京官話を學べる邦人には解し難く、元來地方話の差別區々たる支那人にも見當がつかない譯である。結局固有名詞（主として人名）及び瓷器名、合はせて二十有餘の支那語は、原書の羅馬綴そのまゝに現はすの外、方法を得なかつた。

或る支那留學生は辜鴻銘氏こそ教を受くるに適當だらうと注意してくれた。支那の鴻儒にして而かも泰西の學を兼ねた氏の如き人によれば、闡明し得らるゝことと思ひ、五里霧

中に始めて認め得た手がかりの一道光明に躍り立つて、同氏に示教を求むべく書面を送つたのであるが、原稿提出期までには、面會の機を得なかつたことを遺憾とする。

今一つの方法は、本書の解説に、一々その憑據が示してあるから、それらの佛人の著譯(概して一八六〇年代のもの)を東洋文庫に就て捜し、それから進んで佛人の根據とした支那の原書を捜し當てて行くことである。これは一つの興味多き支那學の課題であるが、これも時日の無いために果たし得ない。以上の事由を記して、大方讀者の寛假を仰ぐ。

『支那怪談』(原名 Some Chinese Ghosts) は、先生が日本渡來前の作の一つで、一八八七年の刊行である。

若きロマンチストが、異國情調に對する憧憬——世紀末浪曼主義特色の一つなる——に燃えてゐた頃の産物である本書は、前言せる如く佛國支那學者の諸著述に基づいてゐるが、先生の貪讀博覽を腦裡中で熔化して得たる創作品と見るべきものである。本書收むる處、六篇、更に話の解説と語彙の註釋が附いてゐる。解説には話の憑據を明示し、また話の大要さへ添へられたのもあるから、譯者が各篇を解説するまでもない。

巻頭のクレービール氏への捧呈（ディディケーション）の辭は奇拔である。兩人は當時莫逆の親友であつたからでもあるが、かやうな奔放自由な捧呈の形式も、文體に於けるまたロマンチストの偶像破壞精神の現はれに外ならない。

　クレービール氏は後年米國に於ける有名なる音樂批評家となり、特にオペラ批評の權威であつた。オペラ史の大著がある。數年前歿した。

　シンシナーティ市の新聞記者時代に相知つた兩人は、熱烈なる知識欲と、世界各國の奇書珍籍及び民謠傳說に對する趣味が一致したので、一八七七年、先生が該市を去つてニユーオーリアンズ市へ移つてから、爾來十二年間に亙つてクレービール氏に宛てたる數十通の書簡（本全集第九、十卷書簡集所載）は、實に當年無名篤學の兩青年が互に切瑳琢磨研究を交換した世にも美はしい事實を語つてゐる。彼等がいかに西班牙、埃及、亞剌比亞、波耳亞の奇譚や、珍異な樂譜を搜索し、更に印度から支那へまでも遠い遠いあこがれの吐息を吹き送つてゐたことは、書簡の讀者を誘つてまた同じ研究の奇異なる雰圍氣に入らせるばかりである。しかし轉じて一方現實の問題として、かゝる心境にあつて作られた『支那怪談』の出版といふことになると、一般通俗向きを主とする書肆の中には、容易に引受者を發見することができなかつた。二年間轉々諸方を廻つた原稿は、一八八六年ボストン

市のロバーツ兄弟商會の引き受ける處となつたが、果然書中の幾多怪奇なる東洋語は、該書肆から排除を要求された。著者の失望懊惱は、クレービール氏に訴へた、左の手紙に見える——

親しきK君——プロミーシュスのやうな艱難痛苦裡にこの手紙を書く。

ロバーツ兄弟商會は『支那怪談』を出版するといつてきたが、幾多の日本語、梵語、支那語、佛教の文句を除いてくれといふのだ。

そこで僕は彼等に懇願祈禱の素晴らしい文書を送つて、サウジー、ムーア、フローベル、エドウキン・アーノルド、ゴーチエー、ロングフエローの『ハイアワサ』、幾多の詩人、幾多の歌を引用し、散文詩の權利と、文體の至上權を述べた。

しかも未だ一言の返事が來ない。

僕の著作は……の靈感を蒙つて成つたものである以上、どうして僕は書中の東洋風を犧牲にすることが出來ようぞ…………（譯者註この書簡は紙魚の禍を受けて、原文所々に空隙を生じてゐる）默示錄の使徒約翰の如く、僕もまた『もし人ありて、この書の豫言の言葉を削る者あれば、神これをしてこの書に錄す處の生命の樹の果と、聖城とに與かること莫らしむ』る考へだ。

内容に關して著者が自信を有してゐたことは、左の手紙の一節に見える。これは前掲の手紙よりも以前のものである。

親しきクレービール君――（前略）僕はチクナー出版商會の手許へ僕の小さな支那の本を託してゐるが、長い沈默はまだ破られない。徵候は惡るい方ではないが、しかし今、君の愉快な手紙に返事を書くに當つて、萬事好都合だと君に申し送る譯に行かないことを失望してゐる。その本は君に向つて捧呈の辭を書いてあるのだ。所載の話は六つの短篇であるが、一つ一つ數ケ月の刻苦と硏究を注いだもので、『異文學遺聞』中のいづれのものよりも、一層高尙なる試みを示してゐる。出版の曉には、捧呈の辭を君は可笑く思ふだらう――して、一般の人には多少神祕と感ぜられるだらう。（下略）

讀者は本書第二章に語られた、美人の怪靈に魅せられたる一秀才 Ming-Y に、『天の河緣起そのほか』（本全集第七卷）の Ito Norisuke の面影を忍び、また第四章の Yen-Tchin-King の歸還は、『日本雜錄』（本全集第六卷）の卷頭を飾れる、上田秋成の雨月物語から取つた菊花の契りといふ物語と、主題の一部に似通ふものあるを認めるであらう。

最後の『窯神譚』中に見ゆる柴、汝、官、哥、定の五窯の場處と創設者の名は、渡邊秀方氏譯『全譯支那陶器新說』（許之衡著『飲流齋說瓷』）によつて知つた。因つて卷末の譯者註にその地名と人名を擧げることが出來た。茲に明記して該著の譯者に謝意を表する。過日恰も京橋高島屋支那部に支那古名陶展覽會あるを耳にし、閉會の間際にかけつけて、今ては巷間に於ては覓めることの不可能となつてゐる支那古名陶、世界に冠絕する工藝美術品を瞥見することを得て、或は古樸渾厚、或は精巧華麗、眞に神工鬼斧の感に打たるゝものがあつた。流石は陶器の國支那、遂に窯神を生んだのであると首肯された。『日本からの手紙』（本全集第七卷所載）に廣瀨中佐の殉國壯烈を歌つた筆は、支那の國粹藝道に殉せる名匠を傳へてゐる。同じく是れ犧牲心の化身なる軍神も窯神も、まことに適はしい讃美者を得たのである。

先生の怪談趣味は、その處女作――飜譯――に夙に顯はれてゐる。否、元來幼穉時代から怪談が好きであつた。また幽靈 ghost といふ言葉が非常に好きであつた。著書に手紙に、この語は應接に遑ないほどである。かの生前最後の一二年間に、折々綴られた自叙傳的の數篇は、幼時の幽靈の觀念に關する思ひ出を以て筆を起こしてある。處女飜譯は、實にゴ

ーチエー英譯の先鞭を着けたものであるが、佛國寫實派小說の出版は、英米の社會に於て容易に引受者を得ないので、原稿は筐底にあること六年間、一八八二年始めて世に出づることを得た。『クレオパトラの一夜、その他』と題し、ゴーチエーから數個の短篇を取つた小冊は、一卷の怪談集であつた。後年東京帝大に於ける文學講義中、『文學に於ける超自然的要素』（本全集第十三卷）の一篇は、超自然的事象が文學に於て驚異を與ふる有力なる一要素をなすことを論じたもので、例としてゴーチエーの一つの物語を述べてある。先生の怪談趣味の道行きは一生を通じて續いて、佛國寫實派の純然たる飜譯から、更に佛人の著譯に據つて、絢爛の文體、百花繚亂の態ある『支那怪談』の作となり、遂に平淡の文章、金聲玉音の妙を極めたる傑作『怪談』（本全集第七卷）に及んで、その絕頂に達したのであつた。

求むるものは與へらる。各國文學を搜し廻つて、遂にこの蓬萊の島國に於て『怪談』の幾多珍らしい話——先生に取つては珍らしい話が、黃金にも換へ難い寶、珍らしい話のある土地がパラダイスであり、エル・ドラドであつた——を拾ひ得たのであつた。しかもかかる珍重すべき材料を織り上げて天衣無縫の美を成し得たのは、ゴーチエーの彫心鏤骨の原文に練られた譯筆と、『支那怪談』の苦心慘憺に鍛へられた腕の賜であらう。本書は後

年大成の素地をなすものであり、無名作家苦心の紀念であり、また出版に難産をした著書の尤なるものである。

ロバーツ兄弟商會で辛うじて出版された本書は、挿畫の件につき著者と出版者の間に意見の衝突を來たし、著者の藝術心は遂に約三百冊の出版部數を憤然破棄し了はらしめた。隨つて初版は全米國を尋ねても双指を屈するに足らぬほどだと云はれてゐる。現今流布の本書は、リツトル・ブラウン會社がロバーツ商會の版權を踏襲して出版したものである。

『ユーマ』

人物

ユーマ　西印度黑人の女。二十五歳位。ペロネツト家の奴隸。

ガブリエル　黑人奴隸。デリヴィエール家農園の人夫頭。三十歳位。

ペロネット夫人　　サン・ピエール市富商の未亡人。
デリヴィエール氏　　サン・ピエール市の資産家。アンス・マリーヌ農園の所有主。
エーメー・ペロネット　　ペロネット夫人の娘。デリヴィエール氏の妻。
マヨット　　デリヴィエール氏夫妻の娘。五歳。
老ド・カーサント氏
青年ド・カーサント

場所

佛領西印度、マーチニーク島、サン・ピエール市。
同島東海岸アンス・マリーヌ農園。
最後の場所――サン・ピエール市『砲臺山』ド・カーサント氏邸。

時

千八百三四十年代。
最後の時――千八百四十八年の春。

『ユーマ』"Youma"は劇てはない。副名稱として『西印度奴隷の物語』"The Story of a West-Indian Slave"と銘打つてある通り、物語てある。ただ臚列的に物語の材料を擧ぐれば、人物と時所は右の如くてある。更に叙事的に筋を辿れば、左の順序となる。

ユーマとエーメー乳姉妹時代。

エーメーの結婚時代——一年間。

ユーマの保姆生活——マヨットのダアとして——大蛇の危難。

ユーマとガブリエルの戀愛。

ガブリエルと主人の問答——ユーマと結婚の許可を得るため。

ガブリエルのユーマに對する脫奔の勸告。

ユーマの拒絕と濱邊の訣別。

ユーマの惡夢。

叛亂の勃發——燒討——避難——慘劇——殉死。

熱帶直下、灣流の湧く墨其古灣を東へ橫切つて、更に南に延び、飛び石を點綴したやうに南米オリノコ河の河口まで連らなつてゐるのが、西印度諸島てある。佛領マーチニーク

島は、列島の南下せる連鎖の中央、北緯十四度から十五度の波間に、南北に長くて東西に幅狹き島影を泛かべてゐる。北端に聳ゆるペレー山は、共なだらかな波動を打たせて海に落ちる處に半圓形の港を描く。(サン・ピエールの市街はそこに連らなつてゐたが、今は滅んだ)山から谷へかけては甘蔗の野がつづいて、砂糖を主産物とし、またラム酒とココを輸出する。密生せる森林からは、二百尺の棕櫚の樹が天を摩してゐる。たえず海から吹き送る淸らかな貿易風と綠鸚鵡の羽のやうな深綠鬱然たる樹陰は、暑熱を輕やかにし、豐富なる果實は香氣潑剌、漿液津々、口中で溶けるやうなのがある。海にはあらゆる色の魚が泳ぐ。灣頭紺碧をたたへて、碇泊の船は蒼空に浮かべるかと怪しまれる。混血種の婦女には、一種濃艶の色さへその顏に漾つてゐる。すべてのものの色彩が明かるい。まことに絕海洋上の樂境、西洋の蓬萊島だ。『眞夏の熱帶への旅行』を試みてこの異國的魅惑に愛着を感じたヘルン先生が、一旦紐育へ乘つて歸つたと同じ船で、三週間の後　またこの島へひき返し、たうとう淹留二ヶ年に及んだのも首肯れる。

天然の恩惠は豐かであるが、その社會は不合理な組織に呪はれてゐた。何ぞや。それは奴隷制度といふ不正な基礎の上に立てられてゐたことであつた。全島十五萬の黑人及び混

血種は、資本家、植民者たる一萬二千の白人に、大抵奴隷として賣買され、使役されてゐた。こゝに社會制度の缺陷があつた。必然かゝる制度に絡んだ惱みと犠牲が生ずる。

ユーマとガブリエルの戀は、純なるものであつた。しかし社會制度がそれを許さない。ペロネット夫人の階級的思想と保守的感情は、保姆（ダア）といふ特殊な地位にゐる、自分の教子なるユーマを、單なる黑人奴隷の勞働者に嫁がしめることに斷然反對した。ガブリエルは主人に懇請した。ユーマに脫奔を口說いた。ガブリエルの愛を重んずるユーマも、生まれ落ちてからこのかた女主人に受けた扶育の大恩と、乳姉妹として緣深きエーメーの遺言に背くことを欲しなかつた。兩人の煩悶は、兩人の戀の犠牲に了はつた。しかしまだ物語はこゝに了はらない。頂點（クライマックス）はこの後である。

十九世紀の澎湃たる解放運動の波は、西印度の島へも打ちよせた。世紀の劈頭、ヘーチー島に起こつた革命は、幾多慘劇の後、黑人の共和政府を建設した。英帝國はやがてその全領土に奴隷解放を宣した。今度がすなはち千八百四十八年に於ける、歐洲諸國を通じて被壓迫階級の革命熱であつた。マーチニークの黑人も蹶起した。『ユーマ』の物語は、この近代的革命運動の徑路に於ける、一挿話、蕩々たる世界的巨浪が絶島の濱邊へ描き出し

た一小波紋として見ることもできるだらう。

燒討ちが起こる。主人が働つて、去れと勸めるのを排して、ユーマはマヨットのために留まる。白人の少女をも併せて救はねばと、頑然救助の梯子を却けて、火炎に葬られる。しかも梯子を提供したのは戀人であつた。耕地の涼しい陰に咲いた兩人の戀――果敢なかつた戀は、たうとう黑人の火焔に燒きつくされてしまつた。

『ユーマ』は先生のマーチニーク滯在中に成つた。初めハーパーズ雜誌に載せられ、更に單行本（オクテーヴォー型百九十三頁）となつて、千八百九十年紐育ハーパーズ兄弟書肆から出版された。著者の自信は千八百八十九年、紐育に歸つてからビズランド女史へ宛てた書簡の一節に窺はれる――

私のマーチニークの短篇小說（ノヴェレット）は正月號に揭載の豫定です。『チタ』よりも、もつとあなたは好むだらうと思ひます。もつと圓熟してゐて、また異國的なものです。雜誌では二號に跨るでせう。

物語は事實に基づいたもので、『黑人の大叛亂の際に於ける壯烈な事件の話を聽いたのを書いた』と、千八百八十九年二月まだサン・ピエール滯在中、グールド氏へ送つた書簡

に見えて居る、後年親友の横濱駐在米國海軍主計監マクドナード氏へ宛てた書簡には、左の一節がある――

君が『ユーマ』を讀んで、好いたと聞いて、愉快に感じた。あの物語は實際にあつたことだ。もし君がサン・ピエールに遊ぶことがあれば、『砲臺山』地域にあの家の廢墟を發見するだらう。また當年の生殘者なる私の舊友アルノー氏に逢ふであらう。あの娘は、書いてある通りの勇壯な有様で死を遂げた――黑人の救助を拒み、梯子を拒んで。勿論私は彼女の人物を理想化してゐるかも知れないが、彼女の行動を理想化したのではない。此の事件も、また實際に起こつたことだが、其女主人公はちがつてゐた――それは農園の娘で、マーチニーク島の歴史家ラフヅ・ド・ラヴィソンがほめ傳へてゐる。私はあの物語を、丁度あの描いてある場面に近く、あの黑い基督像のある十字架の下の方で、みじめな境遇のもとで書いた。（一八九八年正月マクドナード氏宛）

この『みじめな境遇』といふのは、熱病にかゝつたことの外に、何よりも懷中の苦しかつたことを指したものである。前に一寸引用したグールド氏宛の書簡には、

昨年の十月このかた、私は室に籠もつてゐる――幸ひ私の前面には、蜿蜒たる丘陵が、瑠璃のやうな海の中へ半圓形に彎曲してゐる――その外、何も見ない、聞かない。

と、ひたすら筆紙にいそしんでゐる有樣を述べ、それから文章の苦心に及んで、

夕方に立派だと思つたものが、朝になつてからは、忌々しくまづいものに見えてくる。私は毎ページを、三日か四日位づつ、ほつて置いて、檢めして見ざるを得ない。

と、述懷してある。まことにこれら片言隻句の中に、藝術家が踏んで行つた精進の道が忍ばれる。

クリーオール語が到る處に插まれてゐる。しかし大抵それを英語で繰り返したり、または前後の關係でわかるやうにした用意が現はれてゐる。この土語(パトワー)は佛語と亞弗利加語の混じたもので、母音の價値を充分に發揮させて、悠長な音感を與へるものらしい。これが文章の中に鏤められて、一種の異國的な飾りとなつてゐる。

第十章にユーマが農園から都會へ引上げて出立せねばならなくなつた前夜、惡夢に魘されるところがある。群嶺に轟く砲聲がきこえる。マヨットは樹木の心がひびくのだといふ。樹根は生きて手をのばし彼等にまきつかうとする。ガブリエルがそれはゾンビ鳥だから、

切ることが彼の手には叶はぬと叫ぶ。すべてこれは夢の中のことてある。少女の無邪氣が直感した樹木の心のひびきは、全島黒人の心底に鬱勃たる反抗精神のどよめきを暗示し、その木を切ることの不可能を叫んだガブリエルの凶言亦籤をなして、所詮反抗は抑へ難く、火焔の中から彼等を救ふことも叶はないといふ運命を語つてゐるやうてある。夢魔を利用して、ゾンビ島の迷信に結び付け、後段の伏線を構へ、神秘的効果を擧げた處、まさしく後年先生が大學て說かれた超自然的事相應用の手法といはねばならない。(本全集第十三卷「文學に於ける超自然的要素の價値」參照)

千九百〇二年五月、ペレー山は爆裂して、サン・ピエール市の二萬六千の人民は市街と共に全滅した。單なる記述形式によらずして、しかも埋沒以前のこの市の鮮かな光景と生活を寫しとどめ、更に迷信、感情、思想までも織り込んて、情景相俟つて渾然たる一篇の西印度昔物語を成せる『ユーマ』は、『佛領西印度に於ける二年間』と共に永久の記錄となつた。

慘報に悲しんだ先生は、『消えにし光のうちにて』と題する斷片に、思ひ出の島に對する愛惜の情を灑いだ。それは次のやうな詩的散文て結ばれてゐる。

すべてそれは過去のこととなつた……またと再び太陽も月もその街頭を照らさないだらう……もはやその道路を踏むものはないだらう……二度と最早その庭園に花は咲かないだらう……夢の中でなくては。

大正十五年八月

落合貞三郎

第一巻要目索引

The Dispute in the Halacha.　ハレカの論諍
Rabbi Yachanan ben Zachai.　ラビ・ヨカナン・ベン・ザカイ
A Tradition of Titus.　テイタスの傳説

Some Chinese Ghosts.　支那怪談

1) Dedication　獻詞

To My Friend
Henry Edward Krehbiel
the musician,
who, speaking the speech of melody unto the children of Tien-hia,—
unto the wandering Tsing-jin, whose skins have the colour of gold,—
moved them to make strange sounds upon the serpent-bellied San-hien,
persuaded them to play for me upon the shrieking Ya-hien;
prevailed on them to sing me a song of their native land,—
the Song of Mohli-hwa,
the Song of the jasmine-flower.

この書を
私の友なる
音樂家——
黃金色の皮膚を有する漂泊の
清人に旋律の言葉を語り
彼等を感動させて蛇皮の腹を有し，
奇異の音を發する三絃を奏せしめ;
彼等に勸めて，私の爲に叫音を發
する月琴を奏せしめ
彼等を誘つて
その故國の素馨花の歌を
歌はしめたる——
ヘンリー・エドワード・クレビー
ルに捧ぐ

2) Preface　序文

3) **Contents** 本文

The Soul of the Great Bell. 大鐘の靈

The Story of Ming-Y. Ming-Y 秀才の話

The Legend of Tchi-Nin. 織姬の傳說

The Return of Yen Tchin-King. Yen Tchin-King の歸還

The Tradition of the Tea-Plant. 茶樹の緣起

The Tale of the Porcelain God. 窯神譚

Chita. a Memory of Last Island. チタ ラスト島の記念

1) **Dedication** 獻詞

To my Friend
Dr. Rodolfo Matas
of New Orleans.

ニュー・オルリアンズの
我が友
ロドルフォ・メイタス博士に

2) **Contents** 本文

Part I. The Legend of L'ile Derniére. ラスト島物語

Part II. Out of the Sea's Strength. 海の力

Part III. The Shadow of the Tide. 潮の影

Youma. The Story of a West-Indian Slave. ユーマ 西印度奴隷の物語

1) **Dedication** 獻詞

To my Friend Joseph Tunison. 私の友ジョゼフ・トニスンに

2) Content 本文

小泉八雲全集第一卷飜譯分擔

大谷正信

異文學遺聞

チタ

落合貞三郎

支那怪談

ユーマ

第五回配本

小泉八雲全集第一巻

第一回豫約菊判背革装　大正十五年八月配本開始　昭和三年一月配本完了

第二回豫約菊判總布装　昭和四年六月配本開始　昭和五年十一月配本完了

第三回豫約學生版　昭和五年十月配本開始　昭和七年三月配本完了



最初申込金五十錢（これは最後の會費に充當）

豫約者に限り毎月一圓五十錢

家庭版【第四回豫約】

昭和十二年四月十五日印刷

昭和十二年四月二十日發行

著作者　小泉八雲全集刊行會代表　田部隆次

刊行者　東京市麹町區三番町一　長谷川巳之吉

刊行所　東京市麹町區三番町一　第一書房

振替東京六四一二三

電話九段三三四四

牛込區山吹町一九八

印刷者　荻原芳雄

（家庭版）小泉八雲全集　全十二巻　内容